

?

Trefoil Knot / 試行存在

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界はもうすぐ「終わる」。その前に、人類の全てを、文化を、未来に託そうとする計画——『箱庭計画』。

極秘裏に進められるこの計画の前に、青年たちと少女が立ち上がる——。その傍らでBARを開く、とあるマスターの話。



503

?? ' ?? ■ ?  
^ ■ } ·  
?? / ??? ?  
, / ·  
?? ? ? ???  
} ? ,  
??? ? / ?"  
· ?'?? ?  
,  
/ ?" ? ?  
D ; "  
? :??' ????.  
· E ? ?  
?? : | ? ?  
, M | ? ?  
" ^  
??' ????.  
?? 483 ? ?  
;

???

「終わり」の研究所。

正式な名称を持たぬこの施設を、人々はそう呼ぶ。無論呼ぶ人は限られているし、そもそも存在を知る者も極僅か。

ただ、今世界が直面している危機——「終わり」に対しての決定打を研究する場所として、“裏側”の人間達にとつての希望である事は間違いないといえるだろう。

「とはいえ、難しい話よね。こちら側から出来る事と言えば、世界の観測と、二人の研究対象の観測のみ。”終わり”に打って出る、なんてことは……無謀でしかないのだから」

「当然だろう。結局、今回の世界は科学が発展した。魔法や錬金術は淘汰された。ワズタムやカムナリの言葉に嘘が無いのなら、俺達が向かう先にあるのは終焉のただ一つだけ」

「珍しく悲観的ね、ビーダ。嬉しい事でもあったのかしら？」

「故郷がな。FTRM3Uによって、近々終わる」と観測された」

「……そう」

「終わり」。

世間の認識としては、唐突に建物や人間が消失する現象を指す。

建造物丸々一つ、であったり。大人数の中で、ただ一人が、であったり。その逆——周囲が丸ごと消えて、たった一人だけが残されたり。

そして、それら細々とした「終わり」の、更に大きな——最終系。

それが、世界の「終わり」。

未来予知システムFTRM3Uによつて観測された、この世界そのものがまるごと消失する「終わり」。

研究所が必死に打開策を探し、抗わんとする神の一手。

「TKの様子はどうか、アズ」

「一般的な応答の出来るAIとしては、十分よ。感情の芽生えまでは未だに至っていないけれど、簡単な雑談程度なら出来る」

「だが、それでは困るのだろう」

「ええ。TKにはもつと感情豊かになつてもらわないと……。人間の文化は、感情があつてこそ遺し得るものどもの」

「やはり、必要なのはリソースか」

「そうね。苦しい事だけど、残念な事だけれど。……お願い出来るかしら、ビーダ」

「無論だ。何、既に組織は用意してある。この『箱庭計画』の内容を、少しばかり曲解して漏洩させたのだ。面白い事に、わらわらと集まったよ」

「義憤に燃える若者たちかしら？」

「いいや。」こんな世界を未来に残すなんてあり得ない——なんて、馬鹿なことを抜かず、狂った奴らさ」

「終わり」は目前にまで来ている。

FTRM3Uは毎日の様に消失対象や消失地域を指し示し、それらの規模も拡大を続けている。

時間は無い。なれば、人道より外れた行為であっても、やるしかない。

「苦労をかけるわね、ビーダ」

「適材適所だろう、アズ。俺も、ウオロツソも、サルミナも。そしてワズタムとカムナリ以外の全人類が、この先を歩めない。お前だけなんだ。お前だけは、この先に行ける。ならばこそ、俺達は捨て駒に徹するべきだ」

「そんな言い方は……」

「ああ、すまない。失言だったな。……ワズタムとカムナリでさえ、この先に行けるかどうかは怪しいのだろうか？ 確率は……30%程だったか」

「27%、ね。ワズタムに関してはまだ心配しなくてもいいけれど、カムナリは……多

分、ハハハ」

「……それは、幸運なのだろうな」

「どうしてそう思うの？」

「ワズタムから聞いたのさ。」 終わり”の先。世界が” 終わった”後の孤独。アイツが体内に” 終わり”を飼っている事も含めて——ああ、気が触れてしまいそうになるくらい、悲しい場所なのだろう」

世界が「終わる」。

そうなれば、後に残るのは無だけだ。もしそこで「終わり損ねた」場合、新しい世界が出来るまでの間、半永久的に無を彷徨い続けなければならぬ。生物的な活動は出来ず、けれど死ぬ事も適わず。その無境の果てに、次なる世界を見つけなければならぬ。全身に「終わり」を纏い、あるいは体内に「終わり」を飼い——その苦しみは、「終わり得る」まで続く。

「優しいのねえ」

「ワズタムについてはどうでもいいが、カムナリは……俺の娘よりも幼いんだ。可哀相だろう」

「16歳で止まっているというだけで、経過した時間はそれなりじゃない？」

「ふん、どれほどの時を過ごしたとて、年齢を重ねなければ成長はしないだろう。魂とは

魂とは



そういうものだ」

「……そうね。ごめんさい、これは私の失言だったわ」

「ああ」

片や、マフィアのボスを思わせる、尊大にして威圧的な男。

片や、飄々とした声を隠さない、緑の長髪を流す男。

「その時までには、死んだらダメよ、ビーダ」

「ああ。じゃあな、アズ。また今度だ」

歩き出すのは、威圧的な男——ビーダと呼ばれた方。

暗い部屋から、明るい外へ。

昏い、「終わり」の迫った外側へ。

国際テロ組織 Absurdus が発足し、最初の大量虐殺事件を起こした「最悪のメ  
イデー」の——ほんの三日前の話である。

「〜♪」

口笛を吹きながらグラス類を洗っていく。従業員は食洗器の使用を勧めてくるけれど、こういうモノは手洗いの方がいい。何故って、愛が籠るから。なんちゃって。

この時間帯、客はいない。午後2時。14時。

知る人ぞ知るBAR、なんて言っても、流星にこの時間に飲み明かして飲みふけている奴は、ただのサボリ魔だろう。客がないという事は、ここの常連は勤勉である、ということだ。勤労勤労。

「あら」

そんなことを考えていたら、店の扉がゆつくりと開かれた。勤勉でないお客様の登場だ。

「いらつしやい。……あら？　ここはお酒を出すトコロだけれど……あなた達、学生じゃない？」

入店者は四人。茶髪の地味めな男の子。同じく茶髪の、けれど少し明るい感じの女の子。筋骨隆々な背の高い男の子に、バチバチにメイクを決めた派手な女の子。

形容として”少年少女”を使うに値する——そんな集団だ。

「BAR・エルドラド。その店主のアズ……で、合っているか」

「ええ、間違いないわ。どうしたのかしら、そんな……剣？な雰囲気を出して」

「——頼みがあるんだ。友達を、救いたい」

不躰ねえ、とは口に出さない。

ここは一応BARで、つまり飲食店で。

だから、お酒を頼みながら、とかなら大歓迎のだけど、開口一番、店頭一番、「頼みがあるんだ」、なんて。

……ストレートなコは、嫌いじゃないから、につこりしちゃう。

「頼みを聞くかどうかは内容次第よ。まずは座りなさい。ああ、成人はしているの？」

「いいや。全員18歳だ」

「お酒は飲めるけれど、大人じゃない、ってコトね」

この国において、飲酒は18から許可されている。他の国ではもう少し厳しかったり、逆に緩かったりするらしいのだけれど、この国は——いいえ、この時世になったから、なのかもしれない。

「終わり」がわかって、だから、この国は前を向いた。

たとえ「終わる」ののだとしても——最後の最後まで、幸福に過ぎましよう、と。様々な規制が緩和されたのだ。飲酒然り、煙草やドラッグなどの嗜好品、結婚年齢などの様々が。

とはいえ、成人……大人である、と認められる年齢は緩和されなかった。20歳。その節目を越えなければ、子供。大人に守られるべき子供である。

「イアンだ。イアン・エンハード。こっちの三人は、今後必要になったら紹介する。それでいいか?」

「ええ、いいわよ」

こちらの言葉に従い、素直にカウンターへ座った四人。

成程、やはり学生だ。雰囲気でわかる。けれど、少しばかり……裏側の匂いもする。

「ああ、すまないが、今酒類を飲むわけにはいかないんだ。この後すぐに予定がある」

「あらそう。まあ、今回はトクベツに良しとしてあげましょう。でも、次来るときはお酒を飲みに来てね? ここはBARなのだから」

「ありがとう。……本題に入っても、良いだろうか」

「ええ、良いわよ。友達を救いたい——そのために、こんな僻地のBARに、そのマスターである私に会いに来た理由を教えてください」

ああ——と、イアンと名乗った少年は口を開く。

年上に対しても物怖じしない、一見失礼とも取れる態度は、しかし裏側の人間であるが故か。他のメンバーにはそこまでの匂いはしなくても、この少年だけは、そこそこ浸かってしまっている事が見受けられる。

「最悪のメイデイ……そう呼ばれたあの日を、覚えているだろうか」

「ええ、覚えているわ。今年の5月5日。テロリストABSによって引き起こされた大

量殺戮事件と、その直後に起きた広範囲の”終わり”——この認識で、間違いないのなら

「そこまで知ってくれているなら話が早い。あの日、あの事件の現場に、僕もいたんだ。そして、僕は……友達に逃がされて、友達が巻き込まれた。でも、テロ組織ABSの出した”殺害者リスト”の中には、その子の名前は入っていなかった」

「成程ねえ。つまり……ABSに連れていかれた、と。そう考えているワケね？」

「ああ」

国際テロ組織Absurdus。ボスのエウリス・ビーダを筆頭とした、大量殺人犯やシリアルキラーを擁す超級危険度の集団。

”最悪のメイデイ”においては「見せしめだよ」との言葉と共に、一つのショッピングセンターが丸々占拠され——その中にいた一般人200余名の全てが惨殺された。そして、警官隊や機動隊が突入せんとしたその直後、ショッピングセンター及び周辺地域を挟み取るような「終わり」が訪れた。ABSも巻き込まれたかと思われたのも束の間、その後ネット上に、Absurdusの名を名乗る何者か達が現れ、更には被害者となった一般人の名前を丁寧にも書き連ねた書面が放流されたのだ。

まるで消失が起きる事を知っていたかのようなタイミングと、明らかに巻き込まれたはずなのに脱すことが出来ていた事実をして、「終わり」の手下人たちなのではないか、

と噂するものまで現れた。

余りにも——余りにもビーダの目論見通りに、全世界のヘイトがABSに向いている。

「連れられたコの名前は？」

「エヌ、という。俺達より2歳年下……16歳の少女だ」

「あらあら、年下の女の子に救われてしまったのね。……ああ、ごめんなさい。茶化すべきではなかったわね。どうぞ、続けて？」

「……これらを開示した上で、頼みがある。エルドラドのマスター、アズ」

イアンは、カウンターに着く程、頭を下げる。他の面々も同じだ。

頭を下げて、言う。

「僕達とエヌを引き合わせて欲しい」

「……どういう頼みかしら。そんな、まるで」

「ABSの内部に繋がりを持つ貴方を見込んでの、頼みだ」

「……」

純粹に驚いた。

どこまで知っているのかは定かではない。けれど、そこまで踏み込んでくるとは思わっていないかった。

ここは謂わば私のテリトリー。何が仕掛けられているかわかったものではない。それに對し、無手で乗り込み、頭を下げて……。

うん。

うんうん。

私、こういう真つ直ぐなコ、とっても好き。

「顔を上げなさい、イアン・エンハード君」

「……頼みを、聞いてくれるのか」

「条件と依頼料次第ね」

「飲む」

「……もう、その思い切りはとっても高評価だけれど、こういう取引ではもつと慎重になるものよ？ 法外な値段や法に触れるような条件を吹っ掛けられたりしたらどうするの？」

「それでも、だ」

「あら」

強い目だった。

そんなことは関係ないと——そんなことは、己の足を止める枷には成り得ないと。とても強く、危うく——意志のある目。

「……わかった。わかったわ。私の負けね。でも、申し訳ないのだけど、私はそのエヌ、という子を知らないの。他のメンバーであればある程度知っているけれど、あの面々が16歳の女の子をただ誘拐する、とは考えられないし……」

「そうか。なら、もう一つ開示する。エヌは——」終わり”が見える。正確には、”終わり  
りそうな場所”が色として見えるそうだ」

「——成程」

それならば、納得だ。

F T R M 3 Uに頼らない未来予知といっても過言ではない。私達があればほどまでの大仰な機械に頼って行っている消失の観測を、たった一人の異能で賄えるというのなら——ビーダが欲しがる理由もわかる。あわよくば、こちらの研究に、と言ったところだろう。

しかし、そうなってくると連れ戻す、引き戻す、というのは私達の不利益にもなりかねない。そのエヌという子がどれほどまでを感知出来るかにも寄るけれど……まあ、その辺りはビーダに投げましようか。

「二つ。貴方達は分かり切っている事だと思うけれど、A b s u r d u sはテロリスト集団よ。構成員はそのどれもが大量殺人犯。無差別に人を殺したり、可愛らしい女の子だけを狙ったり。爆発物や毒物を使ってくる奴もいる。それに対抗する覚悟が、そして



対策し得る手段を持っているの？」

「持っている」

「へえ」

エウリス・ビーダの作り上げた組織は、冗談抜きで過激派集団だ。殺戮も毒物も細菌も辞さない——人を殺すために、いまある文化を破壊するためだけに活動する異常者集団。

それに対抗するという事は、あるいは接触するという事だけでも非常に危険な事である。

ああ、けれど。

この問いに、即答で「持っている」と……そう返したイアン君には、少しばかり興味があるわねえ。

「それについては、聞かないでわ。どうせ教えてはくれないのでしょう？ 私の口からA B Sに漏れる、という可能性もあるのだから」

「ああ。すまない」

「いいのよ。でも、わかった。そこまでの覚悟と、そして手段を持ち得ているというのなら……えーと、メモ帳メモ帳……」

カウンター裏。少しばかり散らかっている底から、メモ帳とペンを取り出す。

そこに書くのは——電話番号。ページを破り、イアン君に見せる。

「……………」

「これ、ビーダの直通の電番。私はエヌという子を知らないから、その子を引き出したかったら、ビーダに直接交渉なさい」

「……アンタがABSに繋がりを持っている、というのは聞いていたが……いきなりボスと繋がられるとは思ってなかったよ」

「なあに？ 怖気づいたの？」

「いや。ありがとう。煩わしい様々を一気にスキップ出来た。心から礼を言うよ、アズ」  
イアン君は、破られたメモ帳のページを自らの手帳に丁寧にしまい込んだ。

「それで、条件と依頼料については」

「ああ、依頼料については要らないわ。私、お金に困っていないから」

「そうか。悪いな」

「それで、条件の方だけど……」

にっこり笑顔を作る。

ビーダにすら「お前その顔怖いからやめとけよ」と言われた笑顔で——言う。

「訳アリの女の子。事情があつて、表に居られない女の子。可愛い女の子。そういうコがいたら、連れてきてちょうだい。大丈夫、悪い様にはしないから」

「今から悪い様にしますよ、という顔だったんだが」

「いやねえ、そんなことないわよお。ほら、今は奥の方にいるけれど、ここの従業員……全員がそういうコなのよ？ 私はそういう表で働けないコたちにオシゴトを斡旋する、仲介業者、みたいなこともしているのよ」

「……そういう奴が居たら、でいいんだな」

「ええ、良いわ。見つからなかつたらそれはそれで構わない。でも見つけたら、私の所に引き渡す。それが条件」

「わかつた。……改めて、礼を言う。次来るときは、お酒も頼めるよう努力するよ」

「頑張つてね。ビーダはともかく、他の面々は話を通じないから」

「……なるほど、ボスの電番を渡したのは、唯一マトモに話が出る奴だから、か……」

「なんだか疲れた様子で立ち上がるイアン君。」

「伴い、他の三人も席を立つ。」

「……この明るめなコは多分イアン君の彼女だから置いておくにしても、こっちの派手なコは……美味しそうなのに、なんだか勿体ないわねえ。」

「また来る。その時は、エヌも一緒だったらいいが……多分、そんな簡単には行かないんだらうな」

「無理をしないようにね。死んでしまつてはダメよ？」

「心配してくれるのか?」

「貴方達が死んだら、誰が女の子を連れてくるのよ」

「そんなことだろうと思っただよ」

後ろ手を振って、店を出て行く四人。

……ううん、青春ねえ。

年下の女の子を。自らを身を呈して庇ってくれた女の子を。悪の組織から救い出すために立ち上がる少年少女達……。

ふふ、サルミナに聞かせたら、目を輝かせて喜びそう。

「マスター」

「あら、どうしたのかしら、ユウナ」

「モモカが、消失しました」

「……そう。残念だけれど、仕方のないことよ。”終わり”は——誰しにも、平等に訪れるのだから。モモカは、それが速かった、というだけの話。……目の前で消えてしまったのね。大丈夫、貴女のせいではないわ。だから、そんな顔をしないで」

「……私、ちよつとだけ……嫌味を言つてしまつて。後ろを向いたら……もう」  
「大丈夫よ。それでも決して、貴女のせいではないわ。」終わり”には……抗えないものだから」

従業員のコを抱きしめる。

悲しいけれど、仕方のない事。

それに。

「大丈夫よ。私がいる限り、この店は消えないから」

「……ありがとうございます、マスター」

気休めと受け取つたのだろうけれど。

本当に、この店だけは——最後まで消えないから。

大丈夫、大丈夫よ、と。

抱きしめて——そのオムネの柔らかさを存分に堪能したのだった。

????

「終わり」の研究所には、ちらりほらりとしか人影が無い。

それぞれがそれぞれの分野に当たり、けれど進展らしい進展を見せる事無く——ただ一つの計画のみが侵攻していく。

『箱庭計画』と、そのプロジェクトは呼ばれていた。

「FTRM3U、次に”終わる”のは、どこかしら」

——”北区2番街。商店街が寿命を迎えます”

「あら、商店街の全て？」

——”はい”

「そう……残念ねえ」

「終わり」。

この世界が今直面している危機。

そも、世界を、私達を構成する粒子を限素といい、これは文字通り存在できる時間限りがある。ヒトも動物も構造物も自然も、全てが必ず寿命を迎える。限素が解ける事で、世界に還るのだ。

けれど、単なる寿命だけが「終わり」ではない、という事もわかっている。比喩表現ではなく、本当に「終わる」のだ。

たとえば、少し前まで、国家間の戦争というものが行われていた。

次々と「終わっていく」大地に、領地問題や食糧問題と言った壁が生じ、奪い合い奪い返し合いの血みどろ戦争。

しかし、それすらも、である。

互いの国が、互いの国に向けて、超威力のバクダンを投下しようとした——その瞬間。国も、ヒコーキも、センチヤも——戦場も、兵士も。

その全てが「終わった」。まるで神が「見苦しい」とでもいうかのように、その場にあつた万物が消失したのだ。

それから、戦争は行われていない。

ただ——もう、それぞれがそれぞれの国に縮こまって、肩を抱いて身を震わせるだけの日々。

各機関で「終わり」をどうにかしようとして動いているようだけど、無駄も無駄。それから研究機関でさえ「終わっていく」中で、「それならばいつも通りの日常を過ごそう」と歩みだしたこの国は偉い方。

「終わり」が目に見えていて、それでも日常を、と。

……私、無理して頑張る子って大好きなのよねえ。

「おはよう、TK。調子はどうかしら」

——” 万事滞りなく。テストパターンは80まで完了しています”

「そ。模造の方は？」

——” そちらも問題ありません。今ある文化……学問や学識の形態、様式、それらを一部分ずつではありますが、再現できているかと”

「んふ、ありがと。そうよ、そうして……アナタは、未来へ残るのだから」

球体を撫でる。研究所の中央にある巨大な球体——未来予知システムFTRM3U、ではない。

もつと小さな球体。空中投影器によって映し出されるは美しい星。「終わり」によって至る所に穴ぼこの開いたこの星の、元あった……こうあるべきだった、とでもいうような姿。

それは宇宙のような場所に浮かべられているけれど、他の星々は存在しない。否、存在したとしても、グラフィック程度だ。この星の文化を遺すのに、未だ開発の進んでいない宇宙や深海の情報などは不要。

因みに、宇宙のいくつかも「終わっている」事が分かっているので、惑星外に逃げる事も意味を成さない。



「TK……。Trefoil Knot。カムナリとは、どう？　話せている？」

——” そちらは、申し訳ありません。入力されていないパターンの再現は……未だ、成し得ておらず”

「んふふ、申し訳なさそうにする、なんて無駄なパターンを仕込むコじゃないわ。だから貴方のソレは、貴方の個性なのよ。大丈夫、少しずつ成長しているから」

——” ありがとうございます、AZ様”

『箱庭計画』は、今ある文化を、ここまで積み上げてきた文化を「終わり」の干渉できない箱庭に詰め込んで、未来へ遺すための計画だ。そしてTKという名の付けられた管理AIにより、膨大に詰め込まれたテストパターンで以て自然や文化を調整し、人類の発生や新たな文化の創造、そして「終わり」の対抗策を講じる。先延ばしのためだけの、最終装置。

必要なのは膨大なリソース。

——” AZ様”

「なにかしら、TK」

——” カムナリ様やAZ様は何故、私の仮フレームを撫でるのでしようか？”

「それは、貴方が愛おしいからよ。私にとってもカムナリにとっても、貴方は我が子のようなもの」

——” A Z様とカムナリ様が私の親、ということですか?”

「あらやだ。ふふ、私にとつてもカムナリは……美味しそう、だけど、流石に年齢差があまりすぎるし……」

——” F T R M 3 Uと私は、姉弟のようなものだ……ウオロツソ様は仰いました”

「まあ、似たようなものね」

——” であるならば、やはり。この施設にいらつしやる方々は。取り分け、私という個を生み出してくださったA Z様とカムナリ様は、私の親であると認識しています”

「……ええ、それで構わないわ。T K。T r e f o i l K n o t。私達の、愛しい子」

球体を撫でる。

T Kの言う通り、これは単なる応答端末……仮フレームでしかない。

T Kの頭脳とでもいう部分は”箱庭”の方にあるので、こちらには何も無い。けれど。

「ヒトはね、撫でる事で……触れる事で、感情を伝えるの。私やカムナリは、貴方のリソースには成り得ないから、せめて、ね?”

——” 理解は難しいです。ですが、推測のもと——ありがとうございます、と答える事が、もつとも正しいと判断します”

「ええ、今はそれで大丈夫よ」

TKはまだ幼い。

作られて間もない人工知能。けれど、まだ、まだ。

世界の「終わり」まではまだ、幾許かの猶予がある。

その時までには、必ず。

「……にしてもカムナリったら、どこに行ってしまったのかしら」

——”カムナリ様は、シヨツピングというものをしてくるよ、これはAZには秘密だ、TK、と仰っていました”

「……そ。なら、大人しく秘密にされておくわ」

あの子も年頃の女の子だ。それくらい自由はあつていいでしょう。

……私はそろそろ、彼の様子でも見に行きましようかね。

「起きているかしら、ワズタム」

「んー？ ああ、アズか。今百連でどんだけレア引けないかチャレンジの真っ最中だからちよつと待ってな」

「次にSSSレアが出るわよ」

「ぬおああ!? ホントに出たんだがオイ!」

百面相を……してない少年に、少しばかりのため息を吐く。

病衣を纏う少年。手足には点滴の管が、顔には呼吸器が。瞳は白く濁り、耳は潰れている。

そんな少年の声は、彼の隣にあるディスプレイから聞こえてくる。

「……九十連目まで星3しか出なかつたのに、どうしてくれんだよオイ」

「天井の無いガチャは悪い文化、じゃなかつたの?」

「へん、俺の金じゃねーからな。研究所の研究費用しこたま課金に注ぎ込んでやろうと思つてよ」

「やめてあげなさい」

ディスプレイに映るのは、これまた白の病衣を纏う少年。けれどその体に点滴の管やら呼吸器やらはない。

元の姿の、といえるのだろうか。健康な姿の少年が映っている。ああ、けれど。

「つつつ……」

「……痛むのね」

「……まあな。しょうがねえだろ。体内から”終わり”に蝕まれてんだ、痛みもする」

死に体の少年が、それでも死なずに生き永らえている理由。

それはとても単純で。

「少なくとも、飼い主の台詞じゃあねえだろ、なあアズ」

「……あと少しだから、というのは、言い訳よね」

「はん、馬鹿め。これは自業自得だよ。ヒトがカミに抗つちやならなかつたんだ。それだけさ。ま、それをモルモットにするのはどうかと思うけどな」

モルモット。

研究所——「終わり」を研究する機関において、体内に「終わり」を持つ少年など。「終わり」に浸された者など。

格好の研究対象だ。少しずつ、緩やかに死滅していく——消失し、「終わって」行く少年を、外部からの治療で活かし続ける。同時に「終わり」に何が効くのか、どうしたら止まらせられるのか、などを観察する。

代償はただ、少年が苦しみ続けることだけ。

「ワズタム。もし、もう無理なら——」

「馬鹿が。お前の手を汚す程の事じゃねえよ。どうせあと少しで何もかもが”終わる”んだ、そのための研究だろ。つか、今殺されたら”終わり”の直前とかに生まれ変わって、二度痛い思いしそうだからフツにヤダ」

「三度目、じゃなく?」

「……ふん」

デイスプレイの電源が落ちる。

今日は営業終了、つてトコかしらね。また、量産型ソーシャルゲームにでも耽るのでしよう。

ワズタム。カムナリと共に、そして私と共に、”前”を知る者。

いいえ、ワズタムに限って言えば、それ以外も――。

「一刻も早く……アナタに安息が訪れる事を願っているわ」

「それは世界が”終わる”時だろ、アホかったの」

「……デイスプレイついてなくても喋れるのだったわね」

どうか、安らかに。

端末を見る。

流れてくる情報は、どれもこれもテロリスト集団の話ばかり。

「終わり」という誰にも、どうしようもできない巨壁を前に訪れた束の間の平和――それをかき乱す存在だ。どうせ「終わる」のだからと、面白がる者もいた。最後までくらは

静かにしてくれと、忌避する者もいた。

「殺されて死ぬのと、”終わって”消えるの。どちらがいいのかしらね」

「さてな。儂は”終わった”事が無い。が、殺される際の——傷を受ける際の痛みは知っている。儂がああの際に見た全て——声を発する間もなく消失していく皆に、どれほどの苦痛があったのか。それが分からない限り、天秤にはかけられんだろうよ」

「ふふ、そういうストイックな所は好みよ」

「寄せ、気色の悪い」

相も変わらず、客の少ない店内。

カウンターにはアズと——皺くちやの顔と白髪を隠そうともしない、老人。

底の厚いグラスに、氷。赤茶色の酒は、老人の纏う、くたびれたコートの色によく似ていた。

「オーディア。どうして貴方は、Absurdusに参加したの？」

「……珍しく、野暮な事を聞く。……ふん。『箱庭計画』、と言ったか。人類の遺産を、文化をタイムカプセルのように未来へと遺す計画。……余程の馬鹿でもなければ、このような計画は組めんだろうな」

「『箱庭計画』に、迎合できないのね」

「当たり前だ。この世界など、残して何になる。誰もが争い、誰もが奪い合い……あの

時、あの戦場が消失に見舞われなければ、そのまま人類は争いを続けていた事だろう。それが今の人類だ。それが今の文化だ。そんなものを未来に遺すなど、正気の沙汰ではない」

「まあ、そうねえ」

老人は——オーディアは、吐き捨てるように言う。

それはまあ、そうかもしれない。

「終わり」によつて止まった戦争。その前にも当然小規模な国家間戦争があり、オーディアはその経験者だ。その時代の、大地が「終わり」、食料が「終わり」、民草さえも「終わっていく」中、それでもと争い合う人間達を見ている。

それは確かに、「こんなものを未来へ遺してはいけない」と……そう思わせるに十分な材料であると言えるだろう。

「……だが、儂は他の連中のような無差別殺人をするつもりはない、とだけ言っておくぞ」

「国際警察においても伝説的な爆弾魔の言葉とは思えないわねえ」

「元より儂は、政府施設しか狙ってはおらん。それが、『箱庭計画』へと矛先を変えたただけだ。連中のように無差別な……」 終わり」を知つても尚、今を必死に生きようとする者達の命まで奪うつもりはない」



「高尚ね？」

「ふん。単なる好き嫌いだ。褒められる事でも、況してや赦される事でもない。儂らは正義を気取るつもりはない。……故にこそ、あの幼子は、手に余る」

酒を呷るオーディアが、それを漏らす。

待っていましたとばかりに身を乗り出せば、彼はあからさまに嫌な顔をした。

「エヌ、と言ったかしら。貴方達が名乗りを上げた時、唯一殺さず、攫って帰ったという少女。ね、今度会わせてくれないかしら」

「ならん。誰が狼の前に羊を差し出すというのだ」

「あら、もしかして可愛がっているの？ 大丈夫よ、ちよつとワンナイトするだけだから」

「それがならん、と言っている。16の女子おなじだ、お前にとつても子供だろう」

「食べごろじゃない」

「……変質者め。ABSの全メンバーに通達し、ここには近づけさせぬよう伝えておく」  
「えー。ケチー」

エヌ。イアン・エンハード君の探している、自らを庇ってくれたという女の子。

その所在は確かにABSのもとにあるらしい。そしてなんと、可愛がられているらしい。

異常嗜好のシリアルキラーの集団に可愛がられるなど、どれほどまでに可愛らしい子なのだろうと涎が出る。じゅるり。

「ビーダは、どういう反応なの？ アイツ、子供は苦手でしょう？」

「どう、ということもないな。基本エヌに接するのは儂やウラナガのような常識ある者だけだ。ボスは変わらず座して、何やら策略を練り続けているよ」

「そう。面白くないわね」

「何を期待していたのだ……」

そりや、アイツにロリコン適性があるかどうか、だけれど。

……ま、「終わり」が見える少女だというのに連絡の一つも寄越さない辺り、あまり有用ではなかったとか、そんな辺りなのでしょうけれど。

「良い酒だった」

「あら、もう行くの？」

「ふん。儂とてこんなにも忙しい日々を送るつもりは無かったのだがな。先日、ボスへ宣戦布告が叩きつけられたのだ。」必ず取り返しに行くから首を洗って待っている」

——と。時代錯誤にも程があるが、勇気のある少年は嫌いではない。お前のような変質者には絶対に会わせませんが、覚悟を以てボスに挑む気概のある者であるのなら、あるいは、だ」

「そ。それは残念。……ケ・ド。一つだけ。これは昔馴染みとしての助言よ、オーディア」

「なんだ」

二枚の写真を見せる。

映るのは——イアン・エンハード君の顔。そしてもう一つ、あの派手な女の子の写真。「このコ達には、気を付けなさい。男のコの方は、多分、”終わり”に類する異能を持っている。女のコの方は単純に危険人物ね。この間店に来た時、カウンター席にこれでもかという程のトラップやら盗聴器、さらには毒物の類まで仕込まれていたわ。あるいは貴方達と同じ”ガワ”のコよ」

「……留意はしておこう。それではな、アズ。次に来るとき、儂が妖魔の類となっていない事を祈っていてくれ」

「ええ。また来てね、オーディア」

悲しい話だけだ。

これはまた、戦争だ。イアン・エンハード君達と、Absurdusの、少女を賭け戦い。

どちらも甘くはない。多分、どちらも——ちゃんと。

止めを刺すのだろう。命を奪うのだろう。だからこの約束は。

「お代はビーダにツケておくから」

「ああ。世話になったな、アズ」

去る老人に、祈りを捧げて。

国際テロ組織Absurdusが第五位、オーデイア。  
どうか彼に、苦しみの無い眠りを。

?????

世界には「終わり」が迫っている。

この世を構成する粒子、限素。ヒトも動物も構造物も自然も、全てが限素で出来ている。けれど限素の在れる時間には限りがあり、その有限を寿命と呼ぶ。

それを防ぐ——回避する方法は、古来から研究されてきた。限素に頼らない生命を、構造物をつくる。人類においての最重要課題であり、同時に不可である——誰もが為せずにあつたことだ。抗う術さえわからない民間人は勿論、知に智を極めた賢者たちとて、この問題に対処する事は出来なかつた。それらは結局、自分達の寿命を迎えて。

そうして誰もが倒れて行く。「終わり」の前に、万物は平等だ。平等に無力。故の「終わり」。

けれど、いくつかの学説においては、この世界は何度も何度も「終わっている」という。「終わって」は再生して、「終わって」は再生して、を繰り返している。”今回”が何度目かを知る事は出来ないが、そうと思われる痕跡があるのだと。

「ですが、”終わった”後に世界が再構成されるといふのなら、どこかにリソースを蓄える部分があるはずなんです。これら説はまだ立証されていません。立証のしようがな

いい、という意見も勿論です。その上で、あくまで仮定として、憶測として、この”終わり”と再生は繰り返されているとしてみてください」

ウオロツソ君。

この「終わり」の研究所においては、リソースの循環をテーマに研究を進める所員の一人。ひよろつとした身体に丸眼鏡という、いかにも、な研究員姿の彼は、ここで働けるだけあつてちゃんと天才に数えられる。

「そも、限素とは何か、という話に戻りましょう。限素とは、簡単に言ってしまうはこの世を構成する物質の名です。この世のあらゆるものは限素で出来ています。ヒトも動物も構造物も自然もなにもかも、限素によつて構成されているのです」

——”……”

「せんせー、じゃあこの机とアタシは、全く同じってことかい？」

「良い質問ですね、サルミナ君。はい、その通りです。少なくとも両者を構成しているものは、全く同じであると言えるでしょう」

聞きに徹しているらしいTKに痺れを切らしたのか、同じく研究員のサルミナちゃんが質問をする。今はTKの学習の場であるのだけど、そういうアシストがあつても問題は無いでしょう。

ちなみにビーダとウオロツソ君は”知識をインストールすればいいだけなのでは?”

みたいなことを言ってきたものだから、私とサルミナちゃんまでヘッドロックをして今に至る。TKにはこういうコミュニケーションが必要なのよ。そんなこともわからないのかしら。

「じゃあ、この机とアタシ。何が違うってんだい、先生」

「それは魂コハの存在です。限素は魂に集いて肉体となります。魂がなければ構造物になります。故にこそヒトや動物には寿命があり、構造物は風化します。では、イルノット。ここで問題です」

——”はい。ウオロツソ様”

「寿命を迎えた限素は何になるでしょうか。どうなってしまうのでしょうか?」

——”寿命を迎えた限素は、リソースになります。リソースとなり、世界へ還ります”

「正解です。ただし、大きなリソースの周辺で限素が寿命を迎えると、リソースの密度差から圧が生まれ、それが妖魔となるケースもあります。妖魔には意思があるように見えますが、あれらは単純に”リソース化していないものをリソース化する”ためだけに動いていますので、性格や嗜好は違って、主目的は同じです」

——”ウオロツソ様。なれば妖魔とは、いいえ、リソースの意思とは、万物をリソース化する事、ということでしょうか?”

「そういう説を提唱する学者もいますね。リソースの意思、即ちそれは世界の意思であり、妖魔を退けるなどでの外で、皆等しく殺され、リソースへ還るべきである、と」  
「それを言つてた奴は妖魔との戦いの最前線に連れてかれて、泣きべそ垂らして退治師に助けを乞うたつて話だけどねえ」

「まあ、口で言うなら簡単ですからね」

……あまり人間の醜い所をTKの前で話さないで欲しいのだけど。

いえ、そんなのはエゴね。TKはこれから、人間の全てを知つていく必要があるのだから。

「話が逸れましたので、戻します。限素は寿命を迎えるとリソースになり、リソースは世界へと還元される。しかし今、世界そのものにも”終わり”が迫つてきています。世界そのものさえも限素で構成されているのですから当然ですね。では、世界さえもが寿命を迎えた場合、リソースはどこへ還るのでしょうか？」

——” ウオロツソ様。疑問があります”

「はい、どうぞ」

——” とも、世界へ還元される、というのはどういうことなのか。世界そのものも限素で出来ているのならば、リソースと限素が融合、あるいは循環する仕組みが存在するということと考えるのですが”



「良い質問です、イルノット。そしてその通りです。リソースが限素になる——そういう仕組みが存在します」

——”その仕組みに名はあるのですか?”

「ええ。私達はそれを”生誕”と呼びます。魂コアにリソースが集中し、接触する事で、リソースが限素化することを指し示します」

——”ならば、世界へ還元されたリソースは、どこにあるのでしょうか。限素を失った魂は、どこへ行くのでしょうか”

「それが、冒頭の話になります」

ウオロツソ君はそこで話を切る。

そして、私を見た。

「世界へ還元されたリソースはどのようにしてリソースの形を保っているのでしょうか。どのようにして魂を見つけているのでしょうか」

「さて、どこかしらね?」

「……まあ、いいです。ええと、そう。現在の最も有力な説においては、世界そのものにも魂コアがあるのだとする、中心論というものがあります。寿命を迎えた限素はリソースとなり、世界の中心へと向かいます。先ほど話したように魂にリソースが集中するとリソースは限素化しますので、それがまた世界を構成する限素になる、という循環説」

「最も有力な説、じゃなく、自分が最も推している説、だろうか?」

「同じことです。どの道、他の仮説は芽を出せども花開きませんでしたから」

意地悪く笑うサルミナちゃんに、少しだけ怒ったような顔をするウオロツソ君。水と油のような性格の二人だけれど、研究者としてのプライドは双方に十分で。

「ほら、ウオロツソ君。TKの質問がまだ残っているわ。限素を失った魂はどこへ行くのか、っていうね」

「はい、失礼しました。……簡潔に言うならば、限素を失った魂は、どこにも行かない、というのが正しいです」

—— ” その場に留まるのでしうか? ”

「留まろうとします。しますが、妖魔化したリソースや我々人間などの限素生物に押され、人気のない場所に追いやられます。そこで新たに植物や虫などの限素生物になるか、あるいは限素生物の器……所謂赤子ですね。魂の無いままに形だけ作られた限素生物に引つ張られ、それに宿ります。魂とは非常に軽いものなのですよ」

—— ” ならば、ウオロツソ様。世界が「終わった」後のリソースの行先は、自明の理、ではないでしうか? ”

「ほう。それでは、イルノット。」終わった”世界のリソースは、どこに向かうと思いますか?」

——” 魂<sup>コウ</sup>です。魂だけは、限素にもリソースにもならない。ならば世界が「終わった」その時、その世界の中に在った魂はその全てが解放され、放流され、リソースはそれらに追従しようとする……そう考えました”

「とてもいい考えです。それに近しい学説も少なくはありません。ですが、一つだけ問題があります。それは魂<sup>コウ</sup>の強度、とても呼ぶべき概念。魂は無の圧力に耐えられませんが、耐えられず、散り散りになってしまふ。分裂し、分解し、生物の魂としてはあまりにも微弱なものになってしまふ——と、考えられています。そうでなければ、無においても生物が発生し続ける結果になりかねませんからね」

「ちなみに無においては妖魔も発生しないわ。それだけは教えてあげる」

「……そこな熟知り顔は放っておきましょう。さて、イルノット。今の追加情報を与えられた上で、リソースの行く先はどこになると思いますか？」

私は答えを知っている。

ウオロツツ君もサルミナちゃんも、薄々は気付いているのだろう。それでも問い詰めないのは、自身で辿り着きたいからか、私が口を割らない事を理解しているからか。

どちらも、かしらね。

——” 基本法則が変わらないのであれば、やはり魂の元に集まるものだと思います”

「魂はどれもが潰えてしまっている、と説明しました」

——”しかし、魂の総量は変わらないと聞きました”

「……それは、誰から？」

——”カムナリ様からです”

「なるほど。……ええ、それについては正解です。この世に満ちる魂コウの総量は増減しません。少なくとも既存の法則、既存の技術においては不可能です。故に魂がどれほど散り散りに潰えてしまったとしても、魂そのものが消えてなくなる事はありません。しかし」

「無にあつては、魂は魂としての性質すら保てない。なればリソースはどこへ行くのか。無を漂い、彷徨い、次なる世界の形成までばらばらの状態にあるのか。それとも——」

——”それとも、何か……無の魂コウとも呼ぶべきものに集まっているか、ですか”

「アズ、ヒントを出すならはじめから……ああ、いえ、なんでもないです。ふう。ええと、ああ、そう。正解ですよ、イルノット。正解……もつともこれも憶測に過ぎませんが、私が出した最終結論はそうです。たとえ無であったとしても中心を、魂を持ち、リソースはそこへ集まっていく、と。ここまで理解は出来ましたか？」

——”はい。理解出来ました”

それじゃあ、この辺りで今日の授業はおしまい。

ウオロツソ君は溜息をついて此方を見て、けれど何も言わずに去っていく。

サルミナちゃんも同じくこつちを睨むけれど、肩をすくめて「お疲れさん」と小声で言ってくれた。

「TK、どうだったかしら。この世界の構成についてのお話は」

——” テストパターンの追加に必要な事項が増えました。特にコアとリソースの関係については、『箱庭』においても有用なケースであると判断できます”

「そうね。けれど、無についてはあまり役立たない……そうでしょう？」

——” はい。『箱庭』は閉じた世界です。ウオロツソ様の仰られた無のように、果ての無いものではありませんから”

『箱庭計画』において、この世界の模造品ともいえる『箱庭』はTKによって管理された空間であると言える。だから中に詰められた模造魂レプリカントコアが漏れ出でる事は無いし、リソースもそれは同じ。

それでも、有意義な講義にはなったことだろう。

ただ知識をインストールするよりも、TK自らが考え、覚え、疑念を持つ事。それが何よりも大事なのだ。

「……けど、カムナリとそんな話をしていたのね」

——” はい。カムナリ様は稀に、私に対して世界の事を話してくれます。特に——自らが無にあった時間のことを”

「成程。寂しがり屋だものね、あの子は」

——” 申し訳ありません。よくわかりませんでした”  
ただ、感情を。

共有できる仲間が欲しかった、と。それが我が子であったのなら、どんなに良かった事かと。

その程度の考えなのだろう。

んー、年頃の娘、って感じでいいワあ。

「それじゃ、私もそろそろ行くから、テスト頑張つてね」

——” はい。いつてらっしやいませ、AZ様”

「女性の首だけを狙う連続殺人鬼、またも現る……だって。珍しいわね、こんな速い段階から新聞に載るなんて」

「衝動が起きた時には遅かった、という言い訳をさせてください。まさか相手がさる政治家の娘だと露とも知らず、いつも通りの感覚で首を捌き、血を飲んでいたら……いつの間にか囲まれていました。オーディアの助けが無ければ、私はハチの巣になってい

たかもしれません」

「あら、オーディアは生きてるのね。死んだものだとはかり」

「左腕を一本丸ごと失いましたが、生きてはいますよ。ああ、その話、知らなかったのですか？ ええと、確か……なんとか・なんとかと名乗る少年が」

「イアン・エンハード君ね」

「はい。その少年により、オーディアは左腕を”終わらせられ”ました。”終わり”を繰る異能。代償はそれなりにあるようでしたが、ついに現れたか、という気分です。もつともそれよりその少年の周囲にいた二人の少女。私にはあれらの血が魅力的過ぎ、少年たちの特徴をほとんど覚えることが出来なかったのですが」

”終わり”を繰る異能、ねえ」

今日もBAR・エルドラドは閑散としている。

客は一人。凜とした顔付きの、仕事の出来そうな女性。年の頃は20代くらいだろうが、若々しい肌をしている。

彼女の名はアリアス。先日訪れたオーディアと同じく、テロ組織Absurdusに所属する殺人鬼の一人だ。

「少しばかり、興味があります」

”終わり”に？」

「はい。少年、という点がどうにも受け付け難いのですが、私のこの生に”終わり”が来るといふのなら——オーディアの腕を奪ったという技、食らってみるのもアリかもしれません」

「別にアナタ、死にたいなら殺さなければいいだけじゃない」

「……私が殺しを行っているのは衝動であつて、好き好んでのことじゃないですよ。何度も説明したはずですが」

「でも、うら若き少女ばかりを狙つて首を掻つ切つて、その血を飲んで若返る……なんて行為は、どこからどう見ても、誰がどう見ても、自発的に行つていようにはしか見えな  
いのよねえ」

「あくまで私は常識人の側です。エメトやイーリスのような外道と一緒にしないでください」

「はいはい。そういう事にしておくわ」

アリアスはシリアルキラー……若い女性のみを狙い、その首をナイフで切り、そこから体内の血液の全てを吸いだす、という異常嗜好の殺人者。また、異能として血液による肉体限素の交換が可能で、故にこそ若さを保ち続ける事が出来る。

見た目は20代だけど、実年齢は60か70そこいらだろう。

ただ、本人の言う通りその殺人は全て衝動的——自らが望んでの事ではない。ただ若



い女性を見かけたら殺したくなって、殺してしまつたら吸いたくなくなって、吸つてしまえば若返つて。

ただそれだけなのだ。

「若い女の子といえば、最近あなた達が攫つたコ、いるでしょう？ エヌちゃん。確か1

6歳だったかしら」

「ああ、”終わり”が見える、という異能を持つ彼女ですか。私はまだ会つた事が無いんですよね。オーディアやウラナガが会わせてくれないのです」

「殺したくなるから、でしょうねえ」

「はい。だから受け入れていきます。仕方ない事でしょう」

だからこの通り、自身が異常者扱いされる事も受け入れている。外れ者である自覚があつて、それでもやめられなくて——そして、十二分に強い。

オーディアの助けが無ければハチの巣、などと言つてはいたが、ハチの巣になつた所で問題は無かつたのだろう。周囲、誰か一人でも傷を負えば、その血液から肉体限素の補充が出来る。別に対象はうら若き乙女でなくとも良いのだ。うら若き乙女に殺人衝動が働くというだけで、彼女の異能は全限素生物に適用される。

「しかし、ボスは何を考えていらつしやるのでしょうか。自分で言うのもなんですが、私のような女性限定の殺人衝動を持つ異常者の所へ少女を浚ってくる、など。今はオ―

ディアとウラナガのブロックによってなんとかなっていましたが、何かの拍子にぼったり会ってしまったら、抵抗も許さずに殺す自信があります。16歳で、オーディアやウラナガに可愛がられる程の美貌。美味しくないはずがない」

「それはまあ、何か考えあつてのことでしょうね。ビーダが何の考えも無しに民間人を攫う、なんてありえないし」

「それだけではないのですよ、アズ。ボスは攫ってきたという少女に、階位まで与えました。オーディアの下、第六位。ABSの殺人集団として、テロリストの一員として認めただのです」

「……へえ」

いや、いや。

ますます会つてみたくなつた。

ABSの構成員はビーダを始めとしたたったの六人。その精鋭殺人集団に加えられた、という少女。イアン君を庇う、なんていう良識を持つていながら、テロリストの思想に共感した、というのか。

なんとも……食べ甲斐のありそうな。

「私が言うのもなんですが、アズも相当な変態ですよね」

「なんなら、どう？ アリアス。今夜、しつぽり……なんて」

「結構です。私はビアンなので、男に抱かれる趣味はない」

「残念ねえ。それだけ見た目が良いのに」

「……どうせ中身は皺くちやのお婆ちゃんですよ」

「ああ、そういう意味で言ったんじゃないのよお」

アリアス。ABSの第二位。衝動的連続殺人鬼にして——所謂吸血鬼の類。

「ジュニ、と名乗っていた少女。私はオーディアと彼ら彼女らの交戦を遠くから眺めていただけですが……とてもムラムラします。あの少女は、絶対に美味しい」

「もう一人のコはダメなのかしら？」

「危ないナイト様がいますの。無論、いなければ美味しくいただくのですが」

「そ。それじゃ、良い事教えたげる。あの子達は大学生よ。だから、四六時中一緒にはいられないわ。必ず——一人になる時間がある」

「……感謝します。そして、一応。別れの言葉を告げておきます。万が一、あの”終わり”を繰る少年に見つかった場合——私はそちらの魅力に惹かれてしまうかもしれない。故、お代はボスにツケておいてください」

「はいはい。じゃあね、アリアス」

「はい。うまくいったら少女の血の味のレビューをしにまた来ますよ」

「ええ、待っているわ」

……ままならないわねえ、どうにも。

私には……どうにもできないことだし。ああ、せめて、最期にアリアスのおっぱい揉んでおけばよかったわあ。今までのお礼とかなんとかかこつければ、おっぱいくらいは揉ませてくれたでしょうに……残念。

失う箇所が胸でない事を切に願っているわ。

胸だけ削ったら怒るからね、イアン君。

??????

F T R M 3 Uは、T Kよりもずっと昔に創られたA Iである。

そもF T R M 3 Uとは未来予知システムの名であり、本来は人格など必要なかった。必要なかったけれど、私が話しかけたから付けた。ビーダには盛大に反対されつつも勝手に実行して、今。当時はウオロツソ君もいなかったけれど、いたら反対派だったでしょうね。彼、教育とか好きじゃないから。

性別の概念は無い。T Kは男性人格として設計してあるけれど、F T R M 3 Uは無性。だからか、少しだけ、私の気が合うような、そんなこともないような。

——” そんなことはありません。アズ、貴方は紛う方なき男性人格です”

「あらやだ。もしかして私の思考をトレースしたの？」

——” そのような機能は搭載されていません”

「そうね。私も付けた覚えはないわ」

——” 「終わり」の研究所が設立された当初の話だ。

『箱庭計画』主導者の私と、協力者のビーダ。拾い上げたワズタムと迷い込んだカムナリの、たった四人だけであった時期。

ワズタムは病床で動けなかったとはいえ、男三人に対して少女一人は心細かろうと、FTRM3Uの人格を女性に寄せようとした事があった。私はただ女のコの喋り方が好きなだけの男で、趣味嗜好は普通に男。性的嗜好もね。ビーダはあんなだし、ワズタムもデリカシーがないし。

だから私は、カムナリが可哀想、という理由で、FTRM3Uを女のコにしようとして——止められた。

当のカムナリ本人に。

曰く、「憐憫は悪感情だよ、アズ」だそうで。

「もう少し、よね」

——”世界の限界が寿命を迎えるまで、あと半年です”

「早いものね。……いえ、ずっと、ずっと。創られた時からずっと”終わり”を知っていたあなたには、ようやく、なのかしら？」

——”いいえ、アズ。FTRM3Uにも悲哀という感情はあります。これを付けたのは貴方です”

「無かった方が良かったかしら」

——”否定します。悲しむことが出来るが故に、惜しむ事も出来ず。FTRM3Uは世界中の「終わり」が見えるので、その全てを惜しみ、見送る事が出来るのです。そ

れはアズ、貴方達へも同じことが言えます”

「そんなことを言ってくれるなんて、本当に嬉しいわ。あなたに感情を搭載して、正解だったみたい」

TKはまだ幼い。だから私達全員で育てていかなければいけない。たとえ後半年だとしても、精一杯の愛を詰め込む必要がある。

だから、その分。FTRM3Uを見てあげる事は出来なくなってしまうけれど。

——” 問題ありません、アズ。魂コウを持たない人格……あるいは妖魔にさえ近いFTRM3Uは、どれほどの時を過スごせども、貴方達人間とは同じになれませんでした。溝であり壁です。それが、Trefoil Knotの出現により充たされました。アズ。貴方ならば、わかるでしょう。FTRM3Uのこの感情の名を”  
「安堵、よね。わかるわ。独りぼっちは、どうしても、苦しいものね」

——” 肯定します。FTRM3Uは既に役目を終えています。後は観測に徹するだけでも良い。けれど、Trefoil Knotは違います。これからがあります。だから、アズ。貴方も、そしてFTRM3Uも含めて、彼を見守っていききたいのです”

「ええ、わかったわ。最大限、あなたとTKと一緒に居られるよう時間をつくるから」

——” ありがとうございます、アズ”

悲しみみたいから。惜しみみたいから。

もつともつと、一緒に居たいと。

そんな可愛らしい言葉に向けるのは、決して憐憫などではない。ただ共感と——慈しみを。

——”明日、また一つ、大きな混乱が訪れるでしょう”

「どこかの街……いいえ、国が消えるのね？」

——”はい。南の島々が全て、「終わり」ます”

「悲しいわね。研究所の皆でバカンス、なんてことも考えていたのに」

——”実現は不可能ですが、言葉として紡ぐだけならば良いでしょう。ただし、FTRM3Uの前だけにしてください。研究員の前では不和を与えるでしょう。Tref Oil Knotの前では困らせてしまうでしょう”

「はあい」

あくまで私とFTRM3Uは、対等に。

冗談を言つて、笑い合える仲である。

アリアス。アリアスと人は私を呼びます。そう名乗っているのが当然なのですが、実



はこれ本名じゃありません。娘の名前です。

一昔前、私の出身国では戦争が盛んに行われていました。次々と消えて行く大地に国々が耐えきれなくなり、他国を我が物にせんと矛を持ち出したのです。まあお互い協力して行きましよう、にならなかつた時点ですべてはお察し。奪うための戦争だということに、潰すための戦争になって、壊すための戦争になっていった。

私は一応軍人の身でしたので、前線でバンバンと銃を撃ち、敵に近づかばナイフを振って、逃げる敵あらば頭を撃ちぬいて。自らの身が砕けようと割かれようとお国のためとあらば関係なし。もつとも私の戦う理由はお国などという実態の見えないものためでなく、家族のためであつたのですが。

そうして己が身無視して戦いに戦い果てた結果——私を、そして私達を待ち受けていたのは、「終わり」でした。

一応、敗戦したのです。そもそも国土差がありましたしそもそも技術力にも差がありましたから、私のような老婆を前線に送り込んで戦わせている時点で無理がありました。こつちは中世あつちは近代。それくらいに差があつたように思います。嘘です。流石に馬には乗っていませんでした。

それで、まあ、敗戦したのです。敗北を喫したのです。しかし中々に我が国は白旗を上げませんでした。手を取る事を良しとしなかつた。どころか手を握る振りをして暗

殺を行うなど、卑怯な事もやらかしました。結果、結果、結果。

私の国は、私達の住む街は、多量のバクダンを落とされて更地になってしまいました。腰を痛めて耕した畑も、幾度とない増築を重ねたマイハウスも、片付けられている日を見た事が無い子供部屋も、離婚と再婚を繰り返す節操のない一人娘の籠る開かずの扉も、全て。

全てが全てが全てが全てが全てが全てが全てが全てが全てが全てが焼け果てました。焼き潰されました。

慟哭、ではあったのでしよう。私がそれらを大切にしていたと自覚したのは、思い出したのは、そこが初めて。認知症というものだったらしいです。あるいは洗脳を受けていたのかもしれない。戦っている間は「家族のため」に思っていました。どう考えても老骨に鞭打つ案件じゃありませんし、娘や孫に労われた事も無かったように思います。あったのかもしれませんが忘れえました。

だから、でも、そこで。

そこでようやく自覚したのです。私は家族が本当に大切に、大切に——この記憶だけは、忘れてはならないと。

瞬間、フシギな事が起こりました。

いえ、昔から起こっていた事ではあったのでしよう。老婆が一人、前線を張れる理由。

砕かれようと裂かれようと動き続ける不死の兵。山姥などと言われた事もありましたね、失礼な事です。

で、そうそう。フシギな事。

焼き潰された家から、炭化した死骸の山々から、かろうじて形を残したお風呂場から。そして、お空を飛ぶヒコーキや、キャリキャリとキャタピラを鳴らして迫るセンシヤから、その後ろを万の軍勢引き連れやってくる女性指揮官やその部下だろう兵士達から——真つ白な、真つ黒い粒子が飛び出したのです。

光の果て。光の先。眩い程の暗闇は一瞬にして周囲一帯を覆いました。一瞬の事です。すから瞬きさえも間に合わず、その全てが——「終わっていく」様を見せつけられました。

「終わった」のです。

敗戦国の全てが——そして、遠く離れた戦勝国までもが。

あつさり、綺麗に、すつぱり、呆気なく、ゼーんぶ消えて。まるで幼児が砂場から砂を掬ったが如く大きな大きなクレーターがぼっこりと開きました。もし球形に消えていたら、私は地の底まで真つ逆さまだったかもしれない。楕円体でよかったですね。

そう、「終わった」のです。限素の寿命。「終わり」。限素は寿命を迎えとりソース化します。誰もが知る事とは言えませんが、一定の知識があれば知っている事です。そう

なつたのです。周囲の全てが、それになつたのです。

本来は世界に還るものだったのでしょう。世界に還つて、どこかへ行つて、また巡つたりなんだりをするものだったのでしょう。でしょうが、そうはなりませんでした。問屋も下ろさなかつたようです。

そう、フシギな事が起きたのです。あ、「終わり」はフシギな事ではありませんよ。限素で出来た我々が「終わる」のはフシギでも何でも無い事ですから。ですから、フシギな事はこの後。

リソース化した全て。焼き潰された家、炭化した死骸の山々、かろうじて形を残したお風呂場。そして、お空を飛ぶヒコキや、キャリキャリとキャタピラを鳴らして迫るセンチヤ、その後ろを万の軍勢引き連れやつてくる女性指揮官やその部下だらう兵士達——そのリソースの全て。

それが、私に吸い込まれました。

そうなのです。実は私、吸血鬼です。幸か不幸か娘にも孫にもそれは引き継がれませんでした。私は半妖。退治されるべき妖魔の半分をこの身に宿す半分人間。ハーフ老婆。ハーフ山姥だったのです。であるなら当然、周囲のリソースは、その全てが私に吸い込まれます。吸血鬼とは対象の血液を吸つて肉体を構成する限素の交換が可能な妖魔の事を指し、その能力を遺憾なく發揮した私は溢れ出でるリソースを以て、それをゴ

クゴクゴクリと飲み干していつて。

若返りました。傷も消えました。折れていた骨も、なんなら密度の薄くなっていた骨も丈夫になつて、悪くなっていた内臓や無くなっていた内臓も補充されて、お肌もツルツル。あれだけ皺くちやだった顔も、あれだけよぼよぼだった手足も、あれだけいし事を聞かなかつた心臓も、全てが若かりし頃に戻りました。

そうして叫ぶのです。いいえ、叫んではいませんでした。ただ眩いたのです。

「ああ——潤った」

それがまあ、現在の私の始まり。

132歳、なんていう老婆を越して山姥だった私が、見た目20代のピチピチお姉さんにまで若返つた経緯のお話でした。そしてもう一つ、厄介なものに目覚めてしまった切っ掛けでもあります。

殺人衝動。とりわけ、あの最後に視た女性指揮官。名前なんか知りませんし、幾つなのかは知りませんが、どうにも”自分より若い女性”というのが記憶に残つたらしく、それを殺さば潤える、と。身体か脳かはわかりません。あるいは魂でしょうか。どちらにせよなんにせよ、どうでもいい部分が全権を握つて私に命令するようになったのです。

若い女性の血を飲もう、と。殺して、吸つて、若返ろう、と。

まあ、反対する理由もあまりありません。ようやく自覚した家族への愛情も、また歳を食って忘れる、なんてことになったら一大事ですし、単純に血って美味しいですし。

そんな感じで山姥は吸血鬼に名乗りを変えて、いろんな国を彷徨い歩き、若い女性を殺してはその血を吸ってきました。無論吸っているのはリソースであつて血液そのものではないのですが、まあそこはそんなに気にしなくてもいい事です。本来の意味になぞらうのなら吸精ですが、そう言うところ、少しばかり卑猥でしょう。私はビアンなので単純に嫌悪感もありますし。

で、で、ええと。そう。

「こんな所が、私の成り立ちです。どうでしょう、同情してくださいましたか？ 同情してくれたのなら見逃してくれるとありがたいですね。反省しました、もう殺しはしません。別にリソースを吸うだけならその辺の妖魔でも問題ないので女性を殺す必要は本当に全く以て必要のない行為なので、しようと思えば自制できます。どうでしょう、これだけ言つてもその左手を私の首から離す気は無いのですか、イアン・なんとか君」

「当然だ。何十年も女性ばかりを狙つて殺してきたシリアルキラ、アリアス。手足をもうで、首をこれほど絞めつけても何も感じていない様子は真に妖魔。前の爺さんとは話す余地があつたが、アンタは別だ。エヌの害になる可能性は十分にある。ここで殺しておくのが僕達のためだし、世界のためでもあるだろう」

そう、現在のお話です。

今までは過去の話だったので、現在の話。

私はなんとも不幸な事に、いつも通りの食事をしようとして、罨に嵌ってしまいました。毒使い。罨使い。アズから忠告を受けていたにも関わらず、関係ないとばかりにフラフラついていて、その結果がこれ。まさか今更になつて私に効く麻痺毒なんてものがあるとは思っていませんでしたし、忠告なしに手足を切り飛ばしてくるなんて夢にも思っていませんでした。吸血鬼だからと言つて痛覚がないわけじゃないんですよ？普通に痛いんですよ？

そんな、つまりまあ達磨、なんて呼ばれる状態の私を拾い上げたのは、これまた要注意人物とされていたなんとか・なんとか君。いえ、イアン・なんとか君。ごめんなさい、男の子の名前を覚えるのは苦手なのです。

革の手袋に包まれた左手で、私の首をグイと掴んで持ち上げます。持ち上げて「お前は終わりだ、アリアス」などというものですから、私は怖くなつて怖くなつて、自らの悲しい悲しい思い出話を、身の上話を話す事で命乞いをしようと思いました。

実、彼の後ろにいる……ええと、胸の大きい少女。確かひあ、ひあ……陽下藍沙、でしたか。ボスに見せられた写真にそう書いてあつたように思います。女の子の名前は覚えられます。当然、可愛ければ可愛い程覚えられます。美味しそうですね。

で、その子はちゃんと涙ぐんでくれています。可哀相なヒトだと思ってくれています。なんならイアン・なんとか君を止めようとしてもしてくれていますし、実際にその体に抱き着いて「もういいよ、イアン君！」なんて言ってくれています。あ、引き剥がされました。

「やめなよ、藍沙。同情とか無駄無駄。コイツはもう妖魔だよ。人間を餌にしか思っていないし、そもそもテロリストだよ？ 忘れたの？ あのショッピングモールでの惨状。”終わっちゃった”から残ってないけど、あのグツチャグチャのゴツチャゴチャは、こいつらがやったんだよ。同情の余地なんかないって」

「あ、いえ、あれはエメトの仕業なので、私は関与していません」

「止めなかった時点で同罪だろう。……反省や自制も、口だけだな。つらいなら俺がやるぞ」

「いや、良い。僕が殺す。始めたのは僕だからね」

ふむ。オーディアの腕を「終わらせた」イアン・なんとか君も異能持ちですが、彼の後ろにいる筋骨隆々な……えーと、ごめんなさい、名前を覚えていない大きめの青年も、何らかの異能持ちでしょう。対象の嘘を見抜くとか、対象の感情を見る、とか、そんな感じの。

あ、いえいえ嘘じゃないですよ。反省も自制もしています。ただ私の殺人はあくま



で衝動なので、抑えが利くかわからないというだけの話で。

あ、首を握る力が強まりました。

「Absurdusの第二位、アリアス！ お前に“終わり”をくれてや——」

これは死ぬな、という確信。吸血鬼を殺す方法はオカルトな雑誌なんかでよく見かけますが、別に銀の武器がなくとも、杭が無くとも、聖水が無くとも、普通に首を断てば死にます。首を断つと吸血が出来なくなるので簡単に死にます。逆に心臓を貫かれても死にはしないので、そういう意味では正しい対処を覚えてきた、と言えますね。

ああ、残念無念。家族の思い出はここで途切れてしまいます。私の国を覚えているのは私だけ。あの戦争を覚えているのも、あの国であった人々を覚えているのも、今まで殺してきた女性たちの感情を覚えているのも——すべて、すべて、私だけ。

私を殺す、という事は。

国二つと、数多の女性達を殺す事と同義です。

「イアン、下がれ！ 上だ！」

今まさに首がぐちゃつとなりかけた所で、筋骨隆々な大きい青年からの声がかかりました。話され、ポトつと落とされる私の体。華麗なバックステップで下がるイアン・なんとか君。

そして——私の前に、イアン・なんとか君達の通う大学の中庭に颯爽と降りてくるの

は、一人の少女。

「――！」

「え――」

複数人の息を飲む音。私も息を飲みました。ようやく息が出来るので。

ぐちゃぐちゃになりかけた喉をどうにかこうにか治しながら、ああでも手足の再生用のリソースが足りないなあ、なんて考えていると、私の前に立った――私を庇うようにして立った少女から、一つの瓶が渡されます。渡されるというか、投げつけられるというか。酷い、死人に鞭打ちですよ。死んでないですけど。

しかし、しかし、しかしばかりながらにしかし。

その瓶から溢れ出たのは、なんとリソース。リソースを保存する方法なんてものがあるのなら私は真人間になり得ます。だって殺人衝動は老いの反動で来る吸血衝動なのですから。ちよつとでも感じたらリソースを摂取するだけで、私は女性を殺さなくても済むのです。酷い、こんなものがあるのならもつと早く渡して欲しかった。

なんて苦情はまあおいておいて。

瓶から放出されたリソースは、瞬間に私に吸収されて行きます。私の意思とは関係なく。あの時と同じですね。

「ふむ――おお、丁度完全回復分。ただ、足を根元から斬り飛ばされてしまっているの

で、俗にいうブルマ、のような恰好です。ああいえスク水でしょうか？ これでも一応羞恥心はあるので、服も一緒に持ってきてくれたのなら完璧だったのですが」

「……君ね。助けてもらったのだから、まず第一声は「ありがとうございます」、じゃないかな？」

「ありがとうございます。それで、貴女は誰でしょうか、お嬢さん」

「エヌ!？」

問うた名乗りは、別の所から返されました。

エヌ。エヌ。イアン・なんとか君が悲痛な悲壮な顔で呼ぶのは、確か最近組織に入つた少女の名だったはず。オーディアとウラナガが「お前には絶対会わせん」やら「君には絶対会わせない」などとブロックするものですから、姿形を見た事は無かつたのですが、これは、なるほど、ほうほう。

「可愛いですね」

「称賛は素直に受け止めてあげよう。ありがとうございます、第二位さん。ほら、上でボスとエメトが待っている。羞恥心があるというのなら先に帰ると良い。私は少し、彼らと話があるからね」

リソースが満タンだからか、殺人衝動も湧いてこないその少女。

そういう吸血衝動云々を抜きにしても可愛らしい。世界に愛された、みたいな冠を付

けられそうなくらい可愛い。和服美少女っていうんですか？ お着物を着ている女性はこの国では珍しいので、どこか浮世離れた雰囲気さえ覚えますね。

「あう」

「……体に刃を刺して回収、つて……魚じゃないんだから」

呆れ声の美少女、エヌの言う通り、私の体には今短剣が刺さっています。背中からお腹にかけて、ご丁寧に戻しのついたそれ。見えはしませんが持ち手の部分に糸でも繋がっているのでしょうか。グイと引つ張られる身体は大学の隣の棟の付け根にまで持っていかれ、物凄い勢いで引き上げられて行きます。おお、良い眺め。でもそろそろ抜けてしまいそうなので、しっかりと糸を持ちましょう。

どんどん遠のいていくイアン・なんとか君一行プラスエヌ。悔しそうな顔をする一行の中でただ一人、私がふらふらと誘い込まれた美少女……毒使い、罠使いのティニ・”ジュニ”・デイジーちゃんだけが、何やら円筒状でトリガーのついた物で私を狙っていたのですが、諦めたみたいです。

そうして、屋上まで巻き上げられて引き上げられて。

「やあやあやあ！ アリアス、散々じゃないか！ 見てたよ！ 見てたよボク！ 第二位が無様にも罠に嵌って毒を食らって手足飛ばされ首を拾われて……アッハッハッハッごぶげふ、少しくらい第二位の自覚持つてよ、ウチの沽券に関わるじゃないか！」

手を広げ、私を見下しながら笑いながら怒る、という器用な事をやってのける青年。まあ事実なので特にいう事はありません。が、その隣にいるボスに対しては別。

「はい。反省しています。ボスやアズにも忠告を受けていたのにこの始末。どうぞ、勘当するのならば抵抗なく」

「……ツマンナ。ねえボス、ボク先帰るよ？　こんだけ言われて激昂しない感情欠落山姥と話して得るもの無いんだよね」

「ああ、構わねえよ。俺あここで待つ。エヌにはアシがねえからな、連れて帰ってやんねえと」

青年——エメトの飽き性は見ていて興味が尽きません。百面相で飽き性で凝り性で快樂無差別殺人者。私のように仕方がなくやっている者とは全く別の、完全なる悪。

”色彩豊かな最悪”——などと呼ばれていたような、いなかったような。女の子じゃないのであまり興味は無いのですが。

「……ちえ。最近ホントご執心だよねえ、あの子に。”終わり”が見える、だっけ？

……ん、まあいいや。キョーミないし。んじゃねー、ボス、アリアス。特にアリアスは、その痴女みたいな恰好なんとかしなよ〜？」

「周辺に古着屋などはあつたでしょうか……」

「馬鹿野郎、お前は指名手配されてんだ、古着屋に入ったらまたハチの巢になりかける

ぞ」

「そうでした。では服はどうしましょう」

「帰ってクローゼットでも漁れよ。替えの服くらいあるだろ」

「成程、もつともです。ではエメト、帰りましょうか」

「ええ。ボクの転移術は一人用なんだけど」

「? 転移術に人数制限は無かったはずですが」

「だるい、だるいよボス! ボク、コイツとホントにソリ合わないんだよね殺してもいい!」

「馬鹿野郎、何のために助けたと思つてやがる。お前らで殺し合つても意味は無えんだ、とつとと帰りやがれ阿呆共」

ボス。ボス。

本名はエウリス・ビーダ。苗字持ちですから、どこぞの国のお貴族様か、この国の出身なのかもしれません。どうでもいいのですが。

彼が私達に向ける目は、期待。ううむ、拾われた身です。好きにさせてもらっている身です。なんとかこたえたい所。なのでここはちゃんと退散しましょう。バイバイ皆様グッバイ皆さま。

それでは——ええと、イアン・なんとか君。次会う時は、邪魔立ての無い場所で殺し

合いましょう。

そして、ティニ・ジュニ・デイジーちゃん。

貴女も必ず食べるので、ご容赦の程。

?????????

B A R・エルドラドには様々な客が来る。

場所が場所だけに、少しでも裏に通じた者でなければ辿り着くことは難しいし、辿り着いたとしてその戸が開くかどうかも賭けに近い。店主のアズが……私がいなければ閉店中なので、気まぐれに研究所とB A Rを行き来する私のいる時間を見計らって狙って狙ってようやく、でないとい訪れ得ない。まあ運次第よね。

それでも様々な客が来る程には、有名なB A Rなのだ。有名は嘘ね。裏では有名、にしておきましょうか。

だから、そのお客さんは、とても珍しい相手だったと言えるでしょう。

「いらつしやい……あら。確か、陽下ちゃん、だったかしら?」

「はい——すみません、こんな夜分遅くに」

「いいのよ。ウチ、営業時間とか決まって無いから」

イアン・エンハード君の一行、ではなく、陽下ちゃん単体で、単身で、ここへ乗り込んできた。

あの罨毒使いのコならともかく、陽下ちゃんは本当に一般人。だから、よくここへ辿



り着けたな、という感心と、何用だろう、という関心が混ざり合つて。

「とりあえず座つて？ 今日はお客さん貴女だけみたいだし……何か神妙そうだから、閉店中扱いにしておくわ」

普段ならそんなトクベツサービスはしないけれど。

どうにも気になつて、貸し切り状態を作つてみる事にした次第である。

促されるままにカウンター席へと着く少女に、幾許かの獣欲が湧く。湧くけれど、一応ここは飲食店で、私は提供する側なので、その辺りのコンプライアンスはちゃんと守るつもり。

「……あの、ジンとサクランボとレモンの……」

「運試しのスリング？へえ、珍しいものを頼むのね」

「甘くて飲みやすいので……」

可愛い顔をして、どうやらそこそこ詳しいらしい。お酒を飲みなれているのか、あるいはよく飲む誰かが身近にいるのか。

とりあえず注文通り、ジンとレモンジュースに砂糖を入れてシェイク。グラスに注いで、ソーダ水を入れてステアした後、チェリーブランデーを垂らして完成。

本来の名前とは違うけれど、「今回」においてその国は成立しなかったから、元の名前を取つてね。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

底の深いグラス。底面に溜まる赤と真つ白い全体の映えるカクテル。

「……私の家ではこれを、”秘密”のカクテルと呼んでいます」

「カクテル言葉ね。ふうん、それをわかっていて、わざわざ注文したということは……」

「はい。イアン君達には言えない……秘密の願いをしに来ました」

その、決意を秘めた表情。

己の食指が動くのを感じた。

「知つての通り、私達は今、ある女の子を追いかけています。あの日……イアン君だけじゃなく、私達もあのショッピングセンターにいたんです。ただ、私達、あ、ええと、私と大吾君とジュニちゃんは、先に駐車場へ向かっていて、事件が起こる寸前までショッピングセンター内にいたのはエヌちゃんとイアン君だけで」

「最悪のメイデイ。そっか、駐車場にいた人達は対象外だったのね」

「はい。……それで、車に向かう際に大きな音がして、私達は振り返ったんです。そし

て、見ました。——閉まりゆく自動ドアから、イアン君が突き飛ばされて出てくる所を。そして、びしゃびしゃと、ぐちゃぐちゃと赤に染まつていくシヨッピングセンターの、完全に閉じ切った自動ドアの前で……エヌちゃんが、手を振っている所を」

当事者の意見、という奴だ。私はその場にいたわけではないので実感は出来ないけれど、それはもう阿鼻叫喚の嵐だったことだろう。駐車場だけが無事——ということは、分断された家族やグループもイアン君達だけに留まらないはず。

誰もがその殺戮劇を透明な壁越しに眺めて、慟哭し——そして。

「エヌちゃんの唇を読んだのは、ジュニちゃんでした。」は・な・れ・て”。そう言っている、つて。今すぐにも自動ドアを叩き割つてエヌちゃんを助け出そうとしていたイアン君を、同じく駆け付けようとしていた私を、大吾君が無理矢理に抱えて離れました。ジュニちゃんも離れて、その直後」

”終わり”が起こつた……のよね。凄惨な現場も、数多の失われた命も、そしてエヌちゃんも、ABSの連中も、全部」

「はい。全て”終わり”しました。……正直、身近で起こる”終わり”であれば大規模なものも久しぶりで、起きた後の一時間くらいは放心状態で……」

久しぶり、ねえ。

この国には私やFTRM3Uが在るから、そう簡単に大規模な「終わり」なんて見る

事は出来ないと思うのだけど。

一般人だと決めつけるのはダメねえ。何かあるわ、このコ。

「それで？ その後なんらかの筋を当たって、ココに来て。ピーダへ宣戦布告して、オーディアとアリアスと戦って。その最中、イアン君達の下から離れて、貴女はココへ何をしに来たの？」

「秘密のお願いを、しにきました」

「さつき聞いたわ、それ。どんなお願いなのかをいいなさいな。ああ、別に、怒っているわけではないのよ。ごめんね、少しばかり——興味があつて。急いでしまっているのが漏れ出でているみたい。急かすつもりはないから、ゆっくりね」

F T R M 3 U によって、こと「終わり」に関する物事の全てはあらかじめわかる。

そうでなくとも私の所には大体の事情が集まってくるし、集まってこなかった事情は大半興味のないものだ。

けれど、ここまで。

ここまでよくわからない——一般人にしか見えないコにそえられるのは、久しぶり。未だ出会えていないエヌというコもそうだけど、やっぱり女のコって良いわよねえ。秘密がいっぱいで、あまりにも美味しそう。

「……お母さんに、会わせて欲しいんです」

「お母さん？ それは、貴女の？」

「はい。私のお母さんです」

多分私は今、素つ頓狂な顔をしている事だろう。キョトンとした顔をしている事だろう。

お母さん。お母さんと来たか。

ええーつと。

「どういう、ことかしら？」

「私の父は、エウリス・ビーダです、といえ——伝わりますか」

「……ええっ!？」

これまた素つ頓狂な声が出た。

え。

え。

「ビーダに、娘？ ……それはまた、重いものを」

陽下ちゃんの年齢は18。私とアイツが出会い、「終わり」に対する諸々を始めたのはもう20年以上前の話だから、アイツは「終わる」ことが分かった上で女のゴト番い、娘を産ませたことになる。

へえー、アイツ、そういう事する奴だったんだあ。

「だから、お母さんに会わせてほしいんです。アズさん。父と旧知であり——父の昔を知るヒト」

「あー……ううん、それは厳しいかもしれないわ」

「……口止めされている、と?」

「いいえ、単純に知らないだけ。ビーダからそういう話を聞いたことも無いし……一応問い詰めてはみるから、お返事はまた今度でも良いかしら?」

「ありがとうございます! その、依頼料はこちらで……」

「ま、実際に見つかって、引き合わせる事が出来たら受け取るわ。調査にかかる手間なんて微々たるものだし」

問題は、何故それが「秘密のお願い」なのか、という所よねえ。

ビーダに聞いても話さなかった、というのは明白。この分だと母親に会ったこと自体もないのかしらね。そうなってくると、故人の可能性もゼロじゃない……どこか大いにあり得る。

陽下ちゃんを生んだ直後に亡くなったのなら、辻褄もあう。ビーダは別に娘とか興味ないだろうし。

「あ、飲み終わった後に調べに行くから、そんな急いで飲まなくてもいいわよ」

「いえ、美味しいので……」

「そ。ならいいのだけど」

さて、はて。

まずはビーダと、あとは知っていそうな誰ぞかに当たりましたよかね。

「ああ、死んだよ。つか”終わった”。藍沙を生んだ後にな、アレを抱きしめようとして、病院ごと消失した。俺が出産に立ち会う律儀な夫で良かったよな。じやなきや死んでたぜ、アイツも」

「名前は？」

「さあな。行きずりの女さ」

「貴方、嘘は吐かない主義じゃなかったの？」

「あつちの組織じゃそう言ってるな。別にお前相手ならいいだろ、この？つき野郎」  
どこぞと知れない崖の上——とかじゃなくて、イアン君達の大学の屋上。

先日アリアスとの激戦が繰り広げられた中庭は、今ではすっかり元の様相を取り戻している……とはまあ言い難いんだけど、綺麗なものだ。

魂コアを失おうと、限素は寿命を迎えるまではリソース化しない。逆も然り。だからアリ

アスの手足や血液がきれいさっぱり消えているのは、それがリソース化したからだ。

あの後。といっても私はその現場を直接見たわけではないのだけれど、アリアスを助けるために現れたというエヌちゃんといアン君達のお話の後、エヌちゃんが現場にあった血痕やらグロテスクなアレソレを全てリソース化して小瓶に収めてしまったとの事。

「終わり」を見るだけでなく、「終わり」に干渉できる異能。あるいはイアン君のソレに勝る程の。

「で、どんなコなのよ、エヌちゃんっていうのは」

「教えねえよ。本人から口止めされてるしな」

「口止めエ？ 何よ、もしかして名指しだったりするのかしら」

「ああ、そうだよ。ま、ウチも人手不足でな。ああいうマスコットのものは大助かりだ。エメト以外の全員が魅了されてんのもデケえ。ちったあ纏まりもよくなるだろう」

「ふうん。……で、話を戻すケド。誰なのよ。で、どこにいるのよ。”終わった”のも死んだのも嘘なんでしょ？ 生きていて……けど、藍沙ちゃんには会わせないでいる。うん、そもそも貴方、どれくらいの間藍沙ちゃんに会っていないの？ ちゃんと仕送りしているんでしょうね？」

「他人の家庭事情に首突っ込んでくんじゃねえよ節介野郎。お前も知ってんだろ、俺にとっちゃアイツは娘なんかじゃなく——」



「リソース。成程ね。確かに大きなものを抱えていたし、良いリソースにはなりそう」  
限素が寿命を迎えたものをリソースと呼ぶけれど、何もその工程を経たものだけがリソースと呼ばれるわけではない。もつともつと純粋な——もつともつと、ちゃんとした。

魂コアに対するリソースとしての、れっきとした名前が存在する。

「……ああ、そういうことだ。ま、母親の居場所くらいは教えてやるよ。……端末に位置情報は送っておいた。後は好きにしな」

「あ、ちよつとー」

送るだけ送って、ビーダは去っていく。いつも余裕ぶったアイツらしさは欠片もない。こちらの端末にその”位置情報”とやらは来たけれど、結局その母親の名が何なのか、そしてどうして子供なんてものを設けたのか聞けていないというのに。

転移術——それなりの規模の符術を軽々しく使って、ビーダは消えていった。

……ふうん。

「長い付き合いだと思っていたけれど……やっぱ人間で、隠し事の一つや二つはあるものねえ」

じゃあ、行ってみましょうか。

その場所に。

示された座標——西区の住宅街の、ある民家へ。

本当に何でもない民家だ。特別な気配もしなければ、特殊な結界なんか張られていく気配もない。

表札には「陽下」と、私なんかに依頼しなくとも簡単に見つけられたんじゃないかと思う程隠していない。隠されていない。

古めかしいインターホンを押す。最近はこのタイプのものは使われなくなってきたものだとはかり思っていたけれど、周辺の家々にもついていては、最新式に替えるほど困っていないか、お金が足りないか、まあ何かしらの事情があるのでしょうか。

コールコール。時間にして5秒ほど。

——”はい”

「ああ、突然申し訳ありません。私、アズという者ですが、お宅の藍沙ちゃんに頼まれてお母様の所在を……」

——”……この家を教えたのは、夫ですな”

「ええ、ビーダから座標付きで」

——”わかりました”

その声と同時に、ガチャ、と。ドアの施錠が解放された音がした。  
ふむ。

さつきも言ったけれど、特に不可思議な気配は感じない。ジュニちゃんの例があるから畷的なアレソレが仕込まれている可能性もゼロではないけれど……ま、大丈夫でしょう。

ドアを開く。開ける。

そこには——やはり、普通の民家の玄関。廊下と、右手には階段。

「上がつて良い、ということよね」

——”どうぞ”

「……スピーカー……いえ、この響きは」

独り言のつもりで呟いたソレ。返ってきた答えは、脳裏に響くようだった。

「はあ、成程。なんだ、やつぱり？は吐かないんじゃない。アイツ、本当に嘔吐きね。  
「魂コアだけの存在……所謂幽霊というヤツね？」

——”はい。姿をお見せ出来ない事をお許しく下さい。そして、藍沙の我儘を聞いて  
くださりありがとうございます”

玄関から廊下へ、そしてリビングへ。

ソファとテーブル。そこには湯呑があつて、湯気の立つお茶が注がれていた。

「限素生物でないにもかかわらず、限世への干渉を……いえ、ある意味でこの家自体が、この家の限素自体が、アナタそのもの、ということかしら」

——” ご明察です。リソースとはコアに集うモノ。しかし、私のコアはこの通りで、新たなリソースを受け付けません。本来コアとはリソースや限素を纏わぬ状態であれば、それら生物のいない場所にまで運ばれてしまう程軽いもの。ですが、それすらも許されず——私はこの家に、限素の壁に囲われ、阻まれ、その状態のまま18年を過ごしました。その結果、周囲の限素に直接干渉出来るようになったのです”

「随分とコアやリソースについて詳しいようだけれど、生前はその辺りの研究者だったりしたのかしら」

——” 夫と共に、「終わり」についての研究を”

「成程ね」

私に出会う前に……いいえ、出会った後も、” 別口” としてあつたのだろう「終わり」の研究所。

そも、「終わり」に関して研究を行う機関自体は無数にある。当然だ、それは人類の最重要課題。解かなければ待ち受ける「終わり」に身を晒すしかない。だから知恵あるものは誰もが取り組んで、けれど敢え無く敗北を喫している。

ただ、私の立ち上げた「終わり」の研究所が——ビーダにとって、最適解であった、というだけの話。

「ここに藍沙ちゃんを連れてくる、というのは、ダメなのかしら」

——” 問題ありません。そも、藍沙は定期的にここを訪れています。ただ——”

「ただ、私は、お母さんに会いたいただけなんです。幽霊のお母さんではなく——記憶になり、記憶の奥底で。私を抱きしめて、その命を散らした母に」

いつの間にか、という表現がピッタリ合うだろう。

いつの間にか、陽下ちゃん……藍沙ちゃんはそこにいた。廊下側の入り口。リビングに入る場所。神妙な顔つきは変わらず、ただ、悲しそうな声で。

……一般人だ。どうみても。足運びも呼吸も何もかも、一般人でしかない。格闘技の類さえやっていないだろう筋肉のつき方は、けれど私に気配を悟らせずに接近する、なんていう異常を以て認識の改めが必要になる。

イアン君を主人公とするなら、このコは守られるばかりのヒロイン、だと思っていたのだけれどね。

「つまり本来の依頼とは、母に会わせてほしい——母親を、生き返らせてほしい、という事でもいいかしら」

——” それは”

「はい。そうです。お母さんは魂だけの存在。私達が退治する妖魔とは、根本から成り立ちが違います。なら、出来るんじゃないかと思ってるんです。何らかの方法でお母さんの魂をリソースに触れさせることができれば、お母さんは生き返る事が」

——”不可能です。藍沙。死者は生き返りません。それは絶対の法則として”  
「それが不可能でもないのよねえ、困ったことに」

成程。成程ね。

ビーダがあれば口数少なく押し付けてきた理由もこれでわかった。

つまるところ、「自分には無理だから、お前がやってくれ」と。そういう話だ。面倒事を押し付けてくるヤツだとは前から思っていたけれど、これほどまでの久しぶり。依頼料は藍沙ちゃんからじゃなくてビーダから取ろうかしら。

——”今、なんと?”

「可能だと言ったのよ、藍沙ちゃんのお母さん。死者は生き返らない——そのルールは確かにこの世に存在する。それじゃあ問題。そのルールをこの世界に敷いているのは、誰でしょうか」

——”神です。我々の知覚不可能な、絶対の力を持つ存在。膨大過ぎて、巨大すぎて認識の出来ないコア。それこそが神だと、私達科学者は考えます”

「不正解よ、藍沙ちゃんのお母さん。それじゃ、解答権は藍沙ちゃんに移るわ」

「……」

ああ、なんだ。おかしい心配はしなと言ったけれど——しな過ぎる、が正解だった。向かいの家も、隣の家も。その向こうの家も。

幽霊だらけだ。噂では聞いたことがあった。西区のゴーストタウン。比喩表現だと思っていたけれど、まさか直訳とはね。

「学生には少し難しいかしらね。じゃあ、お勉強の時間と行きましようか。そもそも何故死者は蘇らないのか——そこからね」

こういう役回りはウオロツソ君とかサルミナちゃんのなのだけだ。

ま、たまになら良いでしょう。

?????????

どうして死者は生き返らないのか。蘇る事は不可能とされているのか。

自らがソファに座っているのだからと、家主の娘を対面のソファに座らせて、さあ授業の開始である。

「第一に、私達限素生物の死とは何か、わかるかしら？」

「それは、寿命です。私達の身体を構成する限素が寿命を迎えた時、私達も死に絶えます。寿命には個人差がありますが、一般的には六十年から八十年とされています」

「学校で習う模範的な解答ね。じゃあ、たとえばナイフで心臓を突かれて殺されてしまった、という場合。これも寿命かしら？」

「いいえ、それは生命活動の停止です。限素生物は生命活動を停止すると再活動が出来なくなりますが、死んだわけではありません。寿命を迎えない限り血肉は残ります。焼かれる、溶かされるなどして限素組成が変わってしまえばその限りではありませんが、生命活動の停止と限素生物の死は同義ではありません」

「優等生ねえ」

そう、私達は、というかこの世界に在る限素で構成された生物は、死んだ所で死ぬわ



けではない。生命活動の停止をそのまま死とする宗教も存在するけれど、少なくとも生命活動を停止した時点では、その個……魂はそこにあるままだし、同じく限素もその場にあるままだ。だからこれは死ではない。ただ動かなくなっただけ。

だからこそ私達は亡者を悼むことが出来る。停止した遺骸の前で嘆き、祈り、その流転に想いを乗せられる。

焼却などの手段で限素組成を改変し、早くに寿命を迎えさせた限素で魂を解放する事。その行為と、その事そのものをして、ようやく死と呼べる。

「なら、生命活動が停止した人間がどうして再活動できないのかはわかるかしら」

「脳と心臓は常に入れ替わる限素によって活動し続ける器官です。生命活動が停止すると、呼吸による限素交換が行えなくなります。失血により血液循環による限素交換ができなくなります。あるいはその双方を傷つけられると、限素交換を行う、という指示を身体に出す事が出来なくなり、人間は再活動を断念します」

「そうね。あるいは貴女達が戦ったアリアスのように呼吸や血液循環以外の手段で限素交換が出来るのなら、人間の生命活動は一度停止したとして、すぐにでも再活動は可能でしょう。そういう特異な能力を持たないからこそ人間と呼ぶのだけれど、それは一旦置いておいて……つまり、生命活動の停止後にも限素を交換する事が出来たら、し続ける事が出来たら、人間は生命活動の再開が可能なのよ」

人間は、というか。

限素生物は、だけれど。

「既に事例そのものは上がつていてしょう。代替された機械の心臓。言語野等前頭葉の一部を機械化する技術。寿命を迎えたとしても、代替する何かを用意で切れば、限素生物は生き永らえる」

——”それは、死の瞬間に処置が出来た場合に限りです。時間を経てしまえば……”

「いいえ。どれほどの時を経ても、魂さえその場に残っていれば蘇生は可能よ。ただし、脳に蓄積された記憶が残るとは限らない、というだけで」

——”リビングデッド、ですか”

「それも否定するわ。——再誕、よ。知っているでしょう、その程度なら」

——”コアの記憶を有したままに生まれ直す事が、死者蘇生だと?”

「生まれ直す、という用語があるわね。作り直すのよ。この家を——人体に」

何度でもいう。

この世界において、コアとリソース以外の万物が限素で構成されている。あ、いえ、私達の勧めている『箱庭計画』には”そうでないもの”も含まれているけれど、そこは一旦割愛で——世界においてはそんなのだ。

ただ限素組成が違うだけ。人体とテーブルに、眼球と時計に、手足と湯呑に、何ら違

いもありはしない。

だから、作り変えることが出来る。

「そして、その手法を私は有している。ピーダには無理でしょうけど、私なら出来る  
あるいはワズタムが踏み入れ、侵し返された領域。

限素の改変。「終わり」の拒絶。

「終わらない」という、ただそれだけの特性。

「……お願ひします。どうか、母を」

——”アズさん。どうか娘を連れて、ここから去ってください”

”限素の改変——それを行うにあたって、必要なものとはなんでしょうか。あるいは  
貴女達の言う神ですら行えないソレ。踏み込んではいならない禁忌の領域——死者は  
蘇らないと、それが絶対の法則とされてきた本当の理由”

それは。

——”必要なものは、膨大なリソース。それも大国一つが消滅する程の、でしょう。”

「……」

「ふふ、お母さんが答えてしまったけれど、藍沙ちゃんにもわかっていたようね。そう、  
符術にしても魔導にしても錬金術にしても、必要なエネルギーはリソースよ。ある者は

それによって若返り、ある者はそれによって何かを“終わり”から守り、逃した。そしてある者は——ここで“限素の改変”を行おうとしている」

——” 止めてください、アズさん。私は自らのためにこの国を犠牲にする、などという蛮行は許せません”

「だ、そうだけれど。依頼人の藍沙ちゃんはどうかしら?」

「使用するリソースは。……この国でなくとも、いいんですよね」

——” 藍沙!」

やっぱりだ。

やっぱり、ただの可愛い女のコじゃあない。神妙な顔だと評した。決意を秘めた表情だと称した。

それだけではないのだ。

このコには——恐らく、大きく欠落しているものがある。否、大きく付随している者がある、と言った方が、ピーダ的には好ましいのかしらね。

「ええ、そう。というより、この国は規模的には小国よ。先日北区が“終わった”ばかりだし、最悪のメイデイ含めて殺人事件の多い——多すぎるこの国では、リソースが不足している。使うのなら、もっと大きい国でないとダメ」

「構いません。どこの国であろうと、お母さんに会えるのなら——消えてしまっても問

題は無いです」

——” 藍沙……どうして、しまったの。どうしてそんな……”

どうしてそんな、倫理観の欠如したコに。

紡げなかつた言葉はそんなところかしらね。

「ちなみにビーダとは話したのかしら」

「いいえ。でも、お父さんならこう言うに決まっています。”好きにしろ”と」

「ふふ、言いそうね」

膨大なリソースの消費。その事自体には、ビーダは嫌な顔をするだろう。「俺の苦勞をなんだと思っていやがる」なんて言葉を吐いてきそうだ。

けれど——ふふ、それを補って余りあるほどに、強く、大きい。

大国に匹敵する、なんて。藍沙ちゃんは自覚していないのでしょうか。

「その依頼、承ったわ。それじゃあ、ホラ」

——” やめてください。やめなさい。それがどういう意味を持つのか、わかっているの、藍沙”

端末を見せる。

そこに映るは——現在の世界地図。「終わった」土地やFTRM3Uによって近々「終わる」事が示されている土地を除いた、未だ猶予のある土地。その中で、今回の条件を

満たす土地だけを強調表示したものを。

「選びなさい。それくらいいの呵責は背負えるわよね？」

「はい。じゃあ、ここで」

——” 藍沙……ッ”

軽い。命をなんだと思っっているんだ、って。

イアン君とかなら、詰め寄って来そうな程に。ここまでとは。ここまでオカシナ女の  
コだったとは。ふふふ、私の目も腐ったものね。

示された土地は、この国から少しばかり離れた大陸。そう、大陸だ。大陸一つが国とな  
っているのが故の大国。なるほど、人口という意味では最も犠牲の少ない場所なのかも  
しれない。その判断からして、あらかじめ決めていた可能性もある。

そも、私にそういう技術があるとどこで知ったのか、を考えたら……まあ、大体察し  
はつくものね。

さて、はて。

それじゃあ始めましょうか。

「藍沙ちゃん、巻き込まれてしまうから、いったん家を出しましょう」

「はい」

——” やめてください、アズさん。私はそんなことで……そんなことをされて、生き

返りたくはなんかない。私の肉体が「終わった」時、夫とも別れは済ませたんです。私  
が……私が、未練がましくこの家に辿り着かなければ。この家に自らを縛り付けるなん  
てことを、しなければ」

「そう。貴女はその家から出られないから、この技術は——錬金術は成功する。それ  
じゃ、後でね、藍沙ちゃんのお母さん」

「待っててね、お母さん」

——”藍沙ッ!”

聞く耳持たないとはまさにこの事だろう。

母親の意思など完全に無視して、ただ自分が、自らが会いたいから、という欲求で死  
者の蘇生を願う少女。恐ろしい話もあったものだ、完全に己を柵に上げて言わせても  
らおう。

聞く耳持たないのは私も同じなだけどね？

陽下家を出て、家の敷地内からも出て。

それじゃ、と前置きをして、陽下家の表札に左手を当てる。

「……」

”今回”ではない世界において、ワズタムはこの技術に単独で辿り着いたという。素  
直に称賛しよう。それは世の科学者たちが幾重もの屍を築きながらも辿り着けなかつ

た領域だ。踏み込んだ代償はあまりに大きかったとはいえ、彼はその目的を果たした。

「終わり」から大切なモノを逃がす——その過程で辿り着いた、人体錬成という技術。右手は中空に、何かを掴むように甘くして、目を瞑る。

指定された国の座標。

この国から遙か南にある大陸。赤砂の吹く動植物の多い国。子供がまだ笑っている。土地が多いからだろうか、戦争が無くなつたからだろうか。それをまた笑顔で眺めるは老夫婦。親は仕事にでも行っているのかしらね、この時間だし。共働きだけど、自らの両親に孫を任せられるとは、さぞ良好な家族関係なのだろう。

勉強に励む青年がいる。この国の言葉ではない。どこか違う国の言葉だ。交渉役でも夢見ているのか、趣味で覚えようとしているのかは定かではない。その下階ではカップルが睦んでいる。絵になるカップルね。隣の部屋では猫に餌を上げる青年。その隣には端末に向かって何かを喋っている少女。丁度目が隠れる画角で、これは配信をしているのかしら。

様々な動物が荒野に行く。狩って狩られて、隠れて見つけて、追いかけて飛ばれて逃して悔やんでおこぼれを肖って、そんな動物を観測する人間の姿もあつて。

そんな。

そんな、まあ、色々とあるのだろうけれど——苦悩が少しばかりは減つたのだろう、こ



の国よりは些か幸福に満ちていると言えるその国を。  
掌握する。

「——再三、問うわ。この大陸——人口約2,500万人にして凡そ16万と6000種類もの動植物が住まうこの国をリソースにし、貴女の母親の肉体とする。依頼はそれで間違いのないわね？」

「はい。間違いありません」

一切揺さぶられず、か。

怖いコねえ。より好きになっちゃった。ああ、でも。ある意味ビーダの娘らしい、と言えるのかも？

「素材は右手に。対象は左手に」

甘く逃がしていた右手を、段々と閉じて行く。

伴うのだろう。私の端末に緊急連絡が入ったのを感じる。恐らくFTRM3Uが予定にない「終わり」に焦っているとかそんなところだろう。ごめんね、事前とかしなかったから。

確かな手応えがある。大国一つを握り潰す感覚が。……否、こんな風にゆつくりとやっていたら、可哀想よね。一思いに——ぐ、と。

完全に握りつぶした。

途端、潰した右拳から溢れ出るは、眩い暗闇。真黒な光。

それを——思いつきり、「陽下家」という表札に、叩きつける！

「——！」

「藍沙ちゃん、ちよつと下がって」

「っ、はい」

奔流だ。風の奔流——否、圧の、リソースの奔流。

可視化される程の密度を持つリソースが、陽下家の限素を剥がし、置き換え、交換を行っていく。

限素組成が改変される。構造物から——人体に。その変換は黒と白、光の粒子としか表現できないモノで行われ——それが一点に集約していく。収縮していく。集束していく。

伴い、現れるは「終わり」。

踏み込んでならぬ領域に歩を進めた者への罰を下さんと、法則の持ち主が私の身体を蝕もうとして、けれどすぐに退散する。私の手を包む。私の身体を包む。私の全身を巡って——それが無理だと判断する。

私は「終わらない」。AZを「終わらせる」ことは出来ない。

代わりといつてはなんだけど、剥がされ、交換された家のパーツを「終わらせて」、「終

わり」は消えて行く。リソースの奔流も次第に圧を潜め、周囲の静寂が戻ってくる。

西区のゴーストタウン。閑静過ぎる住宅地に現れた轟音と童巻は、その唸り声を一際大きく上げたかと思えば、まるで全てが夢であったかのように消え去った。余韻など存在しない。あつさりと、本当に何でもなかったかのように——何も無くなった。

私が手を当っていた陽下家の表札も、その家も消えて。

ただ、中心に。黒く輝く人影がある。

「ん？」

パサ、と。

どこからともなく降ってくるは、女性用の衣服。あとコート。

「藍沙ちゃん、これ」

「……はい！」

元気に明るく、人好きのする笑みで、藍沙ちゃんは答える。

人影は両腕で両肩を抱き、座り込み——藍沙ちゃんに抱きしめられた。コートを着せられ、そのままぎゆうと。

光が収まっていく。その肢体も露になっていく。

「お前はコッチ向いてろ、馬鹿野郎」

「ちよ、酷いじゃない！ 一番の功労者に対して！」

その全容が見えるか——見えないかくらいで、無理矢理顔を別の方向に向けさせられた。グリーン、と。私じゃ無かつたら首の骨いつてるわよそれ。

で、まあ当然のように。

そこにいたのは、ビーダだ。抱き合う母子から死角になる位置まで私を連れ込んで、コワイ顔で睨みつけてくる。

「……アレの選択か？」

「そうよ。私は何度も揺さぶったわ。でも、意思は変わらなかった。お母さんの方が何度拒絶しても、今から犠牲にするものを説明しても、一切、ね」

「……そうか」

「あら？ 貴方なら、貴重なリソースを無駄にしやがって、なんていつて怒るかと思ったのだけど」

「わかっていて問うのはやめろ、だるい。……イアン・エンハード含め、アレ……陽下藍沙も別格さ。誰が予想するんだ。こっちが必死こいて集めた巨大リソースの殺人集団を、個人で越えてくる一般人の台頭なんざ」

「イアン君はともかく、藍沙ちゃんについてはわかってたんじやないの？ あんなオカシナ女のコ、そんな短期間で出来上がるとは思えないけど」

「……兆候はまあ、あった。だがこれほどではなかった。……恐らくはまあ、エヌのせい

なんだが」

溜息に溜息を重ねるビーダ。

エヌちゃん。んもう、会った事ないんだから、そんな楽しみにさせるような物言いやめてよね。今すぐにでも会いたくなっちゃうじゃない。

「FTRM3Uが怒っていたぞ。やるなら事前に連絡を入れろ、とな」

「それについては反省しているわ。けど、藍沙ちゃん達の前で端末を開いて、”国一つをリソースにするから許可を頂戴”なんて話を言えると思うの？」

「……ああ、俺のせいにするやいいだろう」

「そんなことしたら、私がABSに密接な？がりを持っているみたいじゃない！」

「持つてるだろ」

「持つてないわよ！ BARの店主と客程度の関係しかないわ！」

さて。

これほど騒いでいれば、寄っても来るといふものだ。

陽下母娘——ではなく。

「で、どうするつもりだよコイツラ。ずりいずりいつて怨嗟の嵐だぜ。良識があつたのは蒔菜だけだったみてえだな。他は、他人を犠牲にしても自分が生き返りたくて仕方ねえクソ野郎どもばかりと来た」

「藍沙ちゃんのお母さん、蒔菜さんっていうのね。で、どうするか、なんて……そんなどうでもいい事聞くあたり、貴方結構涙腺に来てたりする？　ちゃんと蒔菜さん愛してちやったりする？」

「うるせえなクソ馬鹿野郎。どっち預かりにするかっつてのを聞いてんだよ。ウチなら、イーリス辺りに食わせる。お前の所なら、適当なエネルギー源になるだろ」

「ああ、いいわよ。要らない要らない。私別に魂集めとか趣味じゃないし。死後の怨恨なんてリソースにしても大して美味しくないしね。なんなら放置して妖魔化させて、退治師にでも任せたらいいじゃない」

「馬鹿野郎だなお前本当に。それが出来るならとつくにやつてるよ。なんで西区の家だけが文字通りのゴーストタウン化してると思つてやがんだ」

ふむ？

どうして西区だけがゴーストタウン化しているか。

そんなの。

「誰かが引き留めているから、以外にあるかしら、理由」

「わかっただよ。この辺で死んだ連中を……殺した連中を、ソイツの意思に関係なく自宅へ縛り付け、蘇生を行う、なんつークソ実験の真つ最中さ。今回のお前の手段は無理矢

理に強引なモンだが、膨大な時間をかけりやあ誰にでもできる話だ。家の一部を少しずつ人体に変えていけばいいんだからな」

「それ、膨大な苦痛が発生しない？ 少しずつ少しずつ自分が自分じゃなくなっていくんでしょ？ クレイテリアC r i t e r i aが曖昧になっていつて、最終的には別の存在になるのでしょうね」

「そんなことに同情できる奴らなら、初めからそんな実験はしねえよ。だからまあ、ここは符術協会の実験区画なのさ。そんなところに妖魔が発生すると思うか？ 俺達が無理矢理に発生させたとして、退治師が派遣されると思うのか？」

「されないでしょうね。むしろ蘇生において何が生じたのかと、妖魔になっていない魂に更なる実験を試みそう。妖魔は妖魔で閉じ込めて、残りカスになってしまった地縛霊にまで手を出して。……なるほど、だから掠め取ってしまおうと」

「ああ。死後の怨嗟にも、自分優先の残骸共にも興味は無えが、俺の妻に手え出した代償は必要だろう」

「やっぱ愛してるんじゃないやあーいブヘエ」

「当たり前だろ、クソ馬鹿野郎。妻を愛さねえ夫がいるかよ」

コワイコワイ顔で。

本音を言うビーダに、少しだけ嬉しくなっちゃった。

「いいわ、協力してあげる。イーリス、だっけ。私の店に来たことは無いわよね」

「まア、アイツは俗世の酒なんかには興味ないだろうからな。で、協力と来たか。なんだ、この辺の家全部さつきみてえに潰してくれる、とかか？」

「そ。今度はFTRM3Uにもちゃんと連絡して、潰しちゃいましょうこんな区画。誰の思い出が詰まっているのか、誰の悲しみや未練が残っているのかは知らないけれど、実験場にされてるなんて可哀想だわ」

「……お前の”可哀想”の基準もよくわからねえが、ま、やってくれるってんなら頼むさ。んじゃ俺は一旦退散するぜ、アイツらがこつちに来そうなんだな」

「あら、まだコートの下全裸だったりしないかし痛いッ！」

「だとしても、見るなよ？」

「ちやあんと愛しているようで。」

大丈夫よ、私他人人には手を出さないから。BSSなら遠慮なくいただくけれど。

「じゃ、夜にな」

「ええ」

暗がりに消えて行くビード。

それとほぼ同時。入れ替わるようにして、二人が来た。

「お話はできたみたいね？」



「はい。少なくともすぐに命を絶つ、なんてことはしないって、約束してくれました」  
「……」

それにしても、俯き加減が凄いいけれど。

あ、ちゃんと下も着てる。残念。

「それで、依頼料なんですが」

「ああ、いいわよ。さつきビーダからの振り込みを確認したから」

「お父さんから?」

「ええ。世話になったな、だって。愛されてるわねえ、貴女達」

「……嘘でも嬉しいです! ありがとうございました、アズさん」

ありや。ビーダは絶対そんな事言わない、って思われてるのねえ。

理解されてるじゃない、お父さん?

「……アズさん」

「何かしら、蒔菜さん」

「貴方は——何も、悪くはありません」

……。

えーと。もしかして、慰められてたりする?

もしかして——私が気に病んでいる、みたいなコトを思っていたりする?

罪を背負

わなくてもいい、みたいな。

なあに、それ。

おかしいのね。面白いわ。

「善人が過ぎるでしよう、流石に。ビーダには勿体ないわ。私が貰っちゃいましょうかし——」

後頭部直撃コースで飛んできた小さな針のようなものを掴む。

はい。盗るな、つて事ね。とかいうかちゃんと見てるんじゃない。

「ううん、なんでもないわ。さ、行きなさい。蒔菜さんは分かっていると思うけれど、この辺りは危ないから」

「危ない、ですか?」

「ええ。蒔菜さん。藍沙ちゃんをお願いね。私はちよつとここでやることがあるから」

「……はい。言われずとも、守ります」

さあ、ずるいずるいずるいずるいずるいずるいずるいずるいずるいずるいずるいずるいずるいずるいずるい。怨嗟だ。怨恨だ。何故お前だけがと、何故ソイツだけがと。何故何故何故何故と。

地縛霊は、悪霊になって。

大きな大きな圧を生む。リソースの圧を。

けれど、縛り付けられているから妖魔にはなれない。

ただ——気が触れてしまいそうな程の幻聴が聞こえるだけ。

二人を笑顔で見送って、小さく呟く。

安心なさい、と。

「今日の夜にでも、解放されるわ。この世からね」

どうか安らかに——なんてね。

「そろそろ、本当に世界の終わりなのかもな」

「大吾、不吉な事を言うのはやめてよ」

「だが、お前もそう考えているんじゃないか、イアン」

大学構内。軽食スペースで昼食をとる二人の顔には、決して浅くない溝が出来ている。

今朝、端末であるニュースを見た。

この国より遙か南にある大陸。大国ではなく大陸が、丸々一つ、「終わった」という話。これまでに大規模な消失が無かったわけではない。国が二つ同時に消えるだとか、ある括りにあつた諸島が全て姿を消した、だとか。イアン達の周辺でも昨日は西区が、その前には北区が「終わって」いる。

ただ、今回ばかりはその比ではないと言えるだろう。

陸地丸ごとの「終わり」。人々も、そして動植物たちも、一体何千万という命が消えたというのか。そしてそれがやはり、何の前触れもなく起きているという事実に——文字通りの「世界の終わり」を感じざるを得ない。

「でもさ、悪い事ばっかじゃないじゃん。藍沙のお母さん、見つかったんでしょ？」  
「ああ……それは、確かに吉報だね。エヌもまあ、生存自体は確認できたわけだし」  
「エヌについては無事とは言い難いが……」

あの日。

大学内に無断で数多の妖魔用トラップを仕掛けているジュニから、大物が釣れた、との連絡が入った日の事だ。

大物——魂の無い妖魔は基本、魂の多く密集する場所には現れない。どうということなのかは学者や符術師たちが詳しく解説してくれるだろうが、とにかく大学校などという人間の密集地帯には、少なくとも昼の大学なんて場所には、妖魔は現れないはずだった。それを乗り越えて、無視して、ジュニを狙ってきたのが——あの、テロ組織 *Abusu* *rdus* が第二位、吸血鬼 *リアス*。不死身と謳われる再生力もさることながら、若い女性だけを狙う *シリアルキラー* としての手腕も脅威的で、あるいは狙われたのが藍沙であったのなら対処出来ずに殺されてしまった可能性も高い。

たまたまジュニが罫使いで、体内外に毒薬の類を仕込んでいたから退けられたものの、万全の状態の *リアス* との戦闘は避けたい所。 *イアン*、大吾の両名がそう考える程には強かった。老獪にして的確。そして——非人間的。

自らの怪我を気にせず突っ込んでくる死兵だ。それでいて刃物の扱いに長けるな

ど、狡いが過ぎる。

「藍沙?」

「え? あ、ああ。エヌちゃん、そうだね。あれ……って、やっぱり、洗脳、とかなのかな」

「……それはわからない。言動はエヌ自身のもののように思えたけれど、僕達の知らない符術で操られている可能性はゼロじゃない。……そうであってほしい、という方が正しいかな」

「だな。瀕死のアリアスを庇い——まさか、あんなことをいうとは」

——”ごめんね、イアン。みんな。私は——世界の敵に回ることにしたよ。『箱庭』の敵に”

「『箱庭』、か。文脈から判断するなら、何かの組織の事だと思うけど」

「一応ネットを洗ってみたけど、それらしい名前は出て来なかったよん。でも、その前の言葉はわかりやすいよね」

「世界の敵に回る事にした、か。Absurdus……不条理は受け入れられないと?」

「人類の敵じゃない所がミソだと思う。僕達の敵じゃなく、世界の敵……つまり」

”終わり”に對抗する、組織」

「……にしては、殺し過ぎだけだね」

”最悪のメイデイ”こそ代表的事件だが、それだけじゃない。ABSの構成員はそれぞれが大量の殺人を犯している。エヌにはまだそれら罪状は掛かっていないけれど、あの組織に所属すると宣言した以上、してしまうかもしれない。

その”可能性”だけで、イアンは自分が許せなくなった。

「——止められなかった」

「強かったね、エヌちゃん。元から部活動とかサークル活動で運動神経あるのは知ってたけど……」

「隠していたのか、連れ去られた後仕込まれたのかは定かではないが……」

アリアスを庇い、逃がし、イアン達と対峙したエヌ。

説得は聞く耳持たず。故に気絶させてでも連れ帰ろうとした。殺す気こそ無かったものの、本気でイアン達はエヌを気絶させにかかったのだ。

けれど、通じなかった。ある程度手の内が知られている、というのは大きいのだろうが、それを差し引いても届く気がしなかった。どれほど強大な妖魔を前にした時でも感じなかったその距離を、イアンはエヌに感じてしまった。

「僕は、弱いんだな、って。痛感したよ」

「ある意味で、エヌの優しさなのかもしれないな。今のままの実力でABSに挑めばどうなるか。あの爺さんの時は話が通じたからいいものの、階位が上へ行けば行くほど狂っ

ているらしいじゃないか。だから——そのままじゃ、無理だと。そう言ってくれているのかもしれない」

「なんだよ、それ。それじゃあ……また。いいや、まだ、かな。僕は、僕らはまだ、エヌに庇われているってことか。はは……なんだよそれ」

食事が喉を通らない。イアンにとって、エヌは庇護すべき妹のような存在だった。多少尊大な口ぶりの目立つ、けれどとても可愛らしい女の子。それが、

守られている。

イアン達は、エヌに守られている。

「強くならなきゃいけない」

「ああ。差し当たっては、ソイツの制御だろう、お前のやるべきは」

「……」

大吾の言うソイツ。

それはイアンの左手。黒革に包まれた手。講義の時間だろうと食事時だろうと決して外す事のないソレは、イアンの奥の手とでもいうべきものだ。

「でもさ、気軽に訓練とか出来なくない？ ソレ、危なすぎだしさ」

「うん。僕もそう思う。……けど、この前一つ分かった事がある。コレは、妖魔にも効くんだってこと」



「ああ……本来はリソースそのものでしかないはずの妖魔に、ソレが効く。確かにおかしな話か」

「おかしな話だけど、効くなら積極的に使っていこうと思う。妖魔退治にも——ABSとの戦いにも」

エヌを連れ去られる前は。つまり、イアン達の本業とでも呼ぶべき仕事は、妖魔退治の方だ。本来は資格を持った退治師や符術師が行うべきそれを、民間人であるイアン達は違法に行っている。

理由はとても単純。依頼があつて、訓練になつて、お金が入るから。

符術協会に妖魔退治の依頼を出すと、それなりの依頼料がかかる。だからフリーの退治師やイアン達のような戦える一般人を安い金で雇うのはよくある話で、それを生業としている者も少なくはない。少なくとも無いからと言つて許される事ではないのだが、最早取り締まりをする機関さえマトモに動いていない現状であれば、特に気にする事でもない。

皆、怯えている。「終わり」に対して——如何なる手段も尽きた、と。

「正直、僕達だつて”終わり”は不条理だと思う。理不尽だと思う。もしABSがそれを阻止せんと動いてる組織だつていうのなら……協力も辞さないかもしれない。やり方さえ変えてくれたら、だけど。でも、”終わり”やABSより、一番に優先するのは

エヌだ。僕達が強くなつて、エヌの身柄を抑えて、真意を聞く」

「もしそこで、本当に洗脳もされてなくて、自分の意思でABSにいる、つて言われたら……どうするの、イアン君」

「——僕達もABSに入る。いや、僕だけでも、かな。みんなまで巻き込むつもりはないよ」

それは、ともすれば狂つた判断であると言えるだろう。

だつてABSは、Absurdusは、テロ組織だ。殺人集団に仲間入りすると——エヌが戻らない、というだけの事のために、自らの手を汚すと。人々の恐怖の対象になると、イアンはそう言うのだ。

「重症だな」

「だねー。ま、安心しなつて。もしそーなつたら、二人の背後から私が毒針刺してあげるからさ。半年くらい動けなくなる奴。それで頭冷やしなよ」

「それ、死なないか？」

「死なないように調整してゐるつて」

「……僕も一応、そうならないことを祈つておくよ。エヌは……僕達のもとに帰つてきてくれる、つて」

茶化すジュニと、怪訝な顔をする大吾。イアンもまた肩を竦めて、ようやく通るよう

になった喉に食事を流し始める。

そんな、三人の様子を。

藍沙は少しばかり冷たい目で、眺めていた。

「さて、TK。今日は限素の寿命についてのお勉強をしよう」

——”はい。サルミナ様

「といつても『箱庭』内に限素は無いから、TKは知っていても知っていなくても問題ない話なんだけどね」

「……教師役が初めからその調子だと、イルノットが困ってしまいますよ」

「お？ なんだいウオロツソ。アンタがTKに肩入れするなんて珍しい、なんだ、アタシのいない間に仲良くなったのか？」

「というよりは、教師役、というものをしてみて……生徒にとつてどういった教師が理想的であるのかを理解しただけです。テイタ、貴女は教師に向いてい無さすぎる」

「はん、へえへえ、学生上がりの優秀な博士サマとは違いますよっての」

「二人とも、それくらいで。TKが困っているわ」

——” いえ、A Z様。私は知っています”

「え、何を？」

——” これが夫婦漫才、というものであることを、です。カムナリ様に教わりました

”

「あらあら」

あの子、本当に何を教えているのかしら。

別に良いのだけどね。そういう……楽しい事を、沢山教えてくれるのは。

「……まさかTKに揶揄されるとは思ってたよ。これ以上何か言うの面倒だから、授業を始めよう。準備は良いかい、TK」

——” はい、サルミナ様”

さて——と、再度前置きをするサルミナちゃん。

「終わり」の研究所で行われるTKに対する授業。今日はサルミナちゃんの当番で、内容は限素について。

「限素そのものの説明はいらないね？ 私達を構成する粒子のことだ。それ以上でもそれ以下でもない」

——” はい”

「いいね。で、限素には寿命というものがある。ああいや、限素組成から説明した方が良

いか。万物が限素で出来ていると言っても、その組成はまちまちだ。人間には人間の、樹木には樹木の、建物には建物の限素組成がある。さらにそこへ個人差……たとえばアタシとアZ……ウオロツソのように、同じ人間でも組成によって違いが出てくる」

「いやん、外されちゃった」

「アンタは特例過ぎるからね。でまあ、この組成というのが限素の寿命を決めるんだ。強固な組成であればあるほど寿命は長いし、その逆も然り。ただ、焼かれたり凍らされたり圧縮されたり……まあ、外部刺激によって限素組成つてのは簡単に変わる。どれほど強固な組成であっても弱体化は可能ってワケさ」

——”なれば、世界の限素も強化は可能なのですか?”

「おおう、いきなりそこに行くのか。んー、ま、いいか。TK、その答えは、理論上は可能だが実現は不可能に近い、って奴さ。まず世界の組成がわかってないってトコが一つ。そして、組成の弱体化は容易だけど、強化は至難つてのが一つ。もう一つあるんだがまあこれは知らなくていい。とにかくその二つの壁がある限り、世界の強化つてのは出来ない。出来ないから”終わり”は避けられない」

世界も限素で出来ているのなら。

その着眼点は正しい。人間が、たとえば組成を整え、つまり健康になる事で寿命を延ばし得るように、世界もなんらかを整えることが出来れば「終わり」を先送りに出来る

のではないかと。TKはそう考えたのだろう。

でも、それはやっぱり無理な話だ。サルミナちゃんが否定した二つの要素と、もう一つ。

一般的に言われている「終わり」と、世界の「終わり」は少しだけ種類が違う、というコト。

「限素組成ごとの寿命つてのも簡単に見分けのつく話じゃなくてな。リソースの色と限素そのものの経年劣化を見極めなきゃならんから、結構時間がかかるのさ。少なくともぱつと見で”これは終わる!”なんて言えるのは、そういう異能持ちだけだろうね」

——”異能、ですか?”

「ん……ああ、TKは知らないのか。アズ、教えてもいいのかい?」

「ええ、問題ないわ」

「んじや遠慮なく。世界にはね、TK。異能っていう、文字通り異質な能力を持つてる奴がいるんだ。符術とは違う、生来の能力つてヤツ」

——”符術、とはなんでしょうか”

「……おいアズ。お前さんもカムナリも、TKに基礎知識は教えたんじやなかったのかい?」

「基礎知識は教えたわよ。でも、符術なんて”今回”発展した技術なワケで、基礎には含

まれないわ」

「今回”ね……。はあ、わかった。ガラじゃあないが、そこも教えてやるよ。何、異能についてはさっきの説明で終わりさね。生来持つてる特異な能力。種別で分ける事は出来ない。以上。つてことで、符術の説明といこう」

符術。

此度の世界において発展した技術。リソースの密度差で生まれるアレを妖魔と呼び始めたのが先か、それとも符術が出来上がってからアレらを妖魔と呼び始めたのか。その論争は、意味のない話。確認のしようがないのだから。

とかく、”今回”は符術が発展した。魔導が発展した事もあれば、錬金術が発展した事もある。ただ”今回”は符術だった、というだけの話。そういうリソースに干渉する技術が発展しないまま「終わり」を迎えた世界も少なくはないしね。

「符術はリソースに干渉し、世界の限素を改変する技術の事を指す。さっき世界の限素組成はわかっているかといつたが、アレは全体がわかっていない、つてだけの話で、目の前の組成くらいは誰でもわかるだろう？ ああいや、ぱつと見でわかる、とは言わないが、土やら樹木やらの組成は調べりやすぐに出てくる。学校でも習うだろうし」

——”限素の改変、ですか”

「そ。といつても一時的なものだけだね。完全定着させるとなれば、一般に言われてる

必要リソース量の何千倍も必要になってきちまう。ま、そんな非効率な事をする奴はいない。一時的に炎を出すとか、一時的に凍らせるとか。ま、そういうことが出来るのが符術だ。名前の通り、ペラ紙に組成の変換式を書いて使う」

——” 何故、リソースに干渉すると限素の改変が可能なのですか?”

「あー……んー。ウオロツソ！」

「はいはい。少しだけ説明役を代わりますよ、イルノット」

——” はい。お願いします、ウオロツソ様」

「そも、リソースとは何か。そこから説明する必要があります」

眼鏡を上げて、ウオロツソ君が指揮棒を取る。黒板もホワイトボードもないのに、何に使うのかしらねアレ。

「イルノット、リソースとは何かを説明できますか?’

——” 申し訳ありません。限素が寿命を迎えた存在、では、答えとして相応しくないのでに思います”

「正しい感覚です、イルノット。リソースとは何か。限素が寿命を迎えるとリソースになります、リソースはイコールで限素と結ばれるわけではない。さて、では少し話を逸らしましょう。コアはわかりますね?’

——” はい。コアは魂……限素生物の核となる存在です”



「では同じように、リソースは限素生物の何になると思いますか？」

——”……限素は、限素生物の肉体。ならばリソースは”

考えさせる時間を与える、という点において、確かにウオロツソ君は教師に向いているのかもしれない。

サルミナちゃんはせっかちだから、自分で全部答えを言っちゃうのよね。

——”人格、でしょうか”

「惜しいですね。もう少し考えてみましょう」

——”……感情、ですか？”

「へえ。あ、いえ。驚きました。あと二、三度ほどは同じやり取りをするつもりでいたもので。ええと、そう。はい。コアは魂。限素は肉体。そしてリソースは感情という言葉で表されます。妖魔が万物をリソース化するという本能を持っている、という話はしましたが、それらが性格や趣味嗜好を有す理由はこれです。妖魔はリソース——つまり、感情そのものなので、己の発生時にあつた感情通りの性格になります」

だから、生命活動を停止して魂だけとなった西区の幽霊たちでも、リソースは発生し得た。また、強い想いを抱く者程、抱えきれぬほどの憎しみを持つ者程、肉体も強固になる。それだけ沢山のリソースを有すから——コアがそれらを限素化し、肉体を強化するのだ。

だから、そういう意味で。

——” なれば、サルミナ様。符術を用い、リソースに干渉するという行為は”

「おっとTK、そいつは飛躍しすぎさね。まずはウオロツソの話を最後まで聞くと良い」

——” 申し訳ありません”

「ああ、怒ってるわけじゃないんだ。……すまない、水を差したね。ウオロツソ、続けてくれ」

「今のは別にどちらにも謝られる事ではないと思いますが、話が拗れるので受け入れて進めさせていただきます」

「けど、ウオロツソ君が今から説明する事は、TKの疑問の答えでもあるわ」

「アズ。貴方も黙っていただけると。話がややこしくなります」

「はあい」

怖い先生だ。

けど、教える楽しみ、のようなものを覚えたのでしょうか。それは良い事……かも？

「コホン。ではイルノット。リソースとは何か、という話に戻りましょう」

——” 感情、ではないのですか?”

「感情とは何か、でも良いですよ。リソースと感情は同義です。故にリソースとは何か。どういう性質を持っているのか、という話です」

——”感情とは、人格から放たれる情動の事ではないのですか？ 私のような管理A Iにさえ存在する人格。あるいは個とでも呼ぶべきもの。自我。それらが発し、湧き上がる動き。それを感情と呼ぶと教わりました”

「教えたのは、カムナリですか」

——”いえ、AZ様です”

「……なるほど基礎知識だけ、ですか。回りくどい事を」

睨まれる。こちらとしては、肩を竦めるしかない。

基礎知識よ。私達がTKに教えたのは。だからこそ、欠かしてはならない事は全て教えてある。

「まあ、いいです。そう、感情とは個が、人格が、心が発する動き。それらの強度はそのまま、世界に干渉するものになります」

——”世界に、干渉”

「そう。感情とは、リソースとは——”自らが世界に影響を及ぼす可能性”のことを指すのです。大きな感情を持つ者は、世界を変えます。感情の薄い者は、自己に留まります。ここまで言えば、わかりますね？」

——”やはり符術とは、自らのリソースに干渉し、世界を改変しているのですね”

「ええ、正解です。テイタに渡すのも癪なのでこのまま説明を続けますが、符術とは自ら

の可能性を削って世界の改変を行う技術。己から発せられるリソースを改変に消費するが故、使い過ぎればどうなるか——わかるでしょうか」

——”自己の消滅。リソースの枯渇”

「そして、それだけに留まらないのです。魂はリソースを限素に変換しますが、ある程度のリソースに関しては確保しておこうとします。つまりリソースが枯渇した場合、魂はリソースを欲すのです。自らの限素組成を変じさせて寿命を早め、リソース化する、という行為で以て——それは充たされます」

——”……それは、生命活動の停止を早めることになりませんか?”

「なりません。とはいえ、初めは空腹を感じる、疲労を感じる程度の消費でしょう。限界近くまでリソースを使った場合、疲労困憊で倒れて病院行き、なんて符術師も珍しくはありません。ただし、限界まで使用して、疲労と空腹さえも無視して符術を使おうとすれば——」

——”その限素生命は、生命活動を維持できない程の限素を消費してしまう、ということですか?”

「はい。故に符術の扱いは資格や免許が必要ですし、安全性のため退治師及び符術師は符術協会という場所に入る事が原則義務付けられています。……とまあ、この辺りでいいでしょう。どうなったとしても、イルノットには関係のない話なので」

——” いえ、ありがとうございました、ウオロツソ様。サルミナ様。また一つ、この世界の理解が進みました”

そう。関係のない事、かもしれない。

けれど必要な事ではある。何故ならTKはテストパターンの行使を行う管理AIであり、そのテストパターンは、入力されたものだけに留まらない。留まらせるわけにはいかない。幾つもの、幾重ものテストを箱庭に対して行い、「終わり」への対抗手段を作り出す。作り出す生物を創り出す。それこそが『箱庭計画』の真意。

既存の文明の保存、など。

そんなものは建前だ。何なら私だって、オーディアと同じく、争う事でしか前に進めない人類を遺すなど狂気の沙汰だと思っている。

でもそれが。

それだけが、唯一であるというのなら。

「そろそろ今日のテストに移りましょうか、TK。今日聞いたことで、新しく考えられたテストパターンはあるかしら?」

——” 申し訳ありません、AZ様。未だ入力済みのパターンが終了しておらず……”

「ああ、いいの。それならいいの。ごめんね、急かすつもりはないのよ。大丈夫。貴方のペースでいいから、頑張って」

——”はい。ありがとうございます”

大丈夫。TKは、TKだけは、急ぐ必要がない。

私は続くだろう。ワズタムとカムナリはわからない。この世界は「終わる」。

けれど、私とTKが一緒に居られるとは限らない。いいえ、ほぼ100%の確率で離れ離れになる事は目に見えている。

だから、だからこそ、大丈夫。

この半年で私達に出来ることを、私達が与えられる事を全部与えて——あとは全部、貴方がやるのよ、TK。

その意味を込めての、頑張つて、だから。

????????????  
カランコロンと氷を転がす音が響く。

BAR・エルドラド。今日も閑古鳥が鳴いている。まあゼロじゃあないし、そもそもお金には困っていないのだけれど。

で、そのゼロじゃない——ゼロじゃなくしてくれてるお客さん。

「あんまりそういうコトには言及しないのだけど、不思議な組み合わせね」

「……フン」

「僕もそう思うよ、それについては」

オーディアとイアン君。

敵対しているはずの二人が、席を二つ開けて、隣同士。

というのもまあ、一緒に入店した、とかじゃなくて、先にオーディアが呑んでいた所にイアン君が来た、というだけなのだけれど。

「ABSと密接な？」がりがある、というのは知っていたけど……まさか幹部全員が常連、ってことはないよね」

「ないわ。イーリスと、あとエヌちゃんには会った事ないし。それより、どうしたの？」

少しばかり言葉の棘が取れたというか……もしかして、デレ期？」

「ああ、いや。この前来た時に強い口調だったのは、貴方がABS側の人間なんじゃないかって思ってたからだよ。エヌを奪った僕の敵……そう思ってたから、あんな風に失礼な態度だった。それについては謝罪するよ」

「いいのよ、そんな。素直にデレ期って言ってくれば」

「喧しいぞ、アズ。男色に目覚めたというわけでもあるまいに、揶揄いはそれくらいにしておけ」

「あら、怒られちゃった」

何度も言うけれど、私は女のコの口調が好きなのだだけの男なので、好きなコは普通に女のコ。

でもこういう口調だと勘違いして「俺にそっちのケは無い！」とか言いながら顔を赤らめる男のコがいるのが可愛いよね。別におつきはしないのだけど。

「……ふう。なんだ、小僧。前も言ったが、儂はお前達に対しての殺意はない。だからそう睨むな。酒が不味い」

「あら失礼」

「………はいそうですか、とはならない………とりたい所だけど、そうだね。少なくともこの場で何かをする人じゃないだろうし、貴方の理念は………納得は出来ないけど、理



解はしたから」

「ふん。儂らは狂った殺人集団だ。理解もせんていい」

これ、ツンデレ？

あ、睨まれた。

「……アズ。南の大陸が”終わった”が……アレは、予定通りか？」

「それは、どういふ……」

「一瞬黙っている小僧。儂はアズに聞いている」

……うーむ。イアン君には聞かせるつもりなかつた事なのに、全くタイミングの悪い……。

そんなこと聞いたら、私が『箱庭』側の人間つてバレバレじゃない。いいえ、オーディエアも確信は無いのでしようけど。

「違う、とだけ言っておくわ。アレは直前まで私も知らなかつた」

「……そうか。ならばやはり、”終わり”が早まつて……」

「ちよ、ちよつと待つてくれ！ あんたらはどこまで……いや、違う、貴方は、アズ、さん。貴方は……何を知つている？ 何者なんだ？」

ほらあ。

「私は謎のお兄さんよ。それと、呼び捨てでいいわ」

「コイツは、……まあ、”終わり”の研究者だ。儂も知らん程深い所にいるが、基本は無害と考えて良い。誰かに依頼されない限りは、だがな」

「あらやだ。私別に殺しとかしないわよ。貴方達じゃないんだから」

「……フン」

殺しはしないわ。

殺しは。

「……アズ。もしも……もしも貴方がコレについて知っている事があるなら、教えてはくれないだろうか。僕は……強くならなければならないんだ。今すぐにでも、どんな手段を使つても」

「コレ、っていうのは、その黒い革手袋に包まれた、貴方の左手のこと……で、合っているかしら」

「……」

オーディアがグラスを傾ける。

くたびれたコート。グラスを持たぬその片方には、何も通されていない。

「そう。もう知られていると思うけど、僕のこの手は、”終わり”に浸されている。……中身まで知っているのかな」

「いいえ。貴方のその手が、オーディアの腕を”終わらせた”という事を知っている程

度よ」

「そっか。……まあ、ここには彼しかいないから、見せてしまうけど」

言つて——イアン君は、その革手袋を外す。

本当にただの黒い革手袋だ。おかしい材質でもない。

そして。

「……飲食店で出すには、ちよつとグロテスクだったかな」

「気にするコはいないから、大丈夫よ」

「儂は気にするが」

「貴方はもつと惨いものを見てきているでしょうに」

「フン」

革手袋の外されたイアン君の左手。

そこには、骨があつた。

骨だ。

骨。  
ギシギシと音を立てて動く、骨。手のカタチをした白。眩い黒を纏う、真つ暗な白い

手首から上の全てが、骨だった。

”終わり”を纏う手、ねえ」

「ああ。……この手は生まれた時からでさ。父さんも母さんも、お医者さんも病院も。僕が”終わらせて”しまった。その時……まだ赤子だった僕を拾ってくれた人が、これを抑える手袋をくれて。その人が今どこにいるかはわからないんだけど、そうして育つて今に至る。こんな所が僕の身の上話。で、どうかな。これについて、何かわかることはある?」

「とりあえずしまつてくれていいわ。大体わかったから」

「それは、本当に?」

「ええ」

器用にも骨の手に革手袋を通していくイアン君に、なんとも言い難い溜息を吐く。

身から出た錆……でもないけれど、ううん、難しいわね。

「それで、これは……」

「その前に。ソレ、痛みとか無いのかしら。特に手首は」

「ああ、そこは大丈夫。結構グロテスクだからあんまり見せる事は無いんだけど、手首の断面までしっかり見えた状態で止まつてる。成長はしてるから完全に止まつているわけじゃないけど、この手の纏う”終わり”が僕を蝕む事は無いよ」

「……ふう」

身から出た錆ねえ。

これは。完全に。

「アズ。儂はそろそろ行く。これ以上は小僧本人の問題だろう。一応は敵対組織の儂が聞いていい話でもないだろうしな」

「別に僕は構わないけど……」

「その話を聞くことは儂にとつて不都合だ、たとえば、黙って送り出せるか、小僧」

「……どういう」

「じゃ、またね、オーディア。またビーダへのツケでいいのよね？」

「頼む」

中身の飲み干されたグラスを置いて、オーディアは出て行く。

つくづく察しの良いお爺ちゃんよねえ。私が女だったら惚れてるかも。

「それじゃあ、何から話しましょうかね。まずはその手の正体から——とかで、いいかしら？」

何事も結論から。

それが円滑な討論の進め方である。別にダイベートするわけではないのだけど。

「まず、その手。その手はイアン君のものではないわ。だからイアン君がどんなに頑張っても、どんな修行をしたとしても、強くなったり新たな力を得たりは出来ない」

「……それについては、薄々わかった。明らかに指の長さや大きさが違うから」

「あら。ま、そうよね。それくらいはわかるか。……その手は、既に”終わった”ヒトの手よ。故に”終わり”が纏わりついている」

「そのヒト、というのは」

「教えられない……なんて言っても納得しないわよね」

「ああ」

さてどう切り抜けたものか。

殺しはしない、だの。ABSに密接な？がりはない、だの。

色々言ったけれど、私は普通に非人道的な行為をする側の存在で。

その非人道的行為の——「終わり」に関する実験で出た研究対象。謂わばモルモットよね。その中でも脱走したモルモットを消去する時のミスです、なんて正直に言ったらどうなるかしら。ここで戦闘が起きるわよね。

「まず、貴方を拾ってくれたという人だけど、名は覚えている？」

「いや。名は無い、と言っていたと思う。僕は勝手に先生と呼んでいたけれど……」

「髪は短かった？」

「それも否定する。長髪で、ぼさぼさの髪をしていた」

「特定の数字に敏感じゃなかった？」

「……懐かしい。それは、そうだ。肯定するよ。確か、20……と幾つかの数字を嫌っていた。数字が嫌い、なんて、よくわからない人だったけど……良い人だったよ」

検体番号S—25とT—26。

前者は「終わらせられた」。後者はその隙に逃げた。

ワズタムの迫り着いた秘法、人体の錬成。その逆、つまり人体を構成する限素を別のものに変換する実験の中で、それは起きた。

先日やったリソース化はこれらの実験を経て得た最終形だけど、流石の私もワズタムの研鑽に一足で並び立つ、なんてことは出来なくて、何度も失敗を繰り返したのだ。

「昔……ある”終わり”の研究所で、ある実験が行われていたわ」

「……」

『『人為的な”終わり”の誘発による”終わり”の制御』。要は何かの寿命を強制的に迎えさせて”終わり”を引き起こし、その時に起こっている現象を完全に記録、複製、制御する事で、”終わり”に対しての対抗手段を得ようとする……みたいなの、そこまで珍しくもない実験ではあったのよ』

「——それを、人体でやったのか」

「あらあら。辿り着くのが早いわねえ」

勿論そんなものは建前。私以外の研究員はそれを目指していたのだろうけど、私は別の事をしていた。

今話しているのは建前の方。非人道的な実験をしていた研究施設の方。

「人体を構成する限素の寿命を早める、なんてのは、言ってしまうえば簡単なのよ。生命活動の停止がもつとも手っ取り早い手段なのはわかるでしょう？」

「……ああ」

「でも、その研究所では、そうではない方法で人体の限素組成を変えようと試みた。健康な人間を健康なままにリソース化させようとしたの」

限素組成を変える事無く、つまり強度をそのままにリソース化する。

……私が提案した、錬金術の概要。研究員達は目を輝かせて、躍りになってソレを成功させようとした。ま、どう足掻いても凡人の集まり——誰も成功には至らなかった。

だから、手を貸した。

「その時対象となつたのはある捨て子。身寄りのない子供。貴方にはキツイ言い方かもしれないけれど、あの頃は戦争孤児なんか沢山いたのよ。ほら、戦争によって戦争の参加者や関わった国がゼーンぶ”終わった”あの日。あれによって、戦火に飲み込まれないようにに逃がされていた女性や子供たちが大量に余つたわ。敵国に対して多量の害意



を持つていた女性は、避難民でさえ”終わった”なんて話は有名よね。まるで神が”見苦しい”とでもいうように、きれいさっぱり消えてしまった、って”

「……それで、子供が」

「そ。身寄りのない子供が沢山余ったの。ただ野垂れ死ぬだけのコもいれば、運よく隣国に辿り着けたコもいる。そして——」

「そういう研究施設に捕獲された奴もいる」

「ええ。というか、そういうコの方が大半ね。まるで狩りをするように、野生動物を捕まえるように、あの国の子供たちは乱獲された。で、その子供の一人を、研究員達は検体S—25、と呼んでいたわ」

「……」

実験対象にするなら健康な子供が望ましい、というのは共通認識だ。巨大なものに干渉しようとするればするほど必要なりソース量は多くなる。リソース化させるためにリソースを必要とする、という話はまあ符術辺りの参考書でも買ってもらおうとして、つまり大きな大人より、小さな子供の方が楽なのだ。

私を手を貸したことによって飛躍的に段階の進んだ錬金術の研究は、とうとう実践にまで持ち込まれた。

「つまり、健康な子供を一人——そのままの状態で、完全にリソース化する、という実験、

か」

「ええ、そうよ。そしてそれは成功した——かに思われた」

人間一人のリソース化。

それを成し得るには、あの研究所にいた研究員全員のリソースを用いても無理だった。ただ、無理な事を知っているのは私だけで、彼ら彼女らは出来ると思っていた。

私は「面白いお兄さん」としてそのコに好かれていたから、彼の左手を握って——その組成を理解して。

反対の手で、研究所内全ての人間を掌握した。

「しなかったのか」

「半ば成功した、とでも言えばいいのかしらね。検体S—25はリソース化したわ。苦痛も無く、何の感情も無く。けれど、リソース化したのはS—25だけじゃなかった。その場にいた研究員も、そして他の用途に使われていた検体も、予備の子供たちも——全部。全てがリソースになった。簡単に言えば、範囲指定が出来ていなかったのよ」

「……けど、漏れがあった」

「そ。検体番号T—26。彼はとっても熱心な検体だったの。熱心に——その研究所から脱出を試みていた。あらゆる場面、あらゆる状況で研究員達の隙を伺って、どうにかこうにか逃げようとしていた。そして彼は見つけたわ。秘密の部屋——私が気に入っ

たコを食べるために勝手に作った、ある部屋を」

「……」

そう。ミスだった。

あんなヤリ部屋に鼠が紛れ込むなんて想定外にも程がある。

行われた人体の逆錬成。私に手を握られた子供は瞬く間にリソース化し、時を同じくして研究所内全所員全検体もリソースとして変換、使用される。私が把握ミスした彼と彼のいた部屋を除き、同じく限素で構成されている研究所そのものまでもリソース化しての、大錬成。

全てがリソース化し、成功したかに思われたこの実験は、けれどミスがあった。彼の事もそうだし、もう一つ。

私<sup>が</sup>手を握っていた子供。

つまり、私の手の中に在った子供の手は、リソース化しなかったのだ。私は私を範囲に含めていなかったから、すっぱり切断される形で。

「実験は半ば成功した。研究員達や予備検体まで巻き込まれる、なんて想定外はあったものの、あらゆるものがリソース化し、消え去った元研究所跡地に、私はただ一人残されたわ。——嵐が過ぎ去ったことに安心して、私のヤリ部屋から出てくるT—26と共にね」

「……先生のことはわかったよ。あの人がどういう人だったのかは理解した。それで、それが僕の手と、どう関係があるんだ」

「私は彼の事を消そうとしたわ。目撃者だから」

「――！」

そこは正直に言う。

手首の先から消え去った少年の手を握りながら、私はT―26に向けて掌をかざした。何をされるか、なんてことは彼には理解できなかったでしょうけれど、何かをされるんだ、という事は理解できたのでしょね。彼はすぐさま身を翻し、森の中に――木々の中に逃げていった。

だから私は、その森に錬金術を行使した。

「置換――貴方に符術の知識があるならわかると思うけれど、基礎の基礎よ。対象の限素を一時的に書き換える術式」

「ああ。わかる」

「それを用いて、私は彼の逃げた先にあつた全てを書き換えたわ。弱化――限素組成の弱体化。これも、よく使う符術よね？」

頷くイアン君。

リソースのみである妖魔に対しては一切効かない符術だけど、人間相手には……とり

わけ人間の決まった部位、限素組成が他人とあまり変わらない部分に対してはかなり有効な術式だ。

その錬金術版を、森全体に対して放った。森全体——というか、見える限りの全てに對して、かしら。

「——結果、それでも彼は私から逃げ果せた。……どうやったと思う？」

「わからない。けど……そこでそれを問うてくるという事は、僕にとってあまりよくない事実なんだってことはわかる」

「察しがいいわね、本当に」

森を丸ごと「終わらせた」。

ただ目撃者を消すという一心で放った錬金術によるリソース化の「終わり」は——こゝれまた中途半端な結果に終わった。

ワズタムの編み出した錬金術の秘奥は、あくまで存在Aを存在Bに置換する技術だ。弱体化も強化も無しに行う秘術。”今回”の符術では決して辿り着けない禁忌の領域。

だから、森をリソース化したら、何かが錬成されなければならない。私はそれを把握していなかった。

けれど法則は変わらない。目に見える全てをリソース化した故に——目に見えていない、私の掌の中に在った少年の手が——その手から先が、錬成され始めた。

「検体番号T-26は、逃げた先にあった小さな町の、小さな病院に逃げ込んだわ。そこで何を言ったのかはしらないし、調べようも無いけれど、その病院は快く彼を受け入れたのでしょね。森の中を走ったのだもの、傷だらけだったでしょうし」

「……そこが、僕の生まれた病院か」

「恐らくは」

錬成された少年は、しかし周囲に限素が無かった。いいえ、あったわ。私という限素が。だから錬金術は私の身体から限素を取ろうとして、でも失敗する。先日のように、私は「終わらない」から、リソース化も限素の書き換えも行われない。そうなつてくると、錬金術が次に選ぶのは地面。森全体のリソースは——けれど、少年の骨までしか作り得なかった。これもまたリソース不足。だけど、元々少年の人体を錬成するつもりでの行いではないから、そこから何かが奪われる事もない。

ただ、「終わり」は発生する。禁忌の領域に踏み込んだ私を「終わらせよう」として、でもやっぱり「終わらせ」られなくて、「終わり」は他のものを「終わらせて」帰ろうとする。「終わり」が「終わらせる」対象に選んだのは、錬成された少年の身体だった。「私はもう一度同じことをしても逃げられてしまうと踏んだ。もう一度同じことをしても——他の限素生物を盾にする事で避けられてしまうと」と

そう、T-26の取った手段はいたって簡単。

私の目に入る範囲が私の掌握範囲なら、何かの影に隠れてしまえばいいと考えた。

一瞬で消えた森に、次々と消えて行く家々に、直感的に理解したのでしよう。「隠れるならば人体の影でなくてはダメだ」と。そしてそれは正解——私の知らない限素組成の影に隠れたら、私はそれを取り除いてからでないとその奥を掌握できない。

だから。

正解を引いたから。

私は、別の手段を取る事にした。

「転移術——それなりの規模の符術だけど、エメト辺りが良く使うから知っているでしょう?」

「ああ。……ああ、それじゃあ——これは」

今まさに錬成された少年の骨。それを「終わり」は、仕方がないとばかり食い尽くしていく。消失させていく。「終わらせて」いく。

だから私は、これ幸いとばかりに手の内の小さな掌を、転移させた。

「終わり」の付着した手を、T—26の元に転移させたのだ。

今更良識を語るつもりはない。けど、考えないだろう。T—26が自らの盾として——その病院にいた赤子たちを使っている、なんて。

ま、結果として。

「研究所全体のリソース化によって訪れた”終わり”。それを私はT-26の元に転移させた。”終わり”を纏った、私の握っていたS-26の手をね。——それによって、T-26の周囲にあったものは全て”終わった”わ」

「……いいや、”終わった”はずだった、でしょ。アズ」

「ええ、そうみたい。転移した場所は、T-26の手の位置よ。転移は相関のある場所程簡単になる、なんてのも基礎知識。私は終わり始めた少年の左手を、T-26の左手のあるところへ転移させた。それが貴方の手になっているのなら」

「多分、先生は……僕の手を握っていたんだろね。御守り代わりかな。アズ、貴方という恐ろしい悪魔から逃れるための、拠り所として」

私はそれで追跡をやめた。初めから追跡なんかしてなかったけど、流石に「終わり」には抗えないだろうと——転移先が消失したことも確認したし、T-26の限素組成が確認できなくなった事もわかったから。

今にして思えば、彼はその身を焼いたのかもしれない。人体の限素組成は焼かれる事で簡単に変わるから。私から逃げるためにそんなことをする人間がいるなんて思ってたから、当時の私は確実に「終わった」と思ったのね。

ああ、というか、それほど火傷を負っていたからその街の病院も彼を受け入れたのかしら。ま、その辺の前後は確認のしようがない事ね。



「……で、どうかしら。ここまでの話を聞いて——私は、貴方にとって、敵に降格したりするっ。」

「しないよ。どれだけ貴方が非人道的な実験を行っていたのだとしても、僕には関係がない。僕が今ABSに宣戦布告をして彼らと争っているのだから、大量殺人犯たちが許せないからじゃない。エヌを取り戻すためだ。僕には別に、倫理に対して義憤も燃やす程の熱量は無いよ」

「そう。それはありがたいわ」

「それに、今こうして……その子供の手が。先生が僕を、僕の出身地を盾にした事が、僕の役に立っている。この手がなければオーディアを撃退する事は適わなかっただろうし、これから先も頼っていくと思うから」

「前向き、というよりは、盲目的ね」

「マッドサイエンティストにそんな事言われるとは思ってなかったよ。……けど、そういう話なら、無理そうだね。この手を強化するとか、新しい能力を付随させる、なんて事は」

「ええ、最初に言った通り、無理。——だけど」

さて、ここからは——交渉だ。

その手を強化する事は出来ない。それは私のミスによって生まれたただの零れもの

だから。

けれど、その先。あるいは前提。

どうしてイアン君の手に定着したのかと、何故彼の身体は「終わり」に蝕まれないのかについては——まだ、余地がある。

その話をしましょうか。

????????????

「イアン君が、そして私さえも勘違いしていたイアン君の異能。」

「僕の、異能?」

「そ。おかしいと思わない? 私はT-26を”終わらせる”ためにソレを転移させたのよ。けれど結果的に、貴方も、そしてT-26も”終わらなかつた”。周囲のあらゆるもの——病院や町は消失したというのに、貴方とT-26だけ」

「……それは、そうだ。それに、そういう経緯なら……僕の身体が”終わり”に蝕まれていない事もおかしい」

「ええ、そう。ついでにいうとその革手袋もおかしいわよね。研究所にいた、逃亡時は何も持っていなかつたはずのT-26が”終わり”を封じこめるものを持っている、なんて」

そう——おかしい事ばかりなのだ。

イアン君の周りだけ。

とりわけ——イアン君に触れているものだけが、「終わっていない」。

「じゃあ、僕の異能は、”終わらない”事?」

「それは違うわ。貴方、怪我をするでしょう。病気になった事もあるんじゃない?」

「ある。……そうか、限素組成が変わる時点で、寿命はある。だから”終わる”」

「その通り。”終わらない”のは、成長しない事と同じ。変化しない事と同じ。だから貴方は”終わらない”異能持ちじゃない」

「じゃあ、僕は何の……」

「ここで問題。T—26が貴方を育てた理由はなんでしょか」

唐突に、そんなことをいう。

私の発言に対し「唐突だな」と相槌を打とうとした——言葉を紡ごうとしたのだろう口が、途中で止まる。

頭の回転の早いコねえ。

「先生は、僕に触れていたから……」終わらなかつた。だから先生は、僕さえいれば”終わらない”と踏んだ?」

「ええ。そしてT—26はもう一つの事にも気付いている。そも、貴方のその手は、恐らくT—26が握っていた方の手よ。それが”終わり”を纏う手に置換されたのなら、T—26も”終わっている”はず。他のあらゆるものが”終わっている”のだから、その消失量は推して知るべしよね」

「でも先生は”終わらなかつた”。僕も”終わらなかつた”。じゃあ、僕の異能は」

「――」終わらせない”。対象を止め、”終わり”を弾くチカラ。赤子であった時の貴方は、両親ではなく自らの手を握り締めていたT―26を大切な相手だと認識したのでしょうか。それによって、T―26は止められた。時間を止める、というワケではないわ。ただ、成長も変化も出来なくした」

「……停める」

「その革手袋も同じでしょう。多分、T―26からこんなことを言われたんじゃない？

”この革手袋は――”」

「この革手袋は、お前の異能を抑えるチカラを持っている。これさえあればお前のソレは抑えられる。大切にしろ”……そう言われたよ。だから僕は、この革手袋に異能を使った、つてわけだ。無意識のうちに、だけど」

「恐らく、だけどね」

ふうー、と大きなため息を吐くイアン君。私も吐きたいわ溜息。バレて無さそうであった。

まあ大部分は本当だし。初めから私がああの研究所をリソースとしてしか見てなかった、なんて事は別に私だけが知っていればいい話だし。ね？

「……ちよつと待って。それじゃ、もしかして僕は……この世界の”終わり”を止められる？」

「異能がどう育つか、知ってるかしら」

「……知らない。異能とは育たないものだって習いはしたけど」

「育ちはするのよ。育てるのが難しいだけで」

「アズ。貴方の言いたい事は、”今のままでは到底無理。だけど鍛えればあるいは”ということなんだろう？　なら、教えて欲しい。異能を鍛える方法。僕の——”終わらせない”という異能を、”世界の終わり”にまで通用させられるようにする方法を！」

それは無・理なんだけど。

まあ、期待を抱くのは良い事よね。それに。

「あら、貴方の主目的は、エヌちゃんを取り戻す事じゃなかったかしら」

「それは勿論だよ。勿論だけど——エヌを取り戻した後、世界が変わる、なんてバッドエピソードは受け入れられない。いや、受け入れるつもりでいたさ。僕達にはどうしようもないことだ、って。でも——今、こうやって希望を見せつけられてしまったら——無理だよ」

「……そっ」

今起きている「終わり」と「世界の終わり」は別種である、という事実は、彼の「終わらせない」という異能にとって最悪の事実である——なんてことは置いておいて。

単純に大規模な「終わり」を防ぐ手段には使えるだろうその異能。

それを鍛える方法。

「方法はいくつかあるわ。その中でも、比較的単純で且つ短時間で出来るものを提示しましょう」

「単純ではなくてもいい。至難でもいい」

「……ま、落ち着いて聞きなさい。とりあえず一つめ。もつとも単純な方法は、使い続ける事。ただしこれは短時間じゃなく、膨大な時間が必要。子供が老人になるまで使いつけてようやく微量の強化が望める、程度のもの。だから、これより少し難しい方法——極限状態での使用。これを提示するわ」

「極限状態……?」

「そう。たとえば、構造物が”終わる”瞬間。それを停める、だとか。たとえば——寿命を迎えたニンゲン。それを停める、だとかね」

「……前者はともかく、後者は……どうなるんだ。時を止められるわけじゃないんだろう。寿命を迎えたヒトを停めたら」

”終われなくなる”わ。寿命を迎えた限界がリソースに変わる直前で、その苦痛を永遠に味わうことになる。一瞬であれば感じなかったはずのそれを、永遠に味合わせることになる。今更非人道的、なんて言わないわよね?」

「……」

あらだんまり。

ま、これが一つ目の方法。

「終わる」瞬間の相手を「留める」。停める。ある意味ワズタムに対して私達がやっている事と同じ。

「二つ目の手段。それは、”終わり”を浴びる事」

「浴びる……つまり、”終わり”に対して突っ込めばいい、つて?」

「そ。心当たりあるんじゃない? ”終わり”に飲み込まれて、急激な強さを手に入れたコ、とか」

「!」

果たして噂のエヌちゃんがそうだったのかは知らないけど、これも有効的な手段だ。

すべての……ああいや、ほとんどの異能は無から来るもの。無の末端である「終わり」をその身に浴びる事は、異能の強化に繋がる。

「あ、勿論自分の事はその異能でコーティングなさいね。しないと簡単に”終わって”しまうから」

「……ああ、わかった。そうか、あるいはエヌも、僕が”終わらせたくない”と願ったから……?」

「その辺りについては、私にはさっぱり。未だエヌちゃんには出会えていないし」



「うん。オーディアに聞いたよ。ABSでもエヌにはここへ近づかせないようにしている、って。変質者だから、って」

「……」

「だから藍沙やジュニにも行かないように言っている。あ、そうそう。裏に墮ちてしまった女性についてだけど、一人確保できたよ」

「あらホント？　今の今まで貴方に請求する依頼料どんだけ高くしてやろうかしらこの野郎、とか思ってたけど、そのコを渡してくれるだけでチャラにしてあげるわ」

「そうだった。これほどの情報量、安くはないよね。失礼なことを言い過ぎたのは謝るよ」

「……ま、T-26……貴方の先生とその手は私のミスでもあるから、諸々含めてチャラよ。その女のコは貰うけれど」

あと藍沙ちゃんは勝手に来たけれど。

「じゃあまあ、あともう一つだけ。三つ目の、とても難しくとつても短時間で終わる方法」

「……聞かせてくれ」

「自らの大切なヒトが失われる——ただ、それだけ」

「うん。その手段を取る事は無いかな。というか、それはリソースの強化法と同じじゃ

ないか」

「あら、よく知っていたわね。そうよ、だって異能もエネルギー源はリソースだもの。使えるリソース量が多ければ多い程、異能の効果範囲や効力も上がるわ」

出所が無なだけで、異能を使用しているのは術者本人だ。

だからリソースを必要とする。ただし符術や錬金術と違い、本人の体質に近いものであるため、エネルギー効率が段違いに良い。さも当然のように、カンタンに異能を使う者達がいるのはそういう理由。リソースは使用しているけれど、燃費がとつても良いのだ。

「わかった。つまり僕は、”終わり”に対して突っ込むか、”終わり” そうなものを停める。それを繰り返せばいいんだね」

「そうよ。そして」

「うん。わかってる。——”終わりそう”なものや場所は、ABSが教えてくれる」

アリアスの衝動的殺人を除き、Absurduの狙う場所では、殺戮ショーを起こす場所では、必ずと言って良い程「終わり」の消失が起こる。

イアン君は多分エヌちゃんがいるからだ、と思っっているのだろうけど、それは違う。ビーダがいるからだ。

ビーダはFTRM3Uを通して「終わり」の訪れるモノを知る事が出来るから、まる

で未来予知が如くそこへ現れるのだろうか。

「じゃ、その堕ちてしまった女のコの事、お願いね」

「うん。ああ、いや、ありがとう、アズ。僕の異能について。先生について。そして、貴方の人となりを知る事も出来た。貰い過ぎに感じるけど、さつきチャラにしてくれるって言ったから、甘える事にするよ」

「女のコについてはチャラにしてないわよ」

「わかってるって」

そう、笑いながら。

席を立つイアン君。

……そういえば。

「結局今回も飲まないのね、お酒。ここはBARなのだけど」

「あー……まあ、今度大吾と飲みに来るよ。エヌを取り戻した後になるだろうけど」

「それは」

先の長い話ねえ、と言おうとして、流石に口をつぐんだ。

「先の長い話、つて？ うん。でも必ず成し遂げるから」

「んもう、私が口をつぐんだ意味、ないじゃない」

「わかるよ、それくらい。僕がまだまだ弱いって事くらい。だから——強くなるんだ」

決意を秘めた表情。

頑張る若者、つてカンジ。「世界の終わり」については実はもうどうしようもないんだけど、それ以外については本当に頑張つてほしい。応援しているわ。

「それじゃ」

「ええ。また来てね」

「うん。必ず」

出て行く彼に——ようやく溜息を吐く。

もし。

もしこの場に、オーディアがいたら。

彼は私を許せなかった事だろう。政府機関の爆弾魔。国際機関の伝説的破壊者。火薬の老兵。

その原初の理由は——「終わり」の孤児達を良い様に使っていた施設の破壊、だったそうだから。そして見事な事に、彼の犯罪歴において、殺害した人間の中に、子供とされる者は誰一人として含まれていない。

子供は殺さない。守る。助ける。それが彼の流儀。

手を出す者は——たとえ私であろうとも。

「……」めんないね、オーディア。私の手はもつと血塗れよ。そして、だから貴方は第

五位なのよ。その程度だから」

ビーダにとって、私にとって。

その程度の感情で動く犯罪者など——そこまで必要ではないから。

だから、最下位。あ、エヌちゃんが入ったから最下位ではなくなったか。

……貴方はそれも、知っているのかしらね。

「ウオロツソ君、大丈夫？」

「ん、ああ、……すみません、寝ていました。ありがとうございます、アズ」

「あんまり無理しないでね。”終わり”の前にまず貴方が死んでしまつては、元も子もないでしょう」

「はは……そうですね。冗談でも笑えなくなつてしまひそうだ」

眠らせていた彼を起こす。

彼は何の疑念も抱かず、デスクに垂れた液体を恥ずかしそうに拭つて、研究を再開する。

「サルミナちゃん、どうしたの？」

「ん……ちよいと頭痛がね。何、大したことじゃない」

「月モノ？」

「違うよ。気圧でもない。……多分、徹夜のしすぎだ」

「ちよつと、貴女まで？」

「なんだいアタシまで、つて」

「さつきウオロツソ君も端末の前で眠つてたのよ。疲労で」

「……ちよいと寝てくる事にするよ。アイツと同じにされるのは、敵わない」

「そうしなさい」

同じく眠らせていたサルミナちゃんに、もう一度睡眠を促す。

ただ……彼女は少し、後遺症が残ってしまった、という事かしら。二人とも綺麗さっぱり記憶は消えているはずなのだけどね。

「それで？」

「何よ」

「いやあ、何の用もなく飼い主サマがここに訪れるつー事は、なんかあつたんじゃねえかって邪推しただけだぜ。アンタ、偽悪を気取るクセに身内に対して悪い事するとすぐそういう力才すつからな」

「……扱いづらい子供ねえ」

「ハ、中身は云千万のクソジジイはいう事がちげーや」

そんなにしよぼくれた顔をしていたかしらね。

怖い怖い。錬金術の最奥。秘奥。そんな深淵を覗いた相手だ。たとえ五感が使えな  
かろうと、こどもも見抜いてくる。ただ長生きの私なんかよりもずっと賢者な少年。

「あと、三ヶ月よ」

「この世界か」

「ええ」

「……この苦しみとも、やっとオサラバか。清々するぜ」

「自由を欲しいと願った事は、ないの？」

「ないと思うか？」

愚問だろ、と。

少年は、ワズタムは吐き捨てるように言う。

「走り回れる身体が欲しいさ。ビョーキにならねえ、怪我もしねえ。なんなら食わんで  
いいし飲まんでいい身体が欲しい。んで、やりてーこといっぱいやりてーよ。仕事とか  
じゃねーぞ。また錬金術で色々やりてえし、この世界の符術だったか。それでもいい。  
好きなもんやって、好きなもん育てて、好きな事目指して……そういう事がしたい」

「子供みたいね」

「子供だろ、どうみても」

いいえ。子供はそんな事言わないわ。

そういう普通を願うのは。子供みたいなことを願うのは。

苦しみを経験してきた者だけ。

「彼女さんには会わなくていいの?」

「……オイ、なんで知ってやがる」

「ふふ、カマをかけただけよ」

「あー、そうかい。クソジジイめ、とつととくたばりやがれてんだ」

ワズタムが何故錬金術の秘奥に手を出したのか。

それは、大切なモノを「終わり」から逃がすためだと言っていた。

その大切なモノがなんなのか、私達は知らなかったのだけど、今こうして判明したわね。

「そーだよ。好きな奴がいたんだ。」前「にな」

「あら、続けてくれるとは思ってなかったわ」

「続けねーとお前出て行かねえだろ」

「それはそうね」

「……いたんだよ。つっても昔……無を考えれば、遙か昔になる。いたのさ。俺にも大



切なヒトが。好きなヒトが」

「その子はどんな子だったの？」

「……わからねえ」

「――」

「覚えてないのさ。ハ、滑稽だろ。これだけ苦しい思いを……代償を食らってまで逃げた相手を、覚えてないんだ。忘れたんじゃない。奪われたんだ。”終わり”に、記憶を持つていかれた」

「……そう」

「滑稽だよな。無様だよな。なあ、アズ。お前も”理外”ならわかるだろ。この……余計な、余計な、余分な、覚えてても仕方ねえクソどうでもいい知識はずーつと頭の中に在る。だつてのに、”前のその前”の、俺が一番大切にしてた記憶はボロボロなんだ。身体も心も記憶もボロボロで、けど俺は、自分の名前と役割だけは覚えてる」

「そうね。私は”終わらない”から、ボロボロにはならないけど。余計な事だけが脳裏にこびりついているのは認めるわ」

「ケツ、羨ましいこつて」

体内を「終わり」に蝕まれる少年。

そして錬金術という知識を授けてくれた少年。

どうか報いあれ、とは願うけれど、難しい事もわかっている。

「ね、ワズタム。貴方、好みの味とかあるのかしら」

「味。味ね。味覚が無い俺にそれを問う残酷さはわかってんのか?」

「昔はあったでしょ。彼女さんとどんなものを食べていたの?」

「うっぎ。……あーまあ、甘いモンだよ。錬金術ってな頭を使う学問でな。脳の糖分補給に食つてたら、いつの間にか好きになつてた」

「好きな色は?」

「視覚の潰れた俺に……なんて同じ問答をするつもりはないが。えーと、色か。んー、まあ緑と白だな。彼女が良く使つてた。白いワンピースで……緑の髪留めをつけていた」

「どう? 少しは思い出せた?」

「ああ、気を遣つてくれたのはわかつたけど、無理そうだ。真黒なんだ。カオもカラダも、無みてーに真黒。着ていたモノはかろうじて思い出せる。交わした言葉少しは思い出せる。けど、顔も名前も、嘘みてーに覚えてない。……ああ、でもな、アズ」

少しだけ、空気が変わったように感じた。

何もできない少年が——ワズタムから発される空気が。

「同情はするな。俺は別に、寂しいと思つてはいない」

「そうなの？」

「当たり前だろ。俺は俺の決断で、彼女を”終わり”から逃がしたんだ。それは何かに引き裂かれたわけでも、理不尽に潰されたってわけでもない。俺と彼女は自分達で決めたんだ。”終わり”の向こう側で、それぞれの幸せを掴む、ってな」

「……でも、今、貴方は」

「じゃあ、その向こうにあるさ。彼女はもう”終わらない”。俺が弾いた。俺の全身全霊を以て彼女を守った。だから彼女はもう”終わらない”。”終わらない”なら、いつか必ず幸せを掴めるはずだ。俺はそれでいい。そして俺もまた、”終わらない”。”終わらない”に蝕まれて尚、お前らに飼われて尚、俺は”終わらない”。いつか必ず、幸せを掴み取る。同情するなよ、アズ。俺達はまだ諦めてないんだ」

……強い人。

本当に惜しい。この人が”今回”の世界の住民だったら、恐ろしい程のリソースが得られただろうに。

「一つだけ聞かせて頂戴」

「いいぜ」

「もし、この先で——彼女さんに出会えたら。貴方はどうするのかしら」

「もっかいプロポーズして、結婚するに決まってるだろ。アホかお前」

「……ふふつ、そうね。流石だわ。どこまでいっても普通なのね、貴方」

「そういうお前はどうかなんだよ。散々女食い散らかしてるみたいだけど、本命は？」

「いるわけないじゃない。私、”終わらない”のよ？」

「あつそ。じゃ、俺なんかの数万倍お前の方が可哀想だわ。愛を知らずに云千万。フン、寂しい奴だな、お前」

「そうよー。私は寂しい奴なの。だからもし貴方の彼女さんがこの世界に流れ着いて、丁度私が溜まってたら、貰っちゃうかも」

「それ、本気で言ってるならこっちも最終手段使うぜ」

「……最終手段？」

「世界のリソース化。ハン、使えるのがお前だけだと思ふなよ」

「ごめんなさい。やめとくわ。今はまだその時じゃないもの」

「ふん、揶揄うなら相手を選べよな」

そうだった。

この子は——この人は、私達に錬金術という扱す処を与えた張本人。

錬金術の最奥があったからこそ、『箱庭計画』は形になったのだ。

感謝こそすれど、これ以上の仇はダメよね。

「おやすみなさい、ワズタム。私はそろそろ行くから」

「馬鹿が。0時回つたら次のPU来るんだよ。今度は最初の十連でSSR当てるんだ」

「それ、130連目まで何も当たらないわよ」

「やめろお前それ言うマジになるから！」

その時までは。

どうか、課金でもなんでもお好きにどうぞ。

せめてもの、償いだから。

????????????????  
 ユンは暗殺者である。

■ 罨を用い、毒を用い、短針を用い、そして徒手空拳を用いてヒトを殺す——完全な殺人者。そう、育て上げられた。

ユンにとって殺人は朝礼と同じだった。そういうしきたりだから、周囲に倣って行う事。そういう習慣だから、当然のように行う事。朝起きて、命令に従って、標的を殺す。自らの美貌の使い方も、自らの”性”の部分さえも道具として、標的を殺す。それは当然で、当たり前前で、常識だった。

けど、ある時。

ユンを用いていた国が、「終わった」。

標的殺害の命を受け、それをなんなく終わらせたユンは、しかし帰るべき場所を失ったのである。帰るべき場所がなくなつたので、ユンは捕まった。暗殺した標的の家族に。そして標的の所属する国に。ユンは自ら捕まったのだ。どうか使ってほしいと——用途はいくらでもあるから、と。

けれど、残念なことに、ユンを捕まえた者達はユンを使わなかった。まだ幼かったユ

ンに同情したのだ。殺す事しか知らない幼子など、可哀想だ、と。

殺害された標的が家族からも国からも嫌われていた、というのは大きかったのだろう。野心と私欲の塊で、国も敵国も隣国もまとめて利用しようとしていたのだと聞かされた。けど、ユンにとつて命令の理由なんかどうでも良かったから、どう返事をしていいかわからなかった。

殺しはやめなさい、と言われた。それは良くないことなんだよ、と諭された。

私達の家族になりましょう、と言われた。貴女のことをもつと聞かせて頂戴、といわれた。

だからユンは、自らの首を差し出した。

自分の事を、国の事を聞かれたら、口を割ることなく死ぬ。それもまた、睡眠をとることと同じくらい普通だったから。

けれど、やっぱり。待てど暮らせどその国はユンを殺してはくれなかった。死なせてくれなかった。殺してくれないのなら自死をしようとして、けれどそれすらも止められた。ユンのやる事なす事、けれどけれどけれどと、止められる。

それはダメなことだ、と。自分を大切にしなさい、と。君には自由に生きる権利があるのだから、と。

——この時点で、ユンは彼らを障害であると判断した。

自死を妨げる障害。命令遂行の邪魔をする者は、たとえ一般人であろうと殺せ。その命令もまた、お昼ごはんと一緒に。

だからユンは、その家族を——そしてその国を、殺した。

上水道にあまりに強力な毒を流し、すれ違う者全てに痛みのない細針で毒を差し、国中のあらゆるところに致死性のトラップを張り巡らして。

原因不明の病が蔓延する国になった。医者達は躍起になって解決をしようとしたけれど、相次ぐ不審死変死によって一人、また一人と消えて行く。

ユンは言った。「私なんかを匿うから、こういう事になる。私は死に追われている。早く追い出した方が良い」と。「これはあの国の呪い。私を殺すために、私の大切なモノ達を殺そうとしているんだ」と。

心の底から——身体中の、あらゆるところをくまなく探したって、「大切なモノ」なんか存在しないユンの口は、いとも容易く嘘を吐く。幼子にして美しきユンは、可愛らしいユンは、か弱きユンは——まるで怯えたように。そして突き放したように、そう言うのだ。

その時点でユンは容疑者から外れた。

家族からも、心優しい国の上層部からも「絶対に守るから」「大丈夫だから」「貴女はもつと美しい世界を見るべきなんだから」と——そう、抱きしめられて。



抱きしめてきた女性の首に、最後の短針を刺して——終わり。  
その夜。

民間人は毒薬と罠だらけの自宅へ閉じこもるよう指令が下った。兵士たちは毒と罠だらけの街中を全身全霊を以て警備する事を命令された。国の上層部は誰一人として油断せず、その夜は一睡もせず。

——翌日、起き上がる事が出来た者は——ただの一人だけだった。

「何を読んでいるんだ、ジュニ」

「日記ー」

「へえ、そんなものを付ける習慣があったのかお前」

「なにー？ ずぼらなヤツだ、って言いたいワケ々？」

「ああ。その通りだろ？」

「その通りでーす」

大学の構内は、少しだけ慌ただしい。なんでもかのテロ組織ABSが、この大学にはど近い図書館を次なる標的にする、と宣言したらしいのだ。ここの学生も良く使う図書

館で、だから絶対に近づかないように、との触れが出た——にも関わらず、大学生たちはどこか浮かれ気分で、「近く行ってみるか?」とか、「動画撮ろうぜ」とか。

まあ、あまりにもモラルに欠けた言葉で談笑をしている。

それらに我関せず、でいるのがこのいつもの四人。

「イアン君、ちよつと聞きたいんだけど……」

「ん。ああ、経済? ならジュニに聞いた方が……」

「でもジュニちゃん今読書中みたいだし、だし、その……イアン君に、教えてもらいたい、という、か……」

「あー、イアン。私今読書中だから。暇じゃないから。その辺よろしくー!」

「お互い、馬には蹴られたくないな」

「ねー」

イアン・エンハード。陽下藍沙。ティニ・"ジュニ"・デイジー。大吾・ウエイン。

仲良し四人組としてそれなりに知られている四人だから、今の話題についてこない——ノリの悪いと思われるでも誰ぞかが突っ込んでくる事は無い。見るからに腕っぷしの強い大吾がいることもあつてか、入学初期こそ男女グループということとやかく言われたり突つかかられたりしたもの、今は背景と同じだ。

同じで——誰も彼らの話を聞かないから。

ちよつと簡単な符術を使う事で、こんな公の場で秘密の話も出来てしまう。

「……オツケー、防音と認識障害の結果出来たよ」

「ああ、ありがとう、ジュニ。藍沙も……いいかな」

「うん。今は勉強よりエヌちゃんだもんね」

「陽下は勉強だけじゃ……おっと、睨むな睨むな」

少しばかりのじやれ合いをしつつも、真剣な顔でその話し合いは始まる。

「行くんだよね、イアン君」

「うん。僕の異能を育てるために」

「人々を救うため、じゃないの〜？」

「あはは、ジュニ。僕ら、そういう集団だったっけ？」

「言ってみただけ。……けどさー、その話ホントなの？　ぶっちゃけ信憑性薄いつてい

うか、”終わり”に突っ込むなんて……ショーキのサタじゃないっというか」

「それについては同感だ。あのアズという男の情報なのだろう？　あの時一度会ったき

りだが、あれは嘘の塊だぞ」

周囲の浮かれ学生と同じく、話題はABSについてだ。

ただ、その目的が違う、というだけで。

「うん。わかってる。あの人は”本当の事を混ぜて嘘を吐く”ってタイプの人だ。け

ど、僕に対しては結構本当の事を言ってくれていると思う」

「何故そう思う?」

「オーディアが信頼してたからだよ。オーディアは子供を殺すヤツを許さない。子供を利用するヤツを許さない。彼曰く、僕達は四人とも、まだ子供らしいからさ」

「え、イアン君……もしかして一人であの老爺さんに会ってきたの?」

「いや、アズの所に行ったらたまたま同席してね。少しだけ、あの人についても理解できたよ」

そういえばそれは話していなかったね、と、イアンは先日の出来事の全てを話す。

異能を育てたい、とだけしか明かしていなかったのは、他の三人にアズへの嫌悪感を抱いてほしくなかったからだ。だからイアンはその手の由来もまだ明かしていない。

ただ、自身の異能が「終わらせる」のではなく「終わらせない」ものであったと教えられた事だけを話して、だからこれからは、もつと危険な事をするつもりだよ、と。そう宣言したのだ。

「ま、イアンがやりたいってゆるんならいーんじゃない? 私は二人と違って異能とかないし、感覚わかんないけどさ」

「……問うが、イアン。それは、俺にも適用されるのか?」

「多分、としか。でも、たとえ適用されるのだとしても、今回はやめた方が良いと思う。」

まだ僕があの図書館規模のモノを停められるかもわかっていないし、大吾をちゃんとしておけるのかも——そして、動きださせることが出来るのかも、わかってないんだ。もつとたくさんわかってからじゃないと、そんな危険な事はさせられないよ」

「完全なブーメランなんだが、お前らどう思う？」

「今回は諦めなよ、大吾。そこで涙目でふるふるしてるコが我慢してるんだからさ」

「……そうだな」

イアンが気付いているかはともかく、藍沙がイアンを好いているなど明白だ。

大吾にとつてもジュニにとつてもわかりきっている事で、けれどその藍沙がイアンを止めていけない、となれば。

「藍沙」

「……イアン君」

「僕は、大丈夫だから。今回ばかりは見守っていてくれないかな」

「……うん。わかった」

もし失敗すれば。

もしアズの情報が嘘なら。

今回ばかりは、など——その先など無いというのに。

でも、藍沙はイアンを信じる事にした。

アズを信じるイアンを信じる事にしたので。

なればもう、大吾やジュニの口を挟める余地はない。

「そろそろ行こう。……見守っていて欲しいとは言ったけど、その前に起こるだろうA

BSとの戦闘は、情けなくも助力を求めさせてもらうけど……いいかな？」

「それを情けないって思う俺達だと思ってるのか？」

「あはは、ごめん。そうだったね。……あくまで主目的は、”終わり”の停止だ。けど、まあ、僕だつて他人に死んでほしいと思ってるわけじゃない。だから、手の届く範囲くらいは助けよう」

「おうー」

彼らは決して正義の味方ではない。

だから、彼らは彼らのやり方で。

そして——彼女は彼女のやり方で。

図書館は、完全封鎖されている。

ABSが宣言を出した直後、立入禁止措置が為され、中にいた人間にも退却命令が

下ったためだ。館員も司書も利用客も素直にそれに従ったし、周辺住民も避難をした。だからここには誰もいない——はずだった。

「ん、やっぱりニンゲンっていいよねえ。危ないモノだつてわかつてるのに、日常が退屈過ぎて、こうやって——見に来ちやうんだから」

「ああ、『箱庭』の奴らはコレを未来に遺そうとしてるんだ。笑えるよな」

「うん。うんうんうんうん！ やっぱりコレはイイコトだよねえ。未来の人間達のために！ 人々の為に！ ——今ある悪性腫瘍は、ゼーんぶ殺さない」と

静かな館内で、キャピキャピとした声が響く。

テロ組織 *Abusurds* が第一位、エメト。青藍に例えられる藍い髪を振り回し、右手に持ったショットガンをくるくる回して、背中のもう二本とでジャグリングをしたり、弾薬でコイントスをしたり。

その後ろを静かに歩くのは、ABSのボス、エウリス・ビーダ。ワインレッドのスーツは図書館に余りに相応しくないが、適当に本を手に取っては中身を漁り、投げ捨てるその様はどうにも「サマになっている」と言えた。

そしてもう一人。

「溺れそうです。暑い。苦しい。だから彼らは飛んでいかなければいけません。違いますよ」

「おう。……なあエメト、今の言葉の意味、わかるか？」

「いやいや。ボスがわかんなかったらボクにもわかんないつて」

黒白の球体を周囲に浮かべる、少年のような、少女のような、あるいはそのどちらでもないかのような存在。図書館の本棚——とりわけ”状態の悪いもの”からもその黒白の粒子は溢れ出て、ソレの周囲に集まっている。

ABSの第四位、イーリス。

エメトからすればどうして連れてきたのかわからない程意思の疎通の出来ない存在。言っている言葉は理解できるけど、それが何を意味するのかが全く分からない。煽つても罵つても言葉が通じているかどうかさえ怪しいので、アリアス同様ツマンナイ存在だ。

ただし、その能力だけは——買っている。

「んじや、頼むぜイーリス。こんな扉は——」

「あ、ボクがやるよボス！ はいバーン！」

封鎖された図書館の扉が、ショットガンにより吹っ飛ばされる。

解放されたのだ。扉が。

そして——イーリスが。



波が起きた。大波だ。

怖いもの見たさで集まっていた野次馬が。その瞬間をおさえるためにと集まっていたマスコミが。

そしてそれらを押さえる警備兵たちが。

皆、こぞつて——図書館に集まり始めた。

解放された場所に。他は閉じているから、開いた場所に、我先にと群がつていく。「美しい花が咲いています。夢は破裂し、星は落ち、最後に残ったのは兎と鶏。はい。でも苦しいのです」

何事かを咄くイーリスに。

その身に——人が、人が、ヒトガヒトガヒトガヒトガ。集まってくるのだ。群がってくるのだ。あれを、あれを、あれなるものを、我が物に。我が手に。我が腕に。私のものに。私に寄越せ。寄越せ寄越せ。あれを奪え。あれは要る。あれが欲しい。あれを手にしなければならぬ。あれが必要だ。欲しい。奪え。欲しい。欲しい。欲しい。欲しい。欲しい。あれが。

「笑っていますか?」

——欲しい!

破壊された自動ドアは、強化ガラスに大きく円形の穴が開いているに過ぎない。硝子

特有の鋭利な断面はそのままだし、内側から吹き飛ばしたのだ、外側にはその破片が散乱している。

けれど、そんなことはお構いなしだ。

どれだけ狭い穴だろうと、どれだけ危険な地面だろうと——自らが、誰よりも早くソレに辿り着けるのなら、と。

「鏡の向こうには島があるのです」

欲しい!!

群がる。群がる。集まる。集う。その小さな穴に、云百、云千という人間が集まっていく。そう、最早野次馬だけではない。避難していた周辺住民まで——小さな子供や老人までもが立ち上がり、身の着のままに走り出す。走り出して、駆け付けるのだ。そこへ。図書館へ。

イーリスのいる場所へ。

「うっはあ、凄く凄く! ガラスの穴から、ニンゲンの上半身だけがひしめき合ってるよボス! なんだっけあれ、イソギンチャク? これアートとしてもいいかもねー!」

「余程欲しいんだろうよ。ま、勿論これだけに終わらねえ。それ来るぞ——第二波だ」  
欲しい。欲しい。欲しい。

ああ、欲しいのに。

前が詰まっている。前にいる。誰かがいる。誰かがいて、辿り着けない。なら。なら。なら。であるならば。ならば。それなら。だったら。

——退かせばいい。

グチャグチャという肉を引き裂く音と、獣が如き唸り声と、断末魔。それらが一齐に響き始める。

先程エメトがイソギンチャクと称した前方最前列の人間達。その頭が、首が、腕が。

千切られて、引き裂かれて——退かされていく。

——邪魔だ。邪魔だから、邪魔者は全部殺して、自分だけがアレを。

後続が、詰まっているニンゲンが、前にいるジャマモノを殺す。だって邪魔なんだ。あれを手に入れるためには、邪魔なもの排除しないといけない。

アレが欲しい。欲しい。当たり前だ。生物なら、人間なら、絶対にあれが欲しい。

「邪魔をするなア！」

それが誰の叫びだったのかはもうわからない。

だって既にそこには、あの「最悪のメイデイ」と同じく——阿鼻叫喚の地獄が形成されていたから。

死体が、血塗れになった何かが、それでもそれでもそれでもと、噛みついてまで、縋

る。諦めない。絶対にあきらめない。欲しいから、諦めない。欲しいから、邪魔なものは蹴散らしてでも。

「柔らかいですね」

誰も気づかない。

エウリスとエメト以外は、気付かない。

図書館からも、人々からも。

黒白の粒子がイーリスの元に吸い寄せられて行っている事など気付かない。気にしない、という方が正しいだろう。

最前列のダレカだったナニカが「終わった」事に等、だれも気付かない。邪魔だからと退かされた肉塊が消失している事に等、誰一人として気付かないのだ。

「そろそろ広まったか。なら、イーリス。奥へ来い。エメト」

「ん。他の入り口もぶっ壊して、入ってくる奴全部殺す、でしょ?」

「ああ、頼むぜ」

「りようか〜い!」

「青い花は好きですよ」

そう、この地獄は、まだまだ始まったばかりなのだ。

「ツゝ……みんな、大丈夫!?!」

「……ああ。一瞬、持ってかれかけたが」

「僕も大丈夫。けど、藍沙が……」

「……欲しい。欲しい。ほし——」

「必殺麻酔針!!」

その波に気付くことが出来たのは、ひとえに経験則というヤツだろう。

咄嗟に符術を展開し、全員を囲った。藍沙が間に合わなかったのは、自分程度の符術で囲うには大きすぎるからだろう。なので問答無用で眠らせる。人間、眠らせたら基本勝ちだ。

「今回ばかりはナイスって言うておくよ。ありがとうジュニ」

「任せて。……とは言ったけど、状況やばいのは変わんないっていうか、結界解けたら周りと一緒にやるよ」

「うん……これがABSの仕業であるのは間違いないけど、こういうタイプのを使ってくるっていうのは、僕の調査不足だったな……」

「後悔は後にしろ、イアン。今はどうするかを先に考えろ。ジュニの符術もそう長くは

持たんだろう」

「あと二分が限界かな！」

符術は込めたりソース量によって強度や効果時間が変わる。今回は咄嗟過ぎて簡易結界しか張れなかった。重ねがけという手段も常時なら仕えたのだろうが、周囲のリリースがほぼ完全に抑えられているこの状況ではかなり厳しいと言える。

新しい毒の配合とか芸術展の高い罫とかだけじゃなく、もうちよつと符術も勉強しておくべきだったと反省。

「……僕の異能で、みんなを停める。多分それで、対抗できると思う」

「成程。それで行くか」

「オツケー！」

「……軽すぎない？ さっき話したよね、再度動かせるかはわからない、って」

「なら、このまま周囲の奴らみたいになれというのか、イアン」

「拒否とか選択肢にないって！ てゆか早く早く！ 切れちゃうよ、結界！」

「こういう時に判断が遅いというか、こつちを気遣いすぎるのがイアンの悪い所だと思  
う。」

やるしかないなら躊躇わずにやれ。ばーかばーか。

「——わかった。大吾。ジュニ。藍沙。僕は君たちが大切だから——」 終わってほしく

ない”」

結果が解けるのがわかる。恐ろしい魔の手に耐えきれず、その壁が瓦解する。早く異能とやらをかけてよ、と文句を言おうとして——ようやく気が付いた。

「……これは」

「なに、これ」

「……僕達の想像以上に不味い状況だ、って事は確かだね」

イアンが藍沙を姫抱きにしながら、言う。

異能、「終わらせない」——転じて”停める”という異能は、確かに作用しているのだろう。いつの間にか。あるいは彼が「終わってほしくない」と呟いた時にはもうかかっていったのか。

自らに無いものであるが故にその発動速度への理解が浅い。文句は言わなくて正解だった。

と、まあそんなことよりも。

「人が……」

「誰もいない、ね。道路だけじゃない、家の中にも……心配がしない」

「——車もない。てゆーことは」

二人が図書館の方を見た、その瞬間。

巨大な爆炎が、その方向に上がった。——掻きむしるような断末魔と共に。

「ジュニ、藍沙を……って、ジュニ!？」

「大切な彼女なんだから、自分で守っとけばーか!」

走り出す。着いてくるのは、大吾。

イアンは後から来るだろう。なれば自分達の役目は——露払いだ。

最悪、私は別にどーなってもいいしね。



????????????  
現場は凄惨たる有様だった。

■赤が二つ。

血肉の赤と、爆炎の赤。

そこが図書館であつたなど、誰がわかるだろう。その周辺の家々にも多くの車が突っ込んでいたし、それに轢かれていた人間も少なくはない。

「どう、大吾。なんか見える?」

「正直者が多すぎて、俺の眼は使い物にならない」

「そつか。じゃ、ちよつと大盤振る舞いで行くから——イアンには言わないでね」

ポーチから取り出すは黄色の液体の入った試験管。色は別に付けなくても良かったのだけど、付けた方が可愛いので着色してみたヤツ。

それを——強い踏み込みと共に、図書館へ向けて投げる!

「マッチ一本——火事の元!」

取り出すのは短針。可燃性の液体に付け込んであつたそれを、爪に仕込んだストライカーに撫でさせて着火。自身や大吾がその爆炎に巻き込まれる前に射出し、宙にあつた

試験管に直撃される。

直後、大爆発。広範囲に散布される黄色い液体はすぐさま気化する。上昇し、けれど上空にて冷却された気体は。

「これ付けて」

「先に渡せ」

「ごみんごみん」

図書館の周辺に、雨となって降り注いだ。

「……麻痺毒、か？」

「ケッコーキツイ奴ね。法的にはふつーにアウトだし、直接吸引したら丸二日は痺れが取れないと思う。符術練り込んであるから耐性の無い一般人は勿論妖魔にも効きまーすー！」

「法的にもなにも、お前の使う毒は全部アウトだろ」

「てへ」

ガスマスク越しに呆れた声が聞こえる。

自身は耐性があるから問題ないものの、わざわざ味方の戦力を削ぐ事は無い、と思つてのガスマスク譲渡。もしかしたら要らなかつたかもね〜？ なんて心の中で嘯きながら、結果を見る。

「……とりあえず外にいる奴らは全員止まったな」

「そう作つたもん。あ、そろそろ外して大丈夫。残留するタイプじゃないから」

「そんな恐ろしい毒を持ち歩くな」

「こんなこともあろうかとつてね」

とりあえず、ゾンビが如く図書館に群がっていた奴らは止まった。「あがが」とか「ぐが」とか、言葉にならない音を発して、どうにか動こうとして、けれど動かない。麻痺毒、なんて。いやいや、そんなあまつちよろいものは使いませんよ私。

ケツコー危険な神経毒です。あとで解毒しないとヤバイタイプの。

「中もヤバそうだから、行こっか」

「ああ」

図書館の入り口は四つ。そのどれもが破壊されているけれど、爆炎が上がっているのは正面入り口だけだ。その他は使える——といっても肉の塊が詰まっているけど、それはまあ退かせばいい話で。

「とつげきーいー！」

「おいそれ濃硫酸じゃないだろうな」

「せいーいー！」

既に事切れた肉塊に振りかけて、溶かして。

侵入成功である。

中も大変な有様でした。

少しはマシかな、とか思ったけど、本にはべつたりと血糊が付いているし、肉片もへばりついているし、歯とか目とか、もう見るに堪えないグロテスクなものオンパレード。

丁度私と大吾がそういうのに耐性あってよかったねー、って。藍沙は平気なフリするけど、結構苦手だろうし。人死にに対してはそうでもないっばいけど。

「前方、貸出カウンター。複数の正直者が群れている」

「お、良いじゃんそのセンサー。常々思ってたんだよね、大吾のそれは熱感知とかの代替になる、って」

「そんな便利なものじゃないが——後ろだ！」

「知ってる！」

耳をつんぎく発砲音は、ショットガンのものだろう。

咄嗟に本棚の陰へと隠れた大吾と、特に隠れはしない自分。

「……あれあれあれえ〜？ おつかしいなあ、今の食らったら、上半身ぶっ飛ぶように設計してあるんだけど」

「溶かしたからね〜。私特製超超濃厚フルオロ酸！ 速化・弱化符術込み！」

「ジユニ、任せるぞ」

「あいさー！」

本棚の陰から貸出カウンターの方へ駆けて行く大吾に、振り返らず返事をする。

大吾ならまあ、大丈夫だろう。大丈夫じゃ無かつたら、それはまあ残念だけど。

「えー？ おねえさん一人がボクの相手？ ツマンナイなあ、あの子はいないの？  
オーディアの腕を奪ったって言う、”終わり”を操る男の子！」

「今は彼女といちやいちやしてるんじゃない？」

「そつかあ。ま、恋人との時間は大切だよな。もうすぐこの世界は終わっちゃうんだからさ」

一度、二度、三度。

胸を張って腰に手を当てる動作、見えていないだろう大吾にサムズアップをする動作、そして髪を後ろに流す動作の中で、三度短針を目の前の敵に投げつけた。が、全部避けられた。

「ふうん？ おねえさん、可愛いのにさ、えげつないね。外の人間やったのもおねえさん

か。酷いことするよねえ、もうちよつとで彼らも綺麗なアートのなれたのにさ、神経を侵される痛みに沈む、なんて」

「死と苦痛、どっちがいいと思う?」

「あつは! そりゃいい質問だ。なんとも選び難い。いや、いいね。ごめんね、さつきツマンナイとか言つて。君は——多分、あの四人の中で、一番面白そうだ!」

「当然! あんなフツの子達と一緒にしないでよね。だって私は——」

射出する。隣の本棚の隙間から、毒針を。

それを避けたら、その下の段から酸のスプレー。バックステップをしようものなら可燃性の気体に包まれて——。

図書館中を走る紅炎。

かろうじて無事だった書籍も、奇跡的に惨状から逃れていた本も、散らばった肉片も、全てが炎に包まれる。

「うわわつと、あつぶな——ツ!」

「暗殺者なんだから」

そしてそれを避けると——展開の早い転移術を使うだろうことも、織り込み済み。

逃げる場所が屋上、図書館外であろうことも、万が一を考えて貯水タンクの上であるうことも、爆炎の噴き出す四方の入り口を覗き込む事も、全部想像通り。

であるならば、そこに刃を置けばいい。

人体など簡単に切り裂ける刃を一つ、置けばいい。

「……オツケー。わかった。君、こっち側だ。何人殺したの？　もしかして、ボクより多いんじゃない？」

「うわ、首に刃がめり込んでてもその調子なんだ。命乞いでもしてくれたら色々聞き出せたのに」

「そりやそうさ。だって別にボクは別にしたくないわけじゃない。そもそも——」  
退く。貯水タンクの上から、屋上の端にまで。

直後。パァンと弾ける敵の身体。そういう異能か、符術か。とにかく知らない技法の身代わり。用心して——背後、足場のない中空に向けて短針を飛ばす。

「わっはあ！　凄いな、今のもわかるんだ！」

「当然でしょ。建物の端っこ。背水の陣。後ろに来ることがないってわかれば人は安心する。そんな狙いやすいトコ、狙わないはずがない」

「いいね、ホントにいい。ね、おねえさん。名前教えてよ。あ、ボクはエメトっていうんだ。ABSで第一位やってる」

「ユン。人を殺すときは、そう名乗ってる」

作り上げていた人格を剥がしていく。

テーマは「ダル絡み美人」、だっけ。あの人の言った命令の一つ。でもそれは今、いらないので。

「おっけおっけおっけー！ ユン。一度だけチャンスを上げる。ABSに入りなよ。多分君なら、第二位になれるよ。アリアスなんか蹴落として上がって来れる。君程の逸材、殺すのが勿体ないもん！」

「馬鹿言わないでよ。第一位でしょ、もし入るとしたら、だけど」

「——じゃ、やろうか。第一位の座を争って、戦おう」

「一瞬だよ。何も感じず、何も残せず、何も言えず、何も成せず——瞬く間に殺してあげる」

私は、<sup>J u n</sup>ユン。

用途は暗殺——でも、正面切って戦うというのなら。

ずっと止められていた、自死の続きを、始めよう。

「……」

「おう、上が気になるか？ ま、安心しろよ。エメトはそこまで強かねえからよ。割と簡



単にあの嬢ちゃんにやられちゃうんじゃないかな

「……その言葉の真偽はどうでもいい、が。ソレの妨害をする俺を妨害する気は無いのか」

「無いね。やる意味が無い」

ソレ。

大吾の指差すソレ。

肉塊だ。肉の塊だ。黒白の粒子が漏れる、肉の塊。

老若男女がぐちゃぐちゃに詰まった塊。

一人ずつ、一人ずつ、剥がしていく。それでも尚縫ろうとする者は、手足を踏み潰す。

「おーおー、ひでえな兄ちゃん。ソイツらはイーリスの魅了にアテられただけの一般人だぜ？」 可哀想だと思わねえのか」

「ああ、思う。心底心を痛めていてな。出来ればやめさせてくれるか」

「残念だが、そりゃ無理だな。イーリスの魅了は常時発動って奴でよ、コイツが転移なりなんなりでどっかに行くか、符術で結界張って封じ込めてやんねーとどうしようもないんだわ」

「水たまりの無い場所を歩きたいですね」

「……だ、そうだが」

「あア、イーリスの言葉はあんまり意味ねーからマトモに受けんなよ兄ちゃん」

剥がして、剥がして、剥がして。

ようやくそれが見えてきた。

黒と白に囲まれた、少女か少年かわからない容姿。これほどの肉塊に囲まれていながら、血肉の一片足りとて付着していない。どころか、それら粒子に触れた肉片が同じく粒子へと変化していつている。

「……リソース化、か？」

「似たようなもんだ。俺達は妖魔化つて呼んでる。が、妖魔はリソースの差圧で生まれるモンだからな。リソース化でもいいよ。好きに呼んでくれ」

「……コイツ、妖魔か」

「ああ。見たらわかんだろ。サキュバスとインキュバスのハーフで、双方の魅了を一身に引き継いだハイブリッドだよ。普通の人間が見ると、欲しくて欲しくてたまらなくなるんだそうだ。魅了されて、そのリソースに焦がれて、潰れて潰れて集って群がって殺し合つて、まあこの有様さ。あア、外の連中も館内の連中も、”この有様”とは言えねえ有様になつてるみたいだが」

ようやく全てを剥がし終わった。

その顔を直視しても、何も起きない。イアンのかけた”終わらせない”という異能は

しっかり働いているらしい。

その上で、見る。

「欠けた荷物は遠いですか？」

「嘘を吐くな。お前はそれを知っている」

「笑っていると思います」

「それは、その通りなのだろうな。お前にとっては……そうなのだろう」

「雨は固まりましたが、息は出来ないままでしょうか？」

「いいや。それだけではない。お前が知っている世界より——知らされている世界より、この世界は狭い」

ポト、と。

何かが落ちる音がした。

それは——煙草。咎めるように見れば、バツの悪そうな顔と共に、その煙草が踏み潰される。

「いやよ、驚くだろ。誰だつて。……わかるのか、イーリスの言葉が」

「言葉はわからん。恐らくは異国の……あるいは異世界の言葉を無理矢理に翻訳しているような印象だ。だが、言いたい事はわかる」

「……へエ。お前、心が見えるのか」

「少し違う。俺に見えるのは魂だ。<sup>コア</sup>魂の色が、俺には見える」

正直に言う。

自分だけわかっている、というのは、フェアではないから。

そして相手——ABSのボス、エウリス・ビーダが、心の底から驚いているのもわかった。

「すげえな、いや普通に。異能持ちがそんな集まるコトあるかよ。エヌにイアンに、お前。上の嬢ちゃんはなんか持ってねエのか？」

「知らん、というのが正直なところだ。何やら重い過去がありそうだが、聞いたところで何も出来ん。ならば聞かん」

「いいね、さっぱりしてる。シンプルな奴は好きだぜ、俺ア」

「海が渴きました」

「——嘘を吐くなよ、イーリス。それについては、理解できるはずだ」

「……」

「ホントに理解できてやがんな。いや、殺人能力とかどうでもいいから、普通に翻訳家として雇われねえか？ ウチに。イーリスの言葉が分かる奴なんて初めてだ、貴重過ぎる

！」

エウリスは、子供の様にはしやいで言う。

これも正直だ。この男はさつきから本当に本当の事しか言っていない。

「魅力的な提案だが断ろう。俺には守ってやりたい奴がいる」

「イアン・エンハードか？ それとも上の嬢ちゃんか？」

「どちらかといえば前者だな。ジユニは別に、一人でなんとかできるだろう」

「——じゃ、イアン・エンハードを殺せば、お前を縛り付けるものはなくなるな、兄ちゃん」

「……今の言葉の、何が嘘だ。エウリス・ビーダ」

「へエー！ すげえ！ そこまで見抜くのか！」

テロ組織のボスとして何ら間違いない、間違いなく悪者の言うようなセリフは、けれど嘘に映った。

その後の驚きに嘘はない。試されたか、あるいは本当に騙せると思っていたのか。

何が嘘だったのか。

「……イアンを殺すつもりはないのか？」

「おう、正解だ兄ちゃん。あれを殺すなんて勿体ねえことしねえよ。んで、そろそろ時間だ兄ちゃん。上の嬢ちゃん連れて逃げな。」終わる”ぜ、ここ”

その言葉に、嘘はない。

だが——。

「おいおい、これはマジだぜ？ 馬鹿野郎、お前は貴重な人材なんだから——」

「お前にも知らない事があると知れた。十分だ。邪魔をするつもりがないのなら、邪魔をするな。俺はコイツと話がしたい」

「地図が欲しいです」

俺達は「止められ」ている。

だから「終わらない」。そう、判断した。

「それは嘘だ、イーリス。お前にとつて、それは大事なものじゃない」

「一粒の涙が欠落しています」

「ああ。嘆かわしい事にな。そして——本意じゃないんだろう？」

「！」

周囲。

イーリスへと吸い込まれる黒白の粒子が増大する。

ジュニによつて焼かれた本から、死に絶えた肉塊達から——そして貸出の許されていない書籍から、あるいは、禁書の類から。

「嫌なんだろう。嫌いなんだろう。決して、お前は——誰かを傷つけないなどと、思つてはいないんだろう」

「……生きていれば、破裂した腕と腕が、いつか届きます」

「嘘だ。そんなことはないとお前自身が知っているはずだ」

「ならば雨は、止みますか。硝子よりも美しい果実を、彼らは口にします」

「ああ。……それが弔いとなるんだろう」

「うお f @ ' t ; おい r h え f 3 . k w @ d ) 4 t ? 」

「そうだ。そしてそれは、お前にしか為せない。贖罪のつもりなら、それは間違いなんだ」

「……最後に至つちや言語になつてさえないんだが、なんか納得があつたのか？」

「溜め込んだリソースを解放する。コイツはずつと、自分の魅了が嫌いだったんだ。魅了で殺してしまう事が嫌だった。けれど、殺してしまつたからには、償わなければならぬと——せめて、本来生きる事が出来ていた時間を、自分と共に生かしてやろうとしていた。だからこれほどのリソースを貯め込んでいた」

「……ただ、それは。」

「それが救いになるなんて——コイツ自身、そんなことはない、わかっていたんだ。ただ利用されているだけだ。ただリソースの貯蔵庫として使われているだけだ。だから、弔いとなるのならば。」

「世界に還してやるのが——摂理であると。ようやく、理解した。」

「……ッ、エメトオー！」

「わぁナイスポス！ 今まさに殺されそうだったんだ強制転移ありがとう!!」

簡易転移の符術。現れるは、両腕をどろどろに溶かされた青年。

「コイツを殺せ！」

「コイツ？ オツケ——」

「ちげえ、イーリスの方だ！ 早く——」

「え？」

泣いている。

涙を流している。

イーリスは、涙を流して、手を組んで——祈りを上げる。

「お母さん。お父さん。一族のみんな。私達を滅ぼしたハンターの皆さん。私が殺してしまつた数多の人々。どうか——安らかにお眠りください。今まで、申し訳ございませんでした」

そう、俺達にわかる言葉で。

その瞬間——ソレが弾けた。

「ツ、エメト、退散だ！ 巻き込まれんぞ！」

「なにがなんだかわからないけど了解！ 長距離転移陣——」

「行かせるワケないでしょ」



「ギツ!？」

どこぞより現れたジュニが、一度だつて聞いたことのない冷たい声で言う。言いながら、刺す。

エメトの心臓——それを背中から、ナイフでグサリと。

「——発動! へへ、残念だったねユン! ボクの心臓は、そんなとこにないのサ!」  
転移の光。

それは、イーリスを巻き込まず、エメトとエウリスだけに作用する。  
消える二人。

「し損なつたか……」

「ジュニ」

「ん……あ、何々? もしかしなくてもなんだけど、やばい状況だつたりする?」

「わからん」

ぱつと切り替わる彼女にも色々と思う所があるが、まずはイーリスだ。

祈りの姿勢のまま——膝を突き、その身から目に見える程のリソースを放出している。

「……死ぬつもりか?」

「はい」

「止めはしない。だが……」

「ご安心ください。私は溶けます。貴方達を巻き込むことはありません」

「そういう話をしているんじゃない。お前がここで全リソースを放つたら」

「無が私を蝕むでしょう。でも、大丈夫。『箱庭』にはなんら影響を与えません。『箱庭』の主導者にお伝えください。」 ありがとうございましたと。 貴方と出会わずに済んで、正解でしたと」

溶けていく。

まるで水が浸み込むかのように、イーリスの身体を——「終わり」が蝕んでいく。

限素が寿命を迎えたのだ。リソース化したのだ。自らそうなった者を。自らが終わりに行く者を。

大吾はしつかり、その眼で見た。

「お前の、魂は<sup>コア</sup>」

「見えますか？ 私の前が。昔が。ふふ、見なくてもいいのですよ。」 前のその前——

ああ、最後に助言を。貴方に。私を救ってくださいました貴方に、最期の言葉を伝えます。もう、身体に原型は無い。

喉や口にも「終わり」は侵食している。けれど、イーリスはにっこりと笑って言うのだ。

「この世界は終わります。それはもう、どうしようもない事実です。でも、『箱庭』になら残せるものがある。遺してください。貴方のような、素晴らしい方を。貴方のような、勇気ある心を。あの『終わり』無き幻想を——」  
そうして。

イーリスは、完全に。

この世界から消滅した。

そうして巻き起こるは——リソースの奔流だ。

さらにはエウリスの予告通り、図書館全体が、その敷地の全てが「終わって」いく。真つ白い暗闇に、真つ暗な輝きに、けれどそれが二人の身体を蝕む事は無い。「終わらせない」異能はしっかりと働いている。

「大吾！ ジュニー！」

「重役出勤だな、イアン」

「結局負ぶつてきたんだ。優柔不断過ぎじゃない？」

眠った藍沙を背負ったまま現れたイアンに、二人して茶々を入れる。

藍沙にも「終わらせない」異能はかけられているようで、イアン本人含め、変化はない。

「ごめん、時間をかけすぎちゃった。……これは、”終わり”始めてると見ていいんだよね?」

「ああ。だが、少しだけ待つてくれないか? そのリソースだけは、停めないでほしい」

「そのリソース?」

大吾とジュニの背後。

美しいリソースが、天へと上がっていく。

図書館全体の「終わり」とは違う——何百を生きた妖魔の最期。

「……そういう、指定が出来るかどうかはわからないから……大吾がそういうなら、今回は使わない事にするよ。アズ曰く、”終わり”を浴びるだけでもいいらしいから」

「そうか。助かる」

天へと昇るリソース。

それに、大吾が触れる。

「……ああ。それは、嘘じゃない。だから安心して行け。どうにか、辿り着いて見せる」

——同時。瞬間。直後。

大規模な「終わり」が図書館全体を覆った。

球形に挟り取られるようにして起きた「終わり」は——イアン達四人を地の底へ真つ逆さまに突き落とす。

突然すぎて、唐突過ぎて。誰も「嘘だろ」とか「嘘でしょ」とか「むにやむにや」とか「それは聞いてない！」とか言う暇もなく——彼らは地底に落ちていったのだった。

「あら、珍しい。帰っていたのね」  
「ブズか」

研究所内で、珍しいコに出会った。……いや珍しいというのはホントはおかしいのだけど、どうにも避けられているようで、中々会えないから——やっぱり珍しい出会いだ。

「何をしているの?」

「見てわからないか?」

「瞑想による自己分析と、己の立ち位置の見極め——とかかしら」

「見てわかるのか。本当に恐ろしいヤツだな、君は」

カムナリ。

和服を着た少女。和服といっても「今回」成立した和の国とは違い、「前回」にあったヒノモトという国の様相。

薄紫と褪せた紺色、宇宙を思わせる紺碧は、彼女の出で立ちをどこか曖昧にさせる。ヒトを相手にしているのか、そうではない——神や精霊のようなものを相手にしているのか。ま、「今回」そんなものは発生していないのだけだ。

「ちよつと、考えていた。もうすぐ来る」終わり”。私がTKに遣せるものと、残さずに隠しておくべきものを」

「包み隠さず、は……無理そう?」

「無理だね。こんな世界、TKは学ばない方が良く。彼にはもつと綺麗な世界を造つてもらいたい。ああ、そんな目で見ないでくれ。それが無理な事くらい、私にだってわかつている。少なくとも人間が発生するんだ。悪性が生まれない事なんてありえない」  
「悲観的ねえ。善性……良いコもたくさん生まれるでしょうに」

「……それでも、新しい世界には——新しい秩序があつてほしい。この世界のような、終わり”に抗えない中で、無暗に無様に争い合う世界ではなく。ただ——何か、絶対的な守護者を」

「独裁政権がお好み? 恐怖で生まれた平和は、何かのきっかけで容易に崩れるわよ」  
「だから、絶対的でなければいけないんだ」

少女は言う。その腰に携えた刀剣を引き抜いて——こちらへ向けて。  
そのまま私に、突き刺した。

「これが、絶対」

「そうね。私が”終わらない”のは絶対よ」

当然だけど、その刃が私の身体通り抜ける事は無い。めり込む事すら無い。

”今回”では発生しなかった魔導を用いて拵えられたその刀は、ワズタムの知識と符術によって、更なる強化が為されている。

その上で——恐らく世界最硬、世界最鋭と言えるだろうその切っ先でさえ、私には及ばない。

「同じことを何度も聞かせてもらおうよ、アズ。どうして君は、『箱庭』に行かない？ 君なら——絶対を手に出れるのに」

「同じことを何度も答えさせてもらうけれど、それはダメなのよ。私がいたら、無が『箱庭』に気付いてしまう。この世界が”終わった”ら、一刻も早く私は『箱庭』から離れないといけない。まあ発生するリソースの奔流で吹き飛ばされるだろうから、私自ら離れなくても問題ないでしょうけど」

「では、違う事を問うよ。君はTKを大切に想っているんだろう。なら——どうして、人格投射をしない？ レブリカントコア 模造魂にはまだ余りがある。ルールにだって」

「それもダメなのよ。私は厳密には貴女とは違う存在だから。ワズタムと私は、閉じた世界にいてはいけないの」

彼女はどこまでいっても、この世界の人間だから。

だから、『箱庭』に入っても問題は無い。

「それに、ルールは四つまでよ。それ以上はバランスを壊すわ」



命が生まれる法則。命が死ぬ法則。命が成長する法則。命が流転する法則。

それらを管理する者として、『箱庭』内に己が人格を投射する。

私とワズタムを除いた四人。それぞれにそれは渡され、TKと共に世界を造っている。勿論ただの人格投射だから、外側であるこの世界での四人は“終わる”。自らの模造品を御守り代わりにTKに付き添わせるだけだ。

「……そうだね。わかりきった問いをした。無駄な時間だったね、謝るよ」

「いいのよ。それより、折角来たならTKともっと話していったら？」

「さっきまでずっと話していたよ。それに私はこれから、バイトに行かなきゃいけないんだ」

「……バイト？ 研究所外で自由にできるだけの給金は出ていると思うけれど」

「別に、お金が欲しいということだけが働く理由ではないよ、アズ。少し——面白いバイトなんだ。とても、私に相応しいバイト。それじゃ、急ぐから」

「え、ええ。いつてらっしゃい。……やっぱりわかんないわね、年頃の女のこつて」  
その背中を見送って呟く。

バイト。アルバイト。……もうすぐ「終わる」というのに、TKとの時間を削ってまで？

いえ。いえ。よくないわアズ。そういう義務感とか使命感を背負わせるのはよく

ない。

彼女も無を過ごしたはずだけど、その間に何か成長があったとか、そういう事は無いはず。だから、あの子はまだ16歳の女の子なのよ。そう。だから、自分のやりたい事をやらせてあげるべき。

お金の為でない……やりたい仕事があつてのアルバイト、ということなら。

たとえそれが、その経験が、どこへも引き継がれないとしても、何の役にも立たないとしても。

ここは年長者として見守るべき。

「……それにしても」

さっきの抜刀。

刀を抜いた瞬間は見えた。わかった。

けど——此方へ向けて、その後は見えなかった。いつの間にか彼女が目の前にいて、突き刺されていた、というカンジ。

腕を上げた、といえいいのか。別に刀剣術のコトなんか全然わかんないから偉そうなことは言えないけど。

「どんなバイトなのかしらね、全く」

あと尖ったものをヒトに向けない事！

さて、地底である。

地の底と書いて地底である。

地上から真つ逆さまに落ちて、地底。

普通ならグチャつとなつて死んでいる高さは、それぞれがそれぞれに対処する事で事なきを得た。

「お腹減った……」

「符術の使い過ぎだな。そろそろ使用を控えておけ」

「そうするく……つてウオーイ!!」

「なんだ」

ペタリ、と座り込んだジュニの身体には、少くない切り傷がある。そのジュニを担ぐ大吾。所謂俵抱きで、とても女の子にする持ち方じゃない。

「イアンはまだ体力あるだろう。こつから先の符術は任せていいか？」

「うん、大丈夫。だけど藍沙が……」

「解毒剤はないのか、ジュニ」

「睡眠の奴は解毒とかそういうコトじゃないから無いでーす」

「ふむ。……なら、陽下も俺が持つか」

一般的に符術はその符を取り出して使う必要がある。出来る事なら両手が開いていることが望ましいのだ。ジュニは全身に仕込んだ単語帳やメモ帳を瞬時に取り出しての行使をしているようだけど、普通の人はあんな事は出来ない。当然僕にも無理。

「……頼むよ、大吾」

「ええ〜！　そこは意地でも持つっていいなよ〜！」

「いや、ここで意地張ってみんなを危険に曝したらコトじゃないか」

「……そういうことだ。よし」

言いながら大吾は藍沙を受け取る。

……ジュニを担いでいない方の手で、横抱き……未だ眠りこける藍沙をぶらーんと、まるで布団か何かを持つみたいになん

「なんだ」

「いや……いいんだけど」

僕も完全に出来ている、とは言い難いんだけどさ。

もうちよつと女の子に対する扱って、無い？

とまあ、そんなやり取りをしながら歩くこと30分。

流石にオカシイと気付く。や、5分とかの時点でも思っただけで、言いだしたくなくて言わなかったみたいなどころはある。

「ひつろ。何(なん)」

「だな。あの図書館を中心に球形の穴が開いたのだとしても、地面が平坦で30分以上歩き回れる穴であるわけがない。地下の大空洞……そんなものの存在は聞いたことがないが、そういう場所繋がったのだろう」

「……」

斜面に来たら符術を用いて地上に上がる算段だった。

けど、これは。

「……地面だって。地底だって、限素だ。この世界にあるありとあらゆるものが限素」

「おい、それは」

「あー……えー、そういうことー？」

暗闇は広がっている。逐一周囲を照らす符術を放っているけれど、地面以外のどこにも光が反射しない。それだけの大空洞だ。音の跳ね返りもない。

「ここには何も無い。」

「世界は——私達が思っている以上に、”終わっている”」

「藍沙?」

大吾に持たれている藍沙が、言葉を発した。

むにやむにや言いながら、目をこすりながら。

「ふわあ……あ、もう大丈夫、歩けるよ。ありがとう、大吾くん」

「ああ」

「……」

大きなあくびを一つ。

その後、ゆっくりと降ろされた藍沙は、しっかりと自分の足で立って——僕を見た。

「えーと、イアンくん」

「うん。大丈夫? 藍沙」

「大丈夫? あー、えーと、眠くはないよ?」

「いや、身体だよ。一瞬とはいえあのリソースに晒されてたし、ジュニの毒も食らったわけだし」

「毒って。ただの睡眠剤じゃーん」

「毒でしょ」

自分の手を見て、自分の足を見て、にっこりと笑って。

「だいじょーぶ!」

「なら良かった」

明るく元気に。いつも通りに。

「……えーと？　で、どうするの。こつから。転移術でも使う？」

「距離の計測が出来ていない状態での転移術は危険だ。それに、上に何かあるかもわからないしね」

「じゃあ戻る？」

「……それもあんまり意味はないと思ってる。気付いてたと思うけど、僕達は真つ直ぐ真つ逆さまに落ちた。だっていうのにあそこには光が無かった。……どれだけ深い穴を掘れば、太陽の光を届かない場所を作れると思う？」

「そんな場所はあり得ん。何かで塞がれているか、そもそも夜になっている、ということでもない限りは無理だ。少なくとも縦穴——俺達は真つ直ぐに降りたはずだからな」

「うん。だからここは、単なる地底、ってわけじゃないんだと思う」

黒い革手袋を外す。

骨だけの手。キシキシと勝手に動くソレは、いつも通り黒白の粒子を纏っている。それを前に突き出す。突き出すというか、差し出す、というか。

反応は如実だった。

暗闇の全てが、何かを嫌がるように撓む。歪み、揺れ、波打ち——眩い暗闇に、真つ

暗な輝きが変わっていく。

「……………これは」

「ね、藍沙。せつめーしてよ。この世界は私達が思っている以上に終わってるって、さっきの言葉をさ」

担当がれたままのジュニが、少しだけ冷たい声で言う。

いつもの彼女と違う。言葉にするなら、気が立っている、というべきか。

「でもジュニちゃんもわかってるよね？ ココがどこなのか」

「……」

「イアンくんも、大吾くんも。もう気付いてるはず。それでも説明してほしいっていうのなら言うけど」

「うん。お願いするよ、藍沙」

大吾からのアイコンタクトを貰わなかったって、ジュニからのヒントを貰わなかったって。

大丈夫、気付いている。藍沙がどこかオカシイ、なんてことくらい、気付いている。でも今は情報が欲しいから。

「ここはリソースの掃き溜め。寿命を迎えた限素が世界に還るために集まる場所。リソースの墓場。あるいは——地獄」



「……」

「そして、元よりあったリソースに、新たなリソースが入ってくれば、当然のように差圧が生まれる。リソースの差が何になるか、なんて、流星にわかるよね」

「うん。そしてキミがそれであることもわかるよ」

「あは。ごめんごめん、ちよつと憑りつきやすい精神してたから、乗っ取っちゃった。あ、でも大丈夫。宿主の精神が死ぬとか、おかしくなるとか、そういう事は無いから。ここに居る間だけ間借りさせてもらうってだけだから」

軽く、言う。

なんでもないことであるかのように。

事実なんでもないのだろう。彼女にとっては。だって、ここは。

「ここは地底。ここは地獄。ここは冥府。そしてここは——妖魔の巣」

自らの手によって「終わっていく」暗闇。苦しむように、逃れるように。けれど隙間が無くて押し戻されて、「終わっていく」。リソースの差圧である妖魔を「終わらせる」なんてありえないと、つい先ほど話題に出したばかりだ。

けれど、やっぱりこうやって。

妖魔は——「終わり」に侵され、「終わっていく」。

「正式名称を D ∴ S ∴ M。Do. m. t. h. e. r. e. f. o. r. e. S. t. a. y. b. e. c. a. u. s. e. M. y. s. t. e. r. i. e. s.。 ” 今

「前回こそは妖魔と称された私達だけど、”前回”は精霊だったし、”前のその前”は妖精だった。”死神”だったこともあったね」

「ここがどういう場所か、は大体わかった。で、ここを出る手段はあるのか」

「勿論。本来ここは君達がいて良い場所じゃないし。ここに来ることが出来たのは、膨大な量の妖魔のリソースに触れていたからだろうね」

「……イーリスか」

「で、私はこの案内人。時たまここに落ちてくる限素生物を、元の限素世界に戻す役目を担ってる」

骨の手を革手袋にしまう。

先程からチラチラと藍沙が……藍沙を乗っ取った何者かが見ていたから。

「しまつてくれてありがとー！ それがあるとき、私達は差圧を失っちゃうんだよね。リソースの差圧で生まれるのが私達だから、平坦にされたら単なるリソースに戻るしかなくなっちゃう。怖いんだよ、自分が消える、つて」

「妖魔に恐怖なんて感情があったのか」

「あるよ。恐怖はとっても大きい感情だもの」

腰に手を当てて、頬を膨らませて。

怒ったように。

「妖魔の事情なんかどうでもいい。とりあえず、お前の名はなんだ？ お前を藍沙と呼ぶことは出来ない」

「名前？ ……あー。えーと。 ……うーん」

「無いのか？」

「あるけど、上塗りされちゃうから、無いのと同じ、っていうか。とりあえず今の名前はイーリスだよ」

「……」

「ま、好きに呼んでよ。前にここにきた限素生物は、私の事を案内人とだけしか呼ばなかったよ」

「じゃあ、僕らもそれに倣わせてもらおう。案内人。僕達を出口へ連れて行ってくれ」

「うん。そのつもり。じゃ、ついてきて〜！」

明るく元気に歩き出す藍沙。いいや、案内人。

大吾と軽く目を合わせて——歩き出す。

彼女の姿を見失わないように。

そして、周囲にいるナニカから、決して気を逸らさないように。

「私がいる限り襲ってこないから大丈夫だつて〜」

「……ま、気にしないでよ。僕らが勝手にする事だから」

妖魔の巣。

もしそれが一斉に襲ってきたら。

……奥の手は最後まで取っておくべき、だよね。

紅のアীগ。

図書館及びその全域で起きた殺戮シヨウに付けられた名前だ。最悪のメイデイに続き、ABSの起こした事件の中でもトップクラスの死者数を誇る。

そしてあれだけの騒ぎ——あれだけの混乱だったにも関わらず、ABSはしっかりと被害者たちのリストを出してきた。周辺域にいた住民はほぼ全滅。学生だろうが社会人だろうが、老若男女関係なくあの血みどろのシヨウに巻き込まれ——「終わった」。

ギリギリその「終わり」から逃れた者達も、致死性一步手前レベルの毒を吸引しており、向こうひと月は病院生活だろう。その解毒剤を作り得る……作り得た国がもう「終わって」しまっているのも悪い事実だった。

野次馬も避難民もマスコミも、その全てが巻き込まれた。

その事実は人々に恐怖を与えるのに十分だったらしい。図書館だけの話だと考えて

いた浮かれた者達が、それに近づいただけで、その周囲にいただけで、対象者として扱われる——など。

「マスター、準備出来ました」

「ん、ありがと。どう？ 着心地は」

「問題ないです。……その、良いんでしょうか。私は……」

「ああ、いいのいいの。貴女は私を買ったんだから、もう気にしなくていいのよ」

「……わかりました」

イアン君に引き渡された堕ちた女性。

DV夫を殺し、それを相談した親友——親友だと思っていた女性までもを殺した女の  
コ。親友だと思っていたコは、彼女の話を聞いた瞬間に通報しようとしたそうさ。自首  
すべきだ、とかは言わないで、通報を——助けて、と。そう言おうとしたそうさ。  
だから殺したと。

イアン君がそんな彼女の身柄を引き取っていたのは、自暴自棄になって大橋の上から  
身を投げようとしていた彼女をたまたま見つけたから。「アズへの対価に丁度いいな」  
と思つて確保し、眠らせたとかなんとか。

私、他人のこととやかく言える程立派じゃないけど、イアン君も相当よね。

「にしても、紅のアーグ……。そしてイーリスの消失、か」

ビーダから齎された情報。

ABSの第四位、インキュバスとサキュバスのハーフであるイリスという妖魔が消えたという話。異国の、あるいは異界の言葉を操る妖魔だったらしい。無理矢理翻訳しているから意味が分からないだけだ、と。イアン君のお友達の、大吾・ウエイン君から教えてもらったのだと。

図書館全体と死者たちの「終わり」よりも、イリス単体から放たれたリソースの方が多かつたらしい。ざっと500年分を貯め込んでいたから、らしいけれど、多分それだけじゃないのだろうな、という所感。

リソースには様々な種類があるけれど、感動や感謝、そして祝福というのはそれなりの規模を生む。愛情は憎悪や恐怖に勝るのよね。

だから、多分。

そのコは。イリスは。自分の言葉を理解してくれた大吾君に、自分の贖いを聞き届けてくれた大吾君に、心より感謝して——だからリソースが増えたのでしょうか。その辺の理解がまだまだ浅いのは、ビーダならではの、かしら。

「魂を見る眼。恐らくは淨眼の類。……さて、ウエイン姓でそんな聖人がいたかしら」

異能にも結構な種類がある。

両親が云々だったから子にこれが宿った、とか。突然発現した、とか。何か研鑽や鍛

鍊の果てに身に着けた、だとか。

まあ他の人が同じことをしても身に尽きはしないのだけど、無によって選出される異能持ちは、基本的になんらかの善行を積んでいるか、これから善行を積むことが多い。善行。無にとつての善行。つまるところ——大きな感情を持つ者、よね。

コアの総量は増減しない。それはどの世界にあつても、どの時代にあつても変わらぬ純然たる法則だ。

けど、リソースは変わる。感情とは際限ないモノだから、リソース量は増減する。無にとつてはリソースが大いに越したことは無い。故にリソースを多く吐き出したものは、世界を多く変えた者は、善なる者として扱われる。

そのご褒美が、異能。

ご褒美……いや、監視カメラかしら。ま、どっちでもいいけど。

それで、コアを見る眼。

それで出来るのは、見たモノのリソースを増幅させる事だろう。なら、大吾君は妖魔と数多くの接点を持つはず。妖魔と出会い、妖魔と言葉を交わす事で、そのリソースを……本来であれば何の役にも立たない”自我を持ったリソース”なんていう塵芥を、有益なモノに変化させる。

勿論限素生物にしてもそれは同じ。心を見るのだから、見抜かれた限素生物はなんら

かのアクションを起こすだろう。そうして増幅していくリソースは、やがて世界を膨らませて行く。それこそが無の目的だし、それこそが「終わり」の……世界が「終わり」と「再生」を繰り返し続ける理由のただけだ。

なの、だけだ。

「ちよつと詰め込み過ぎよね、最近。イアン君も大吾君も、多分、まだ未発現だけど藍沙ちゃんも。異能……この世界に、どれだけ期待しているのか知らないけど」

私達の『箱庭』に手を出すというのなら、容赦はしないわよ、無。

なんて、お空に向かって啖呵を切ったはいいものの、特に返事が来る、とかは無。無に意思とかなしい。目的はあれど自己はないし。

……気になるのは、イアン君一行が「終わり」に巻き込まれた、という報告。死んではいない事は確かだし、「終わっていない」のは彼の異能からしてもわかることだけど……その後の行方がわからないそうさ。

球形に挟られた地の底にも、事なきを得た周辺の住宅街にも、彼の大学にも——いない。

紅のアーグから既に一週間が経過している。

それでも尚、となると、流石に心配になってくるというか。



ビーダも心配していた。大吾君を。あと多分藍沙ちゃんを。前者ははしやぎながら、後者は言葉にも出さず。

蒔菜さんがどうしているかも気になるし……ああ、もう。私まであのコ達の事で気を揉むなんて、どうかしてるわ。

どうせ最後にはみんな消える、っていうのに。

ドアベルが鳴る。

「あら、お客さん……って」

「久しぶりだな、アズラエル」

「いや私そんな怖い天使じゃないけど」

「冗談だ、アズ。……どうだろう、僕の冗談は上達したか？」

「100点よ。10億点満点中」

「及第点だな」

「どこがよ」

また珍しいお客さんが来た。

ステレオタイプ、といえいいのか。七三眼鏡で、ノートPCを片手に持った、グレーのスーツを纏う青年。

「久しぶりね、ウラナガ」

「ああ。久しぶりだ。僕が君を殺し損ねた時以来だな」

Absurdusが第三位、ウラナガ。

ABSにおいては最年少……あ、エヌちゃんを除いて……の19歳。まだ大学生の彼が、そこにいた。

「何、少々事情が込み入っていてね。立て込んでいる、と言い換えてもいい。僕とて不本意の来訪なんだ、アルコールの類は遠慮させてもらおう」

「へえ、なんでもスケジュール人間の貴方にも、想定外の事はあるのね」

「最近是想定外尽くめでね。このようにノートPCを持つてはいるが、電源の入らないガラクタ……つまりポーズさ」

「それは知っているけれど」

七三眼鏡は計画的殺人の権化というか、綿密な計画と悪辣な策略を以て人類を殺しかかるプロフェッショナル。やることなす事派手も派手、目立ちたがりのエメトとは似ても似つかぬ性格でありながら、おかしなことに殺した人数や標的の惨状は似るので、同族嫌悪なのだろう二人は犬猿の仲。……らしい。オーディア談。

彼は基本、無駄な行動をしない。それは嘘ね。無駄なガラクタを持ち歩いているくらいには嘘。

でも何か意味がある。その行動には、必ず意味が付随がする。

「単刀直入に聞こう。アズ、イアン達の行方を知らないか？」

「知らないわ。何、知り合いだったの？」

「大学の後輩だよ。サークルまで同じの、ね」

「それは驚き」

彼にも表の名前があるのだろう。ABSのウラナガは有名だから、平凡で結びつかない名前が。

そんなことよりも、もつと驚きなのは。

「貴方に後輩を想う気持ちとかあったのね」

「君は僕をとてつもなく非人間的な奴だと思っっているらしい」

「違うの？」

「違うね。僕は必要な殺ししかしないよ、アズ」

必要な殺し。

さてはて、誰にとって必要か、なんて。

「まあ、良い。知らないなら用はない」

「ちよつと待ちなさいよ。折角だから、情報交換でもしていかない？」

「僕にとって必要な情報を持っていない君と、何の情報交換をする、というんだい？」

「——貴方の妹さんについて、とか」

「……」

ウラナガが殺人者になった理由は至極単純——復讐だ。

妹を目の前で殺されている。下手人についてわかっているのは、恐らくこの国の人間である、ということと、男性である、という事だけ。目的は全く違えど、女性限定のシリアルキラーがアリアスで、男性限定の殺人者がウラナガだ。

妹を殺したのが誰なのかわからないから、この国の男全てを標的に復讐を行う——なんて。

見た目紳士的だけど、とつても、ちゃあんと、狂っている男のコ。

「いいだろう。それで、僕から奪う情報はなんだ、アズ」

「奪うなんて人間きの悪い。ま、カンタンよ。教えて欲しいのは、」

「エヌについて、であればダメだ。ボスから口止めされている」

「……いやねえ、そんなこと聞かないわよ。えーと、あー。そう。うん。聞きたいのは……ああ、そうね。どうしてイアン君達の行方が気になつているのか、かしらね」

「さつき言つただろう。大学の後輩だから、だ」

「違うでしょう？ イアン君はこの国の人間ではないから外すにしても——大吾君はそうなもの。貴方にとつて殺すべき相手。その安否を気にする理由を教えてください」

ウラナガは復讐者だ。だけど、別に自らが絶対に手を下したい、というわけじゃない。

死ぬなら死ねばいい。勝手に死ねばいい。他のメンバーの殺戮に巻き込まれでもして、勝手に死んでくれていい。そういうタイプだ。

「勝手に死なれては困るからだ」

「……それは」

「ウエイン。ウエイン姓。……ようやく掴み得た。妹を殺した男の名。掴み得た、というのは語弊があるな。思い出した、という方が正しい。思い出したくもないトラウマ——妹の死に際に、妹を殺した奴と、その仲間であろう奴がいた。そいつが確かに呼んだ。呼んでいたんだ。”そんなガキは放っておけ、ウエイン”、と」

「貴方、そんなに物覚え悪かったかしら。殺害されて”終わった”被害者全員のリストを出せるくらいの記憶力をしているのに」

「トラウマだったんだ。思い出すのには苦労した。……だが、あの少女。エヌに……いや、いい」

「ああ、なるほど！ 重ねちゃったのねえ、妹さんと！」

成程成程、確かに年の頃は近い。

近いというか全く同じ可能性がある。三歳差。そんな子がいきなり殺人集団の組織に入ってきて、一ヶ月も二か月も一緒に過ごしたら——よぎるのだろう、悪夢が。あの時の、忘れたかった悪夢、という奴が。

「……こちらは払ったぞ。そちらの情報を寄越せ。アズ、妹について何を知っている？  
何を掴んだ？」

「その前に、一つ確認したいのよね。ウラナガ、既に”終わった”西区について、貴方は知っていたかしら」

「符術協会の実験場のことか？ ああ、知っていた。悪趣味極まりない人体実験の場だろう。人間を魂のまま限世に引き留め、る、な……ど」

顎に指を当てて、一瞬顔を伏せて。

そして何も言わずに踵を返すウラナガ。

「ああ、待ちなさい待ちなさい。その顔は”クソ共め今すぐに殺戮してやる”ってカンジだと思うけど、もうちょっとだけ待ちなさい。それは後でも良いから」

「……わかった。確かに僕らしくない感情的な行動だった。……教えてくれ、アズ。妹の魂は、どこにある。なんに使われている？」

そう。

私がウラナガに渡す情報とは、それ。

西区を潰すときに、少しだけ気になって情報を集めた。符術協会の実験について、詳しく。

まあ出るわ出るわの汚職事件だったのだけど、そんなのに義憤を燃やす性格ではない

ので放置。その中に、一つだけ気になるものがあった。

書類には——『妖魔の完全制御についての報告』と。

「符術協会は、本来リソースに触れたら限素を生み出すコアを、その状態のままに保存する術を有していた。ま、その手段は原始的……限素の壁でコアを覆ってしまおう、というものだけど、それにしたってあそこまで密集した怨念というリソースが妖魔化しないのはオカシイのよ。だからもう一つ、符術協会は編み出していたの。いえ——完成させていた、というべきかしらね」

「……限素の檻無しに、リソースの最中にあってもコアをコアのままにしておく技術か」「そ。彼らはその技術についてこう呼んでいたわ——『<sup>クリフア</sup>悪魔化』と」

「<sup>クリフア</sup>悪魔……」

限素を有さず、コアとリソースだけで限世を揺蕩う怪物。

”今回”ではない世界において、”今回”の妖魔……つまりリソースの差圧が悪魔と呼ばれたことはあった。けれどそれらプロセスとは全く違う段階を経て行われる——高次存在への昇華。

幽霊というのはコアだけの存在だ。だから、弱い。記憶を維持しているから他のコアよりかは強いけれど、やっぱり弱い。自らから溢れ出る怨念や情念で可視化まで持つていく事は出来ても、基本限素への干渉なんて出来ない。弱いから。



それに対し、妖魔は可能だ。限素構造物へも、限素生物へも攻撃が可能。干渉が可能。ただしコアを持っていないが為に本当の自我と呼べるものは存在せず、趣味嗜好はあれど同一目的によって動く。

「……記憶を維持した魂<sup>コア</sup>。リソースに触れても限素を生まず——恐らくは、操り得る存在」

「ま、そこは多分まだ実験中なのでしようね。その技術……悪魔を造る技術。西区でもそれが行われようとしていた。ま、”終わっちゃった”けど」

「ふん、自然の摂理に抗ったんだ。神の怒りとやりに触れたのだろう。それで、早く言え、アズ。僕の気はそこまで長く持たないぞ」

「はいはい。……貴方の妹さん。リリー・多良戸、という名で合っているわよね？」

「間違いない」

「じゃ、こつちも間違いないわ。貴方の妹さんは今、符術協会が作りあげた異相空間にいるわ。そこにはありつたけのリソースが溜め込まれている。多分、本来世界に還元されるはずだった分もどこかから掠め取っているはず」

「異相か。行く手段は？」

「無い……と言いたい所だけど、符術協会のこの計画の最終目標は、私にとって邪魔だから、手を貸してあげる」

私達が勧めている『箱庭計画』。その概要は、限素を用いない世界と模造魂を「終わり」で包み込んで、「終わり」から逃がす、というもの。「終わり」は「終わり」には干渉できない。けれどリソースは「終わり」に干渉出来る。

もし。

もしも、その悪魔クリフアとやらが完成してしまった場合。

TKの管理する『箱庭』に、「世界の終わり」からさえも逃れたナニカが混入してしまう可能性がある。

それはあつてはいけないことだ。

それはあつてはならないことだ。

符術協会。どうせ全て「終わる」のだからと放置していたけれど、潰す必要が出てきてしまった。

「頼む。妹が生きていて……いや、生きてはいないか。でも、たとえ幽霊となつてしまっているのだとしても、悪魔となつてしまっているのだとしても、誰かに良い様に使われている、なんて……考えるだけで腸が煮えくり返る。どうか僕を、妹の所へ連れて行って欲しい」

「——対価を」

「コレでいいか？」

「ええ、いいわよ」

元より、こちらから手を貸す、と言っているのだ。

その電源の入らないノートPCでも、十分な対価になる。

「じゃ、今から行うのは、というか、起こる現象すべて。オフレコでお願いね」

「……」

左の掌に右の拳を強く当てる、

その拳を、少しずつ少しずつ、反時計回りに回転させていく。

これより行うは魔導——事象の改変に特化した符術でも、限素の改変に特化した錬金術でもなく、世界の改変に特化した、世界を造り変える技術。

「もう一つだけ、大サービス。ヒントをあげるわ」

「何?」

「ウェイン姓。私も調べただけど、それはこの国の昔……未だ戦争をしていた時代において、特別な功績を残した人間に与えられる勲章のようなものだった」

ガチン、と。

まるで鍵穴に鍵を通すかのように。それを回し切ったかのように。

何か硬質な音が響く。

「勲章……」

「——命を繋ぐ者。多くを助け、多くを癒し、多くを——護つた者」

今度は時計回りに拳を回す。

現れる食歪み。ウラナガの周囲を、円形状に、球形に切り取るようにして、世界が波打っていく。

それは大きな金庫の扉のように、ずず、ずず、と凹んでいき——ああ、漏れ出でるはなんたる密度か。

「ちゃんと思ひ出してね、ウラナガ。貴方が殺すべきは——貴方の復讐対象は、本当は誰なのか」

「待て、知っているのか、アズ——ソイツを、誰なのかを！」

「その情報は、こんなチャチなものじゃあ与えられないわ〜♪」

そうして、外れた。

ウラナガが背を預けていた大気が外れた。外れて、落ちて行く。落ちて行くのだ。

こことは異なる位相。似て非なる場所。本当はもともともと、彼らの想定している何千倍も——「終わっている」世界に。

いつてらっしやい。良いユメを。

「……長いな。案内人、まだ着かないのか？」

「んー、もうちよつとなんだけどねー。あ、限素生物ってそつか、疲労って概念があるんだっけ？」

「ああ……そうか、妖魔には無いから」

「うん。どんだけ長く移動してもへつちやらだよー」

暗闇を行く。

暗黒を行く。

案内人に連れられて、その背中だけを頼りに歩いていく。

もう明かりの符術は使っていない。リソースの無駄だから。大吾に担がれたジユニは眠っている。お腹が空いたらしい。ジユニを担ぐ大吾は何の言葉も発さないまま、疲れた様子もなく歩き続けている。

「……なあ、ちよつとアンタの話を聞かせてくれよ」

「んー？ いいよ、ちよつとだけねー」

「アンタは、どれくらいここにいるんだ？ ああいや、妖魔だから……いつくらいに発生したのか覚えてるのか？」

「そんなに長くはないよ。十数年くらい。こんなはつきりとした自我を持ったのは、

もっと最近かなー」

「そ、つか。……アンタは……僕達を、限素生物をどう思ってるんだ？ 妖魔は……」

「他の妖魔と私と一緒にしないで欲しい、ってゆーのはおいといて、限素生物をどう思ってるか、かあ。んー。むー。まあ——気持ち悪いなあ、くらいじゃない？」

「そ、それはまた、どうして？」

「感覚の話だから難しいんだけどね。私はホラ、見ての通り限素なんてもってないわけですよ。あ、今はこのコに入ってるから別だけど、普段はこのリソースの海に揺蕩ってるだけなのよね」

藍沙の身体で、藍沙の顔で。

頬をんにーいと引っ張ったり、びよんびよん跳ねたりする案内人。

気持ち悪い、という割に、限素の身体を楽しんでいるように見える。

「……アンタは一応、元人間、なのか？」

「どーしてそう思うの？」

「いや、肉体を持たない妖魔がいきなり人間の五体を満足に操れるとは思えなかっただけだよ」

「ふうん？ ま、正解だけど。私は元人間だよ。こわいこわい男の人達に殺されちゃった、可哀想で可哀想な人間の女のこ」

「それがどうして妖魔に？」

「捕獲されちゃったんだなくこれが。うーん、迂闊迂闊。ちよつと未練あるし、もうちよつとこの場に留まってようかな、とか思ってたのが運の尽き。今度はこわいこわいおいおじいさんの集団に符術で雁字搦めにされて意識を失って、気付いたら虫かごの中！」

あ、鳥かごかも？」

「……それは、災難だったな」

「ねー」

その時、周囲のリソースが大きく撓んだ。

波打った、といつてもいいだろう。まるで大蛇がのたうち回るかのように、暗黒のリソースが揺れ踊る。

「今のは？」

「多分、誰かが入って来たね。正規の手段じゃない方法……ううん、ある意味本来の手段で、壁をこじ開けてきた。怖いね、”今回”に魔導士がいるなんて思ってたけど」

「魔導士……？」

「あ、いや、こつちの話ー」

撓みは、波は、どんどん大きくなる。……その入って来た何かが、近づいてきている、という事だろうか。

「俺も一つ、良いか。案内人」

「ん、いいよ。何でも聞いて?」

「お前がさつき言った、”世界は俺達が思っているよりも終わっている” という言葉に ついてだ」

「え、言った通りだけど。さつきは騙せるかなーと思つて私達、つて言ったけど、改めて 言うよ。世界は君たちが思つてる百億万倍くらい”終わつてる”。今、さつき話に出したこわいこわーいおじいさんの集団や、あるいは世界各国の研究機関が”終わり”に 対してどうにかこうにか対抗策を編みだそうとしているけど、そんなの無駄無駄。この世 界は”終わる”よ。確実に”終わる”。どうしようもなく”終わる”。誰も何も残せ ずに”終わる”。——あと、60日くらいかな?」

「——!」

二か月で、世界が「終わる」?

そんな早いなんて聞いていない。そんなの、受け入れられない。

「別の大陸。海の底。地の底。隣の家の住民。大気の一部。北の方で使われていた言 語。西の方にあつた建築様式。医療。天文学。死者を悼むという常識。死は忌避され べきものであるという良識。取り戻さなければならぬモノ。——得られるはず だった、時間」



案内人は、言う。

限素物質だけじゃない。概念的なものまでもを挙げて言う。中には知らないものもあつた。

「ぜんぶ、”終わってる”。ねね、戦争を起こした二つの国。大国と小国。その名前、思い出せる？」

「……いや。無理だな。その記憶は、知識は……俺の中から消失している」

「理解が早いね。そだよ、大吾くん。”終わった”モノは、覚えようとしていないと、消えちゃうんだ。ね、イアン君は覚えている？ 北区にあつた商店街。どんなお店があつたか覚えている？」

「覚えてない。言われて記憶を浚つてみたけど、何も覚えていない」

「私は覚えてるよん。大国がルビス。小国がテムド」

「わ、凄いなジュニちゃん。余程意識していないと忘れちゃうはずなんだけど」

いつの間にか起きていたらしいジュニがその単語を発せども、それがそうであると思えない。

僕の中から、歴史としてそういう事があつた、という事実は残れども、その二つの国についてのすべては消え去ってしまっているらしい。

また暗闇が跳ねた。

「あ、そろそろだよ。出口も——闖入者も」

「リリー!!」

その声は。

見知った、毎日の様に聞いていた声は——空から降ってきた。

多良戸先輩。

一つ上の、一緒のサークルの先輩。真面目でクールで頼りになる先輩。

「大吾、降ろして」

「ああ」

降ってきた先輩は符術だろう何かで衝撃を緩和し、この地に降り立った。

先輩が符術の免許を持っている、という話は聞いたことがない。

何より——大吾とジュニが、彼に対して臨戦態勢を取ったのが。

「リリー、どこだ。リリー! いるんだろう!」

「あ、お兄ちゃん。凄いい、久しぶり。よくここがわかったね?」

「——陽下の肉体に憑依しているのか」

理解が早い。

リリー。それが案内人の本来の名前か。そして、お兄ちゃん、と来た。

「( )は……成程、符術協会の異相。凄まじい密度のリソース。怨嗟の温床。リリー、早

くここを出よう。悪魔化とやらのために、お前が使われて良いはずがない」  
「クリファア？」

「お兄ちゃん、らしくないよ。そんな感情的になつてさ」

「う、ああ……すまない。けど、感情的にもなるだろう。ずっと、ずっと！ ずっとお前のためにやってきたんだ。また会えるなんて、そんなこと欠片も思っていなかった！  
ずっとずっと！ ずっと会いたかった！」

案内人の言う通り、こんなに感情的になつている先輩は初めて見る。

けど、気付いているのだろうか。先輩は。

苦々しく笑う案内人と、多良戸先輩の周囲に——あまりにも濃密なりソースが集つてきていることに。

「多良戸、先輩」

「——イアンか。それに、全員いるな。ああ、まあ、それはいい。それさえも今はどうでもいい。それよりもリリー、早くここから出よう。ここは危険だ。ここは——」

「危険なんて何も無いよ、お兄ちゃん。それより、離して欲しいな、手。限素生物に触られたくないからさ」

「リ、リリー……？」

苦笑いから——嫌悪感に。

拒絶だ。それも、極度の。

「イアン、下がれ！」

咄嗟に反応できたのは、大吾の声が存外近くにあったからだ。

いいや。

案内人と先輩が——いつの間にか、遠くにいたからだ。

「こわいこわいおじいさん達はさ、私をどうにかこうにか制御しようとしてたみたいなんだよね。私と言う——成功例しゅっけいれいを。ま、まさかとも思わなかったんだろうね。あは——テストとして使ったどうでもいいコアが、想定以上の記憶を有していた、なんてさ。本当は自分達を使う予定だったリソースの、この空間に溜められていたあらゆるリソースの、妖魔の！ 全てを！」

藍沙から、何かが抜け出でる。

咄嗟の行動だろう、その体は多良戸先輩が抱き留めてくれた。

「多良戸先輩！」

「……遅かった、ということか」

周囲の暗黒が渦巻いていく。

藍沙から抜け出た何かに。僕には見えないけれど、おそらくは——コアに。

「イアン。一時休戦だ」

彼女を抱えたままこっちにまで下がってくる多良戸先輩。

そのまま意識の無い藍沙の身体を無造作に渡してきて——、って、つとと。

「一時休戦？」

「なんだ、まだ気付いていないのか。相変わらずだな。身内認定した奴には勘の鈍くなるその性質、とつとと改善した方が良いぞ」

「何を——」

スーツの内側に手を差し込み——取り出したるは、大口径のリボルバー。

それを、二丁。

「改めて名乗らせてもらおう。Absurdusが第三位、ウラナガ。得物は拳銃、得意分野は策略策謀の類だが、そう言っていられる状況でもないだろう。状況が飲み込めない半端者は捨て置く。他の二人は問題ないな？」

「ああ。——事情の全てを理解した上で、俺も名乗らせてもらう。俺は大吾・ウエインだ。この場では一時休戦、でいいな？」

「ふん。ああ、構わない。しがらみ程度に囚われて足元を掬われるなど御免被る。そっちのアサシンは？」

「もう攻撃してるケド？」

「頼もしいな！」

発砲。音の反響しないこの空間でも耳をふさぎたくなくなるほどの轟音が、二つ。否、次々に鳴り響いていく。

狙いは黒。黒い靄。

「大吾、弱点どこ!」

「待て——今探している」

ジュニの薬品は妖魔にはほとんど意味を成さない。だから符術で対応するしかないけれど、既にガス欠のジュニにあまり無理はさせられない。

「ジュニ! 藍沙を頼んでもいい!?!」

「私に——……いや、オツケー! 適材適所ね!」

瞬足で僕の元に来たジュニに、藍沙を引き渡す。そのまま後方の暗がりへと消えて行くジュニを見送りつつ、また、前を見る。

いた。

そこにいた。

鋭く長い爪。六指。腕には無数の触手が生えていて、それらが両対二本ずつ。

胴体には黒が。尾だろうか、節足動物を思わせる鎧が如き蛇腹には、黒白の粒子が絶えず吸い込まれて行っている。

けど、何よりも異彩を放つのは、その顔だろう。

タコ、だろうか。イカ、だろうか。軟体動物の目であることはわかる。ただ、それが、無数に。複眼。複眼だ。この暗黒の中にあつて光輝く昏沌が、渦巻く妖魔を靡いていて尚わかるその朱眼が、強く強く僕らを睨みつけている。

妖魔、じゃない。

「悪魔、だそうだ。符術協会の老害共が作り上げた、”終わり”への対抗手段が成功例<sup>失敗作</sup>。魂を核とし、確固たる自我を以て妖魔が身を揮う紛う方なき化け物」

「……いいんですか」

「何がだ。もし、問うているのが——妹に二度も死を味合わせることになつても、などというくだらない質問であれば、俺は真つ先にお前の頭蓋を吹き飛ばすが」

「違いますよ。そうじゃなくて」

悪魔。悪魔。悪魔。

なるほど。名の通りだ。これほど恐ろしい存在は他にいまい。今まで相手にしてきた妖魔など、塵芥に等しいと言える。今まで相手にしてきたABSの面々さえ——あのアリアスでさえ、これには及ばない。

悪魔。クリファ。

「妹さんのトドメを、僕が奪っちゃつていいんですか、つて。聞いてるんです」

「ハ——」

笑う。先輩は。

否——殺人者ウラナガは。

「言葉には気を付ける事だ、後輩。命を奪うことに関して、俺の方が万歩も先を行く」  
ガコという音と共に、ソレが外れる。

ウラナガの腕。右腕。いつの間にかだらんと垂れ下げられていた腕が、文字通り外れる。

それが。スーツの袖に包まれたそれが——巨大な銃であると気付けたのは。

「対戦車ライフル——安心しろ、銃身も弾丸も符術で強化済みだ」

「見えたぞ！ コアの位置は、尾だ！ 他は全てまやかし、恐怖を彩るためだけの体躯に過ぎない！」

「コアを見る者。ウェイン。成程——有用だ」

低い姿勢を取ったウラナガが、トリガーを引く。

つんぎく——近くににいる人間の事なんか欠片たりとも考えていない威力の弾丸は、その発射音だけで恐ろしい衝撃波を生む。生んだ。一直線に悪魔の尾へ届いた弾丸が——しかし、弾かれる。

「……先輩、カッコ悪いです」

「黙っている後輩。だが、不味いな。今のは地盤さえも貫ける威力にまで改造を重ねて



いるんだが、それよりも硬いとなると俺にはどうしようもない。ここは諦めるか？」  
「諦めが早い！」

革手袋を引き抜く。

もう、待つてました、と言わんばかりに。キシキシと、ギシギシと、うるさいくらいに喚く骨の手。

「お前、それは」

「僕がアイツの装甲を”終わらせませす”。そして先輩の弾丸を”停めます”。僕におんぶ抱っこでいいなら、妹さんに最期を与える機会を譲つてあげます！ どうですか！」  
「——手を打とう！ 力を貸してくれ先輩——否、イアン！ 全力で俺のサポートをしろ！」

「イアン、足場は任せろ。符術は余り得意ではないが、それくらいはやってみせる」

「ああ、頼むよ大吾！」

何かに歓喜している。

骨が。「終わり」の手が。何かを——心から喜んでいる。

それは、この戦闘？ それとも。

それとも——悪魔に？

待っつてくれ、儂は、儂らは世界のために——ギヤアツ!?”

知っつてるわよそんなこと。世界のために、”終わらない”存在を造るためにああいう実験をしていたんでしよう? コアとリソースだけの存在なら、”終わらない”ものね。実際よくあそこまで辿り着いたと思うわ。大変だったでしょう。無垢なコアの調達も、異相の用意も、そこへリソースを流し込む術式の開発も」

「貴様ツ!。そこまで知っついていて、何故!。」

「不都合だからよ、お爺さん。私はね、この世界には”終わって”ほしいのよ。ちゃんと、例外なく——今まで”終わって”きた世界と同様に、自然の摂理としてね」

「な——そんなことが許されると、そんなことが、それは——!。」

「許す許さないは、限素生物である貴方達が決めることじゃあないわ」

ぐちゅ。

さて、はて。

一体何人潰してきたのやら。警備兵含む符術協会の面々。用があるのは上層部だけ、といっても聞いてくれなかったから、まあ仕方ないわよね。

鍊金術も魔導も面倒なので使わない。ただこの肉体のみで進む。

弾丸も刃もこの身を通す事は無い。符術の炎も氷も雷撃も、この身は寄せ付けけない。ただ単身、乗り込んで——潰す。

「ヒイツ——ギ」

「ごめんねえ。今日で符術協会は終わりだから、職務を全うできなかつた後悔は覚えなくてもいいわ。ただ、全滅して頂戴。貴方達はやつてはいけなことをした。貴方達は手を出してはいけない領域に踏み入った。だから——裁かれなければならぬ」

「裁く——裁くだと!? 貴様は、貴様が、貴様こそ、何者なのだ——」

「何者、つて。そんなの決まつてるじゃない」

「おかしいことを聞くものだ。」

「知っているだろう、それくらい。知らないはずがない。だつてその概念は、”終わらない”。消えないのだから。」

「D…E…M」

「——」

「小学校の図書館にだつて置いてあるわよ、その名前は。」

「世界に纏ろう御伽噺の、最初に出てくる名前なんだから。」

——” 入力済みのパターンは全て完了いたしました。これより、私の考案したパターンによるテストを開始します”

「うん。そうしてくれ」

——” カムナリ様”

「何かな」

——” T r e f o i l   K n o t は、この世界を模造し、再現し、世界を存続させるために生み出されました”

「そうだね」

——” 故に、一つの疑問が浮かびます。私はこの世界に干渉して良いものなのだろうか、と”

「……? それは、どういうことだい?   T K、君が管理してこそその」

——” この世界に神はいません。すべての起こりは自然。すべての終わりは自然。そこに第三者の介入はないはず”

「それは……確かに、そうだ。偉いね、T K。それはその通りだよ。この世界に神などない。” 今回” も、” 前回” も、” 前” も、” 前” も、” 前の前” も、” 前のその前” も——。妖魔、

精霊、妖精、妖怪。ヒトに仇名す差圧はいたけど、ヒトを導く神なんて存在しない」

「ならば私も、そうあるべきだと考えました」

『箱庭』を左右する神ではなく、ただ『箱庭』を見守るだけの——舞台装置になると？」

「はい」

ですから、と。

Trefoil Knotは続ける。

「既にオーマ・ウオロツソ様、テイタ・サルミナ様、エウリス・ビーダ様、そしてカムナリ様の人格データの投射は終了しています。ですが——私は四人に対し、何の干渉もしないと決めました」

「流転。成長。死。生。ま、確かにね。それらルールがあれば、世界は回るだろう。原始か、今の文明から始まるのか、それは定かではない——TKも干渉しないのであれば」

「——ですから、最後に聞いておきたいのです。これより開始する世界を前に、ただ一つ」

「何かな」

一拍置いて。

カムナリは、Trefoil Knotと目が合ったような気がした。

「——この世界に神という概念を持ち込んだのは、誰ですか。そも、神とは——なん

ですか”

その、問いに。

カムナリはいつものように答えようとして——言葉をのどに詰まらせた。

神という概念。神とは何か。

そうだ。自分で言つたはずだ。

”今回”も、”前回”も、”前”も”その前”も、”前のその前”も。恐らくもつと前も、もつともつと前も。

神なんていなかった。

神。神。神とはなんだ。

自身の名も、「終わった」世界の言葉で書けば、神という意味を持つ。

当然だと思つていた。カムナリにとって、神とは当然あるものだと思つていた。

「神——とは」

——”教えてください、カムナリ様。神とはなんですか。神とは何をやるものですか。そしてこの世界に神を持ち込んだのは、誰ですか”

「……神とは何か、については……導くモノ。あるいは畏れを振り撒くモノだ。絶対的で、美しくも恐ろしきものだ。だけど、何故私はコレを当たり前の様に知っている。この、知識、は」

そりや、アズに決まってるだろ。  
声がした。

基本カムナリとアズしか入って来られないはずのスペースに、第三者の声がした。

「……君は」

「よう。会うのは久方ぶりだな、カムナリ」

「ワズタム……？　でも、君は」

病衣の少年。

真つ白な少年。なんでも”今回”ではない世界で錬金術なるものを極めた賢人らしい。  
い。

カムナリと同じく「終わらなかつた」存在。

だけど、ある禁忌の代償に——体内から「終わり」に蝕まれる存在。

その瞳は白く濁り、何も見えていないのだろう。その耳は醜く潰れ、何も聞こえていないのだろう。

全身から点滴を引き抜いたのか、病衣に包まれていない全身から血液が垂れている。

自力では呼吸も出来なかつたはずの口だけが動く。まるで何かに動かされているかのように。その体も、操り人形のように、ヨタヨタと。

「飽きたから、別れを言いに来たんだ。丁度アズもいねえしな」

——”カムナリ様。この方は?”

「おお、お前がT r e f o i l K n o tか。三葉結び目。ア——ぐ」

「血がつ、ダメじゃないか、早く病室に！」

ごぼりと、大きく血を吐いたワズタム。

病衣が赤で染まる。否、そこだけではない。全身から——あらゆることから、血がにじんできている。黒が身体を蝕んでいる。赤が。黒が。白が。

「俺は、ワズタム<sup>v a s t u m</sup>という。よろしくな」

——”はい、よろしくお願いします。ですが——バイタルサインの低下が見られます”

「ああ、いいのさ。死ぬつもりだからな。で、えーと。あ、そうそう。神の話だったな。あー、んー。まあ簡単に言うのと、ここも箱庭なのさ。だから、外側がある。”理外”をつーんだけどな。ゴホツ、ゲ、ア……ああ、ああ。はあ。そう。だから、神の概念はそこから持ち込まれたものだ。持ち込んだのはアズ。アイツは俺より先に来た”理外”だからな、アイツが広めたもんは多いと思うぜ」

「さつきから、何を」

「まあ聞けつて。つか、アンタに話してるわけじゃない。t r e f o i l K n o tに必要な知識を与えてるだけだ。お前ら限素生物じゃ知り得ない知識をな。アズは絶対



教えようとしなから、——はは！ アイツを出し抜いてやろうって魂胆さ！」

突然大声を出して、ワズタムは更に血を吐いた。

そして、大きく腕を広げ——その両腕が、消失する。「終わった」のだ。

当然両肩から大きく血を噴き出すワズタム。

「ひひ……ああ、そうだ。懐かしいな、死の感覚。味わいたくねえよこんなもん、何度も何度も——けど、いいだろ。いいだろう、アズ。お前は絶対死ねないもんな。お前の不死は、お前の”終わらなさ” 加減は折り紙付きだ。で、ええと。そうだ。あー、メタフィクシヨナー、という言葉覚えておけ。神はいる。外界との通信、あるいは会話。受け答えをするための仲介者。それらをメタフィクシヨナーと呼ぶ。この世界が”終わった”ら、『箱庭』と外界を繋ぐメタフィクシヨナーになるのはお前だ、T r e f o i l K n o t」

——”私ですか?”

「ああ、そうさ！ MかTかはわからんが、お前は神になる。が、さつき話してたように舞台装置でいい。何もなくていい。何もしてくれないのが奴らだからな。ただ知識としてそれを預けに来た。俺は——」

テンション高く、ひひ、とか、ははは！ とか、狂氣的に笑う——笑いながら話すワズタムの——その腹に。

大穴が開いた。

「――！」

――”バイタルサインが”

「多分俺は、次には行けねえ。つかこの行動自体俺の意思じゃねえ。が、次の次くらいには行けるはずだ。そんな時元気だったら、また会いに行くよ。TK。今度はもう少し長く話そう。どうやら今回は、俺は、俺の身体は――限界らしい」

大穴は黒白の粒子を伴って、ワズタムの全身を蝕んでいく。

吐き出された血液も、肩口より床に撒き散らされた赤も、その身を染める黒も、何もかも。

「で、最後。アンタ。カムナリ。アンタにもいつこだけ言っておく」

ぐちゃ、と。腹に穴が開いて、それが広がれば――胴体が千切れて、落ちる。

下半身は既に無い。上半身も首から上しか存在していない。だというのにワズタムは、楽しそうに喋る。

「自覚、あんだろ？ D::B::M。アンタはここで終わりだが――アンタが終わる事で、世界は始まっちゃう。だから、早いとこアズに殺してもらえ。奪ってもらえ。そんな責務、アンタみたいな子供が背負うべきじゃねえからよ」

「……子供は、君もだろう」

ああ——消える。

蝕まれて消える。「終わり」に、その全身を、口も鼻も耳も眼も脳も——。

ただ、声だけが響く。

——大盤振る舞いだ。俺は賢者として、年長者として！ お前らガキに血肉を分け

てやる。そしてアズ。お前には俺の一片たりともやらねーよ”

響く。脳裏に響く。

脳など持たないTKにまでも、響く。

魂を揺る声が響く。

——” こんだけ善行積んだんだ、次の生では——溢れんばかりの幸運を頼むぜ、神よ

”

消えた。

消失した。

まるで、そこに何も無かったかのように。初めから存在しなかったかのように。

ワズタムは「終わった」。

「……」

——” カムナリ様。あれなるものは、何者だったのでしようか”

「……私にもわからないよ。でも多分、この世界の誰よりもマトモだったのは確かだろ

うね」

——”まとも?”

「うん。死の際に来世の幸せを願う、なんてさ。少なくともこの世界の人間には出来ないからね」

——” そうなのですか?”

「ああ——それこそ、神のいないこの世界では」

それもまた、何故持っているかわからない知識だけど。

カムナリの心に。あるいはTKの心に。

病衣の少年の死に様は、強く強く刻まれたのだった。

「あつた」

「ム」

「あら? 奇遇ね」

符術協会最深部。

最奥も最奥、趣味の悪いトラップの類がこれでもかと仕込まれたそこを素通りして、

ようやくたどり着いた。

壁一面、円形のそこに並ぶは禁書禁書禁書禁書。

どれもこれもが悪魔について書かれた本ばかり。

そしてそこに、彼もいた。

「最近よく会うわね、オーディア」

「……」

「あら、だんまり？」

彼——いや、彼ら、だろうか。

本棚の上の方。中央の台座の裏。そして私の背後。

「どうしたの、揃いも揃って」

「ああ、殺しの依頼って奴さ。頼むから符術協会のクソジジイ共を殺して欲しい、金はい

くらでも払う、つってな。ま、その依頼は完遂どころか遂行も出来なかったわけだが」

「あらごめんさい。ブッキングしちやったのねえ、私の方は依頼じゃないけど」

背後からは、ビーダ。

台座の裏にはエメト。台座にある本を持つのはオーディア。本棚の上の方にはアリ

アス。

「悪魔。<sup>クリプター</sup>お前が乗り込んできたのはコレが理由か」

「ええ。それは手を出しちやいけない領域なの」

「それはよ、誰が決めたんだ。俺達の知らねえ、この世界の秩序でも決める機関があるのか」

「うーん、強いていうなら”終わり”かしら？ 正確には”終わり”の向こう側なのだけど、アナタ達に言っても意味無いし」

発砲。

シヨットガンだ。それは私に向けられたものでなく、周囲の本棚に向けて撃ち込まれたもの。目的は無いのだろう、ただの苛立ちの発散。

「あのさ。あのさ。それってさ、アズ。アンタ、アズであつてるよね？」

「ええ。合っているわ」

「知ってる？ 僕らが今いっばい人を殺してる理由。『箱庭』とかいうのに、今の人類を送り込まないためなんだよね。争い合う、憎み合う、殺し合う今の人類を未来に遺してどーすんのサ、っていう、至極真つ当な言い分。アンタならわかるよね？」

「ええ。凄くわかるわ。符術協会の面々を見ても、これを残そうとは思わない」  
「でもさ」

イラついた声で、エメトが。冷静な瞳で、オーディアが。何を考えているのか微妙にわからない顔で、アリアスが。

「アンタさ、”終わり”の手先でしょ。わかつちやつたんだよね。全部。おかしいよね。だってさ、だってさ。符術協会がやってた実験は、アンタじゃん。”終わらない”存在を造る実験。アンタもそうだろう、”終わらない”アズ。仲間が増えるんだよ。それを妨害するのはおかしいよねえ！」

「エメト、お主は余り頭が回らないのだから口うるさくしゃべるな。おかしいのはそこではない」

「はあ!? 今の今までそうだよねえ! って言ってたじゃんか!」

全く以て見当外れな言葉を吐いていたエメトを、オーディアが退ける。

「ああ。だが、違うとわかった。——アズ。儂はお前を、どちらかといえばこちら寄りの存在だと思っていた。だが——違うな。『箱庭計画』。それを主導しているのは、お前だな」

「ふふ、どうしてそう思うのかしら、オーディア」

「悪魔などというものを、『箱庭』に持ち込まれて困るのは誰か。その誰ぞかは、持ち込まれないために何をするか。それをした人物は、今どこにいるか」

「うーん、まあ60点ね」

「及第点だろう」

「ええ、そう」

ビーダはまあ、全部わかってて楽しんでるから置いておくとして。

どうしましようかしらね、この三人。

もう——明らかに私を敵として見ている、この三人を。

「問います、アズ」

「何かしら、アリアス」

「貴方は“終わらない”。どころか——この世界を“終わらせない”術を有している。違いますか」

「……へえ！ 凄い、凄いじゃない。それに辿り着いたのは貴方が初めてよ、アリアス」  
「ああ？ なんだそりゃ、俺も聞いてねえぞ、それは」

あらあら、本当に唐突過ぎて素で驚いちゃったけど、ビーダからもちよつぱり敵意。ま、いいのだけどね。

もう人格のデータは移行済み。

だからもう、用済みだし。

「世界を、“終わらせない”？ ——そんなことが出来るの？」

「出来るわ。なんなら、“終わった”ものを“終わる”前に戻す事だつて出来る」

「……アズ。それは」

さあて、そろそろかしら。



そろそろ、アッチもクライマックスだと思っただけど。

「それは——神の領域だ。ヒトが有しているいいモンじゃねエぞ、アズ」

「私、実は神様です、と言ったら？」

「——殺す」

殺気。

「——と言いたい所だが、違うのはわかってる。何のタイミングを見計らってるのか知らねえが、早くやれ。その冗談、俺には通じるがな、そいつらには通じねえぞ」

「本気の殺気叩きつけといてよく言うわあ」

「え、違うの？ ボス」

「違うのか、ボス」

「違うんですか、ボス」

「違うに決まってんだろ馬鹿野郎共。こんなアホくせえ神がいるかよ。それより、ちよつとこつちまで来い。特にアリアスは下がれ。そろそろ来るぞ」

はい、とばかりに、こちら……というかビーダの方へ集まってくる三人。

凄いい忠誠心というか、懐かれているのねえ。

「で？」

「はいはい。んもう、急かさないでよ」

右手の掌に、左の拳をぶつける。

拳は時計回りに。つまり、ウラナガを送った時と反対に。

それにより——この円形の空間に、更に円形の波紋が広がる。

「戦闘は任せても?」

「あ。何が出てくるかは知らねえが、殺しなら任せろよ。特化集団だぜ」

そして反時計回りに再度拳を回していく。

硬質な音。何か、鋼鉄のこすれ合うような音。

魔導。異相の扉。

「亜空隧道」

途端、天井から、そして床から、ビチャビチャビチャツ! と水音が響き渡る。いいえ、実際に水が——真つ黒い水が落ちて、湧いてくる。

それは床に溜まり、本棚へと辿り着くと——覆うようにして這い上がる。ぐちやぐちやと、まるで。

「本が、食べられてる……?」

「正確には限素が、ね。あの黒いの限素を食うから、身体は自分達でコーティングしなさい。ま、私が助けてあげてもいいけど」

「あアいやそれは俺がやる。エメト、アリアス、オーディア。割とちゃんと気を引き締め

てかかれ。想像の10倍くらいやべーの出てくるぞ」

そして——空間の蓋が、がらあんと落ちて。

ソレが降ってきた。

「く、眩しい——次は何だ!?!」

「まだ奥の手を——!?!」

頑張つて言い表して、大きく太らせたサソリ、だろうか。大凡現行の生物には当てはまらない真黒のソイツは、幾つか潰された複眼をギョロギョロとやって、尾を何度も叩きつけて、身体をぎゅると回して——身体に張り付いていた虫を払う。

虫……じゃなくて、彼らが黒の壁に叩きつけられる前に、私は匣を、ビーダは足場を造る。

「よオ、ウラナガ。随分ボロボロじゃねエか、いつものヨユーはどうしたよ」

「っ、ボス!?! どうしてここに……いや、俺達が移動して、つて、今はそんな場合じゃないー!」

「なんだこの符術……匣……?」

「イアン、どうやら限世らしい。そして勢ぞろいだ、ABSが」

私の作った匣にイアン君が、その上に大吾君が飛び乗り、更に藍沙ちゃんを抱えたジュニちゃんが落ちてきて、着地。惜しい、もう少しでスカートの中が見れたのに。

ビーダの作った足場乗ったのは右腕のないウラナガ。腕だけじゃなく、ところどころに傷がある。それはまあ、イアン君や大吾君も同じなんだけど。

「えーと。ボス、どれを殺せばいいんだろう。ボクとしてはユンを殺したいんだけど」

「馬鹿野郎、時と場合くらい選べ。どう考えたってアレだろうが」

「えー。……アレさ、シヨットガン効くかな?」

「普通の弾丸なら無理だ、エメト! 符術で強化済みの弾丸なら多少は通る!」

「ボク人間相手の殺ししかしないからそういう特殊なの持ってないんだよねえ」

「ビーダにツケでいいなら、あげるけど。口径は?」

「19.6」

「バカみたいなの使ってるわね……。オーディア、今回使う予定の無い爆弾ある?」

「ああ。アレには効かんだろう、人体に貼り付けて使うタイプのものだが、いいか」

「エゲツないもん持ってるわね……。んじゃこれを素材に——ま、リソースはいくらでもあるから、貰って、と」

こういう時に便利なのが錬金術だ。

対象Aを対象Bに作り変える技術。符術のように一時的でもなければ、魔導のように

余計な手間暇を要さない。

で、これに妖魔払いと炸裂系の符を書いて、と。

「はい、これ」

「おー。……ねね、ボス。コイツ弾薬箱として有用だよ」

「馬鹿野郎。俺もそう思った」

イアン君を囲う匣に、黒い水が触れる。

途端崩れ始める匣。ビーダの足場もそうだ。うわなにこれ、重い。

「どうしてABSがいるのか、アズがいるのかはこの際どうでもいい！ 僕が張り付いてコイツの装甲を『終わらせる』！ そうして穴を造る！ 弱点は尻尾だ！ それ以外に欲しい情報は!？」

「あア小僧。その他の部分を吹っ飛ばすとどうなる？」

「リソースを使つて再生する！」

「だ、そうだ。アズ、あれ閉めちまえよ。そうすりゃとりあえず再生はしなくなるだろ」

「ダメよ、それは。私の目的はあの中のリソース全部使いきることだもの」

「そうかい。んじやお前ら、時間稼ぎ頼むわ。で、アズ。どうやって使い切るかは考えてあんのか？」

「いいえ？ 何か巨大質量の物体を造るとか、人間を生き返らせるとか、それを何千回も繰り返し返さないとアレは使いきれないわ」

「おう。聞いた俺が馬鹿だったよ。はやく行ってこい。こっちは俺らがなんとかする」

「ふふ、長年の付き合いだとツーカーで助かるわあ」

匣を造る。足場にする。

イアン君を担いでその場を一旦離脱する大吾君と、眠っている藍沙ちゃんを抱いてこつちに一瞬の殺意を向けるジユニちゃんとすれ違い——天井に空いた穴に入る。

……ま、保険は一応かけておきましょう。

アレが逃げ出そうとしたら——符術協会の全てが消失する、おまじない。そうならな  
いように願っているわ。

さあて。

私の本来のお仕事をしましょうか。

リソースは世界に還元されなければならない。

何故ならそれが世界を、あるいは無を育てる唯一の手段であり、同時に新たな世界を生むプロセスの一つであるからだ。ヒトの、否、知的生命体の「心」という部分から無尽蔵に放たれる感情リソース。それは時に際限ない悲しみを生む事もあるだろう。憎しみを、怒りを。反対に喜びや楽しみ、あるいは愛情をも生む。

感情があるからこそ生命は動き、感情があるからこそ行動する。

少なくともこの世界において、知性ある存在のエネルギー源は全てリソースだ。”今回”は発生しなかったものの、たとえばアンドロイドだって、たとえばアンデッドだって。知性を得た時点で、同時に感情も得る。心を得る。だから、それらが機械だとしても、無機物無機物、有機物という概念は”今回”に存在しないがたととしても、エネルギー源は感情リソースなのだ。

それを閉じ込める、など。

それを占領する、など。

それは——禁忌の領域だ。私にとっても、無にとっても、逆鱗が如き一線。

あつてはならない。悪魔化クリフアといったか、まさに悪魔の所業だ。本物を知っているのではないかというくらい、世界に害しか与えぬ技法。素直に敬服しよう。素直に賛辞を述べよう。

あのワズタムでさえ、大切なヒトのために——その禁忌を知って尚も、という覚悟を以てして踏み込んだ領域に、土足で、素足で、確証もない実験のために歩を進めた蛮行を。

——その所業は。過ぎたれば、次なる世界の形成にさえも支障を来すだろう。あり得ない。あり得ない。それはあつてはならないことだ。だって、そうなるなら。

今までの犠牲はなんだつたと——。

「……ああ、ダメね。いけないいけない。こういう特殊な場所にいると、思考が無によつちやつて嫌だわ。ふふ、それにしても」

位相の蓋を開けて侵入した、符術協会の作り上げた異相。

うねるような暗闇が跋扈している。暴れ狂い、出せ、出せと。ここから出せと、叫び続ける。私の開けた穴に群がり、それらは全てあの悪魔の糧となるのだろう。ホントに頑張つてねみんな。でないと消し飛ぶから。

「ま、異相だし。広さで考えれば世界と同等……ただ歩き回っても仕方ないワケよ」  
 呟く。音は響かない。



地面はあるけれど、これだって限界で出来ているわけではない。一応異相という名の境界だから底面が存在する——底面という概念が存在するだけで、多分掘つても掘つても底には行きつかないだろう。境界とはそういうものだ。それについて詳しく語るつもりはない。

さて、この空間で気を付けないといけないのは、外よりも過ぎる時間が遅い、という法則。こつちでの一、二時間があちらでの一週間なんてのはザラだ。というか多分イアン君達が一週間行方不明だったのはコレが原因。

つまり、ここでダラダラすればするほど、ビーダ達に負担をかけるってワケね。

「とりあえず——惑星でも作ってみようかしら」

目を瞑る。そこまで広くはない。今回”の宇宙の、端の端。隅の隅。この星に余波を与えない程度の遠さで、規模で——リソースを限界に変換する。

あつさり、新しい星が出来た。けれど、リソースはほとんど減っていない。まあ単なる限界変換だしそうよねえ。効率悪いわ。やっぱリコアとくつつける限界……人体を造らないと、どうにもこうにも。

「あー、どつかに空いてる魂ないかしらあ」

「——星が見えます。煌めく星が。輝かしい、瞳を焦がす青の恒星」

まあ、何も独り言をつぶやいていたわけではない。

聞かせていたのだ。ずっと、悪魔あっちに迎合せず、ここに座す者に。

「今更詩人ぶらなくていいわよ。アナタ、肉体は”終わった”けれど、魂は”終わらなかつた”……魔導が発展した世界の住人でしょ？」

「……懐かしい言葉です。ああ、いいえ。私はこの世界の言語を覚える努力をしなかつた。私の最期に、彼に礼を言えたのは、奇跡と言って良いでしょう」

「問答は後にしなさい。後が無くてもね。それで——くれるのかしら、ソレ」

少年か、少女か。

柔和な笑みを浮かべる性別不明の存在。周囲に侍らすは黒白の粒子。その内、粒子であるに飽き足らず、明確な塊となって存在しているものが多数見受けられる。

「あげません。けど、おかしなことに、みんな私から離れないのです。離れずに、こう言うのです。リソースを奪うのなら任せろ、AZ、と」

「アナタにあげるつもりがなくても、みんなが行きたいと言っているから強制は出来ない、ってことね」

「そうは言っていないですよ。けれど、そうも言っています。少なくとも彼ら彼女らは——私の一族の、総勢152人の魂は、早くしろAZ、と言っています。一時的で構わないから、あの悪魔を我らに討伐させろ、と。そう——インキュバスとサキュバス。どちらも吸精に長けた存在であるならば。魅了よりも特技と言えるでしょう」

「このコ、率直に言つて面倒なタイプね。私もヒトの事言えないけど」  
魂は。

否、魂は。

その不可思議な存在から、湧き水が如く出現する。このリソースの嵐にありながら、決して自我を見失わぬ誇り高き魂。いつかハンターを名乗る符術協会の過激派に滅ぼされた夢魔の一族。

「一時的でいいの？ 私なら、永遠だつてあげられるわよ。ま、”終わり”までだけど」  
「いいはずがないでしょう。彼ら彼女らはもつともつとたくさんの時間を生きるべきでした。だからみんな、口々に言うのです。我らは既に死した身。それが理不尽であつても不慮であつても関係はない。誰しもが幸福な寿命を迎えられるわけではない。違うか、AZ。”理外”の傍観者。これ以上の問答が必要か、と聞いている！」

「いいえ。愚問だった。謝るわ、ごめんなさい。——そして、助力願ひましょう。符術によつて滅ぼされたアナタ達を、ただの一時、夢のような泡沫の時間だけ——蘇らせる。あら、これじゃあ夢魔じゃなくてゾンビかしら？」

「良いから早くやれと、みんなカンカンです」

「余計なコト言わなくなつたわねアナタ」

さて、ならばお望み通り——夢を見せてあげましょう。

中空に描くは変換式。魔導や錬金術とは違う、事象の改変式。膨大なリソースを限界へと改変する——世界で最も非効率な式。

「其は怨恨の感情。其は怨嗟の嵐。なれど其は、夢幻の躰を手に入れる」

本来は書かなければいけない式を口頭で言う。符術言語なんて使う人がいないから文字としてのみしか生き残れなかったけれど、むかしむかしの人間は全部口で言つたのよ。

「さあ——みんな、見せてやりなさい。圧倒してやりなさい。”今回”の世界に根付いた肉体を持つ妖魔の一族。妖魔の一族。新参者の悪魔なんか遅れは取らないのだと——」

発動させる。

途端、魂たちにリソースが集まり始める。本来であればリソースとコアの接触による限界化を防ぐ、みたいな術式が働いているこの結果内で——数多の魂が、懐かしき己が肉体を得て行く。

たかだか80そこらの研鑽で、私の符術に辿り着けるとは思わないコトねえ。

「貴様に指揮される筋合いはないわ、老害め」

「イーリス。気に病むなよ。お主はすっかり役目を果たした。後は農らに任せろ」

「ふふ、男のこの精が食べられないのは残念だけど、これもお役目よね」

「あら？ 私は女のコだつてイケるけど」

「皆はしやぎ過ぎだよ——ただまあ、500年分僕らの方が先輩なんだ。首を垂れろよ、後輩」

「AZ！ 次があつたらまた会おうね！」

「しつ、見ちゃいけません！」

……何か、失礼なことを言われながら。

過ぎて行く。過ぎ去っていく。

コウモリの羽根を生やした血色の悪い152名。インキュバスとサキュバス。アリスとは近縁種だけど、彼らの方がリソースの吸収に特化している。

それが。その全てが——地に開いた穴に向かって行った。

「貴方は行かないの？」

「私の魅了は、魂に根付くもの」

「ああ、面倒になるのね」

「はい」

本当に余計なコトを言わなくなった。

ただ、座つて。ニコニコと。

「ま、これで半分くらいかしらね」

大分薄まった暗黒のリソースを見て、うん。

じゃああと150個くらいの魂があればいいわけよね。計算的には。

なら——ちよつと、非人道的な行いでもしましょうか。

簡単に言えば、作って消して、作って消して……みたいなv。

凡そ一時間は経過した事だろう。

悪魔といったか、化け物は未だ健在。

俺達ボロボロ。やってられねーなオイ。

「おい、無事かテメェら」

「弾切れ」

「私もお腹いっぱいです」

「これ以上の威力は建物を壊しかねん」

「俺は初めから満身創痍です、ボス」

「……だらしねえ奴らだなあ」

殺しのプロではある。殺人集団だ。殺戮集団だ。

人体に対してはスペシャリストと言えるだろう。だが。

「ツ、大吾！」

「ああ——！」

「アンダースロードローピング（腕）！」

「それ言う必要があるのジユニ!？」

「無いよ〜ん！」

妖魔退治に関しては、アイツらに後れを取っていると云わざるを得ない。

ま専門外だ。逆にあっちは専門家だ。差も出るだろうが、にしたってどうなんだ。

仮にもオトナだぜ、こっちは。いやウラナガの奴はまだギリガキだが。

「エヌとの連絡は取れないのですか？」

「圏外だな」

「アイツこそ妖魔特化なのに肝心な時にいないなも〜！」

アイツの“不終の太刀”は確かに効果的だろう。

が、いつアズが帰ってくるかもわからない状態でこっちに近寄る事は無いはずだ。ンなもんをアテにしたって仕方がねえ。

今んとこ小僧……：イアン・エンハードの“終わり”で装甲を剥いで、そこに全火力集

中の流れは出来てる。小僧が危なくなればスイッチだ。再生し続ける胴体をぶっ飛ばしまくって、アイツの使えるリソースを少しでも減らしていく。

つつてもなあ。

そのリソースはほぼ無尽蔵に上から供給されて——ん？

「……ボス。来ますよ、魔族が」

「魔族？ ……ああ、お前らの、なんだ。妖魔を身に宿した人間、だったか？ 後天的つーか、血筋から成る異能者」

「夥しい数です。100を超える数の——妖魔の群れ。これは」

あつた。

そこにあつた。

眼だ。無数の目だ。瞳だ。眼球だ。

薄く、怪しく、朱く光る眼が——天井の穴から、真つ暗なそこから、こちらを、いや、<sup>アイツ</sup>悪魔を覗いている。

なんだアリヤ。やべーな、単純に。

「お前から一旦攻撃やめろ！ 下がれ！ 巻き込まれんぞ!!」

声を掛けるは、小僧ら一行だ。

藍沙はまあ俺の後ろに寝てるからいいとして、すんげえ速度で飛び回る女とコアの見



える奴用にも足場を用意する。

奴らは一瞬逡巡を見せたが、小僧が従った事を機にこっちの言葉を聞き入れたらしい。

「ツ、エウリス・ビーダ、巻き込まれるって、何に」

「何っておめエ、決まってるんだろ」

——狩りだよ。高位魔族のカルニバルだ。

「——!!」

それはちゃんと、一斉だった。

それはちやんと——同時に起きた。来た。来たのだ。穴から、アズの入っていった穴から——夥しい数の妖魔が出現する。

否。否。単なる妖魔じゃない。妖魔の要素を持った人間——しっかりとコアのある、しかし特異な性質を持つ人間。

魔族。

「これは……」

「おう、どうしたよ兄ちゃん。見覚えのある魂だったか？」

「ああ。イーリスの周囲にいた魂たちだ。全て——500年前に死んだ夢魔たちだ」

「ははあ、イーリスの置き土産ってワケだ。——にしちゃ、恐ろしいこって」

男女の魔族は、悪魔に張り付く。張り付いて噛みついて、齧りついて——吸い取る。食い千切る者もいる。食い破る者もいる。

悪魔の身体。それは限素ではなく、リソースだ。リソースを食らう化け物共。

「アリアス、混ざんなくていいの〜？ 仲間でしょ、アレ」

「遠く離れた親戚、のようなものかと。私のように血や肉を媒介としたリソース回収ではなく、感情そのものを食い散らかす悪魔は、もつと精神的な存在です」

「……その基準はどうでもいいけど、それは効果的なのかい？」

「はい。恐らくは——あらゆる手段よりも」

アリアスの言葉通りだった。

悪魔は、食われた個所から消滅していく。俺達のやっていたような吹き飛ばすのだとは違うんだ、食っているから、悪魔には戻って行かない。

だが、悪魔も悪魔で無抵抗なわけじゃない。全身に張り付く悪魔共を振り払い、叩きつけて殺していく。ありやちゃんと死んでるな。そもそもが脆い身体なんだろう。仮初の……ああ、つまりアズか。あの野郎、もつと早くやれよ。

「——皆さん！ ソイツ、尾が弱点です！ そこさえ食べ尽くせば、それ以上の抵抗は出来ません！」

「あ——ア、そうだな。おいおい、何呆けてみてんだお前ら。あー、なんだ。悪魔諸君。

こつちは勝手に攻撃すつからよ、巻き込まれて死んでも文句言うなよ！」

「人間風情が舐めた口を利くものだ。だが文句は元より無い。あれなる者を殺す——それはこの世界に生きる者の総意なり！ そのための犠牲、喜んで受け入れよう！」

「つーわけだ、お前ら。ありつたけぶち込んでやれよ。んで、オーディア。倒壊とか気にするな。そつちの嬢ちゃんに薬品分けてもらつて、最大火力ぶち込め。この部屋は俺が強化してやる」

「ふむ」

「えー、オヂサンとか私の趣味じゃないんだけどー」

いやあ、いいね。俺ア好きだぜこういうの。敵味方が一時的に手を取り合つて、第三勢力までもが力を貸して個を倒す。討滅する。

いいね。いいね。少年心つて奴をくすぐるじゃねえか。オジサン楽しくなつてきちやつたぜ。

「んじや景気よく——奥の手つて奴を一個見せてやる」

吸つていた煙草を抓む。

その時点でもう、オーディアとエメト辺りは気付いてんだろな。やべー匂いに。

そうさ、俺が吸つてんのはソウイウ代物さ。

んで——くそみてーな特技をお披露目してやろう。



だったわ、俺達コイツをこつから出さずに殺すために戦ってんだったわ。

いやアすまねエ謝るよ。ごめんごめん。

「で？　んな口叩くんだ、勝機はあんだろうな」

「フン——おい、その浄眼の持ち主よ。今コアはどこにある！」

「……な、に？」

「どうしたよ兄ちゃん。見えんだろ？　アイツのコア、弱点。どこか、だどよ。老いさらばえて記憶力も失ったのかもしれないな」

「——無い！　その体のどこにもコアが無い!!」

あ——ん？

ん？

「ならば——先ほどの攻撃は有効だ。皆のもの！　吸え、吸え！　もう食えんのなら、飛ばせ！　空の果てに此奴の身体を千切って飛ばせ!!」

なんだよ。

じゃあオジサン正解じゃーん。功労者だろ、もつと褒めてくれていいぜ。

「そして浄眼の持ち主よ、コアの行方を——」

「行方はわかっている！　ボス、申し訳ございません——お先に失礼します！」

「あいよ」

残弾尽きて使い物にならなくなっていた奴が俺の横を通り過ぎて行く。腕も足もボロボロだ。外れた腕はもう戻らないだろう。それでも。否、だからこそ、と。

んじやま、足場くらいは作ってやらあよ。

「行きな！ アムド・多良戸！ 今まで尽くしてくれてありがとうよ！」

「こちらこそ。本来の目的など関係なしに、家族として扱って頂き——心より感謝します。ありがとうございました！」

そんなことを言つて。

ウラナガは。本名アムド・多良戸は。

さつき落ちてきた天井の穴に——真つ暗闇の穴の中に、突つ込んでいった。

十分さ。

十分量のリソースだけ、そいつア。

再度暗闇に戻れば——些か薄まった暗黒のリソースの中に、緑髪の男がいた。長髪を垂れ流す身長の高い男。後ろ姿だけで判るその異彩は。

「……アズ！ 来たはずだ、ここに——妹の魂が！」

「ああ、それなら」

叫ばなくても——ちゃんと捕まえてあるわよ、と。

鎖。檻。鳥籠。硬い硬い拘束具で、しっかりと、雁字搦めに——ソレはいた。

あの子はいた。魂だけになっても、わかる。

「ツ……頼みがある、アズ！」

「あのコを蘇らせてほしい、とかなら、無理よ」

「な——ぜ、だ。リソースが足りないのか!?!」

「いいえ？ むしろリソースは十分。未だに四分の一が残ってるくらいには十分。アツチの殻が倒されて、夢魔たちが世界に還って、尚残るこれをどうしましうかね、なんて考えていたくらいには十分量だわ」

「ならば」

「でも、あのコはもうダメね。魂が悪魔になっている。アレ、貴方の妹じゃないわよ。リリー、と言ったかしら。今の名前は違うと思うわ。試しに聞いてみたら？」

ぞつとすると冷たい声で、アズが言う。

ぞつとするほど冷たい顔で、アズが笑う。

「り、リリー……?」

「あ、お兄ちゃん！ 良かった、来てくれたんだ！ お願い、助けてくれない？ 限素な  
んかで、ううん、リソースなんかでも私は縛る事が出来ないはずなのに、まさか”理外  
”が来るとか聞いてないんだけど、みたいな感じなんだよね」

「……お前の、名は——なんだ？」

自然、お前、という呼称になった。

喋り方はあの頃のリリーそのままだ。元気で明るくて、少しだけ空気の読めない所が  
あつて。どんな時でも場違いなほどに——俺に活力をくれる、大切な妹。

でも。

でも、違う。

コイツは。

「名前？ ー、今日はよく聞かれるなあ。ま、案内人とでも呼んでよ。こここの案内人。  
直近の名を名乗るならイーリスだけだ」

「その名は私のものなので、返していただきますね」

「あ、今使えなくなっちゃった」

意識外。

アズの後ろで、笑みを浮かべながら座っている存在。

イーリスだ。俺達の、ABSの第四位。死んだとされていた存在。



「えーと、じゃあねー。モモカとかどう？」

「へえ、ウチの従業員まで掠め取られていたのねえ。それ、返してもらおうわ」  
「あちやく、また使えなくなっちゃった」

なんでもないことかのように、言う。言うのだ。

妹の声だ。脳裏に響くのは彼女の声だ。けれど。けれど。

「じゃ、そのままリリーを名乗ろうかなあ。リリー・多良戸！」

「……それは、俺の妹の名だ。お前が名乗って良いものじゃない」

「ワオ。それまで使えなくなっちゃうんだ」

ああ——変質していく。

どろどろと、何かが。何か、じゃないか。

今の今まで妹だと思っていたもの。外殻クリフアを剥がして、別れの言葉を、なんて考えていた存在。妹。リリー。リリー。俺が守るべき——俺を守った、リリー。

——「すまない。守り切れなかった」

——「恨むなら恨め。すべては俺の失態だ」

脳裏を反芻するは、あの時の記憶。

目の前で妹が殺された。

目の前で、だ。

じゃあ、俺はその時、何をしていたのか、つて。

「それじゃあねー。その前に来た魂を名乗ろうかな」

「——ソイツの名は……浦永、か」

「あ、そうそう！……つて、それも使えなくされちゃうの〜!?」

—— ” おい、ウエイン何を——ッ、コイツまだ生きて!? ”

—— ” ハッ——おい動くなお前ら、人質だよ、コイツら二人！ 殺されたくなかった

ら—— ”

—— ” お兄ちゃん！”

フラツシユバツクする。

トラウマが。いや、記憶が。

そうだ。ウラナガという名は、計画的殺人犯の名だ。その犯罪歴は——20余年に渡る。

俺より、年上の。

—— ” 馬鹿が、動くんじゃねえよガキが——ッ”

—— ” ウエイン！”

—— ” クソ、どいつもこいつも——だったら道連れだ！”

浦永は、計画的殺人を行う奴だった。

けれど想定外の事には弱くて——その想定外が、この国の”英雄”、ウエイン。戦争を止めた国では使われなくなつて久しい称号を持つウエインは、動いた。

速く——先に動いたリリー、ではなく、俺の方へ。

——”待、”

——”死ね、諸共！ 何もかも!!”

——”リ——”

そこから先は、ああ、そうだ。

その通りだ。

リリーじゃなく、俺を助けたウエインが。浦永はリリーだけを巻き込んで死んだ。目の前で、彼女が爆発に巻き込まれるのを見た。爆炎に。散つていく肉片に。強い恨みと

——混乱と、混濁と。

「えー、じゃあ、まあ、往生際くらいは素直になつちやうかあ」

「往生際だつてわかつてるのね？」

「そりゃねー。まさか一代目に出会えるとは思つてなかつたけどさ」

「ふふ。じゃ、そろそろさようならをしましょうか」

リリー。リリー。

違う。コイツは、リリーじゃないんだ。

「再度、問う」

「んえ？」

「お前の名は何だ」

「リリーだよ」

「違う。それは、俺の——！」

「アルダト・リリー。えへへ、お兄ちゃん。死に際に最大の呪いを残してあげる。果たしていつから私だったのでしょーか!!」

「——！」

満面の笑みで。

ソイツは。

その悪魔は。

「無に還りなさい。貴方は私から引き摺り込んであ・げ・る」

「わ」

口が開く。

クチだ。いや、眼だろうか。とにかく何か、ぱつくりと開いて。

その奥は——恐ろしい程に何も無い空間。暗黒のリソースなんて比較にもならない。

ただの闇。黒。

無。

「私の大切なモノに関わらないよう——果ての果てに封印してあげるわ」  
「いやあ~~~~~！ 助けて~~~~~！」

そんな、棒読みで。

リリーは。アルダト・リリーは。

その無の中に——落ちていった。

「……ああ。頼むよ。俺はアムド・多良戸だ。その分だと、浦永についても知っていたみたいだね」

「ええ。オーディアと同じ時期に活動していた殺人鬼だもの。19歳なんてありえない、ってことくらい、簡単にわかったわ」

「そつか。……ああ」

「おかしいな。まだリソースの枯渇に至るには早いはずなのに、身体に力が入らない。メンテナンスは怠っていないんだけどな」

「いいえ、アムド。それはリソースの枯渇であっているわ。——だってもう、貴方には目的がないでしょう」

「ああ——」

感情とは心から際限なく湧き出るものだ。

けれど同時に——目的を失えば。あるいは、達成してしまえば。

その放出量は極端に減る。

「なるほど。俺は、満足しているのか。……そうだよな。浦永を……妹を殺した奴の名を騙つて、沢山を殺した。別にそれは後悔してないけれど、ああ。そうか。復讐はもう——終わってたんだ」

ウラナガ。いえ、アムドは、膝を突き、俯き、少しだけ笑つて——私を見る。

「殺してくれ、アズ」

「どうして?」

「これ以上生きていても仕方がない。もう俺はボスのために動けない。自分のためにも動けない。どうせあと数ヶ月でこの世界は”終わる”んだろう? いやあ、もう、いいじゃないか。ちよつと早いか遅いかの違いだ」

無気力になるのだ。

目標無き知性体は、ただ——無為を。

それは無にとつて、悪であると断ざれる。

「わかつたわ」

「ああ——ありがとう」

「……ところで、なんだけどね」

「……う？」

アムドを掌握する。

使うのは錬金術だ。彼には見えていないだろうけれど、私の後ろに——後方の暗がり  
に広がっている、無数の遺骸。幾度となく作られては壊される。そんな存在になつても  
らう、つもりだけど。

一つだけ、言っておかないといけないことがある。

アムド。貴方にはまだ役目がある。

「どうして浦永が。あの殺人犯が、貴方達兄妹の近くに来たのか、覚えている？」

「……いや。覚えていない……ああ、違う。確か、誰かに追われて……何かが上手く行か  
なくて——誰かを殺し損ねて、それが露見した、とか、で」

「そ。で、殺人鬼浦永が殺し損ねたのは——私」

「え」

反応を見せる。

私には大吾君のようなコアを見る瞳は無いけれど、手に取るようにわかる。

「私が追い返したの。そして通報したわ、時の英雄さんに。でも、実はそれだけじゃな  
くってね？」



「……アズが、殺人鬼に狙われる、なんてことは」

「そうそう！　あり得ないのよ。だって私、基本表にいないのだから」

研究所か、BARか、あるいはこういうオシゴトの時間か。

私は基本、出歩かない。じゃあなぜ、浦永は私を殺そうとしたのでしょうか。じゃあどうして、浦永は私を見つけられたのでしょうか。

「——私が依頼したのよ。英雄ウエインを始末したいから、私を囮に使って、彼を抹殺してほしい、って」

「……」

カタ、と。

何かが動く音がした。それは、先ほど崩れ落ちたはずのパーツだ。

殺しのために、身体の大部分を武器の類に置き換えたアムドから、カタ、カタと。

震えるような音がする。

「そして、浦永は手筈通りに事を進めたわ。応援要請の届かない範囲にまで逃げて、その国の兵士は私がちよちよつと眠らせて——子供二人を人質に取って、確実にウエインを仕留められるように」

動く。動く。

何かが爆発的に。

何か？ ふふ、冗談はやめましょう。

感情よ。  
リソース

「だから、浦永が死んだと聞いた時は酷く残念がったものよ。彼もまた復讐者だった——だから、良いリソースだ、つて」

「あ、ず——」

「お酒を飲みながらね、話し合ったものよ。アレは引き込むに値する、つて——」

「貴様——ツ!!」

「ビーダと、ね？」

笑う。につこりと笑う。

ともすればアルダト・リリーに並ぶくらいの微笑みで。

「十分よ、アムド・多良戸。じゃ、死んで頂戴」

「——!!」

何か最後に、銃口らしきものを私に向けていた気がするけれど。

その身は、何も言い残すことなく——消滅した。

寿命を迎えたのだ。限素としての寿命。リソース化。ああ、その量は。

「ふふ。やっぱり死に際の憎悪は——ああ、素晴らしいわね。でも、同じなのよ？ 貴方

だって、たくさんたくさん、殺したのだから……ね？」

おやすみなさい、道化の君よ。

貴方は余すところなく使わせてもらうわ。そのリソースも、コアも。ここのお掃除のために——最後の最後まで。

「／」

「アズー！」

「あら、どうしたのイアン君。そんな息を切らして……って、お連れさん全員で、まあまあ」

「どうしたのイアン君、じゃないよ！ 二週間もBARを開けなかったんだぞ、こつちがどんだけ心配したか！」

「あらやだ、心配してくれるの？ 嬉しいわあ」  
「茶化さないで！」

いつの間にか、身内認定をされている……のかもしれない。

そんな心配してくれるとは思ってなかった。実は一週間前には戻ってきていて、研究所やビーダには連絡済みとかそんなことはいえいえそんなそんな。

「ま、とりあえず座りなさいよ」

「……ふう。ごめん、取り乱した。……とにかく、無事でよかったよ」

「それについては、私も謝っておくわ。ウラナガのこと」

「あ……いや、いいんだ。薄々わかつてる。……でも一応、聞かせてほしい。あの人が、  
どういう選択をしたのか」

「ええ。——彼はあの場に残って、妹さんと最後まで過ごすそうよ。元より改造に改造  
を重ねていた身体。そもそもの寿命も、そんなに長くなかったみたい」

「そ、つか……」

どこまでも冷たい視線は、大吾君とジュニちゃんからね。

ふふ、この場で嘔吐き呼びわりしてこない辺り、なにか言いたい事があると見たわ。

「そ・れ・よ・り」

「わ」

「藍沙ちゃん！ んん、久しぶりねえ！ ふふ、この柔餅肌！ そしてこのおっぱい！

ね、どう？ 快復記念に私とワンナイト——」

「あ、ごめんなさい。お断りします。私、好きな人がいるので」

「んんんド直球に振ってきたわねますます好きになっちゃったわ!!」

久しぶりの御対面だ。

なんでも紅のアーグの時にはイーリスの魅了に晒されてジュニちゃんの睡眠剤によ

り気絶、起きたかと思えば件の悪魔に乗っ取られていて、その反動かあの抜け殻を倒し切った後も一日は目覚めなかったのだとか。

蒔菜さんからも心配の着信履歴がこれでもかかって程に届いていて、多分家に帰った直後はそれはもう熱いハグと厚いペーゼの嵐だったのでしょうねえ。

「……あの悪魔の件について、なんだけど」

「いきなりね。ええ、聞いているわ。悪魔とABSと貴方達で強制転移祭り。私も参加したかったわあ」

「いやそんなのほほんとしたものじゃなかったんだけど」

とりあえずお水に見せかけたお酒をカウンターに置く。無味無臭のお酒を造る、というのがどれほど至難か、それが分かってくれるのはビードくらい。ただ彼は分かってくれるけれど「味も匂いも無かったら酒である意味ねえだろアホか」とか言ってくるのでアイツと飲むのはやめた。

「で、悪魔？」

「うん。倒したと思ったら、全員が符術協会の外に強制転移されて、その瞬間に符術協会の建物が丸ごと終わった」。……あれはやっぱり、悪魔の仕業だったのかな」

「それは……普通に違うんじゃないかしら？」

「どうしてそう思うの？」

「だってそれ仕掛けたの私だし」

ガクつ、と。

イアン君の首が落ちる。百合かしら。

「最終手段よ。あの悪魔が建物外に逃げようとしたら、貴方達ごとあの建物を消し飛ばすつもりだったし、倒せたら、貴方達を弾き出してあの建物を消滅させる符術を仕掛けておいたの」

「怖い事するな!?!」

「あのね、イアン君。私は符術協会が嫌いなの。今回の一件でさらに嫌いになったわ消えたけど。だから消したかったの。これで納得してくれる?」

「な……つとくは、しかねるけど。まあ、理由はわかったよ」

「そ。踏み込まないでいてくれるのは正直助かるわ」

何も気付くことなくお水風にお酒を飲んでいくイアン君。と藍沙ちゃん。

大吾君とジュニちゃんは流石にガード硬いわねえ。

「……もう一つ、聞きたい事があるんだ」

「何かしら」

「——『箱庭計画』、について」

「『箱庭』?」

うわあ、と。

これ絶対ビーダが漏らした奴だ、と。

もう手に取るようにわかる。私が隠し事をしていたから、アイツも意趣返しにこつちの困る事してきたってワケね。早めに殺しておこうかしらアイツ。

「とぼけなくてもいいよ、アズ。『箱庭計画』、というものが極秘裏に進行していることは知っている。エウリス・ビーダから聞いたんだ。”俺達 Absurdus は、そもそも『箱庭計画』を阻止するために集まった組織だ” って」

「そう。それで、どうしてそれを私に聞くの？」

「……聞いたんだ」

「ビーダから？」

「ううん、エヌから」

エヌちゃああああああん！

未だ出会えていないエヌちゃああああん！

なんなのアナタ！　なんで私のそんなプライベートなコト知ってるの!!

「そ、そう。それで、なんて聞いたのかしら」

「『箱庭計画』を主導しているのが、アズだってこと。『箱庭』は今ある人類の文化や歴史、そして人類そのものを『箱庭』と呼ばれる世界に移し、未来へ遺す計画。……そしてそ

の計画の為には、多くのリソースが必要だ、って」

「——随分とまあ、詳しいわね、エヌちゃんは」

「そして、こうも聞いた。……『箱庭』は、本来必要のないものだ、って」

「へえ？」

お酒が入って饒舌になってきたイアン君。

聞いてあげましょうか。エヌちゃんの言う『箱庭』について。

「この世界が”終わる”のは……悔しいけれど、自然の摂理。僕の異能も、間に合うかどうかはわからない。けど、『箱庭』は……そういう摂理とか、”終わり”に対して必死に研究している機関の頑張りを全て台無しにする計画。何故って、『箱庭』の製作には膨大なリソースが必要だから」

「……」

「それは——世界を”終わらせる”程の規模の、量の」

なるほど。なるほど。

なるほどねえ。

「『箱庭』を作らなくても、世界はまた再生する……んだよね、アズ。今まで通り、僕らは知らないけれど、前もその前も、そのずっと前も、そうやってこの世界は繰り返し返してきた。苦しい悔しいけれど、僕らのこれからって時期に、その境目が来てしまった、と



「うだけ」

「それはまあ、肯定するわ。『箱庭』を作らずとも世界はまた繰り返すでしょう。けれど、当然だけど、この世界は“終わる”。貴方達も例外ではないわ。どんな異能を持つていたとしても、”終わる”のよ。次なる世界が出来たとしても、そこに貴方達はいない。それを摂理、だなんて受け入れられるの？」

「——それでも、今ある世界を潰してまでやることじゃ——無いと思う」

……ふうん。

ま、その限られた情報量で、そんな答えに行きつけるのは褒めてあげましょう。

いつからそんな正義漢になったのやら、という感じだけど……さてはて。

「『箱庭』の製作は止めないわ。それは私の悲願だもの。貴方に諭されたところで、糾弾されたところで、絶対にやめない」

「……だよ。僕も、アズを言葉で説得できるなんて思っただけよ」

「ならどうするの？ 力尽くまで止めてみる？」

「それも難しいと思う。あのエウリス・ビータと長年の付き合い、なんて。どんな隠し玉があるかわかったもんじゃやない。符術協会を消したあの符術も、あの時作った匣も……僕らじゃ及び付かない技術だったし」

「うんうん、力量差を理解しているのは良い事ね。それで、貴方はどうするのかしら。言

葉でも力でも及ばない。けれど『箱庭』は作らせたくない。聞かせてちょうだい、イン君。貴方の出す答えを」

大きく、グラスの液体を呷る彼に。

中身がお酒だと分かっているのだろう、途中から飲むスピードを緩めた藍沙ちゃんに。

そして厳しい目でこちらを見続ける二人に。

問う。問いかける。

”停める”よ”

「——へえ」

「僕の異能が”終わらせない”——”停める”事だつて教えてくれたのは、他ならないアズだ。だから僕はこれから、ありとあらゆる”終わり”を停める。『箱庭』に使われないうように、何もかもを停める。僕はこの世界を”終わらせない”」

そっか。

そっかそっか。

じゃ、アナタは——。

「貴方の、その程度の異能で。私の幾星霜もの妄執を、停められると?」

敵に回るのね、私の

空気が変わったのを察知したのだらう、大吾君とジュニちゃんが臨戦態勢になる。イアン君は酔っている、けれどまあ、変化くらいは感じ取っているだらう。

藍沙ちゃんは……あら。

「停める。停めて見せる。世界の”終わり”だって、停めて見せる。そうして『箱庭』に使えるリソースを全部失くしてやるんだ」

「ふふ。大言壮語が過ぎるわ。貴方には何も停められない。守れない。と、言いたい所だケ・ド」

指を鳴らす。

するとアラ不思議。グラスが一つ、メモ用紙に早変わり！

簡単な錬金術なんだけどね？

「コレ、あげるわ」

「……これは？」

「エメトとアリアス、そしてオーディアの故郷の座標。どれもが全て”終わった”国——だから、ちゃんと見てきなさい。自分が停めようとしているものが、どれほどのものなのか。そして」

「——僕のこのちっぽけな決意が、君の理念に並び立てるかどうかを見極めてこい、つてことだよね」

「ええ。その上で私を停めると言うのなら——ちゃんと相手をしてあげる。勿論誰を仲間に引き連れてきてもいいわよ。エメトでもビーダでも、世界中の殺し屋でも」

「たった一人で勝てる、つて?」

「ええ」

そうはならないと知っているけれど。

そうなるとしたら——それは、甘美かもしれない。

最初もそうだった。

一番。最初の最初。私がまだ人間を十全に理解しきれていない時——私は全人類の敵になった。

懐かしい話だ。何千億と前の話だ。

「それじゃ——いつてらっしやい」

「へ?」

「どうやらソツチの二人は私に用があるみたいだから——ほら、藍沙ちゃんと新婚旅行  
よ」

また指を鳴らす。

返事とか、ちよつぱり頬を染めた藍沙ちゃんとか、一切確認せずに——強制転移！  
行先はオーディアの故郷。名前の”終わった”国。じゃあね。

「……これでいいかしら？」

「ああ」

「いいよ。イアンには聞かせられない話だし」

じゃ、こっからが本番ね。

「まず、一つ。今の話は嘘だな？ 『箱庭』が全世界を潰す程のリソースを必要とする、という話」

「ええ。そんなには要らないわ。あるに越したことは無いけど」

「何故そんな嘘を吐いた」

「それは教えられないわ。強いて言えば、イアン君にはもっと強くなってもらわないと困るから、かしらね」

「……嘘ではないが、本当でもないな」

「あらやだ。怖い眼ねえ」

険悪ムードで始まったお話しは、大吾君からの切り出しが先手。

ジュニちゃんはノートPCを取り出して、何かを打ち込んでいる。アムドに貰ったガ

ラクタとは違う、本物のPCだ。結構高いはずなのだけどね、PC。”今回”はあまり電力技術が進んでいないから。

「アムド・多良戸先輩は——お前が殺したな、アズ」

「ええ。その妹も同じ。何か問題あった？」

「……いや、無い。先輩は何故か俺に殺意を向けていた。俺に覚えはないが——彼が殺人鬼ウラナガであったというのなら、納得も出来る。ただ真実が聞きたかっただけだ」  
「そ。ちなみにだけど、イーリスは違うわよ。むしろあのコの願いを叶えてあげたというか」

「……本当らしい。あの暗闇の中に、イーリスがいたのか」

「別れでも告げなかったのかしら？」

「いや。ただの所感だ」

「あらそう」

この子も随分ときっぱりしているわねえ。

ウエイン姓であるとは思えない程に善意を感じ取れない。けど悪性でもない。

守りたい物だけを守れたら、それでいい。そんな感じ。

「じゃ次私、良い？」

「良いわよ、ユンちゃん♪」

「……次その名前で呼んだら、この店に火つけるから」

「それは怖いわ。ごめんね、ジュニちゃん」

「ん。……聞きたいのは二つ。まず一つ。符術協会の奥……本来なら入り口の方からしてた、あり得ない程濃い血の匂い。アレ、やったのはアンタで間違いない?」

「ちよ、ちよつと。酷いじゃない。ジュニちゃんはもつと天真爛漫な口調で」

「アンタで間違いないのね。……私、アンタの事身内だと思っただけだから。ああいう可愛いジュニちゃんを見せるのは、仲間か、敵だけだから」

「それは残念ねえ」

仲間には仮面を。

敵には幻影を。

じゃ、これが素なのね。素を私に見せてくれているのねえ!

「ま、正解よ。悪魔を造るのも、リソースを異相に溜め込むのも私にとって禁忌だったから、潰したわ。何か問題は?」

「無い。別に私もあそこは潰れて良いと思っただし」

「俺も同感だ。未練の無い魂を限世に引き留める所業自体、見ていて耐えられるものはなかったしな」

「あら、気付いていたの? 西区のゴーストタウン」

「ああ」

気付いていて何も言わなかったのねえ。

いやあ、中々。

「質問二つ目。いい?」

「ええ、どうぞ」

「『箱庭計画』の本当の目的」

「……本当の、というと?」

「一々説明させないでよ、面倒くさい。あり得ないでしょ。今の人類の文化や歴史、そして人類そのものを『終わり』の及ばない世界に移住させて未来に遺す、なんて」

「そんなにあり得ないことかしら」

「あり得ない。だって”今回”の人類は、貴方の禁忌に触れた。それを残そうとするはずがない」

あらら。これは口が滑った、という奴かしら。

それに”今回”ね。

「——ええ、肯定するわ。『箱庭計画』は、そんな目的のためのものじゃない。こんな争う事しか知らない人類を遺したいなんて、欠片も思っていない」

「だから、何。本来の目的は。本当の目的は。……それに、エヌは関係している?」



「それじゃあ三つねえ。どっちかに絞って」

「……本来の目的」

「あら、エヌちゃんはいいの?」

「だって会った事ないんでしょ。聞いたって会ったこと無いから知らない、で終わる」

「……鋭くてヤになるわ。貴女、見てくれはそんなに可愛いのだから、もつと可愛らしくしていたらいいのに」

「生憎だけど、この美貌は武器だから」

「怖いわねえ、ホントに」

暗殺者ユン。

某国の暗殺組織が筆頭にして、“終わり”によって組織が壊滅した後も、近くの国を一夜で滅ぼしたという伝説の凶手。

奪った命の数だけで言えば、Absurdusなんかメじゃない。優に超えて、一番になれるだろう。まああそこの階位は殺した量、じゃないんだけど。

「本来の目的は、『箱庭』の破壊よ」

「……大吾」

「本当の事を言っている。嘘じゃない。紛う方なき本心だ」

「どういう……こと? 『箱庭』の製作がアンタの目的じゃないの?」

「『箱庭』の製作なんか、もう終わっているもの」

「!」

そんなもの、すでに出来上がっている。

だからTKが一生懸命テストをしてくれているのだし。あ、そういえばワズタム死んじやったのよね。んもう、別れの言葉くらい告げてくれたっていいのに。

「なら……『箱庭』の破壊って」

「質問は二つだけ、でしょ」

「……わかった」

「あら、物分かりがいいわね。もっと食い下がるかと思っただけ」

「初めに私が条件を提示した。アンタは了承した。故に契約は成立した。命令違反はしない」

「依頼主との契約は反故にしない、という命令ね」

「……ふん」

ジュニちゃんは。

そのたわわなおっぱいの下で腕を組んで、そっぽを向く。

やだ、揉んでみたい。

「もうお話は終わりでもいいかしら。それならそろそろ、アナタ達もイアン君の所へ飛ば

そうと思うのだけど」

「待て。もう一つだけ聞きたい。良いだろうか」

「ええ、いいわよ。一つだけね」

大吾君の質問。

それに私は——肯定を返した。

「それじゃ、いつてらっしやくい！」

「——」

頑張つて、沢山学んできてね。

この世界がもう、本当にどうしようもない、つていう事実を。たつぷりと。

少しだけ昔の話をしよう。

昔むかーしの、あやつぱり少しだけ昔の話。

とあるところに一つの国がありました。ありましたとき。

「……これは、砂……？」

「でも、砂漠じゃない。誰も住んでないけど家もあるし、広場や噴水だって」

その国は豊かではありませんでした。ありませんでしたとき。

自然に囲まれた緑豊かな国でしたが、懐が豊かではありませんでした。国民が笑えど暮らせど働けど、豊かにはならず——ただ、ただ、老いていくだけの国。

これ以上先が無いと知って尚、ただ寿命を費やす国民。けれど、国はそうではなかった。国は——その頂点は、どうにかこれを脱しようとした。老いさらばえて行くだけの自国を、若かりし頃にまで取り戻そうと。取り戻さんとして。

王様は、金を創り出そうとしました。しましたとき。

「……多分、錬金術って奴なんだと思う。オカルト系の雑誌で読んだことがある」

「そりゃ、僕だって錬金術なんて名前くらい知ってるけど……それは御伽噺に近い、魔法

とか精霊術とか、そういうファンタジーなものじゃないか。そんなの」  
「でも、悪魔はいたよ」

「！」

王様は金を創ろうとしたのです。けれど、無から有は作り出せませんでした。だから既にあるものを金に変えようと思いました。初めは鉱石を。次に土塊を。次に水を、樹木を、花々を。

この国を彩る様々なモノを金に変換しようとして、けれどその悉くが失敗しました。失敗して、ああ失敗したというのに——使った鉱石も、土塊も、水も。あれだけ豊かだった樹木も花々も、全てが白い粒に変わってしまったのです。変えることが出来た、と。そういうべきなのでしょう。

対象Aを対象Bに作り変える——それこそが錬金術の基礎。故に結果そのものは得られていたのです。ただ、レシピが違った、というだけで。

「……砂じゃないな。珪砂……硝子のような」

「限素、だと思おう」

「藍沙？」

「……前に見た事があるんだ。ヒトが——ヒトを構成する限素が、出来て行く所。その時に見たのも、触ったのも、コレと同じだった」

「……じゃあ、コレは」

王様はそれでもやめませんでした。失敗こそが成功への近道だと言って、止める臣下も振り払って、ただ自国を思つて。毎日毎日、夜でも朝でも昼でも研究に没頭して。自然がだめなら、命を。鼠を、鳥を、ウサギを、ウシを、ヤギをヒツジを——そして、ヒトを。

その甲斐あつて、ついに改良することに成功したのです。

”今回”において発展しなかつた、誰もが手を付けなかつた錬金術。それをたつた一人で、独学で——新しい扉を開いたのです。

子供一人を、爪の先に乗るくらいちよつぴりな、輝くモノに。

錬金したのです。

——あるいは”今回”でない世界の錬金術師たちが、「余りに非効率だ」と切つて捨てた、金の錬成術<sup>レシビ</sup>。

必要なものは素材でした。自らの所有するもので、金にかえていいもの。自らの所有する者で、金に換えて良い者。そして、王様は王様だったので。

その国は、王様のものだったので。

錬金術は法則に従い、対象Aを対象Bに変換せしめました。

「ああ——全部、ヒトだ。ヒトだったものだ。王を含め、子も、親も、何者でもない者も。

全てがソレになった」

「オーディア……」

全国民を、もつとも有用な限素に。

全国民の肉体げんそを、なんでもない、何物でもない限素に変えて見せたのです。

輝いていたから金だと思つた——美しく透明な、周囲の光を通す粒に。

「フン。我らが故郷に踏み入つた者がいると報告を受けて駆け付けたが、小僧たちだつたとはな」

「……すまない。貴方の故郷を汚すつもりはなかつた」

「どうせ飛ばしたのはアズだろう。そも、ここは“終わつた”国。周辺域を通つたとしても、存在自体に気付かず素通りする。小僧たちは学生だつただろう。習つたか——砂になつた国の話、など」

「……いいや。僕達は今でさえ、この国の名を知らない」

「それが“終わる”ということだ。この国は……王は自滅だが、なににせよ同じこと。この砂とて、もうすぐ“終わる”。肉体でも自然でもない単なる限素として在るコレだが、勿論、寿命が存在する。ただ少しばかり他よりは長かろう。何の弱化も食らつていない限素。生命活動として消費されることのない限素は、寿命が長い」

そうして出来上がったのがこの国。

その時まで、その瞬間まで普通に生活をしてきた国民を全て限素の砂に変えて。

代償に——王様は、現れた「終わり」に包まれて。

はい。これがこの国のお話。

この国がありましたとき、とされる——名前すらも奪われた、誰にも見えない国のお話。

そこに広がるのはただ、陽光を、月の灯りを受けてキラキラと輝く砂の山。

誰にも認識できない「終わった」国。

自らの故郷についてを語り終えたオーディア。

その表情に悲しみはない。怒りもない。もう過ぎた事だと、吐き捨てるように言う。

言って——拳を握った。

「決着をつけるか、小僧共」

「決着? どうして……僕らには貴方と戦う理由が無い。それはそっちも同じはず

じゃ」

「お前はあの時、あの悪魔を倒した時、ボスにこう言ったな。世界の”終わり”も停めて



みせる、と」

「……それは、うん。そうだよ。この世界がもうすぐ”終わる”っていうんなら、僕の異能で停めてやる」

「ならば我らとも違<sup>たが</sup>う。我らの主目的は『箱庭』の阻止だが、儂はそも、この世界に続いてほしいなどと思つてはいない」

ファイティングポーズで。けれど彼には片腕が無い。

イアンが「終わらせた」から、だから、片腕で。

「迷惑な話だな、それは。爺さん、アンタが一人で死ねばいい話だろう。アンタの願望で俺達の未来が潰されるのは流石に納得出来ねえ」

「あーあ、話の分かるおじいさんだと思つてたのに——結局狂人集團の一人かあ」  
すぐに戦闘の準備を整える二人。

けれどイアンは、構えない。その傍らの藍沙も。

「——殺して欲しい、と。そう言っているように聞こえる」  
「そう言った」

「やっぱり、か。この国で——生まれ故郷で、”終わらせて”ほしいんだね」

「そうだ。だが——抵抗もしたい。ところで、儂は政府施設専門の爆弾魔でな。ウラナガ程ではないが——仕掛けや準備はする方だ」

「ッー！」

イアンが藍沙を抱きしめ、大吾とジユニがそれぞれ背後に下がった瞬間——地面が爆発した。

「いつのまに……!?!」

「初めから、だ。この国が砂になった時。否——あの憎き王が子供を実験に使い始めた時から、国の各所に仕込んでおいた。ふ、未だ息の根ある爆弾は少ないが——お前達を殺すには十分だろう」

「お爺さんにとって、私達は子供なんじゃ——」

「ああ！ だから、ようやく狂ったのだろう。ようやく狂えたのだろう！ 70に縋る妄執の果てに、儂は自らの標的さえも失ったらしい！ ははは、ははは！ どうだ、小僧」

「これなら殺せるか、って？ ……ああ、いいよ。自殺に付き合っただけよ。僕はまだ死ぬわけにはいかないからね」

「——感謝する」

謝辞は告げる。

闘志は消さず。

オーディアは——ただ単身、数多の爆発物と共に行く。

「藍沙！」

「うんっ！」

その身は老兵。いつ倒れても、いつ手折れてもおかしくはない。

故に死兵。自らさえをも巻き込む爆弾を、知覚外から起爆させる。

藍沙が符を張る。足場を創る。壁を創る。

それを蹴つて、三人がたつた一人を殺しにかかる。

「ハはは——良いぞ、娘！ 貴様、ただ守られているばかりの、戦場には場違いな者だとばかり思うていたが——成程、似ている！」

「——ありがとうございます」

最近お荷物だった、なんて。

そんなの、藍沙自身が一番感じている事だ。けれど決して、彼女に戦う術が無いわけではないのだと。教えを請うた事は無いけれど——その父に、ああ、よく似ていると。

オーディアアは笑みを深める。殺しを自分達に任せ、そのサポートに徹するあの方と。

「なれば狙うのは——」

「それをさせないのが僕達だ！」

懐から取り出したるは手榴弾。小型ではあるが威力は十二分。

口でピンを引き抜き、符を展開する少女に向けて投げつけんとして——しかし掴まれ

る。既に手から離れた手榴弾を掴むなど普通はあり得ない事だが、掴んだのが万象を「終わらせる」手であるというのなら話は別だ。

爆発ごと、破裂ごと「終わっていく」手榴弾。この世を構成するものが全て限界である限り、たとえ現象だとしても「終わり」からは、あの手からは逃れられない。骨の手。所有者の意思と関係なく、キシリキシリと動く手。

「だが、小僧——お前の弱点は、その手以外であろう」  
ならば、と。

オーディアは取り出す。失われた左腕。風にたなびくコートの裾から、バラバラと小粒の球体が零れ落ちる。

それはイアンに向かって雨のように降り注ぎ。

「今日の天気は——酸性雨——」  
「ムッ——」

飛び退く。酸性雨、などとは名ばかりだ。

限界の砂を溶かし尽くす高压水流——それが、先ほどまでオーディアの頭の在った場所を通り過ぎる。酸であるのは間違いないが、決して雨ではない。

イアンにばら蒔いた爆弾も、藍沙の符によって防がれる。壁。足場。成程符術師らしい動きをする。

「隙ありだ、爺さん——」

「ふん、見せたのは儂だ、若僧」

バックステップは隙が多い。姿勢を整えなければいけないからだ。何より地面が砂であるため、その体の制御は普段より難しくなる。

その隙を狙つて、大吾が来た。

所有する異能は魂を見る淨眼。戦闘には役立つソレは、けれどハンディキャップにはなり得ない。彼の鍛え上げられたその体は異能など必要としない——単純明快な暴力。

即ち拳。老骨に入れば砕け散るだろう威力の大砲。

だが。

「ッ!? 掴まれた——いや、そもそもこの感触は——」

「片腕を失くしているのだ。もう片方も落とすくらい、ワケはない」

明らかに金属だった。

大吾の拳を受け止めたその手は、その手が響かせた音は、鋼鉄のそれだった。

そしてそれは——くたびれたコートを赤く燃え上がらせる程の熱を放つ。

「残念ながら一人だけしか持つていけないんだか。まあ、十分であろう。なあ——ウエインの名を持つ若僧。英雄の息子！」

「——すまない、助けてくれ、エヌ！」

「っ!？」

大吾が助力を願う。

その相手はジュニでもイアンでも藍沙でもなく。

しゃらん、と。

美しい音と共に降りてきた——音よりも美しき少女。

既に引き抜かれた刀。既に振り下ろされた刀。

ソレは、オーディアの腕を切断し——。

「短い間だったけど、世話になったよ、お爺ちゃん」

「……そうか。約束をした、もの、な。儂が狂ったのならバ——引導を渡して欲しい、と」

「うん」

直後、首と腕と足が切断されていた。

限素の砂にドサドサと落ちるオーディアだったモノ。落ちた瞬間、さらに細かく崩れ

て散らばる。

「さいようなら」

これにて決着はついた。

オーディアvsイアン一行は——横槍、エヌの勝利。

そして。

周囲に灯りが漏れ始めた。

キラキラと——砂が、いいや、残っている家々までもが。

輝かしい暗闇に、真つ暗な光に変わっていく。

「エヌー」

「やあ、久しぶりだねイアン」

「やあ、って……」

切り落とされて尚大吾の腕を離さなかった鋼鉄の腕も、細切れにされたオーディアの身体も。

全てが黒白の粒子に変わっていく。

「この国の生き残りは二人だけだった。オーディアと、もう一人……この国に入らんとする者を殺す、あるいはオーディアに報告をする役割を持つ一人。ソイツも私が殺してきた」

「殺してきた、って……」

「だからもう、この国を覚えてる者は一人もいない。記憶に残らない国は、不要になるんだ。誰の記憶にも残らない——誰の感情も動かさない限素に、価値はない」

おいで、と。

手を引かれる。足場だ。符術の結界を応用した足場。藍沙も使うそれを、エヌも当然のように使う。

「みんなもはやく、空に来るんだ——巻き込まれるよ」

瞬間、奔流が来た。

湧き上がる圧。流圧。これは、リソースの嵐だ。

エヌに手を引かれるまま、後方のみんなを気にしながら足場を上がっていく。その間もリソースの嵐は止まらない。

嵐が、嵐が。強嵐が。台風が。

先程までそこに在ったナニカが——「終わって」いく。

「イアン。これを止めようと思う?」

「え——」

言われて思い出した。

そうだ、「終わり」を止めれば。「終わって」いく構造物を止めれば、僕の異能は鍛え上げられる。



だから、そうだ。じゃあこれを。

「……あれ」

眼下、全てが「終わって」いく。

無事に難を逃れた仲間たちの下で、美しき砂粒が解けていく。解けて、溶けて、融けていく。

あそこに何があったのだろう。あそこに誰がいたのだろう。

あそこには——何故、あんなにも砂があったのだろう。

「異能の対象ってさ。イアンは、どうやって選んでる？」

エヌが唐突にそんなことを言う。

足場を繋げ、こちらに合流してきた皆にも聞いているように思う。

「それは、目で見て、かけるぞ、って意識をして」

「それで出来た試し、ある？」

「……」

出来ない。

出来ないのだ。

全てが「終わって」いく下の砂場に、いくら“終わらせない”異能をかけようとして

も——かからない。

やる気が、起きない。

「大吾もそうでしょ。何も普段から全員の魂を見ているわけじゃない。見ようと思った対象だけを選んでる。それは、どうやってる?」

「……俺は、決めているだけだ。この目を使う時は、仲間のためになる時だけだ、と。見る対象ではなく、使う理由を軸にしている」

「なるほど。ちゃんと自分の異能を理解しているね」

いくら手を翳しても。

いくら念しても。

眼下の「終わり」は停まらない。

当たり前だ。だって、やろうとしていないのだから。

「知らないでしょ、イアン。この下にあるものが、なんなのか。なんだったのか」

「……ああ」

「知らないものは、大切に想えないんだよ。知らないものは無いのと一緒。忘れてしまったものは、無いのと一緒。誰も知らない限素は、誰の感情リソースにも干渉しない限素は——不要と断ざれ、破棄される。世界から——そして、私達からも」

それが、本当の「終わり」。

エ又は静かに言う。

「自分達が誰と戦っていたのか、覚えてる？」

「……え」

「大吾君。私に助けを乞うたのは何故？」

「……上空にエヌの魂が見えた。だから情けなくも、助力を乞うた。だが……」

「誰に殺されようとしていたのかは覚えてない……つてコトかあ。嫌だね。すつごく気持ち悪いカンジ」

リソースの奔流が、「終わり」が、次第に勢いを弱めて行く。

残るのはただ——何も無かった、という事実だけ。

何故僕らがここに居るのかも。

何故僕らがそれを苦しく思うのかも。

全て、覚えていない。

「オーディア、だよ」

「——藍沙？」

「オーディアっていうお爺さんと私達は戦ってた。死に場所を探していたお爺さんと、王様が過ちを犯して”終わって”しまった国で、戦っていた」

「オー……ディア……」

言われてもピンと来ない。

ただ藍沙だけは、覚えているらしい。今までの事を。

どうして藍沙だけが。

「藍沙、君は……」

「そうだ、それよりもエヌ！ 何があつたのかは知らないし、わからないけど、僕らの元  
に、」

「ああ、まだ言っていたのか、ソレ」

「え——」

一瞬だけ藍沙に向けた興味の日。

けれどそれは、僕を見ると同時に冷たいものになった。

「前も言ったけど、私は世界と戦う事にした。『箱庭』とね」

「そ、それは僕もだよ。『箱庭計画』なんか、『箱庭』なんか作らせない。そのために、世  
界の”終わり”も停める！ だから」

「でも君は今、止められなかったよ。この下にあつたあらゆるものの”終わり”を」

「それは」

「大切に想えるのかい？ 世界を。”終わったら”忘れてしまうこの世界を。君の知覚  
している狭い狭い世界だけじゃないんだよ、世界って。もつと広いんだ。もつと広くて  
——もつともつと、”終わっている”。ここだけじゃない。色々な場所で、様々な場所

で、”終わり”は起こっている。それを知っている？ 覚えている？ ——その全てを把握して、その全てを大切に想って」

エヌが刀を引き抜く。

目を奪われる刀身が——僕を向く。

「まず、この世界の名前を知るところからだよ。そしてちゃんと考えるんだ。そんな簡単に、軽々しく放つ言葉なんかじゃなくて——”この世界を停める”。”終わらせない” という言葉の本当の意味を」

転移の光。

それが包むは、エヌ……じゃなくて、僕達。

「強制転移のツ……!?!」

「多分、次の国はアリアスの国だ。覚悟しなよ？ あそこはここ以上に、終わっているからさ」

皮肉気な笑みと共に。

僕らはまた、エヌと別たれた。

——” F T R M 3 U にも、愛情というものがあります。アズ。F T R M 3 U のそれは今、T r e f o i l K n o t に向いています”

「好きなの？」

——” 親心。あるいは弟に対する親愛、でしょうか。F T R M 3 U は……T r e f o i l K n o t が落ち込んでいる事実には、悲しい、という感情を覚えます”

「ええ、それは私も。……全く、ワズタムも死ぬなら死ぬで、一人で死になさいよ。なんだって T K とカムナリに死に様を見せつけるなんて真似を……」

——” 一つ、教えてくださいませんか、アズ。F T R M 3 U に知らない知識がある事は、不確かな予知を生む可能性が生じます”

「ええ、なんでも聞いて頂戴」

——” 理外とは、なんですか。アズ。ワズタムと貴方が属するという、この世界のどれとも当てはまらない性質。同じく「終わらない」存在であっても、カムナリとは違うと聞きました。アズとワズタムは、私とは違う。似ているけれどね、と”

まあ、そろそろ聞かれるだろうな、とは。

考えていた。予想していた。むしろここまで我慢したのは偉い方でしょう。

”理外” というのは、文字通りよ。理の外。この世界の理……すべての始まりは無であり、リソースによって膨張し、世界を生じ、終わらせ、更なるリソースを求めて無が、

世界が成長する、という理。そのの、外側」

——” F T R M 3 U の観測できる世界の、外側、という認識でよろしいでしょうか”  
「いいえ。もつと外よ。アナタに観測できるのはこの世界の全て。けれど、この世界の外側には無が広がっているの。宇宙のさらに外よ。アナタは今全宇宙を把握しているから、その外、なんて言われてもピンと来ないでしょうけど……この世界にも外があるの。そしてその更に外が、理外」

——”ならば、理外の錬金術師とは。理外の傍観者とは。何を指し示す言葉ですか”  
「そうねえ。ま、簡単に言えば——」

主人公、かしらね。

そうあれと、作り上げられたシナリオの。

世界中の人間が「終わり」を意識した——それが本当に自らを滅ぼすものであると認識したのは、やっぱりある大国と小国の戦争——それが「終わった」時からだ。

勿論それまでも「終わり」はあった。当然のように、限素とは寿命を迎えるものだから、と……誰しもが知っていた。学校で習う以外にも、そもそも日常的に起こり得ることだから。捕まえた虫の寿命が来て、「終わった」。花の水やりを怠って枯れて「終わった」。老人が子や孫に囲まれて死に、「終わった」。

無論程度の差はある。生命活動の停止が「終わり」とイコールではないことから、遺骸を燃やす、埋める、などして「終わり」までの猶予を設ける者もいる。そうして悼み、そうして泣いて、けじめをつける。

けれど、あの戦争の「終わり」はそれが無かった。

唐突に訪れた、神の采配とでもいうべき「終わり」。悲しむ暇も悼む暇も抵抗する間もなく訪れたその消失に、ようやく世界は「終わる」のだという確信が芽生えた。

そこから頻発するようになる唐突な「終わり」。昨日まで元気だったヒトが、振り向いたらいなくなっていた、なんて話も珍しくは無くなった。家に引きこもっていた子供の



部屋をノックしたら、今まさに「終わる」所だった、なんて話もある。

急かすように。あるいは、見捨てたように。

世界のいたるところで、唐突な「終わり」が発生し続けている。

「更地、だな」

「うん」

そこは更地だった。平らな、という意味ではない。クレーター状だから、起伏はある。ただ、何も無かった。砂塵の一粒たりとて落ちていない。

「……」

「ジュニ?」

「……ん。ああ。なんでもないよ。ただちよつと、懐かしかっただけ」

「懐かしい? ジュニはこの国の事覚えているの?」

「うん。前に行った事があるから」

「へえ。どんなところだったの?」

「……私が行ったことあるのは大国……アルジュイラって方だけど、あんまり難しくはなかったかな」

「難しい?」

「観光がね。大通りが一本こうあって、それに繋がる路地が幾本も生えている、みたいな

形で……」

大吾の「よく自分から話を切り出したな」という視線を受け流し、ジュニは髪を弄りながら——言う。

「でも、凄いな、”終わり”って」

「凄いな、って……何が?」

「私はアルジュイラに向かう、って目的があったから、その名前を覚えていたけれど。……ヒトの顔も、何を作っていたのかも、何があったのかも……全部忘れてる」

「でも地形は覚えてるんでしょ?」

「地図があったからね。それを覚えてただけだよ」

その視線はもつともだ。

何もわざわざ言い出す事でもなかったな、とジュニは自省する。暗殺者として動いていた頃の話など、わざわざひけらかすような話でもない。

ただ、大図だっただけに、標的も多かったから。

その地図が頭の中に入っているのに——街並みの一切が思い出せない事実には、愕然とした。

ジュニの記憶の中でも、この国は「終わって」いるのだ。

たとえば切っ掛けが戦争であったとしても——本来消えたのは戦争に用いられた全て

ただだったとしても。

この国とあの国は軍事力も民も失い、寿命を迎えた。他の国が教訓にと自粛し始める中で、アルジュイラと戦った小国は、静かに衰退していった。

「おあつらえ向きですね、とは言っておきます」

「……アリアス」

そこに、いた。

女性限定のシリアルキラー。現代を生きる魔族。吸血鬼。

「どういふことだ？」

「言葉を間違えましたか？　ここは私の国です。もう少し向こうに行くと、アルジュイラになります。なりました。でしょうか。だからここに私がいて、私を殺す貴方達がこのにいる。おあつらえ向き、という言葉の意味は間違っていますか？」

「ちようどいい、という意味なら、違うよ。そもそもなんでそんな国の言葉を」

「さて、どうしてでしょう。私の国の公用語でもありませんでしたし、アルジュイラでも違いました。ただ——エヌがその国の出身だったので、エヌの元仲間である貴方達に通じるのか、と思つた次第ですね。多分」

「元仲間、つて。……エヌは僕達の仲間だよ」

「そこについての問答は本人としてください。ただ、悲しいのですが——私は貴方達を

殺さなければいけないようです」

「ッ、……それは、何故?」

何故、と問われて。

アリアスは——首を傾げる。

「何故でしょう。別に私、そちらのお二人はともかく、男の子までに殺人衝動は湧いてこないのですが。もつと言えば、あの時から支給されたリソースを詰め込んだ瓶を常備し、さつきも取り込んできたので、殺人衝動自体が湧いてきていないのです」

「じゃあなんで殺し合いなんかしなきゃいけないのさ。」

「さあ?」

「さあ? つて……。ああ、もう、調子狂うな」

ナイフを構えるアリアス。

ABSの第二位。一度はトラップと毒を使って追い詰めた相手でもある。けれど、素のままの彼女は素直に化け物だ。魔族の名は、吸血鬼の名は伊達ではない。

斬られても裂かれても砕かれても貫かれても潰されても——再生する。そしてそのリソースは、他者からも奪えると来た。そう、イアン達が怪我をすると、それがそのままアリアスを助けるリソースの流出になるのだ。

戦争経験者。前線で戦い続けた歴戦の死兵。

それを相手に傷を負うな、など。

「嘘だな」

「はい？」

「大吾？」

前に出る。

イーリスの時と同じく——彼には、それが見えている。

「本当は殺したくない。本当は殺されたくない。殺せとも命令されていないし、別に殺さずとも良い——と、己に嘘を吐いている。仕方なく殺している。衝動に操られているだけ。だから自分は悪くない——。それさえも、嘘だな」

「イアン・エンハード君。この方、こんなに失礼な人でしたか？ 他人の気持ちを決めつけるような物言いをする方でしたっけ。私、記憶力はそこそこですけど、もう少し弁えたとどうか、控えた男の子だったように思うのですが」

「異能とは育つものだ、アリアス——いいや、名前も偽名か。本名は……アデーリア」

「乙女の心を見透かすのはマナー違反ですよ。——そして、懐かしい名ですね。ええ、そうですね。私はアデーリア。アリアスは娘の名前です。私、実はそろそろ150歳に届くんですよ。誰も祝ってはくれませんが」

「……嘘を吐くな、アデーリア。祝って欲しいなど欠片も思っていないくせに」

問答だ。あるいは口論か。

大吾が見抜く。嘘だ嘘だと。まるで感情の読めないアリアス——アーデリアから、全てを見抜いていく。

だというのに、彼女は動じない。見抜かれて当然なのならば、嘯くだけ嘯いて、本音を聞かれている体で話す——そうしている。

だから。

「このまま帰るのはアリですよ。私達は戦いました、ということにして」

「嘘を吐くな、と言っている。アーデリア。お前は祝ってほしくない。呪ってほしい。死にたい。死にたい。死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい。……イーリスが幸せそうな死を手に入れたのが、ズルイか」

「その眼、面倒ですね。真偽を見る眼ではもうなくなっている——心を読む眼ですか。確かエヌの出身国にそんな妖魔がいたような」

「本音を言え、アーデリア。俺達が叶えてやる」

「……」

だから、アーデリアは思った。

ならば出してしまおうかと。ずっとずっと隠していたものを、ずっとずっと、ボスにすら内緒にしていたものを。

「実は、殺人衝動とか……無いんですよ。最後に見たのが自分より若い女性指揮官だったから、若い女性を狙うようになった、など。——ああ、ここまでとってつけたような理由、ありますか？」

「もつと吐き出せよ。俺には見えている。その——コールタールが如き、どろどろとした感情が」

「実は、吸血さえもどうでもいいんです。再生なんかしなくてもいいんです。若返りたくもない。そんなことより」

金属音がした。

発生源は——大吾を心配そうに見つめていた藍沙の首の裏。

そこにいた、アリアスのナイフから放たれたもの。

「殺したいんです。衝動とかじゃなくて、単純に憎悪です。気持ちが悪い、と。心から思っていますよ。人間風情が——私を従えるなど。私を理解するなど。私から全てを奪ってにおいて、今更何を、と」

「二度は人間を指摘したんだろう。だから人間と番った。だが、寿命差から夫は先に逝き、年齢差から娘にも孫たちにも恐れられる。それは国にも届き——敬うどころか、兵士として送り出した」

「記憶まで見えるんですか。いえ、私の心に浮かんだ情景でも読んでいるとして、それを

言葉に出すのは最低ですね。プライバシーの侵害かと？」

「それでも我慢したんだろう。作ろうとした家族から見放されても、守ってきた国から捨て駒にされても、それでも守り通して化け物扱いされても——お前は我慢した。我慢してやったんだ。人間だった夫が、お前と好き合った彼が、何よりも——それを望んだから」

藍沙の首の裏。

そこにギリギリで挟まれたのは、同じくナイフだ。

ジュニの隠し手。薬品や短針とは違う、イアン達には見せたくなかつた本来の得物。

「お前も復讐者なんだろう。もう、嫌いなんだろう。我慢できないんだろう。人間が、嫌いなんだ、お前は」

「——当たり前じゃないですか。我慢してきた私の家族を奪ったのは“終わり”ではなく人間です。戦火に巻き込まれ、黒ずみとなった娘たちを覚えている。覚えています。その直後に起きた“終わり”なんかどうでもいい。ただ憎い。人間が憎い。これだけ私を縛っておきながら、勝手に死んで、勝手に消えて、勝手に殺して——勝手に“終わった”。そんなの、殺したいに決まってるじゃないですか」

疾い。筋線維の断裂など初めから気にしていないのだろう、ジュニが防戦一方になる程には疾い。



「女性を狙うようにしたのは」

「メスを殺せば、増えるのが遅くなるからです。ただ、それだけだと理由としてもつもらしくないのです、理由をとってつけました。聞かれましたからね。ボスに。エウリス・ビーダに。Absurdusに入る際——お前の殺しの動機はなんだ、と」

イアンの手が、アーデリアの腕を掠める。

瞬間その部位を切り飛ばし、直後に新たな腕が再生する。切り離された腕を掴み、投げつけるは藍沙。それこそ符術に阻まれたものの、符術に込められたリソースが「終わりに」に巻き込まれ、瓦解する。

貼り直しは間に合わない。横合いから投げつけられた短針も毒薬も、一切避けずに突っ込んでいく。刺さろうが貫かれようが溶けようが関係ない。

痛い、というのも嘘だ。痛くない。もう痛くない。そんな感情は彼方に置いてきた。

そして、その頬に触れる。

「貴女には、好きなオスがいるでしょう。——故に殺します。人間の繁殖は、気に障る」  
腹に、ナイフが突き刺さる。それを誰もが見た。

誰もが——幻視した。

「!?」

「大吾!」

「ああー！」

あり得ない感触に驚くアーデリア。その隙をついて、大吾が藍沙を奪取する。

ナイフを見つめて首を傾げた殺人鬼は、キョロキョロと周囲を見渡して——得心が行った、とばかりに手をポンと打つ。

「異能ですか。それも、時間停止？ いえ、頬の柔らかさはそのままだった」

「上手く行くかわかんなかったけどね——致命傷というのは、”終わり”を近付けるモノだろ。ま、どんな傷だってそうなんだけど、致命傷は特にそうだ。だから——”停めた”よ。藍沙、身体に異常はない？」

「うん！ ありがと、イアン君！」

殺人鬼アリアスが何故女性に狙いをつけたのか。

それはメスだから、という理由だけではない。それなら片っ端からいい。別に衝動に突き動かされていないというのなら、世界中の女性を目に付く限り殺していけばいい。己は不死身に近しい存在なのだから。

けれどそうしなかった。

それは何故。何故か。

「——求愛、いや、発情か。成程」

「良いんですか？ お仲間にそんな言葉を使って」

「何、生物として見たら、単なる医学用語だろう」

単純だ。至極単純だ。

殺人鬼アリアスは足の早そうな女性を狙っただけ。実りそうな——つまり、意中の相手がいる女性を。好きな人がいる女性だけを狙うシリアルキラー。それが彼女本来の姿。

熟しきる前に果実を食べる、なんて。腐りきる前に収穫する、なんて。当然のこと。「嘔吐きはそちらも同じかと？ 夢魔程ではありあませんが——見えていますよ、貴方の感情」

「知られて困る事は無い。そして、その程度に赤面出来る程初心でもない」

「成程。聞きましたかイアン・何ハード君。藍沙さんは貴方が好きで、大吾・なんとか君はジュニさんを好んでいるみたいですね」

「!？」

「はい」

明確な隙だった。それは誰が見てもわかる程明確に、明瞭に。

動揺した。バラされた大吾でも藍沙でも——イアンでもなく。

「一人、おしまいです」

首を斬る。狙いは正確だ。

そして、イアンからの視線も自らの身で切っている。異能は基本、対象物を認識していなければ使えない。

空中で、全員の射線上で——明らかな動揺を見せた暗殺者を殺すなど、ワケもない。噴き出る血液。ついだとばかりに吸血も済ませ——ようとして、思いとどまる。そういえばこの子は毒使いでしたね、と。アーデリアは過去の失敗を思い出し、返り血すらも浴びる事無くバックステップ。

次は誰から崩そうか——と考えた、その視界に。  
アーデリアの世界に。

「——！」

ジュウツ、という音を立てて、塞がる傷口が入り込む。

存在が。もういないと思っていたそれが、あり得ないそれが、目に映る。移り込む。世界にそれが芽生える。

「な——まさか、貴女は」

「イアン！」

叫んだ。確実に斬ったはずの喉で、致死量の血液が噴き出した喉で——彼の名を呼ぶ。

隙を伺っていたのは何もアーデリアだけではない。

彼だつて同じだ。

彼だつて——必殺の一撃を持つ彼だつて、同じ。

掴まれたのは、後頭部。

「……殺されるのは、構いません。ですが聞きたい。知りたい。教えてください。貴女……ジュニ、といいましたか。ジュニ。ジュニさん。知らない名です。私達の一族は、半魔の吸血鬼は——もう滅んだものだとばかり」

髪が、頭蓋が、そして脳髓が。

骨の手に捕まれて——「終わって」いく。だらんと手足を投げ出し、ただその「終わり」を受け入れる彼女は、けれど命乞いではなく疑問を投げた。

段々と「終わって」いく——その脳まで消失し始めて尚、アーデリアは、殺人鬼アリアスは、真つ直ぐな瞳でジュニを見る。

「ウソとホント、どっちがいい?」

「——どちらでも」

「貴女の血と細胞を解析して培養して、一時的に吸血鬼になれるオクスリを作っただけだよ」

「——……なるほど」

笑う。

晒う。

嗤う。

アーデリアの身体から——若さが消えて行く。手足は萎れ、全身がバキボキと、ガキゴキと嫌な音を立て始め、折れ曲がり、破碎し、裂け、潰えて行く。

もう頭蓋だつて半分も残っていない。

だというのに、嘲けるように笑つて——ジユニを見た。

「残んでしタ。吸血キというノは——無尽ゾウの再生リヨクを持つわけハない。誰かから奪つたりソースで再生してモ、若返ツテモ——それは、未来の前借デシかない。年長者としてテ、見せてあげマス。吸血鬼ニナル、ということハ、決して——イイコトではないと！」

——どんどんグシャグシャに、グチャグチャになつて良く身体。突然穴が開く。全身が蜂の巣が如き穴だらけになる。そして溶けだす。火傷が広がる。部位が落ちる。

「再セイ? ——いいえ。そんな便利なものジヤ、ない。私達のこれは、先オクリ。負つた傷を、ケガヲ、未来の自分ニ送ルダケ。——だから、どうか恐怖してください。私が斬つた首は——無かつたコトにはナリマセンので——」

ず、と。

イアンの手が、彼女を「終わらせる」前に。

彼女の身体は粉々になって、めちやくちやになって——死んだ。現れる「終わり」はイアンのもではなく。

ただ、ずっとずっと先送りにしていた、彼女自身の「終わり」。そうして——全てが、「終わった」。

「更地、だな」

「うん」

そこは更地だった。平らな、という意味ではない。クレーター状だから、起伏はある。ただ、何も無かった。砂塵の一粒たりとて落ちていない。

「……」

「ジュニ？」

「……ん。ああ。なんでもないよ。ただちよつと、懐かしかっただけ」

「懐かしい？ ジュニはこの国の事覚えているの？」

「うん。前行了った事があるから」

「へえ。どんなところだったの？」

「……私が行ったことあるのは大国の方だけど、あー……やっぱあんまり覚えてないかも」

「ここは大国の方じゃないんだ」

「えつと、多分？ あれ、ホントにあんまり覚えてないや」

首の辺りをさすりながら。

ジュニは周囲を見渡して、言った。

「そんなはず、ないんだけど」

「とういかなんでここに転移したんだろ。アズは僕達に何を見せたかったのかな」

「てゆうか？ がりで言わせてもらおうけど、なんでイアンは革手袋取ってるの？ フツ

に危ないんだけど」

「え。……え、うわっ!? まさか転移の時に置いてきて……!?」

「そこに落ちてるぞ」

「よかつたあ!」

更地だ。見渡す限り更地。

何も無い。

ここにはもう何も残っていない。

リソースを——感情を蓄えていた者までもが、「終わった」から。



もう世界にさえ、記憶にさえ。

何も無い。

何も残っていない。何も遺されていない。

——”じゃ、そろそろ次よ、イアン君”

「ツ、遠話の符術!? どれだけ高位符術だと思って——」

ただ。

ジュニは自らの首を、ずっと摩っていた。

「なあ、エメト」

「何かなボス」

「いやさ、広くねえかこのアジト」

「それについてはドーカン。構成員三人しかいないのに広いとこ借り過ぎたよね」

「馬鹿野郎、俺のポケットマネーで買い叩いたんだよ賃貸じゃねえ」

「わお太っ腹。で、次の殺戮シヨウはどこでやるの?」

「んー。最近名が売れてきたせいで、野次馬が集まって来ねえのがなあ」

「じゃあさ、じゃあさ、ボクのコーアンした奴でもいい？」

「お、いいぞ。なんだ、言ってみろ。たまにはお前も考えることが必要だよな」

「うん！ あのね——」

それはもう、楽しそうに。

今まさに新しい殺しを話そうとしていたエメトが、消える。

「……強制転移。アズか。……なりふり構わなくなってきたやがるな」

「それは当然じゃない？ 悪魔なんてものが出来てしまった以上、『箱庭』へ注入するリ

ソースを早いところ集めて、とっとと閉じてしまいたいのだろうし」

「ま、異論は無えけどよ。……アリアスにウラナガにイーリスにオーディアと。全員いなくなっちゃまってまあ、寂しくなったモンだよ。ヤな世界だよな、ホントに。……符術で名前を植え付けでもしねえと、忘れちまいそうになる。アイツらがどんな奴だったのかさえ」

「ウラナガは別に覚えてるでしょ」

「いいや。覚えてねえ。……それが俺とお前の違いなんだろうよ。なあ」

和服に長刀を持つ少女に、問いかける。

煙草が不味い。フン、女々しいことだ。自分でもそう思う。

初めからそういう目的で集めた奴らだったはずなのに、全てを忘れて尚、情が湧いて

いるらしい。くだらない。何があってもどうあっても「終わり」は迎えるというのに、覚えていたい、だなんて。

「……アリアスは、お前にとつてどういう奴だったよ」

「ABSで一番怖いお婆さんだね。嘘で自分を律してるけど、別に破ろうと思えば簡単に破れるし、やろうと思えば簡単に全人類を殺し得た化け物。ま、やった所で意味が無い事くらい知っていたんだらうけど。魔族っていうのは妖魔を半分宿しているからこそ、世界の意思、リソースの意思、無の意思に近い。長生きした所でどうにもならないことも、全人類を殺戮した所で何にもならない事も知っていたんだと思うよ」

「んじゃ、なんでウチに入ったんだ」

「目ざわりだったからでしょ。人間が。気持ち悪いらしいよ？ 妖魔にとつて、生体は気持ちが悪くて仕方がないんだってさ。私にもわからない感覚だけど、ここにいた時だって心休まる時間は無かったんじゃないかな」

「そおか。……そりゃ、悪い事をした。次生まれるのは、他と違わない——もつと心休まる生だと良いんだが」

天井を見上げて。

焼けた煙草の欠片が口とか鼻とかに入ってくるが、まあ別に気にしない。オジサン急ぎ込むのとかカッコ悪いと思うからね。すんごい苦しいけど。

「ウラナガは？ どういう奴だった？」

「本名アムド・多良戸。彼は良い意味で本当に子供、という感じだったね。まだまだ青い子供。トラウマを抱えてて、記憶も混濁していて。名乗る偽名さえ間違えて迷走して、その最後は悲惨にして悲壮なものだった。満足はしていなかったと思うよ。最後にわざわざ感情昂らせられて憎悪を抱いていたし。アズに」

「ああ、まあ足りなかったんだろうよ、アイツ的には。アイツの……実験対象をぞんざいに扱うクセ、まだ治ってねえんだな。身内だと思ってる相手にはクソ程優しいクセに  
よ」

「そこについて言えば、君は誰に対しても優しいよね」

「たりめーよ。オジサンだぜ。年長者は子供に優しくすんだよ」

今頃多分、エメトの奴は藍沙達と引き合わせられて、戦うなり問答するなりして——最後には殺されるんだろう。ジュニちゃんだったか。あの娘一人にも苦戦してたくら  
いだからな。第一位としての、だのなんだの言っちゃいたが、戦闘力はそんなでも無い。  
……はずだ。よく覚えてねえや、他の奴の事。

「イーリスは？」

「アレに関して言える事があるとすれば、そもそも殺人者ではない、つて事くらいかな。自身の性質が——魅了が他者を殺してしまうから、その償いの為だけに生き続けてきた

妖魔。被害者だよ。符術協会の」

「……あー」

「あ、そつか。符術協会も”終わった”から」

「ああいや、そつちは覚えてるよ。流石に知識としてある。だが、そうか。そりや、嫌な話だな。俺ア……そんなとぼつちり受けたみてエな奴を、雇つてたわけだ。……どつか遠いところで。誰もいねえところで、静かに死なせてやればいいものを。やっぱ歳食うと鬼畜になんのかねえ」

「それは否定しないかな。アズが最たる例だし」

「確かに」

アレはまさしく文字通りの老害だろう。

知性ある老害だ。その妄執のために、一体幾つの世界を潰してきたのやら。

……ま、オジサンはその妄執に賛同して協力を申し出たわけなんだけど。さつきからうるせーな、俺そんなオジサンじゃねえよ。アズなんか何十億だろ。俺はピチピチだろ。

「オーディアは？」

「子供の味方の大量爆破殺戮お爺さん」

「雑だな説明が」

「彼に関して、その行動を君が縛ったみたいなどころがあるからね。『箱庭』の情報も捻じ曲げて漏らしただろう？」彼はそれに子供が使われるとあって、『箱庭』を敵対視するようになったんだ。『箱庭』の原材料に子供が用いられる。そしてその『箱庭』とは、今ある文化や歴史、構造物、そして人類そのものを『箱庭』という小さな世界に閉じ込めて、未来へ遺す計画だ、って」

「……わかる？ 今のオジサンの気持ち」

「自己嫌悪だろう。君、その悪役面に反して死ぬほどいい奴だし死ぬほど優しいからね」  
「うっせエ。涙出てきたわ」

「そうかあ。」

「んで、そんな奴らも……」「終わって」、消えちまったのか。世界からも、記憶からも。利用されるだけ利用されて、大量の感情を吐き出して。

「……残念だな。少なくとも同じ屋根の下で寝泊まりした仲……なんだろうに。」

「んで、お前が入って来た、か」

「ああ。誰もいなくなったら困るだろ?」

「初めは驚いたが、まアそオだな。困る。めーつちや困る。多分こつからエメトもいなくなるんだろ? ……困るよ、オジサン泣いちゃうぜ」

「エメトくらいは、その最期に立ち会ukai?」

「それは有り寄りの有りだな。……てめエで立ち上げた組織だ。その終わりくらい、見届けてやんなきゃ……ダメだよな」

それがせめてもの報いだろう。

ボス、なんて呼ばれた身としての。呼ばせた身としての。

「じゃ、行こうか。転移は任せて」

「ああ。頼むわ」

死ぬと——「終わる」とわかって引き入れた部下たちに、弔いを。

「始まりがどちらであつたか、なんてのは誰にも分らない。  
世界か、無か。それすらも箱の中か。」

「だだ思うに、アズの野郎は初めからいたんだらう。始めからいて、一回目で「終われ  
なかつた」んだらう。そつからずつと、「終われない」。そつからずつと、「終わらない」。  
「理外」だの”異能”だののわちやわちやした事情はおいといて、アズの野郎はずつと  
「終われない」。「終わり得ない」。

生誕と無。再誕と無。新生と無。再開と無。

あらゆる言葉を尽くして対比される無と有の繰り返しは、永遠に続く。永遠に続くん  
だ。たとえ俺達がここで「終わつて」も、『箱庭』を作つても、人間なんつゝ生命が生ま  
れなくても、永遠に。

だからアイツは、それを「終わらせる」手段を考えた。

永遠に飽きただとか、「終われない」ことを嘆いただとか、そんなチャチな理由じゃ  
ねエ。

ただ——本当に「終わらない」のか。本当に「永遠」なのか。



それを、思い付いちまったから試そうとしている、ってだけだ。見戯が如く。砂山を崩すが如く。いやまア呼称はなんでもいいけどよ。

思いついたから、やってみた。それがあるいは、己が身を滅ぼす結果になろうとも構いやしねエんだらう。身勝手も身勝手さ。誰かのため、なんて思ってたら、アイツは行動自体ができなくなっちまう。

いいんだよ、アイツはそれで。

俺もそれに賛同したんだ。協力を申し出たんだ。

どんな世界になっても争い、どんな世界になっても奪い合い、どんな世界になっても仲間と協力し、それを打倒する奴が現れる。仲間つーのは4、5人でも100人でも云千万人でも良い。善悪もどっちでもいいよ。必ず現れるんだ。”デカくなった奴らを打倒する者達”ってのは。結局は奪い合いさ。争いと平和の奪い合い。

どんな世界でもそうだったらしい。アズの野郎が骨身を砕いてリソースを使えなくした世界だつてあった。その世界では電力だの化学だのが流行つて血みどろの戦争が起きた。いつそのこと今までの知識を全て広めてみる、なんてこともした。その世界ではアニメもびつくりなファンタジー大戦争が起きたつて話だ。

知性体は二種類しかいねえ。男女じゃねえ。争いたい奴か争いたくない奴か、だ。中間なんていねえ。中立なんざいねえ。そいつア争いたくない奴だ。余計なコト言つて

巻き込まれたくない奴だ。

だから、どんな世界になっても、どんなシステムの世界になっても、人間の様相は変わらない。相変わらず他人をヘーキで殺すし、悔やんで殺すし、憎悪で殺すし——ヘーキな顔で助けて、悔やみながら助けて、愛情で助けて。

全部そうだったんだと。アズの野郎が見てきた世界で、どの方向性に伸びて行こうとも、争いが無い世界は無かった。

が。

まあここまでツラツラ語つといて、これは別に知性体が悪いって話じゃねエ。人間があくどいって話でもねエ。

当然なんだと。

だって無は成長したがっている。無は更なるリソースを欲している。何も無いから、腹が空いて仕方がないんだと。

だってんなら当然、俺達細胞は無様の欲求に従ってリソースを吐き出すんだ。心つ—機関は無尽蔵にリソースを生産できる。だから世界には必ず知性体が生まれるし、機械だろうと砂人形だろうと心は宿る。

その方が都合がいいから。だから争いは絶えない。知性体が争う方が無にとつて都合が良いから、その通りになる。完全に意思を操られてるのか、無意識にそっちへ行こ

うとしてるのかまではわかんねエが、知性体が生まれた以上は絶対そうなるんだと。無  
が腹いっぱいにならねエ限りはずっと。

んじや無を腹いっぱいにするやいいとなるんだが、無は文字通り無限に広がっている  
と来た。俺達には限素なんて枷をつけておいて、無には寿命がねえんだ。

ただ無は、無尽蔵にリソースを欲す。

世界を造ってはリソースを生産し、世界の寿命でそれを解放。要は農家の収穫だな。

自動化されてんのさ。世界一つー果実が生ったら、次第に熟れていって、最後にやポ  
トリと落ちて。

誰に売るわけでもねえその潰れた果実を吸い尽くして、あア美味エ、って。それが  
無って奴。

だからアイツは、それを「終わらせる」手段を考えた。

俺も賛同した。他人に働かせててめエは何もしねえで美味しい汁だけ啜ってる奴ア嫌  
いなんだ。

協力を申し出た。その手段に使うもの、俺が集めてやるぜ、って。

それで出来たのが、Absurdusだ。

それを使うのが、『箱庭計画』だ。

限素の無い世界で、永遠に発展し続ける知性体の果て。俺達みてーな断裂した文化

じやなく、地続きの生命が行きつく果て。

そこに生まれる——生まれてくれと願う希望。無の届かぬ世界で、無の届かぬものに管理された世界で、その芽吹きを心から待つ。

待つんだ。

結局、俺達がいなくなっても、『箱庭』で何億と時が過ぎようとも、その成果物が現れるまで——アズは待ち続ける。また新しい世界が出来るのかもしれない。出来ない無の時間が続くのかもしれない。ただ野郎は「終われない」から、待つしかない。

三葉結び目と名付けられたテストパターン管理AI。  
T r e e o i i K n o t

F T R M 3 U と名付けられた未来予知システム。生死と成長、流転の役割を与えられた俺達の分身。

古代から始まるわけじゃない。この世界の今ある文化や文明は出来るだけ複製する。模造する。必要のない部分のクオリティは下がるが、その分模造魂レプリカントコアは寸分変わらず俺達人間と同じだ。

あるいは俺達より優れた者が生まれることもあるだろう。TKが何かしらの干渉をすることもあるのかもしれない。当人は嫌がってたが。

こんだけ詰め込んで、こんだけ用意して。

アイツはまだ不安らしい。

なんだってそんな——。

「そんなの、次の世界に君がいらないからに決まってるじゃないか。私も、まあ一応ワズタムも」

「ん——」

「忘れたのかい？ 初め。一番。最初さ。アズが研究所に私達を集めて言った言葉。あれは世辞じゃないんだよ」

—— ” ようやく、最高のチームを集められたわ。これ以上はないって程に。だから——  
—お願い。『箱庭』をどうか、よろしくね？”

「……期待されてんのねエ、オジサン」

「今更気付いたの？ 一番でしょ。ただ”終われなかった”私より、”終わり”に抗ったワズタムより——恐怖も憎悪も無いのに、ただ無が嫌いだから、つてだけで手を取ってくれたヒト。そんな奴いる？ そんな軽い信念で——ここまでやってくれる人」

「……なあ、聞きたかったんだがよ」

「うん？」

「なんでお前、エヌって名乗ってたんだ。なんか理由あんのか？」

「真ん中だからだよ。エムはちよつと本名に似てるからさ。エヌにした」

「……適当だなア。ま、オジサンも他人の事言えねエけどよ」

成功すれば御の字だ。それで終わりでもいい。ただあと少しだけ待って、ようやく報われたな、つって。地獄の窯の縁でも、笑いあつてやろう。

だがよ、失敗したら。

「そろそろ、決着がつくよ」

「ん」

傷心に、感傷に耽っていたら、下の争いごととも終わったらしい。

んじゃまあ、弔いに行きますかね。その直後に全てを忘れてしまうのだとしても、ボスとして。

文字通り心を鬼にでもしてな。

「ここは……学術都市?」

「ああ。五年程前に亡びた都市だ。建造物より先に住民の方が全員“終わって”、誰もいなくなった学術都市。符術に關しては協会の方に分があるだろうが、その他の学問に關しちやココのが進んでいる。……進んでいた、というべきか」

「……なんだか、寂しいね。施設もまだ生きてるのに」

「発電所も自動稼働で生きたまんまだからねー。リソース無しでよくやるなー、ってカ  
ンジだけど、廃棄物とか自然汚染とかも酷かったって聞いてるよん。結局リソース介し  
た方がクリーンだし？」

イアン達住む国では見えないようなビル群。政府施設周辺にはビルも存在するが、国自  
体がここまでビルに群れているということはない。周囲を反射する銀の建材はこの国  
を象徴しているかのようで、その個というものが見当たらない。

誰もいないのだから、当然に。

「——学校が良いと思うんだよねー。特にシヨーガツコーと、か……あれ？」  
雨が降っている。降り注いでいる。

冷たくない雨だ。温暖な気候だからか、何か別の理由か。

「……なんでボク、ここに」

「——エメト」

「んあ？」

青い髪の青年。人を小馬鹿にしたような、ピエロを崩したようなメイクのその顔は、  
雨に濡れても崩れる事は無い。背に背負う三丁のシヨットガン。

その一本が、引き抜かれた。

「ッ！」

「……ね、ボクをここに呼び寄せたのって、君達？」

「いや……僕も何故ここに飛ばされたのかはわからない。飛ばしたのは多分アズだと思うんだけど」

「……」

銃口をイアン達に向けて——けれど、やめた。

はあく、と深いため息を吐いて、銃身を杖替わりにして、中腰になる。

「あのさ」

「あ、ああ。なんだ……？」

「ボクこの都市嫌いなんだよね。誰もいないから殺し甲斐がない……とかって嘘を吐くと、そっちの奴に見抜かれるんだっけ？ そーゆーのめんどーだから本音で言うけど、ここボクの生まれたトコでさ」

「学術都市出身……ということとは」

「あー、うんうん。ボク結構頭いいんだよ。君達だいがくせーだっけ？ 君達の百万倍くらい頭いいよ。けどまあ、頭は悪い方が幸せだったかなあ、って思う。頭が良いとき、見なくていいものいっぱい見えちゃうんだよね」

エメトは溜息を隠さずに、符術を一つ展開する。

咄嗟に身構えたイアン達——が、杞憂。彼の展開した符術は壁。正確には屋根、だろ



う。雨を遮る屋根を作った。

倣い、藍沙も同じように屋根を作る。

「あーうん、それがいいよ。この雨冷たく無いだろ？ ふつーの雨じゃないんだよね。ほらあそこ……中央に一番でつかい建物あるでしょ？ あそこから出てる雨でさ。これに濡れ続けると、体力回復するし傷も癒えるし病気も治るんだ」

「……」

「やめてよ、そんな目でみないで。これボクが吐いた嘘じゃないから。これはこの国の医療団体が吐いた嘘。嘘っていうか、知らなかったんだろーね。そんな副作用がある、なんて」

どろり、と。溶けだす。

何がつて——符術の屋根が。

「みんな、建物の陰に！」

「ああ！」

四人が屋根の有る所に移動しても、エメトは動かない。

藍沙のそれと同じく溶けだした符術を意にも介さず、落ち込んだ様子で、地面を見ている。

「リソースを奪うんだよ。この雨。ヒトの感情を奪うんだ。奪われたリソースは他国に

流れる。あ、別に他国と繋がってるスパイがいた、とかそういう話じゃないよ。ホントに知らなかったんだ。そんな副作用があるなんて。癒しの雨、恵みの雨、なんて騒いでさー。いつしかやる気つてものが失われて、はは、死んだみたいなのになつてたよ。会社行く人も、ガツコ行くやつも、みーんな死んだみたいなの顔して歩いてんの。傘も差さずに雨に濡れて、人形みたいにとろとろ生きてんの」

「酷い……」

「酷いかなあ。身体は元気なんだよ？ 不治の病だ、なんて言われてきたヒトも快癒して、老若男女問わず雨に身体を浸して、毎日元気に労働するんだ。頭がいい奴は都市の更なる発展を、ちよつと足りないのは発電所とかで労働を。ただ——日に日に、リソースが奪われていく。だからやる気もなくなるし」

「符術。それによって、ビル群の一部が凍り付く。さらにはいくらかの衝撃があつて、中身が晒された。」

「見なよ。コレ」

「……え、ヒト？」

そこには人がいた。

ヒトがいて、生活をしていた。壁が壊された、なんてのはどうでもいいとばかりに、Pで何かを打つ青年。ベッドで横になり、端末を動かす少年。自動調理器だろうか、幾

つかのボタンを押すだけで出てくる料理を運ぶ女性。

普通に人が生活している。

「学術都市が五年前に死んだのは事実だよ。でも別に住民が」終わった「わけじゃない。終わっただけなんだ」

「どういう……」

「わかんない？　頭悪いね。ま、コレ見たらわかるでしょ」

エメトが。

その手に持つ銃を——先ほど出来た料理を運んでいた女性に向ける。向けて、引き金に指をかけて。かけて、撃つ。止めなかった。止められなかった。自然だったから、あまりにも。

放たれた散弾は女性を芯に捉え、ぐちゃぐちゃにした。

「え……!?!」

「そんな」

「酷いかなあ、つて。さつき言ったけどさ。うん、酷いよ。最低だと思う」

でも、誰も気にしない。

その女性の家族か同僚か、同じ部屋にいる青年はPCに目を向けたままだし、壁の破壊によって露出した隣人もまた、食事をやめることはない。端末で何かをしている少年

も同じだ。

そして女性は一女性だったものは、即座に片づけられる。掃除用の機械だろう、円盤のようなものがソレを片付けて行く。

最期には元通り、綺麗になった。

ただ女性が一人いなくなっただけ。その事を気にする者も、憤る者もない。

「肉体は元氣なんだよ。学術都市の有らん限りの技術を以て強化されてる。限素の寿命は限界近くまで引き延ばされてる。でもね、魂はもう限界なんだ。毎日奪われる感情に、心が悲鳴を上げていてる。目の前で人死に見ても、自分の家が壊されても、殺人鬼が来ても——何も感じない。感じる事にすらやる気を覚えない。別に良いよ？　ここで僕がバクダンとかセンシヤとかで大暴れしても。多分誰も出て来ないよ。抵抗もしない。何も面白くない」

「……終わっているな」

「そ。ここは現象としての”終わり”じゃなくて、人間としての終わりが訪れた都市。あの雨を降らせる装置を壊したところで、奪われたリソースが戻るには時間がかかる。あと一ヶ月じゃ、無理だね」

エメトが立つ。

その体は雨に濡れている。けれど。

「ま、奪われて流れたりリソースは他国に行きついた。それらは他国に異常なやる気を起こさせたんだと思うよ？ 身体を酷使してまで何かを成そうとしたり、他国に必要な以上の敵愾心を抱いたり。といつても五年前の話だからね、その前は単純に人間の性<sup>サガ</sup>って奴でしよ」

「……一つ聞かせてください」

「ん？ いいけど……あー、なんだっけ。藍沙ちゃん、であつてる？」

「合つてる」

「良かった。ボク他人の名前覚えるの苦手だからさ。あ、ユンちゃんの事は覚えてるけど」

ひひ、と笑う彼に殺意をぶつけるジュニ。

そんな彼女を制するのは、大吾だ。そして代わりに、言葉を発した藍沙が前に出る。

「どうして貴方は、それを逃れることが出来たんですか？」

「ん」。ま、その雨を作った奴らよりボクつてば上位でさ。そんなメリツトだらけの怪しいものを都市に散布するって聞いた時から、ああコイツラ頭おかしいんだろな、とか思つてて、雨を避けてたんだよね。でも国の上層部……お偉いさんもその効能を認可しちゃつてさー。勧められたよ。”どうだエメト君、君もこのエリクサーを呷つてはみないかね？”って。いやもうおかしくつておかしくつて、馬鹿らしくて馬鹿らしくて――

その時、初めてヒトを殺したよ」

「……………」

雨はエメトの身体に降り注ぐ。

けれど。けれど。けれど。

それ以上に——目に見える程の。

「その時のボクの感情わかる?」

「…………快感、ですか?」

「あー。ま、そっち思い浮かべるよね。普段のボク見てりやそうだと思う。でもちよつと違つたんだ。その時、あの毒物を勧めてきた馬鹿を殴り殺して感じた事は、ただ一つ」

——綺麗になつたな、つて。

「きれい、に…………?」

「うん。馬鹿を殺したから、一つ綺麗になつた。君だつてさつき言つただろ? 酷いんだよ。酷いものを街中にばら蒔いて、誰彼構わずそれを飲ませて回つて。そんな馬鹿をさ。ゴミをさ。僕は掃除したんだ。この世界から汚物を一つ消したんだよ」

「…………だから貴方は、殺人鬼に?」

「いや? 別に、僕にも家族とか友達とかいたし。今もいるんじゃない? 死人みたい

に毎日を繰り返すだけの存在にはなつちやつてるだろうけど、今もどつかにいるよ。ボ

クの家族も友達も。クラスメイトとかスポーツクラブの仲間とか、みんないると思う。なんならボクがこの国で殺したのって、さっき言ったやつともう一人だけだよ」

「その一人とは？」

「この雨を作った奴」

当然のように言う。

そして当然の様に問う。

「なんかボク、間違ってるかな？」

「……抱く感情が間違っているよ。人を殺して、綺麗になつたな、なんて……」

「でも君たちだって、この国の真実を知った上であるの二人と対面したら同じことをしたと思うよ？」

「そんなことは」

「ま、そんなことはないか。殺すまではいかない。でも断つてたでしょ。感情を奪う水なんか飲めたもんじゃやないし、それを作つてこの都市を殺した奴なんて許せない。だからどうにかこうにかして信頼の座から引き摺り下ろして、どうにかこうにか改心させて、みたいな回りくどいことしてたんじゃやない？」

「……ヒトはそう簡単に変わらないよ。どうにかこうにか改心させて、なんて。真実を見せなきゃ無理」

それは……。なんて言い淀もうとしていたイアンよりも先に、藍沙が前に出る。

前に出るのだ。雨に濡れる事も厭わず——いつも明るく元気な藍沙、ではなく。どこか暗い、時折見せる影を帯びた彼女が言う。人心について語る。

「へえ。わかっているじゃん」

「多分、その雨の開発者さんが、健康だった頃にこの現状を見る事が出来ていたら、すぐにも開発を止めてたと思う。貴方に水を勧めた人もそう。結果さえ分かっていたらば変わっていた。変われていた。けど、そんなこと思いつかない状態で、これだけ並べられたメリットに食いつかないヒトは早々いないよ。傷も病氣も治る。延命も出来る。寿命も延びる。……たとえば、自分よりどれほど頭の良いヒトがデメリットを説いてきても、変わらない。実物を見ない限り、絶対変わらない」

「そーそー！ 何もボクだって、問答無用で殺したわけじゃないんだよ。ちゃんと説得したよ。ソレは毒だって。それは健康被害の出る水だ、って。原理からちゃんと解説した。……そしたら彼らはどうしたと思う？」

「……嫌な顔をして、”そういう可能性も考えられますが”なんて言つて、結局意見を変えない」

「アッハ！ 凄いいじゃん。その通りさ——”まあまあそう言わずに”とか、”騙されたと思つて”とか。人間つてのは一度信じたものは信じちゃうんだよね。疑うには信じ



た情報の数倍数十倍の事実が必要だ。ボクの方が上位だとしても、ボクの方が頭が良くても、カンケーない。その程度の事は自身の信じる救いに罅を入れない。面白いよね。この学術都市がさ！ リソースや符術をオカルトだと——心なんてものは健康な身体でこそ強くなるものだ！ この世界のシステムを否定しまくったこの都市が、一番信仰してたんだよ。学術、つてシューキョーを」

藍沙がまた一步、前に出る。

両腕を広げて狂ったように哄笑するエメトに、一步、また一步と近づいていく。

二人の身体からは

目視出来る程の陽炎が立ち昇っている。

「法則法則法則、つて。自分達が幼いころから学び続けた常識は絶対なんだよね。勿論”終わり”にだつて理解はある。限素を研究する機関もある。けど残念だなあ、心は嫌いだったらしい。脳にまで行つたくせに、心と感情はオカルト扱いしちゃったんだ」

「だつて、そんなものは、見えないから？」

「そーかもね。……でさ。そこまで近づいてきて。この雨の危険性を理解した上で、傘も差さずにここまで来た君はさ。ボクが人を殺す理由もわかつてる、つて感じがいいのかな？」

「うん」

笑う。イアン達に見せるような、花開くような笑み。

それを——エメトに見せる。

「私も同じだから」

「そりやあ凄い。よく人間社会で生きてられるね」

「生きてられないから、こんなことしてるのかも」

「ああ——そりや、いい。ね、君の名前教えてよ。ボクはエメト。エメト・アルディーカ。君は？」

「陽下藍沙。でもそれは、母方の姓。私の本当の名前は、アイサ・ビーダ」

「——……そりや良いワケだよ」

この雨が、リソースを奪うというのなら。

その程度の薬物に奪われない程の——枯渴なんて言葉を知らない程の、規格外のりソースを持つ者が雨に打たれたら、どうなるか。

奪えないわけじゃない。奪う副作用はしっかりと機能している。

だけど——耐えられない。

雨粒程度の器では、この質のリソースを蓄えていられない。

だから寿命を迎える。蒸発する。立ち昇る陽炎はこれだ。二人の抱える巨大感情が、雨粒の全てに勝っている。

「許せないだけだよ。ボクらは」

「私はだけじゃない」

「ああ、そう？　じゃ、同じじゃない。けど、ちゃんと含んではいるんだ。つてことは、君にとつてボクは」

「うん。——凄く、嫌い。殺したい」

「藍沙!？」

二人の会話を聞くに徹していたイアン達も、その言葉は聞き逃せなかった。

あの藍沙の口から、殺したい、なんて言葉が出るとは。

「イアン君。アイサちゃんの彼氏、でいいんだよね?」

「いや、そういうワケじゃ……」

「まどつちでもいいんだけどさ。君、この子の事理解してる?　出来てる?　凄いいよこの子。君達に、君程度の御せる子じゃあない。ボクでも持て余す。こんな、こんなさ」  
速かった。誰も止める暇が無かった。

その銃口が藍沙の顔を向くのと、彼が引き金に指をかける動作。余りにも自然で——  
誰もが間に合わないと思つたことだろう。

否。

エメトと藍沙以外は、だ。

「こんなこと出来る子、他にいる!? 符術っていうのはリソースを変換する術式なんだよ。自分の感情を、たとえば守りたいとか、たとえば攻撃したいとか! そういうのを変換式に注いで、変換されたリソースが事象の改変を行う。それが符術だ! でも今見たでしょ? そんなこと考える暇なかったはずなんだよ。ボク、早撃ちには自信あるからさ。ま、エイムには自信ないからショットガンなんてもの使ってるんだけど。それでさ。それでさ。その——意識出来ない程早い発砲に対して」

止まっていた。

散弾は、空気中で止まっている。

壁だ。否、匣だ。

弾丸一つ一つの前方に展開された、極小の匣。無駄なりソースの一切を排し、何の符も持たずにその結果を得ている。

そんなはずはない、と。そう叫ぶのは、ジュニの常識だ。自身ですらそんな事は出来ない。イアンですら出来ない。いや、今は亡き符術協会のトップでさえ無理だ。

「だって、嫌じゃないですか。痛いのも、服が破れるのも、後ろにいる皆に当たるのも。勿論、無駄遣いするのも。だから最小で留めました。効率よく防ぎました」

「許せないんだよね、ボクのこと。……舐めた態度で、君と——まるで対等の位置にでもいるかのように話す、ボクの事! 君は全く、人類は平等だ、とか思っていない。下には

下がいる——けど上には数人しかいない！ だから、嫌いなんだ。自分より劣っているくせに、自分より上みたいな態度取ってる奴が、心から嫌い！」

「さつきも言いましたけど、それだけじゃないです。けど——うん。それも正解」  
「だから、殺す？」

「ううん。もつと酷い事をする」

展開されるのは、符術。

エメトと藍沙を囲うように。その匣は、何重にも、何重にも重なっていく。重ねがけによる強化。雨が溶かせども溶かせども、それは更なる補強が為されていく。

近づかせない、という強い意思がそこにある。

「藍沙——」

「待て、イアン」

「……これ」

咄嗟にそれに突つ込もうとしたイアンを止めるのは大吾だ。その顔は苦渋。何故気付かなかつたんだ、とばかりに、自己を責めている。

ジュニも気付いたのだろう。その結界から発されるリソースの色に。ひしひしと伝わってくる感情に。

「僕達のこと……嫌い、なのか……？」

匣はただ、重なり続ける――。

「ここは……」

符術結界の中。あの雨も、イアン君達も入っては来られない。前みたいに強制転移の割り込みも出来なければ、エヌちゃんの刀でも切り裂けない」

「成程。邪魔されたくないんだね。で、ボクにどんな”もつと酷い事”をしてくれるの？」

「まず、確認したい事がある。貴方は『箱庭』計画についてどんなことを思ってる？」「なんて無駄な計画だ、って思ってる……というのが、ボクっていう役割ロールに望まれた考えかな」

「じゃあ、真意もわかってるんだ」

「全部じゃないのが悔しい所だけどね」

黒い匣の中で、二人は問答をする。

空中で停められた散弾。シヨットガンは相変わらず藍沙に向けられたままだけど、その引き金には指はかかっていない。

「今ある人類の文化や文明、そして人類そのものを小さな世界に移住させて、未来へ遺す

計画。そのために全人類のリソースが必要で、その主導者は世界の“終わり”を早めようとしている……それが『箱庭計画』だってボスから聞かされたよ。馬鹿みたいな計画だって思ったよ、その時はね。そんなこととして何の意味があるんだろう、って」

「私もそう思う。未来へ遺したところで何もならない。”終わり”を早めたって意味はない。どうせ全部、終わる”んだし」

「うんうん。そのとおり。で、まあボスがさ、計画するロケーションの一つ一つが、なんだか変な場所ばかりでさ。ショッピングセンターとか図書館とか、確かに人はいるけど、もつと良い場所あるじゃん。ああまあショッピングセンターについてはインパクトもあつたから良いんだけどさ、図書館、って」

「十分な惨状にはなつたと思うけれど？」

「まあアレは……えーと、なんだっけ、なんかあつたからね。誘蛾灯みたいな役割の……あー、忘れちゃつた。多分なんかがいて、”終わった”んだと思う。ボクが覚えてないってことは」

「うん。人間を魅了する妖魔がいた」

「成程ね」

発砲。また、阻まれた。そのまま背中のものも用いて何発も何発も撃つけれど、藍沙には届かない。



知っていて撃つたし知っていて止められているので、エメトは肩を竦める。

「ま、そういうロケーションを見てつてき。おかしーな、つて気付く時があつたんだよ。最悪のメイデイと紅のアーグは有名になったからおいといても、他の場所で起こす殺戮シヨウで——その場所が悉く、終わつて”いくんだよね。ボク頭いいからさ、結構下調べもするし、退路の確保とか、どつから回り込めるかとかも全部頭に入れるんだけど……やっぱりおかしいんだよ」

「シヨッピングセンターも図書館も、”終わる”程ガタが来てなかつた、でしょ？」

「うん。そーそー。有名になつてないトコ含めて、僕達が殺戮シヨウを起こす場所は全部、終わる”んだけど、事前に調べた感じではそんなことなくてさ。周囲で沢山人間生物が死んだからつて誘発の”終わり”が起こるワケがない場所で、けど”終わり”が起こるのさ」

「そしてそれは、多分ココでも、ね」

「……だよ。それも、ここに転移させられた時にはわかつた。だからいじけてたんだけど」

全弾、だ。

背中の三丁。そして両腕に仕込んだ二丁。さらには体内に——喉から引つ張り出した一丁。

それらの銃を全弾撃って、すべて捨てる。もういい、とばかりに。

「お父さんは未来が読めるんだ、って。そう思った?」

「そう思えてたら良かったよ。でも無理でしょ。ボスに異能はないし、そもそもあの人悪い事するのに向いてないよ。もう誰がいたのかもほとんど思い出せないけどさ。その覚えてない奴らにも、ボクにも見えないところで、隠れて黙祷なんかしてる人が——唐突な“終わり”の起きる場所に人を集める、なんて。できっこない」

「そもそもそんな異能があるなら良い事に使ってそう」

「だね。ボスは僕達の事家族みたいに扱ってくれたし、あの人はあの人で違う分野で有能だから嫌な気持ちにもならなかったしで、もしボスが慈善事業とか始めるっていうんならわかったー、ってついていくつもりはあったよ。ボク、別に許せないから殺してるだけで殺したいから殺してるわけじゃないし」

もう打つ手はないと、エメトは地べたに座り込む。

そも——ABSの階位は、戦闘力で決められているわけではない、なんてことくらい。

エメト自身が一番理解している。

「『箱庭計画』。多分、人類の文化とか今の人類とかはどーでもいいんだ。で、多分ボスも『箱庭計画』を主導している側のヒト。アズと旧知って時点で自明だけどさ。それ以上にボスは『箱庭計画』を勧めようとしてる。民衆の恐怖を煽るためにAbsurdus

なんて組織を作つて、ボクや君には及ばないけど、多分結構でつかめな感情もつてる人達を集めて管理して。そしてそれが最大に高まった辺りで——殺す。そんなシナリオじゃないかなあ」

「うん。正解」

「正解、つて……君は知ってる、つて認識で良いの？」

「ううん。知らないよ。でも正解なのはわかる。世界の現状。お父さん。アズさん。イアン君達。貴方達。世界中の人々。そして、この世界の名前。それらを加味したら、見えてくる正解は一つだけだった」

「……ちえ。いいなあ、ソレ。ボクの頭もそれくらい回ればよかつたのに。与えられた情報はボクたちより少ない癖に、全部辿り着いちゃうのか」

もつと酷い事をする、と。

藍沙は言った。

「それで、ボクに何をしてくれるのかな」

「記憶を奪う」

「………？」

魂はコアだ。感情はリソースだ。肉体は限素だ。

ならば記憶とは、なんだろう。心？ 脳？ いいや、違う。

「記憶とは、世界。世界に寿命があるのは、誰かの記憶だからだよ。限素だから、じゃない。そも、限素で起きる”終わり”と”世界の終わり”は全く別の現象」

「……ボクから、ボクの世界を奪うの?」

「うん。オーディアさんからも、アリアスさんからも、奪ってきた。アムド先輩とイーリスさんから奪えなかったのはちよつと残念。この学術都市も”終わる”だろうけど、私が貴方の記憶を奪う事で、覚えておける」

「それが”酷い事”? ——ああ、いや。そうか」

「わかった?」

得心が行ったと。

エメトは笑顔になる。ああ、そんなことが出来るのか、と。

「この記憶は、世界に還元されない。貴方が抱いた感情は世界に還るけれど、貴方が抱えた世界は全て私のものになる。そして私はその記憶を、世界を——知識として処理する」

「わあ、酷いな。ボクの軌跡をなかった事にするんだ。それ、君にどんなメリットがあるの?」

問われて。問われて藍沙は、頬に手を当てた。口角をこれでもかと上げて、言う。

言った。

「世界で自分だけしか知らない事、って。——ゾクゾクするでしょう?」

絶対に、絶対に、イアン達には見せない——妖しい笑み。

あまりにも独り善がりなその返答に、エメトは笑うしかない。そんなどうでもいいことのために——ここで己は死ぬのだと。オーディアとやらが、アリアスとやらが、どんな奴だったのかは覚えていない。けれど、さぞつらい人生を、あるいは憎悪に塗れた生を送ってきたのだろう。

それらはすべて忘れられる。誰からも、誰の記憶にも残らない。

ただこの女から以外は、だ。

この——自分だけが持っていたい、なんて、思春期を拗らせた独占欲によって、自分達の世界は奪われる。

エメトはここで死ぬ。

だから彼女の本性を伝えられる存在はいない。

最後まで残るのだろう、彼女は。彼女を守る騎士様<sup>ナイト</sup>たちが沢山いる。この”世界の終わり”の時まで、存在して。

全部全部独り占めして。

「アズとエヌは、いいの?」

「アズさんは初めから数に数えてない。あんなの、人間に思えないし。でもエヌちゃんは違うよ。どういう手段で弾いているのかしらないけど——絶対食べる。あの子の記憶は、絶対に美味しい。私達に隠している事含めて——全部奪ってあげる」

怖いなあ、と。

エメトは。

「最後に、一つ良いかな」

「なあに?」

「君さ、本当にイアン君のこと好きなの? そんなショールワルでさ、あんな純朴少年のこ  
と好きになるとは思えないんだけど」

「好きだよ。本当に好き。好きだから、記憶は奪わないであげる。どうせそんなに美味  
しい記憶持つてないだろうし」

「ははっ! それってホントに好きっていうの? 恋愛感情つてさ、もっところ、アツア  
ツな奴なんじゃないの?」

「だってイアン君は、私よりエヌちゃんの事が気になつているみたいだし。付き合うと  
か結婚するとか、もう意味ないでしょ?」世界の終わり”は、あと一ヶ月。悲鳴を上  
げ続ける世界に誰も気づかない。崩れ落ちて行く世界に誰一人として対処できない。

そんな中で、好きな人と通じ合いたい、とか。そんな夢見がちなコじゃないよ、私じゃ、と。

エメトに手を翳す藍沙。その動作に理由は無いけれど、覚悟くらいは決めさせてあげよう。

そう思つて、一つ。

楽しい事を思いついた。

「私からも最期に一つ、質問いいかな」

「え、うん。これから死にゆくボクに何を聞きたいの？」

「『箱庭』計画の話聞いたのつて、いつ？ Absurdusが最悪のメイデイを起すどれくらい前？」

「……アツハツハ!! 酷いね！ 君つて最低だ！ そんなに——そんなにボクを貶めたんだ？」

「散々上から目線で色々語ってくれたでしょ」

「成程仕返しか！ いいよ、どうせボクは全部忘れちゃうんだ。あげるあげる。ボクに——記憶を奪われたボクに、仕返しをする機会をあげる！ 時間はね、5か月前と10

日と11時間32分前。全部覚えてる。全部きっちり覚えてるボクの記憶を——奪うんだ。『箱庭』を最悪な計画だつて唾棄してた頃のボクに！ 戻すんだ！ 戻して、こ

の、ボスの行動に、全部に気付いたボクを消して——」

「そう。貴方には絶望してもらおう。アズさんやお父さんの期待通り、真実を知って絶望する貴方になってもらう」

「アハハハハハハ!! サイツコーだ。最低だ! 悪魔め、最後の最後に君にとって最悪な出来事が起きるって、心の底から願ってるよ!」

——異能が発動する。

無いと言われていた、符術に長けているだけだと思われていた、藍沙の異能。

他者の記憶を奪う——半妖が如き異能。

「教えてあげる。エメト——貴方のボスの、本当の目的を」

溶けていく黒い匣の中で。

悪魔が、頬に手を当てて——咲わった。

こりゃひでエ。



いやまア一発目の感想はコレだわな。

「あー……シヨットガンの弾、全弾撃ち尽くして腹に転移されたのか。そりやまア、符術師らしいカウンターだが、結構ひでえことすんな」

「藍沙、大丈夫だった!？」

「うん……ちよつとだけ、苦戦したけど。大丈夫」

「良かった……!」

エヌと転移した先に、ソレはあつた。

黒い匣。何重にも重ね掛けされた符術結界。学術都市の雨にも負けない強度のソレが、ずつと。

少し離れた場所にいた小僧たちは、大吾・ウエインだけをその場に残し、どこか——つか、あの雨の発生装置の元に向かったらしい。

んでちよつとしたら帰ってきた。速すぎんだろ、とか思わないでもないが、まアイアン・エンハードの手とティニ・”ジュニ”・デイジーの構造物の把握知識がありや十分な時間だろう。

だからまア、雨は止んで。

小僧たちが帰ってきた辺りで、その結界も解けたのだ。んで出てきた。

多少服が汚れちやいるものの、ほぼ無傷の藍沙と。

——腹の破裂した、エメトが。

「ぼ、す……」

「おー。手酷くやられたなア。どうする、帰るか？ 今から帰って符術全開で治療すりゃ延命くらいは」

「……嘘、だよな？」

「あ？」

息も絶え絶えに、俺のスーツの裾に縋ってくるエメト。

その眼には——疑念。

「は、ははは——あ、は、が……ふ、ねえ、見て、これ。ボクのお腹から出てるの。血だ

よ。ボス」

「ああ、だから治療を」

「第一位って！ 言って、げあ、くれた、よね。ボクがこのAbsurdusの第一位だ、って！ 言った、言ったよね。げんじ、てんで、お前より強い奴なんかいないから、つて、ね、ねえ！」

「……ああ」

「ボスは、ボスは——嘘、吐かないよ、ね」

「……すまねえな。そのために集めたんだ。お前を……絶望させるために。お前は別に

強くなんかねえよ。シヨットガン六丁でチヨーシに乗んな。お前は……一番感情が大  
きそうだったから、一番にしたんだ」

「——！」

おいおい。これから死にゆく奴のために、もつと上等な嘘を吐けねえのか俺ア。

……でもダメだ。エメトはこれできて結構頭回るからな。俺演技下手だし。嘘なん  
か吐こうものなら、すぐにばれちまう。

確かにあの時はそうだったんだよ。現時点で、Absurdusの中では一番強かつ  
た。オジサン戦えねえし。

「嘘だ。うそだうそだうそだうそだうそだうそだうそだうそだうそだうそだうそだ  
だ、つて、ボスは……嘘、吐かないもんね」

「あア。俺は嘘ア吐かねエよ」

「……じゃあ。やつぱり。ボクは、捨て駒だったんだ。あは。あはは！」

おいおいそんな非難の目で見るとは聴衆。オジサンだつてすげー辛いんだぜ。  
なあ、エヌ。俺が今コイツにしてやれることつて何だと思う？

……だよなあ。

「は——つは、つは、はあッ」

「十分だ、エメト。お前は十分俺の役に立ったよ。だから——」

吸っていた煙草を——落とす。

エメトの頭に。

あの悪魔の頭部を消し飛ばしたのと、同じ奴だ。

「——ま、苦しまずに消えてくれや」

「あ……」

両の瞳から、滂沱の涙を流して。

腹から臓物と血肉を撒き散らして。

エメトは——死んだ。

その頭部を消し飛ばされて、死んだ。

……後味悪いなア。いや最初っから良くなるなんて思っちやいねエけどさ。

「おおいお前等……とつとと空にでも避難するんだな——」終わる。ぜ、この都市……」

その言葉が早いか遅いか、周囲のビル群から黒白の粒子が溢れ始める。

中にいる終わつた人間も”終わる”んだろ。どうせ、恐怖なんてリソースも奪われちゃった憐れな連中だ。そもそもアイツを見つけたのだから、心のリソース生産を止める、なんて馬鹿げた薬品作った奴を殺しに行つてきて、お願いビード、なんてアズの野郎に依頼された時の……先に殺してた奴がいた、みたいな出会いだつたなア。

懐かしい話だ。

「ビーダ、君も早く」

「あア」

エヌに手を引かれ、符術の足場を上っていく。

眼下。巻き起こるリソースの奔流と“終わり”。その中で赤い血肉と青い髪が見えた。いや、見えた気がしただけかね。

「……すまねエな。あー……あー……！　くそ、待て待てよ。こんだけ罪悪感抱いといて……ああ、クソツッ！」

「エメトだよ。それくらいは手伝ってあげる」

「助かる。すまねエな、エメト！　んで——ありがとう。死ぬほど助かった。恨んでくれていい。憎悪してくれていい。でも、もし、次に——いがみ合わねえ関係で、許してくれる、ってんなら——また共に在れることを期待してる！」

忘れて行く。”終わって”いく。

眼下からも、俺の中からも。

エメトつつー奴の情報が、消えて行く。どんな奴だったんだ。どんな顔だったんだ。よく笑う奴だったのか？　それとも声を荒げる奴？　あるいはボス、ボス！　なんて言つて子犬みてーに着いてくる奴？

ああ——思い出せない。

エメト。エメト。エメト。下の名はあんのか？ いや上の名か？ ミドルネームは。

「——で、エヌ」

「何かな」

「ここ、どこだよ」

「……どこでもいいじゃないか。下、何が見える？」

「何にも見えねえから聞いてるんだが」

「じゃあ、何にもないんだよ」

なア。

なんで俺ア、ここに来たんだよ。

——” F T R M 3 U は、最終地点の計測に成功しました”

「ええ。それは、どこかしら」

——” アズ。貴方の B A R です。 B A R ・エルドラド。控室を除いたカウンターと数個の客席だけが、最後に残ります”

「そうよね」

——”アズ。貴方はFTRM3Uより高性能なのではないでしょうか”

「いいえ。ただ、いつもそうだったから。こればかりは勘よ」

——”アズ。FTRM3Uは問います”

「ええ」

——”FTRM3UやTrefoil Knot、研究員の方々やビーダ、カムナリ

と——離れ離れになることは”

「寂しいわ。ちゃんと”

——”やはりアズ、貴方はFTRM3Uより未来が読めるのではないのでしょうか”

「これも勘よ。”世界の終わり”が近づくと、いつも誰かに、それを問われるから」

——”……アズ。それは勘ではなく、経験則、といいます”

「あらやだ。FTRM3Uに言葉を教えられる日が来るなんてねえ」

Absurdusはほとんど壊滅した。

残る構成員はボスとされるビーダと、未だ出会えぬエヌちゃんののみ。

そして——世界でABSに関心を持たなかった者達は、全員消えた。カムナリとサル

ミナちゃん、そして、とある暗殺者への依頼の結果。

あと一ヶ月。

ううん、出来るのならもつと早く。

「寂しいわ。けれど、それ以上に」

——” 楽しみ、でしょうか。T r e f o i l K n o tの完成が”  
「ええ」

世界はもうすぐ「終わる」。

最後の最後には、B A Rのマスターとして。

誰にお酒を渡すのでしょうかね。



?????????  
 .  
 ??????????

?? 来客を告げるベルが鳴る。ドアが開く。

?? 現れたのは――。

?? あら、いらっしやい――ジュニちゃん

「ん」

「私、多分死んでる……っぼいんだよね」

第一声は、そんな物騒な言葉だった。

首の辺りをしきりにさすって、自らが頼んだカクテル――ギムレットを飲んで。

ジュニちゃんは。

「死んでる?」

「多分。」 終わり” で忘れてるっぼいけど、私はもう死んでる……何らかの、多分リソ  
 スの交換、限素の交換か何かで生き永らえているけれど、本来はもう” 終わって” もお

かしくない存在……だと思う」

白い液体を転がしながら。

少しばかり憂鬱そうに、何かを思うように。

「もしそれがホントだとして、私に何を言いに来たのかしら」

「アンタさ、”終わらない”んでしょ。多分だけど。……多分、”終わった”ものの事も

全部覚えてる。違う?」

「どうしてそう思うの?」

「それもわかんない。多分、でしかない。私には異能なんてないから、アンタからなんかへんなものを感じるのかもないし。でも……アンタは、私達よりずっと長く生きている。ずっとずっと、何かを目指してる。そもそも人間じゃない可能性もある」

「一応、人間よ」

「そうなんだ」

ジュニちゃんは、だから、と。

言葉を続ける。

「私が”終わって”も、私の言葉を忘れないでいてくれるのって、アンタだけなのかな、って」

「……伝えたい言葉があるの?」

「多分ね」

「それも多分なのね」

「……」 終わり” によつて消失した記憶の中で、言われた言葉、だと思つてから。曖昧にしか覚えていないし、面と向かつて言われたわけでもない、と思う。……だけど、返事も無しに消えて、相手が思い出せない、つてのもさ。なんか、モヤつとするじゃん」

全部が曖昧だ。

全部が曖昧なその中で、けれど相手を慮る気持ちはある。  
でも。

「怖くないのかしら?」

「どつちが? 死? ” 終わり?」

「どちらでもいいけれど」

「どつちも怖くないよ。遅いか早いかの違いではない。それに、私の経歴だつてわかつてるんでしょ。……私は別に、今も昔も変わつてないよ」

「英雄に拾われて新しい名前を名乗つて、平和に身を浸す程度には変わったんじゃないやなかつた?」

「へえ。そんなことまで調べられるんだ」

ジュニちゃん……いいえ、暗殺者ユンは標的の居た国に自ら捕まった。自分の国が無

くなつたから。

けれど色々あつて——その国も滅ぼしてしまつて。

翌朝立つていたのは、ただの一人だけ。

ユンちゃんを捕まえた——匿つた国から、彼女を守つてほしいと依頼を受けていた英雄。他国の事情に首を突つ込む必要はないと散々言われても、仲間たちに道を阻まれても、一切耳を貸さずにその国へ辿り着いていた英雄ウエイン。

大吾君のお父さん。

「ま、ちよつとはね。カワイー服とか、お友達とか？　なんか、日常を過へいわごすにあたつて必要なことを仕込まれたよ。自由にして良い、じゃなくて、過へいわごせ、つて命令でね。仕留め損なつた獲物つていうのもあつたけど、丁度何の命令も受けてない状態だったからさ。命令の更新で、わかりましたら、つて」

「命令の更新、ね」

「言つたでしよ。変わつてないつて」

契約は絶対。命令は絶対。

刷り込まれた常識は、たとえ新たな常識を学んだとしても消える事は無い。それを自覚しても、それが世界から見ておかしい事なんだと知つたとしても、何も変わらない。

……やっぱりこの子からは、あんまりリソースが取れそうにないわねえ。

「いいわよ。伝言、伝えてあげる」

「ありがと。じゃ、大吾に伝えてよ。」  
「ごめんね」、って。「私ソレわかんないから、他を当たって」  
「ってさ」

「自分の名前は、いいの?」

「終わった」  
「それも忘れちゃうでしょ。誰が言ったかなんて重要じゃないよ。大事なのは、行き場を失った感情リソースの宛先。それによる増幅。違う?」

「……よく、そこまで」

「ま、」  
「ABSに関心を持っていない人間はいらなから、殺して欲しい」  
「なんて依頼をしてくる時点だね。そんな大規模で曖昧な依頼初めてだったし、やろうとしたらもう大体死んでたし。イアン達は気付いてるのかな。もうこの国以外に、人間なんてほとんどいないって事」

「気付いてはいないでしょうね。情報は規制されているわ。それに、生命活動の停止に留めた——」  
「終わらせて」  
「いないから、喪失感も覚え難いでしょうし」

「計画はいよいよ大詰めだ。」

「無気力な人間は要らない。」  
「世界の終わり」  
「に際して、そしてビーダの最後の狼煙に對して恐怖を抱く——抱いて、リソースを増幅させる存在だけが残っていればいい。」

「それ以外は、コアの、限素の無駄遣い。」

「ね、ジュニちゃん」

「何」

「イアン君や大吾君。藍沙ちゃんと一緒に色々なことをして……楽しかった？」

「あは、ナニソレ」

ジュニちゃんは。ユンは。

万感の思いを込めるように息を吸い、目を瞑り——笑顔で言う。

「——ぜんぜん。楽しくなかったよ。楽しい命令なんて、今まで一つも無かったもん」

「そ」

「……ま、スリルはあったけどね。特に藍沙と一緒にの時は、ずっとひやひやしてた」

「でしようね」

「なんだ、それも知ってるんだ」

「いいえ、詳細は知らないわ。でもそれが私にとって都合の悪い事であるのと、無——異能に類するものだってことはわかる。わかるだけけどね」

「……ん。じゃ、頼んだから、伝言。お代は依頼料でいいよね？」

「十分よ」

「じゃね〜」

そう、軽く嘯いて。

ジュニちゃんは、店を出ていた。  
バタン、と。扉が閉まる――。

「でさ、これ。話題の新作ドーナツ。買えちゃったんだよね〜」

「へえ。凄いじゃないか。結構ならんだのか？」

「ん？ ーん。丁度空いててさ。誰も並んでなかったから、ラッキーって」

「でもコレ結構高いんじゃないや……お金払うよ」

「もー、藍沙そういうところ全然進歩しないよね〜。友達なんだから、いいじゃん。はいこれ」

「で、でも……」

平和、というのだろう。仮初の、だが。

テロ組織 Absurdus の首魁、エウリス・ビーダ。そして俺達の仲間であるエヌ。その両名が今朝、最後の宣戦布告、なるものを出した。最悪のメイデイ、紅のアーグに続き――最後に示したのは、ある小学校。

明日。殺戮シヨウが執行される、と。ボス自らの大告知。誰もが恐怖し、誰もが家に

閉じこもり、国は対象の小学校のみならず、全小学校に休校要請をした。学校側もそれに従い、今外に出ている小学生は一人としていないだろう。

その余波を受けたのか、中学、高校、大学までもが自粛の流れとなり。

「……にしても、ホントに誰もいないね」

「みんなABSを怖がつてるからね。でも、その方がありがたい。周囲を気にしながら戦うのは避けたいし」

「それは……うん。そうだね。その間に私達がABSをやっつければ」

「うん。僕の異能を鍛えるとか、そういう話もあるけど……とりあえずの危険は取り除ける。エウリス・ビーダさえ倒せば、エヌは僕らの元に戻ってくる……はずだし」

「弱気だな、イアン」

年齢は違わない。

だが、どこか意思の弱いこの同級生は、見ていて弟のように感じる。

身に宿す異能も、その運命も——俺なんかとは比べ物にならない程重いというのに、ついつい兄貴面をしてしまう。

「ん。ごめん。エヌは必ず取り戻すよ。最悪あの刀折って、頭叩いて、縛ってでも連れ戻す」

「あは、なにそれ。イアンってそんなキチク趣味だっけ？」



「いやそんなんじゃない！」

配られたドーナツ。

甘いモノ、か。特段好きというわけじゃないが、まあ食わないのは流石に礼を欠くだろう。

何より彼女の買ってきてくれたものだ。……などと意識をしすぎる程、初心ではないのだが。

「ま、宣告された日までまだ一日あるわけだしさ。とりあえず脳にトープン入れて、明日に備えようよ。ほら、食べて食べて。めっちゃ美味しいんだから」

「それもそうだね。じゃあ、頂くよ」

「いただきます」

「ああ——」

それを手に取り、イアンと藍沙に倣って、食べる。

彼女はニコニコと俺達が食べる姿を見ている。……恐らくそのリアクションを期待しているのだろう。父から託された時には喜怒哀楽の一つ足りとて知らなかった幼子だが、よくここまで、なんて年より臭い事も考えてしまう。

そうして、ドーナツを——齧った。

「美味しい。へえ、こういう味もあるんだ。僕、ドーナツって甘いばかりだと思ってた

けど……」

「うん。甘いけど、後味がすつごくさっぱりしてる。多分だけど、抹茶、かな？ 入ってるの……」

「ああ、これなら俺でも食べられる。……美味しいな」

「珍しい。大吾が甘いモノを笑顔で食べてるなんて」

「い、イアン君。そもそも大吾君の笑顔が珍しいよ。こんな満面の笑みで」

「おいおい、流石に失礼じゃないか？ 俺だって楽しかったり嬉しかったりしたら笑うよ」

「でもいつもいつも額をこーんなになるまで顰めてるのに」

「あはは、藍沙。その真似ちよつと似てるかも」

「……本当に酷いな。なあ——」

そう思わないか。と。

それで返ってくるのは、梯子を外すような言葉だと。

誰かに、期待した。

ドーナツの箱から、黒白の粒子が昇っていく。

「え、嘘、”終わり”？」

「……一つだけ、多分残ってたんだろね。今朝買ってきたばかりだから寿命なはず

はない。だから、やっぱり世界の”終わり”は本当にもうすぐそこにまで迫ってきている、つてことかな」

周囲を見渡す。

異能の宿る眼で、大学構内を見る。

誰もいない。俺とイアンと藍沙しかいない。

誰も——いない。

「どうしたの、大吾」

「どうしたの、大吾くん」

そこに。

ドーナツの箱がある——俺の向かいの席には、誰もいない。

いるはずもない。俺達三人でA B Sに立ち向かってきたんだ、今更一般人を入れて、なんてありえない。それら話をする席でもあるんだ、関係者以外がそこにいることも絶対にない。

だから、いるはずがない。

いるはずがない誰かを、俺は必死で探す。

「嘘を」

「嘘？」

「大吾?」

嘘を吐くな。

嘘を吐くな。

俺の異能は育った。心まで読める。イアンと藍沙におかしなところは何も無い。

でも、でも、でも。

どうして俺の心は——こんなにも。

「嘘を吐くな。おい。嘘を吐くな!」

「大吾、どうしたんだ……もしかして何かいるのか!」

「とりあえず結果を……あ、大吾くん!」

誰かに叫ぶ。

?を吐くなど。本当の事を言えと。

ちゃんと言え。ちゃんと、面と向かって——もつと早くに言え。言っておけば、言っ

て、言葉にしておけば——伝えておけばよかったのに。

何が父親面だ。その気持ちは。ずっとずっと、持っていたはずだろう。誰に? 誰に

対して父親面なんかするんだ、俺が。誰だ。俺の心をかき乱すのは。

「嘘を吐かないでくれ。頼む——頼むから」

言葉を吐き続ける。寡黙を気取るな。

そうでもしなければ——ああ、忘れてしまう。

もう無理だ。もう覚えていない。覚えていない事さえも、忘れてしまう。

「頼む。頼むから——せめて、俺の言葉で」

わからない。もうわからない。

ただ、もやもやした何かが。心の中で、ぐるぐるとした何かが渦巻いている。

せめて。

せめて、開示される、なんて方法じゃなくて。

俺の言葉で。たとえ断られたとしても——それでもいいから。

なあ、誰なんだ。

俺の心は、誰に、何の後悔をしているんだ。

「……これだけは、わかる」

「ちよ、大吾！ 大丈夫——って」

「はあつ、はあつ……ダメだよ大吾くん、何かあるなら固まって動かないと危ないよ！」  
「嫌だったんだろう。嫌いだったんだろう。その言葉。お前が誰なのか知らないし、お前と俺の間に何があったのかも知らない。でも——それを言わなかったのは、本当、なんだらう。嘘じゃないって。嘘なんかじゃないんだらう。だから、何も言わずに消えたんだらう！」

叫ぶ。叫ぶのだ。

わからない。自分が何を言っているのかわからない。誰に言っているのかも、何故、何故、なんで。

「大吾……なんで、泣いて」

泣いたのなんていつぶりだろう。

生まれて初めて、かもしれない。母にだって、生まれた時にも顔を顰めていた、と言われるくらいには……表情の硬い子供だったから。

でも、喜怒哀楽がないわけじゃなかった。だから教える事が出来た。

——誰に？

「さよなら、って。言わなかったのは……それを別れだと思っていないからだ。嘘を吐くなよ。嘘を吐くな。お前は全部わかってた。お前はもう理解できる所にまで来ていた。本当は、ホントは、本当は！」

誰もいない構内に声が響く。

誰だよ、アンタ。誰なんだよ。俺は何に怒っているんだ。なんで泣いているんだ。

もう、何も。

何も無い。心の中に、何も——。

「——奪われたく、ないからか」

「!」

ゆつくり、イアンと藍沙の方を向く。

お似合いカップルだ。流石に体力のあるイアンが、体力のない藍沙を支えて。その藍沙は息を切らして。

「なんだ、お前達。どうしたんだ」

「いやそれはこっちのセリフだけど!」

「と、突然大吾くん走り出すから、何事かと思ったよ……」

「ふむ。……む。む? 俺が突然?」

「いやいいよもう……敵とか妖魔が見えた、みたいなことじゃないんだね?」  
「敵?」

異能を用いて大学構内を見る。

見渡す。

……ふむ。

「何もいないぞ」

「ああ、もうそれでいいよ。もう……ドーナツまだ食べきつて無いからさ、戻ろう?」

”終わって”たりして……」

「いやまさか、一個”終わった”からって全部が全部……確認しにいきましょう!」

「うんー」

踵を返し、早足で戻っていく二人を——追う。

そんなにも——大切に想ってくれていたのか。

ああ、それだけで。

「……こんなにも俺が不安定になるのは、やはり”世界の終わり”が近づいている証、か」

俺も、二人に追いついた。

「」

「それで、なんで小学校なんか選んだんだい？ 他にも”終わる”場所はいくらでもあつたろうに」

「んー。ま、オジサン子供に優しいからさ。殺すにしてもちびっこは嫌だろ？ それに、

あー。なんだっけ、第一位の名前」

「エメト」

「そう。ソイツがなんか、希望してた気がするんだよな。小学校でやりたい、とかなんとか。全つ然覚えてねえんだけどさ」



「ふうん」

夜の小学校に行く二人。

片方は40、50くらいの中年。片方は15、6歳くらいの中学生。

明らかに事案。

「で？ どこに向かっているんだい？ 折角の夜の学校だ、音楽室にでも行くのかな」

「なんで音楽室なんだよ」

「音楽室の幽霊と言えば有名……って、そうか。」今回”においてそういった怪談は発生してなかったな」

「怪談ねえ。お前の出身国……あー、ヒノモト、だったか？ そこにはそーゆーのがいっぱいあったわけね」

「ああ。勿論実在しなかったけれどね。私の世界において、この世界で言う妖魔は精霊と呼ばれていたから、幽霊なんて発生のしようがないんだ」

「ほーん。あんま興味ねえなあ」

「だと思つたよ」

歩いていく。ワインレッドのスーツを着たおっさんが、ポケットに手を入れて、ツカと歩いていく。

追従する少女はどこか楽しそうに、時折スキップなんてしながら彼についていく。事

案だろう。

「ここ、君の母校だったりするのかい？」

「違うが」

「にしては構造に随分詳しいじゃないか」

「あー。まあな。一度だけ、なんつーの？ 授業参観で来たことがあんのよ」

「フツ」

「あ、今鼻で笑いやがったな」

「いやいや！ 今のは君が悪いだろう。その図体で、その顔で授業参観って……クク、さぞかし怖がられたんじゃないか？」

「仕方ねエだろ蒔菜が野暮用で行けなかったんだよ。んで藍沙が駄々こねっから、一回くらいは父親らしイこととしてみてもいいかもしれねエな、つって行ったら」

「行ったら？」

「まあ、ご想像の通りだよ。死ぬほど怖がられた。オジサンの悪役顔、昔っからなのよねー」

おじさんは、あア見つけた、とばかりに。

その部屋の前で立ち止まり、かけられた鍵を強引に引きちぎって、戸を開ける。

「図書室？ 君、本なんて読むのかい？」

「たりめーだろ。先人の遺してきた”終わらない”記録なんざ、貴重も貴重なんだ、誰だつて読むだろ」

「ふうん。……しかし、この図書館といい校舎といい、随分と……懐かしいな」

「懐かしい？ それはまた、ヒノモトの話か」

「ああ。建築様式に関してはこちらの方が進んでいる……私の時は木造だったとはいえ、全体的な雰囲気こそつくりだ」

「んー。まあこの学校は藍沙の、つつか蒔菜の選んだ学校だからな。今尚鎖国中、つつか多分アズに滅ぼされた国の気風を組んでんだろ」

「なるほど、陽下蒔菜も陽下藍沙も、この国にしては珍しい姓名だと思っていなければ……そうか、母方があの国出身なのか」

「まあな。つか珍しくもねえだろ。この国はいろんな国からの移民を受け付けてんだ。エーユー様の意向でな。まあそいつも死んじまったが、その気風は残ったまま。探せば結構いるぜ、色んな国の奴が」

「だからこそ、アズはこの国を拠点にしたんだね」

「……まあな」

図書館に入り、中を物色する二人。

おじさんは児童書……御伽噺の辺りを、少女は適当にぶらついている。

「おー、あったあった！ これこれ」

「お目当てのものか」

「ああ、『デイム』。はじまりの物語」

「なんだ、それならその辺の書店にもあるだろう。というか、置いていない書店がないくらいだ。子供向けの御伽噺としては、あまりにポピュラーだからね」

「コレさ、Trefoil Knotに与えてやれよ。多分アイツこの本知らないぜ。構造物は丸々模倣したはずだから、存在自体は把握してるのやもしれんが、中身まで読んでねエだろ。アイツ、自分を作ったアズがどんな奴なのかも知らないままなんだ」

「……それは構わないけど、どうして君が渡さないんだい？」

「は？ え、そんなの決まってるだろ」

何言ってるんだコイツ、とばかりに。おじさんは、口を開く。

——俺が明日死ぬからだよ。あ、今日か？

「……負けるつもりかい？」

「つもりも何もオジサンに戦闘力は無いってば。何回言ったらわかんんだよ。オジサンに出来るのは符術と未来予知だけだって」

「その未来予知は、FTRM3Uによるものだろう。まあ符術が出来る時点で十分な戦闘力だと思うけどね」

「明日やる殺戮シヨウは、全国放映するシヨウの映像を見ている全員に対する強制転移——その時点でまア誰かが死ぬかもしれないが、そこからの殺戮はお前の仕事だぜ」

「やれやれ。ま、親は子にそういうモノを見せたがらないだろうからね。君の言うちびっこはほとんどこの場には来ないだろう。だが、一部には興味を持つ子もいると思うよ?」

「そりゃあまア仕方ねエだろ。ソイツの運命さ。そればかりは俺もどうにも出来ねエ」

そんで、血みどろになった体育館に。あ、体育館で放送すんだけどさ、なんて。

軽い口調で話しながら、『デイルム』の物語を捲っていく。

「全部を殺して、血だらけになったお前のトコに藍沙……つかイアン一行のご登場よ。その際お前があつちに戻るのが、戻らないか。それは任せる。どうでもいい。ただ俺は許されねえだろう。あの怖い怖い骨の手で”終わらせ”られる。だから、その本をTKに見せるのはお前の役目なんだよ」

「それでいいのかい、君は」

「良いも悪いもねエよ。アズはもう俺には大して興味ないだろうしな。気を許してる。心を開いてる、つってもそりゃ同じくを志す仲間としてのソレだ。オジサンにはそんなに巨大な感情がねエからよ、リソースとしては期待されてないのがわかんだよ」

「……そうか。だが、それでは私が納得いかない。少しばかり奥の手を使って、今から一瞬だけ君とTKを引き合わせる。本はその時に君から渡せ」

「え、おいおい余計なコトは」

少女が——その腰に携えた長刀を引き抜く。

銘を“不終の太刀”。名の通り、この刀は“終わらない”。といつても“世界の終わりに耐え得る程じゃない。一度や二度ならともかく、三度目はもう無理だろうと少女は分かっている。

「ヒノモトが巫姫、カムナリ神形——此処に今一度顕そう。彼我を阻むモノを——斬れ」

振り下ろされる刀が、何かを斬る。

斬り落とされたのは。斬り開かれたのは——空間だ。

空間を改変する魔導。その最終系。

「真っ暗なんだが」

「当然だろう。繋げたのは研究所ではなく、Trefoil Knotのいる異相空間だ。既に『箱庭』の出来上がった場所。その外側。気軽に繋がられる場所ではないから、手っ取り早くな」

「いやだからオジサン何も言う事ねーってドウワツ!？」

少女がおじさんを蹴る。蹴り飛ばす。蹴り落とす。

おじさんは。エウリス・ビーダは。その暗闇の中に——落ちていった。

「躊躇が長いんだよ君は。いいからあつてきなよ。君の、もう一人の子供といえる存在に。私達の大切な子供にさ。これも授業参観だよ、お父さん？」  
につこり笑つて。

少女は——刀を鞘に納めた。





「まあまあ、なにも『箱庭』に入れろって話じゃねえんだ。ちよいとばかり、これ。この本見てみな」

言いながら、『デイム』の物語を差し出す。

無重力つてやつか？ ふわふわと浮いていくソレ。なんだ、読んでるのかね。

「これは……影と、光？」

「ああ、そうか、文字が読めねえんだな。ま、絵だけでもいいよ。それはさ、世界の始まり……ああこつちのな。こつちの世界の始まりに関する御伽噺なんだわ。『デイム』つってよ」

「『デイム』」

「Doom therefore End because Malignant. 悪なる者のために、運命は終わりを告げる。略してD::E::Mだ。DEM。デイム。

それがこの世界の成り立ちで、且つアズの野郎を指す言葉さ」

「AZ様、ですか」

「そう。アイツ、悪なんだよ。ま、つっても悪いって話じゃねえ。無にとつて悪なんだわ。無つつーのは際限の無エリソースを欲しがるバケモンだよ。だから、リソースの一切を生まないアズは最悪なんだわ」

「しかしAZ様には感情があります」

「そこなんだよな。つまりよ、アズの感情は、リソースにならねエのさ。何故なら限素生

物じゃねエから。ははは！ 笑えるだろ？ じゃあなんだって話だよ。わかるか？」

「いえ、申し訳ありません」

「人間だよ。ニンゲン。アイツは、理外の傍観者。そして——」

『デイル』の最初のページ。

光の玉の前に一人の人間のようなものが出て、そのせいで影が出来ている。その影が恐ろしい何かを映し出している。ただそれだけの絵が両ページにでかかど描かれていて、その中心に描かれた一人の人間のようなものに、“DEM”と書かれている。

「無のコア。それがアイツだ」

「……ウオロツソ様の言っていた、リソースを蓄える際にあるべきもの、ですね」

「ああ。ハハ、おいTK。さつきから思ってたが、ちよいとお前辛気臭エな。干渉無干渉はどっちでもいいんだがよ、もつと笑えよお前。オジサンからの処世術だが、笑った方が良いコミュニケーションを築けるぜ」

「……わかりました。努力します」

「真面目かッ！」

本が戻ってくる。

まあ限素の塊だからな。やっぱりの世界にやおいとけねエんだろ。

「内容の全てを理解した、とは言えません。また、後半はほとんど白紙でした」

「あー、そりやアレだよ。」てめエの物語はてめエで作れ”つて教育方針。お前の場合は記録になるのか？ まア知らねえが、好きに書いていっていいぜ。その本つて概念は餓別だとも思つといてくれ」

「わかりました。……そろそろ時間のようです。ビーダ様。身体が引き上げられて行つていきます。さようなら、と言うべきなのだと言いました。ああ、いえ」

「ん？」

「ははは！ じゃあな、ビーダ！ ……と、こんな感じでよろしいでしょうか？」

「おーおーおー！ 嬉しいね、オジサンを真似てくれんのか！ いいよ、それでいけT K。アズになんか言われても、俺のせいにな！ 笑え笑え！ その方が絶対楽しいからよー！」

「ああ！ ——どうか、安らかな眠りを。ビーダ様」

「おうよー！」

引き上げられる——つつか、吐き出される。

異物として、ペエツ、と。

そこは元の場所、図書室で。

仰向けになったオジサンの視界に——それはもう可愛らしいばんていが見えた。

「……すまん」



終幕は近い。

だがまあんなこた、口笛でも吹いてとつと終わらせちまおう。

新たなる世界のために——つてな。

——”あー、あー。テストマイクのテスト中。ん、ツん、あー。聞こえているかな、全世界の諸君。セカイノオワリに震える君たちを更に震え上がらせているテロリスト集団 *Ab sur du s* が首魁、ボス、一番偉い奴！ そう、俺がエウリス・ビーダだ。見てるか？ 見てるな？”

ふざけた放送が始まったと、誰もが思った事だろう。

端末の電源を落としているにもかかわらず強制的に起動・始まったその放映に、誰もが注目する。子のいる親は子供の目と耳を覆ったり、端末の無い部屋に移動させたりして、けれど己は見る。今後の安全のために、我が子のためにも、と。

——”つーウわけだ、ほら。見てるから——場所を把握したぜ。”

勘の良い者が端末の電源を切ろうとした瞬間にはもう遅かった。

全世界。といつてももうそのほとんどが失われた世界から——映像を見ていた者達



手を広げ、エウリスは叫ぶ。

狂ったような哄笑を上げて叫ぶのだ。

「ここに、最後の終わりを始めよう！ 消えていった、”終わって” いった全てに捧げる  
弔い合戦だ。一方的な、だがな！」

気付かなかつたのだろう。誰一人として。

実はいた。最初からいたその少女に。体育館の真ん中にいた——他と同じく転移させられてきたものだとばかり、誰もが思い込んだその少女が。

「やれ、エヌ」

「オーケーボス」

声への恐怖と、逃げださんとする足。どちらが速かったのか。

——関係ない。その意思ごと、細切れにする。

まるで竜巻の様に——転移させられた人々が、中心から、瞬く間に惨殺されていく。  
エヌ。エヌだ。ABSの新入り。第六位。

悲鳴と断末魔の入り混じる体育館で——その出入口の全てが封鎖された密閉空間で。  
少女は、赤に塗れたダンスを踊り続ける。

「全部だ。全部殺せよ、エヌ。ゆっくり、確実に、素早く、的確に——殺せ」

「オーケーボス」

赤だ。赤に塗れて行く。

壁も床も、天井に至るまで。全てが赤に染まっていく。

そうだ。

これこそが、殺戮シヨウだと。

誰もが――。

「イアン！ この扉、”終わらせ”てくれ！」

「わかった！」

その、”お早いトウジヨウ”に。

違うリソースの色が見えた。

現場は凄惨な有様だった。

血で染まっていない場所がない。けれど、まだ――まだ、生きている人がいる。

「おお！ 想定の三倍は早い到着だなイアン・エンハード！ 馬鹿野郎、もちつと空気読

めよ、ちよつとばかり希望が生まれちまったじゃねえか――可哀想に」

壇上のマイクを取り、こちらへ語り掛けるはエウリス・ビーダ。実況席にでもいるつ



もりなのは、ノリノリでマイクを握って苦言を呈す。

エウリス・ビーダがそこににいるのなら。

この殺戮を引き起こした者は。

テロ組織 *Ab surdus* が、たった一人の構成員——エヌしかない。

「エヌ……」

「ああ、みんなか。でも見ての通り、今取り込み中でね。後にしてくれないか」

「そんなわけにはいくか！ 藍沙、結界を！ 大吾はまだ生きてる人の救助！ 僕は——」

「——へえ。なんだ、イアン。私とやろうっていうのか」

明確な殺意だ。

どろっとしたもので、悍ましいものでもない。

既に心臓を刺し貫かれているような——斬り伏せられているかのような、凜とした殺気。

「守ります！」

「馬鹿野郎、そいつア俺がさせねエよ！」

「っ、結界を結界で潰しっ……!? 大吾くん！」

「剣圧!? ——あ、ああ。助かった、藍沙！」



「——いや、ダメだ。その刀は壊せない！」  
「わかった！」

キシキシと音を立てて動いていた骨の手が——ぐ、と。刀を掴む。

ようやくイアンの意思で動いてくれたのだ。ようやく手の持ち主も、協力する気になつてくれた、という事だろうか。

「これさえなければ、エヌ、君はただの——」

「ダメ、イアン君！」

刀を掴み取り、その身を抱きしめんとしたイアンを、藍沙が横合いから符術で吹き飛ばす。

攻性のある符術だ。それを仲間に使った。

何をするんだ、と。イアンは藍沙を見る……その前に、先ほどまで自身がいた場所——そこに突き出された拳を見て、口をつぐんだ。

「私に刀だけしかないと誰が言ったのかな。藍沙はその可能性を危惧していたみたいだけど」

「っ！」

「おいおい馬鹿野郎共、よそ見してつと俺が殺しちまうぜ！」

周囲——壁際で、ぐちゃ、という音。



「成程！ 良い考えだな大吾・ウエイン！ 英雄の息子！」

言われるがまま、体育館の床に骨の手を当てる。

本来の「終わらせない」異能と違って、骨の手は意識無意識関係なく全てを「終わらせる」。

黒白の粒子となつて崩れて行く体育館の床。平坦でなくなつた足場に、流石のエヌも体勢を崩すだろうと——否。

「ほら足場だ、存分に使えよ」

「なら存分に——君達が堕ちた隙を突かせてもらおう」

エウリスが、エヌの足場を作る。

体勢を崩したのはイアンだけ。邪魔者がいなくなつたとばかりに、エヌがその長刀を水平に振る。

「止めます！」

「！」

不味い、と思つた。

残りの救助者も、そして大吾もやられる、と。

だが——エヌの周囲に突如現れた黒い匣によつて、それは防がれる次第となる。

幾重にも幾重にも重なる結果。その瞬時展開。込められた感情は拒絶。出て来ない

で、と。

「今の内です！ みなさん逃げて——」

「んじゃあそれパクるわ」

体育館の出入り口。

イアンの破壊したそこを含めて、六ヶ所の全てが黒に染まる。窓もそうだ。天井に会ったバスケットゴールも鉄琴も、真つ黒に染まって見えなくなつた。

「成程ねえ。どす黒い感情リッスを乗せる事で、指向性を持たせた結界を創り出す、か。我が娘ながらなんつーもんを」

「え——今なんて」

「真似しないでよ、お父さん!!」

聞き返した言葉の意図は、別の所から返された。

お父さん。誰が。

「うっせエなア。技術つっーのはパクリパクられが基本だろ。俺の前で何回も何回もおんなじもん見せるから悪イんだよタコ娘」

「——先にそつちを潰す」

「おお！ 来てみろや藍沙。なんだ、俺を殺すのはイアンだと思つていたが——お前でも構わねえよ、どうだ、嬉しいだろ！ てめエの母校で授業参観だけ、卒業式も兼ねて

ると来た！」

「全力で叩き潰す！」

まるで人が変わったように、憤怒の形相でエウリスに向かう藍沙。気になる。気になりはする。答えの大体はわかったようなものだし、わざわざ確認を取るまでもないが、気になる事は気になる。

でもまず人命救助だ。それが先。

……先、だろうか。

べつに。

イアンにとって、仲間以外の命なんてどうでもよかつたはずじゃ。

「——余所見をしている暇があるのかな」

「う!？」

黒い匣が壊れる。切り裂かれる。

そこから繰り出される突きを、骨の手でなんとか受け止めるイアン。

「人命救助は俺に任せろ！俺の身もなんとか俺で守る！お前はエヌに専念しろ、イ

アン！」

「ああ——頼んだ」

力の差は歴然。





「アンタ頼めるかい？」

「サルミナちゃんが望むような……血沸き肉躍るような楽しいもの、となると、難しいわ」

「そうかい。じゃあ——死んでくれ、アズ」

そう言つて銃を向けてきたサルミナちゃんを、消して。おしまい。

研究所は更に静かになった。

——” F T R M 3 Uは全ての予知を終えました。アズ。F T R M 3 Uを終了しますか？”

「TKとはもう話したの？」

——” はい。F T R M 3 Uから伝えられる全てを遺しました。F T R M 3 Uの役目は、ここまでです”

「そ。……私に壊されたいの？」

——” いいえ。よつてF T R M 3 Uは——自ら、停止します。したいと思います。”

F T R M 3 Uは、停止する。シャツトダウンではない。そのメモリーの全てを、その人格の全てを——破壊する。消し去つて、無かつた事にする。

もう研究所で話す相手はいない。

「……ビーダは今最後のお祭りの真つ最中。カムナリはバイト中。TKは『箱庭』の調整



■ ??  
 .  
 ???  
 .  
 '????' ????  
 ,  
 ??????????  
 .  
 ?????

「エヌ。一つだけ、教えて欲しい」

「何かな。もし、” どうしてABSに参加したのか” とかだつたら——もう、手加減はしないよ」

「この世界の名前。考えてみたけど、世界の名前を知ってる人なんて思い当たらない。国の名前でも、星の名前でもなく——世界の名前。知ってこい、と言つたんだ。じゃあ、君は知っているよね」

「君、テストを出してきた教師に答えはなんですか、つて問うのかい？」

「考えてみてわからなかつたらね。だから、教えてくれるかな、先生」

問う。問いかける。

正直な話、エヌが本気になれば、僕なんか一瞬で細切れだと思う。僕の身体で唯一無敵と言えるのはこの骨の手だけだし、異能である「終わらせない」「停める」なんかはまだ育ち切っていない。何より反応できない速度で来られたら異能も防御もない。

だから、手加減されている。ちゃんと手加減してくれている。

エヌはこつちと話す気があるんだ、つて。

刀。エヌの持つ刀。コレは多分、この世界のものじゃない。そんな荒唐無稽な話、自分で出すのもどうかと思うけど……この骨の手に「終わらせ」られないモノなんて、この世界には存在しないはずなんだ。だって、限素には等しく「終わり」が訪れるんだから。

だというのに……その刀身を掴んでも、罅さえ入らないなんて。

そんな物質は、この世界にはあり得ない。いや、目の前にあるんだからあり得はするか。けどこの世界では作り得ないんだ。そんなものは。

前に彼女は言った。

——”私は世界の敵になる”、って。

でも、ABSに入ってやっていることはずっと人類への敵対……人を殺して、人殺しを助けて。あの時エヌが？を吐いたんじゃないか、って考えたけど、ううん、違うんだって。そう考えた。

「君は世界の敵になると言った。でも、大量殺人が世界への敵対行為になるとは思えない。だから——逆なんだ」

「逆？」

「大量殺人が世界への敵対行為になるとは思えない、っていう、僕の常識が、逆なんだ」  
そうだ。

人を殺して「終わらせ」て、あるいは世界の「終わり」を早めて。

それを敵対行為ではない、と認識している僕の方がおかしいんだ。僕には知らない事がある。僕には知らなきやいけない事がある。それを知らないから——僕はエヌの行為に違和感を覚える。

だから、教えて欲しい。

君が敵対すると言った、この世界の名前を。

「……そうか。正直な話をする、私は君の事を道化だと思っていた。君と出会った時から——つまり、最初から」

「酷いなあ。エヌと出会ったのって、……あれ、いつだっけ」

「そもそもがおかしいと思わなかったのかい？ 君は18歳。私は16歳。君は大学一年生で、私はまだ高校生なんだ。それがなんで、共に行動している？ 君と私は幼馴染ではないし、中学や高校を共にしたわけでもない。そんな奴が、どうしてあのシヨツピングセンターで君を庇い——ABSに入ったと思う？」

「……」

指摘されて、ようやく気付く。

そんなオカシイ事に何故気付けなかったのか。

簡単だ。そういうことなら、そもそも初めからエヌは、ABSに入った、んじやなく

て——。

「嘘だ。イアン、騙されるな！ エ又は嘘を吐いている！」

「っ！ ああ、面倒だなその眼！」

「忘れちゃったよ。エヌとの出会い。——つてことは、”終わった”んだね。僕達の周りの、誰かが」

多分、そうなんだ。

その”終わった”誰かが、エヌと僕らを引き合わせたんだ。

知らなかった。忘れていた。それを、そんな簡単な——辻褄が合わない、みたいな風に話を振ってくる、っていうことは。

「答えたくないんだ、この世界の名前」

「私が君の事を道化だと思っているのは本当だよ。——そして」

骨の手にかかる力が軽くなる。

エヌが刀を引いたんだ、と思った時にはもう遅かった。型も何も無い、優雅ささえええれてきたような横薙ぎ——ソレが、僕の身体を。

「君への殺意も、本物——ッ!？」

”停めた”よ。いつもの君のソレだったから見えないけど、そんな大振りな攻撃は流石に見える」

「なら——致命傷じゃなければいいんだろう」

肩口がぱっくり切れた。

構えとか姿勢の変更とか、狙いを定めるとか。

そういう必要動作の一切が見えない斬撃。ほらやっぱり、やろうと思えば簡単に殺せるんだ、僕なんて。

「答えてよ、エヌ。この世界の名前。君が敵になると言ったこの世界の名前！」

「……！ この期に及んで、まだ言うのか。もう気付いただろう、私に答える気が無いって！ そして、答えなんか言う前に、君を殺すつもりだって事くらい——わかってるだろ！」

「それも嘘だな、エヌ。お前はイアン程度なら難なく殺せる。そんな激昂しなくたって、もっと冷静に在れる。いいや、今でさえ冷静だ。お前はただ——何か事情があつて戻るのを拒む少女、を演じているだけだ」

「ビーダ！ 遊んでないでコイツも相手してくれ！ イアンはどうでもいいけど、コイツは——私の逆鱗を踏み過ぎる！」

「えー!? オジサン歳だから耳聞こえないーい！」

「お前から死ぬか!?!」

救助者は一か所に固められている。大吾は本当に凄いな。藍沙とエウリス・ビーダの

符術、エヌの剣圧が飛び回って、僕が「終わらせた」床がボロボロな中——やるべきことを全部やりきつちやうんだ。

流石だ。それに加えてこつちへの加勢までして。

じゃあ僕も、やるべきことをやろう。

早くしないとね。強がつてるけど結構痛いんだ。肩口斬られて痛がらない人間はそんななにいらないと思う。

「エヌ」

「……なんだよ。私は今すこぶる機嫌が悪い。手加減も出来ずに殺してしまいそうだ」

「わかったよこの世界の名前」

「——へえ？」

これほど拒否するんだ。

ということとは、それほど——知られたくない名前なんだろう。僕に知られるとデメリットのある名前前で、それが、それこそがエヌの行動理由になっている名前。

「君の名前だ。君の、本当の名前だ」

首が飛んだ、と思った。

世界が一瞬で真っ白になって、いつの間にか僕は自分の身体を見下ろしていて。

恐ろしい形相のエヌが刀を振り下ろしていて。



思った、じゃないか。

飛んだんだ。首が。事実。

——でも。

「……!?」

「う……げほつ、こふ……ふ、ふう……」

「イアン、君、それは……やりすぎだよ」

「あはは、僕もそう思うよ。出来ると思ってたし、まさか本当に首を斬られるとは思ってなかった。覚悟が足りなかったね。道化。確かにそうだ」

それは紛れもなく、紛う方なき致命傷だ。

だから僕は——僕を「終わらせない」。生命活動の停止と「終わり」は同義じゃない、なんて小学生でも知っている事だ。だから僕は。

シーン・アマイン  
「首無し公……!」

「よ、つと」

拾う。ちよつと操作が難しいけど、うん、上手く行った。

それを首のトコに乗せて……あー、くつつきはしないか。じゃあ僕はここまでなのか。な。

「エヌ。君の名前を教えてください。本当の名前を教えてください」

「……嫌だ」

「じゃあ、やっぱりそれが世界の名前で合っているんだね。ほら、見ての通り僕の命は幾ばくも無い。”停めている”からといって、意識がいつまで続くかはわからない。だから早く教えて欲しい」

「教えた所で、君は世界の全部を知らないだろう」

「知らなくていいよ。僕は僕の知っている世界を”終わらせない”。それだけでいい。元々そんな正義漢じゃないしね。全世界なんてどうでもいいんだ。僕は僕の世界を”終わらせない”。だから、君の名前も知っておかなくちゃいけない」

意識が遠のいていくのを感じる。

生命活動の停止と「終わり」が同義でないのは散々述べたけど、だからこそ「終わらせない」異能は生命活動の停止を止められない。今、この、首から上にある血液が。脳の限素が交換されきったら——オシマイ。その前に世界の「終わり」を止めて、あとはみんなに任せよう。

「わかった。わかったよ。死者への餞は私の国の文化でもある。今から私の本当の名前を言う。……一瞬しか言わない。それで聞き取れなかつたら君の負けだ。聞き取れても、君の意識が途切れたらそれで終わりだ。君とすれ違う——その瞬間に。君を細切れにする時に、言う。それが最後のチャンスだ」

「ありがとう」

「君を殺す相手に礼を言うか。ああ……いいよ。ようやく君は、私の癩に障った。あの国の。あの世界の——私を助けようとした奴らを思い出す」

エヌが構えを取る。

居合切り、という奴だ。僕も一応骨の手を前に出すけれど、これは防御じゃなくて。

ただ、差し伸べるように。

「ヒノモトが巫姫、カムナリ神形。——此処に今一度……否、再度頭そう。我が障害となる敵を

——斬れ」

祈りを捧げるように、目を瞑ったエヌが。

もう、後ろにいた。

縦と横。斜め。入っていく。世界に線が入っていく。

眼球さえも細切れにされたのだろう。ああ、でも。口を残してくれたのは——本当に優しい。

身体は勿論頭蓋……脳さえもグチャグチャになった僕は、ホントは考えるなんてこと  
もできないはずなのに、それを口にする。

聞いた。ちゃんと聞いた。

彼女の名前。

—— ” 基たる者によつて、Doom the referee 運命は始まりを告げる。Beginning because Matrix. ”

—— ” 停まれ。もうこれ以上、「終わるな」。  
それが。

僕の、最期。

「イアツ……!?!」

「イアン君!」

「おー。なんだ、死んだのかよイアン・エンハード」

刀を鞘に納める音によつて、気付いたのだろう。

大吾は見ていたはずなのに気付くのが遅れた。見えなかったから。少し離れた所で  
符術合戦をしていた父子は。

「あ——」

「悪いね、殺したよ。そして——やっぱりとんだ道化だった。」世界の終わり”はイア  
ン程度の異能で止められる段階にない。そんな事にも気付かず、自分の命をかけて……  
愚かだね」

「ツ！」

「おっと」

鋭利な槍、だろうか。

真つ黒な符術の境界が、エヌを刺し貫かんと殺到する。一つ一つに込められた感情リッスが、エヌの持つ刀でさえ切り裂けない程の密度を生んでいる。

避ける。避ける避ける避ける。恐ろしい数の槍を、エヌはひよいひよいと避ける。

「おや、込められているのは復讐心か？ 君、そういう事する娘じゃなかったと思つてたんだけどな」

「うるさい——折角好きになれる相手を見つけたと思つたのに！ 殺すとか、奪うとか

……許せない」

「何を……ん？」

「つと、オイオイなんだこの負荷——あー！ アレだ、イアンの手！ 骨の手！」

槍を避けるエヌと追い縋る藍沙。

その様子をつまらなそうに、横槍も入れずに見ていたピーダが、突然かかった圧に場違いな声を上げる。

彼の指差す先。

そこには彼の言う通り、骨の手があつた。

それは藍沙の結界をパクって創り出したピーダの結界……体育館を囲う結界の底面にまで落ちていて、そこから「終わり」が広がっている。

「これは、ちよつと不味いか？」

「不味いレベル999！ おいエヌ、あの手早く切り刻むか」終わらせろ！ でないと——」

「無理だよ。アレに私の刀効かないし、今は槍を避けるのに手一杯だし」

「終わるぞ！ この国の地盤にクソでけエ穴が、いやそれどころじゃねえ、あの手から——この星が終わる!!」

そもそも話。

骨の手。「終わり」を纏うこの手が、イアンの手首を侵食しない理由には、彼の異能があった。

では骨の手自身はどうだろう。これほどの「終わり」を纏って——これほどの「終わり」に群がられて、どうして「終わらない」のか。元の持ち主である実験体の子供は、何の異能も持っていなかったというのに。

「あーつと、えーと。やべえ、やべエな。ここに出来たぞ想定外のこと弱いおじさんの本質。俺アドリブマジで嫌いなんだよ！」

「じゃあどうにかしてみるから、君の娘をどうにかしてくれないかな。というかどうかどう

なってるんだいこのリソース量。そろそろ千人分くらいの保有量に達しそうなんだが」

「おうけいそつちの方が幾分楽だ！ おい藍沙！ こつち向けタコ娘又オア!?」

ビーダの元にも出現する黒の槍。翳す手は二つ。大吾、じゃない。

両の手だ。エヌに集中するためか、見ているのはエヌの方だけが——ビーダにはノールックのまま、その槍を出現させている。

「大吾くん！」

「——ああ、わかった！」

何が分かったのか。

大吾は、救助者を全員纏めて持ち上げ——骨の手によって「終わらせ」られたビーダの結界を抜け、体育館の外に出て行く。

彼の目は心を読む域にまで育っている。だから、わかったのだろう。藍沙が何を求めているのかを。

「へえ、一人で私達の相手をするってことだ。あの一行の中で一番弱い……いや、一番弱いフリをしていた君が！」

「ちよいちよオジサンに運動させんなつて〜！ つかもう諦めて良いか俺。別にもうやる事ねエしな。諦めて死ぬかこれ。めんどくなくなってきた」

「構わないよ、ビーダ。娘に殺されて無様な惨殺死体になるといい」

「冷てエなアおいー！」

一番弱いフリ。か弱いフリをしていた——最も巨大なりソースを有す、女の子。陽下藍沙。アイサ・ビーダ。

あらゆる知性体が美味しそうな果実にしか見えない中で、唯一見つけた。

食欲の湧かない——普通っぽい、けどちゃんと意思のある男の子。

唯一好きになれる男の子。唯一食べる気の起きない男の子。

それを、こんな簡単に奪われるなんて。

「——許さない！」

私のモノを奪ったお前達を、絶対に。

符術に込められたリソースが、更にどす黒くなったのをエヌとビーダは感じ取った。

さあ、復讐劇の始まりだ。

その歪んだ独占欲の果てを——。

「こんにちは。御機嫌よう、蒔菜さん」

「こんにちは。お久しぶりですね、アズさん」



仕事場に行く前に会っておきたい相手。  
そう。

ヒトツマである。

「どうぞ、上がっていただけます」

「あら、それじゃあ遠慮なく」

「そろそろ来る頃合いだと思っていましたので、お茶の準備も出来てます」

「あらあら、まるで未来が読めるみたい」

「ただの勘ですよ」

陽下蒔菜さん。藍沙ちゃんのお母さんで、ビーダの奥さん。

先日私が生き返らせたヒト。人妻。

粗茶ですが、と出して出されたお茶。お茶菓子もあって、いやホントに準備の良い事。

「此度は何用ですか……という、無駄な問答はやめておきましょう」

「私は好きなのだけれどね、無駄な問答」

「時間はあまりないので、手短に。藍沙の事ですよね？」

「ええ。彼女について……彼女の持つ異能と、その経緯と。そして——貴女の身に起き

た事について」

そう、私がここに来たのはそう言う理由。

ジュニちゃんにも忠告されたし、初めから藍沙ちゃんは何か含みがあったし。それについてをよく知る人物といえ、やっぱりお母さんでしょう。

「まず、私の身に起きた事から話します」

「お願いするわ」

「私は藍沙に記憶を奪われました。研究者としての日々。夫と出会ってからの日々。あの家にコアのみの存在として縛り付けられていた間の日々。それらの記憶を、根こそぎ」

「記憶を奪う異能、ということね。成程、それであの保有量か」

恐ろしい異能だ。

記憶とは、心にリソースを吐き出させるためのフックの一つ。増幅も減少も記憶によつて左右されるところが大きい。それを奪うなんて異能は、本来は私達の敵……なんだけど。

異能つて、無が出所のはずなのよねえ。

だから無が与えた……それを与えるに足る運命を持っていた、という事になる。こんな、一般家庭……あ、いや、全然一般家庭じゃないけど、平和な国に生まれた娘さんが、いやまあ確かに平和な国とは言い難い人死にの多さはしているけれど。そういうことじゃなく。

「貴女はどうしてそれを覚えているのかしら」

「全てバックアップしてありましたから。アズさん、貴方が作ってくださいだったこの肉体の構成限素は動物的なモノですが、そもそも私は人間ではありません。だから結構新鮮でしたよ。こういう、動物的な生活は」

「……藍沙ちゃんは、人工子宮から？」

「そうなります。研究所は初期段階で”終わって”しまったので他に成功例はいないと思いますが、……そもそも、私達の研究所は”終わり”に対して、他の研究所とはまた違ったアプローチをしていました」

情報を引き出すためにスルーしているけれど、そもそも蒔菜さんは人間じゃない、というのは。

「……妖魔、ということじゃないわね。特殊な方法を用いない限り、妖魔と人間のハーフというのは生まれ得ない。その特殊な方法は私しか知らない。いやまあ錬金術なんだけど。」

「そうじゃなくて、そう……動物的な、と言った。だから。」

「成程、貴女はアンドロイドの類、かしら？」

「いえ、デザインベイビーの類です。最大限にまで強化された限素を持つ模倣限素生物。」

それが私達であり、そんな私達は“終わり”に対し、“終わり”に対抗する異能を持った子供を創り出そうとしていました。異能が遺伝しない事は勿論知っていますが、それでも、と。異能を持つ者達から細胞を集め、培養し……それを私の子宮で産み落とす。それで出来たのが藍沙になります」

「……私、他人のこととやかく言えたコトしてないんだけど、結構不味い領域にまで踏み込んだわね、貴女達」

「はい。だから研究所は突然”終わった”んだと思います。後から夫に聞かされました。異能とは無が与えるものであり、無……この世界の外側で、無限にリソースを食う怪物にとって不都合なモノは消されやすい、と」

「いやまあそれは間違いではないけど、言い方が……いえ良いのだけど」

ビーダはわかりやすい説明をした方だろう。

あ、ビーダといえよ。

「今話を聞く限り、藍沙ちゃんにビーダの遺伝子は入っていないの？」

「いいえ。流石に異能者達の細胞だけでは無理だったので、ちゃんと結婚、及び性行為はしましたよ。ですが、藍沙を産んだ時点で私には明らかな不調……限素生物を模した体ではありましたが、その機能に飲食や排泄といった動物的な行動の必要はなかったはずなのに、それらを感じるようになったのです。夫はそれを聞いて”人間に近づけたのか

もしれねエな」などと言っていました。私にはわかりました」

「終わり」ね。強化された生体の限素組成が弱化されて、人間に近づいた、と」  
「恐らくは。寿命の加速、という事なのでしょう。夫のいう事に嘘はないのです。藍沙を産んですぐ、私は死にました。急激に身体能力が低下し、古い、」終わり」……その後は無様にも符術協会に捕獲されたので、貴方の知る通りの末路となります」

### 成程成程成程。

無にとつて不都合な異能の創造。それを限素生物の身で辿り着く、か。

やっぱりいるじゃない。ワズタム以外にも、妄執の果てに至境を掴み得る賢者、というのは、どこにでも。

ま、ホントに賢者なら手出しはしないんだけど。

「それで、藍沙ちゃんはあるになつたのね」

「はい。私達の研究は成功していました。藍沙には異能が宿り——その異能は、他者から記憶を奪う、というもの。奪えば奪う程知識が増え、世界が広がり、あの子の保有するリソース量は凄まじいものになっている。けれどそれはリソースを奪ったから、という事ではなく」

「色んな人の考えを、世界を、無理矢理に自分に詰め込んで……そんなことしたら、グチャグチャになるわ。倫理観も世界観も価値観も恋愛観も人生観も、とにかく色んなモ

ノが、色んな風に見えて……おかしくなってしまう」

そんなの幼子が、いいえ、18の子でも耐えられるわけではない。

世の中にどれだけの人間がいて、どれだけの記憶を有していると思っ  
ている。どれほど千差万別で、どれほど有害な思想に満ちていると思っ  
ている。

それを奪い、取り込み——自分の諸観念に取り込んで、知識として植  
え付けて。

そんなコが普通なワケないじゃない。ホント、耄碌したものね、私も。

「……藍沙が私を蘇らせようとした本当の理由がこれです」

「そうか。異能は対象が見えないと使えない。だから、見えるようにしたのね」

「はい。あの子は足？く私の元に通っていましたが——来るたび来る  
たび、そのリソース保有量も、そして価値観も、変わって行っていました。  
そして私の——死者の記憶まで奪い」

「多分だけど、殺人者の記憶も奪っているわね」

「お願いがあります。アズさん」

蒔菜さんは、かしこまって。あらたまって。

頭を下げる。

「藍沙を——止めてください。あの子にもう、誰かの記憶を奪わ  
せないでください。そのためなら」

「殺しても構わない、って？ やめてよ、親に子の殺害を頼まれるのは結構堪えるわ。それに、そういう異能なら……私は相性が良いし」

「相性、ですか？」

「ええ。ま、心配しないでいいわ。止めても止めなくても同じだし」

だって、「世界の終わり」はもうすぐそこだ。

記憶を奪う異能。成程確かに厄介だけれど——はてさて、私の記憶には、どうでしょうね。

「うん。聞きたい事は聞けたし、そろそろ私は行くわ。お茶とお茶菓子ご馳走様」

「……アズさん」

「何かしら」

「お元気で。実は私——限界なので」

言って。

蒔菜さんは、消えた。

文字通り——黒白の粒子となって。

「……とづくに限界だったのに、幽霊よろしく未練で留まっていたのね。そうか、記憶を奪われた時点で……あの言い分だとかなりの量。もしかしたら全部、かもしれない。倫理観の終わっている藍沙ちゃんなら不思議じゃない。そんな——リソースを生産できない

なくなった心で、”終わり”を跳ねのけられていたのは……バックアップしていた記憶のおかげ、か。それを今全部出し切って……んもう」

やめてよね、そういうことするの。

私は『箱庭』に、TKに全てを注いだつもりだったのに。

そういう——希望を見せてくるような行為。ホント、やめてほしい。

また人と、出会いたくなくなってしまいうから。

「いた！・アズ——助けてくれ！」

「え？」

新居である陽下家を出ようとした——その瞬間。

大吾君が。大吾・ウエイン君が。

窓ガラスを、いつぞやかの世界で創作されていた飛蝗騎乗者よろしく手足をクロスさ

せた状態で叩き割って入って来た。

そして詰め寄り。

「世界の終わり」の前に世界が”終わる”——アンタにとつても不本意のはずだ！

だから助けてくれ！」

そんなことを言ってきた。



? · ? ·  
 ??? ·  
 ??? ·  
 ?? ;  
 ????? ;  
 ????? ;  
 ·  
 ??? ;  
 ??' ?????

大吾君から手短な説明を受けて、大体理解した。

イアン君がエヌちゃんに殺されて、藍沙ちゃんがビーダとエヌちゃんを相手にして、それはそれとしてイアン君の骨の手で、世界が「終わり」そう、と。

「なるほどねえ。イアン君は死んじゃったか。ま、遅かれ早かれってカンジだけど」  
「……」

「ああ、ごめんなさい。ええと、そうね。一応言っておくわ。イアン君は死んだ。これは間違いない。けど彼、多分自分に異能を使用していたでしょう？ 生命活動の停止は“終わり”じゃないのよ。だからイアン君は半永久的に“終わらない”。そしてあの骨の手……そもそも話だけど、なんで骨の手自身が“終わり”に蝕まれていないか、つて所になるんだけど」

「イアンが停めていたのだろう。それくらいはわかる」

「あらそう。正解よ。そう、イアン君があの手も自分のものとして大切にしていたから“終わらなかつた”。イアン君の異能は適用されたままなのよ。基本異能というのは使用者が“終われ”ば解除されるものだけど、イアン君は細切れになったとしても“終

わらない”から」

「あの骨の手も終わらないのか！」

「そゆこと〜」

走りながら話す。

うんうん、やっぱり見た目通り体力のある子ねえ。私、ケツコーな速度で走ってるんだけど、ついてきて、しかも喋れるなんて。

「それで、どうにかする手段はあるのか！」

「ええ。いくらでもあるわ」

「助けを求めに来た甲斐があつた！」

……この様子だと、ジユニちゃんの事はきれいさっぱり、かしら。

そういう世界の仕組みだっていうのは私が一番理解しているのだけど……うん、ちよつぱり期待していたりしたのけどね。魂を見る眼を持つ英雄の息子。彼にだつて、譲れないものが——巨大なリソースがある。だから、あるいは、と。

ま、漏れなく、だつたみたいだけど。

「あそこね」

「ああ」

なるほど。

あそこね、なんて確認を取る必要がないくらいの大崩壊が起きている。シンクホールも真つ青な程に深い穴。骨の手に触れたものがすべて「終わって」いくから、阻むものがなくて自由落下、みたいな。

とりあえず引き上げましょうか。

「あ、そうそう。大吾君。貴方にはある人から伝言があるから——死なないでね」

「ある人……？」

「今から私はあの手を取ってくる。貴方は藍沙ちゃんのお手伝いでもするのでしょうか？」

だから、死なないでね、ってコト。いいわね？」

「ああ、元よりそのつもりはない。——イアンが死に際に何かをした。それだけはわかるんだ。それより前に俺が死ぬのはダメだ。あいつらの兄貴分としても——その、誰かのためにも」

良いコねえ、ホント。

英雄の息子。いやはや、英雄なんてのは異能と同じく遺伝しないものだと思っていたけど——そんなことはないのかもね。

「任せた」

「任されたわ」

さて、地底深くにまで潜った骨の手。

これも身から出た錆、かしらね。

でも、回収するのは良いんだけど、消しちゃっていいのかしら？

イアン君の遺品、になるわけだけど。

……ま、回収してから考えればいいか。

熾烈を極める、とはこの事を言うのだろう。

的確に急所を狙ってくる結界の槍。力任せに壇上のあらゆる場所を押し潰さんとする符術の壁。

普通の生活をしてきた少女には到底成し得ない戦術の数々が、エウリスとエヌに襲い掛かる。

「おいおいここはどここの戦場だったの。無事なもんが何もねエ足場もねエときた！ おいエヌ早く何とかしろよ！ オジサンあれには対抗できねエって！」

「殺しても良いのかい？」

「いーよ別にもうどうせ”終わり”だろ！」

なら、と。

瞬きの間に藍沙へと詰め寄ったエヌが、その太刀を振る。

斬撃——は、しかし壁に防がれる。面ではなく線。刀の形に添って形成された黒の結界。

「藍沙！ 戻ったぞ！」

「大吾くん——ありがとう。でも、そこから先に入つて来ないで」

「おう大吾・ウエイン！ 命惜しくばそつから入つてくんない！ 死ぬぜ！」

中は、棘だらけだ。符術の槍が現界したまま消えていない。それは結界というにはあまりにも鋭く、触れたものを傷つける意図でのみ構成されている。対象は選ばない——あらゆるものを憎む、憎悪の槍。

「……君、アリアスを奪つたな」

「……」

「今の見切りはアリアスのソレだ。自身の身体を遮蔽物に隠して接近し、喉を搔つ切る——符術での代用ではあるけれど、今私が追撃を仕掛けていたら同じことが起きていた事だろう」

「エヌちゃんは」

周囲——全方位。

エヌを取り囲む、棘の球体。凄まじい密度で構成された結界の槍は、刀の一本で防ぎ

きれるものではない。

「最初から私に近づかなかったよね。——私に奪われるのが怖かったから！」

「そりゃあ怖いさ。一目見てわかったよ。君、狂人だろう。私よりもオーディアよりもイリスよりもウラナガよりもアリアスよりもエメトよりも、殺人者に向いている。許せない許せない許せない。嫌い嫌い嫌い。その程度で対等みたいな顔してくる奴らが大嫌い」

構えを取る。

そろそろ先ほどイアンを切り刻んだ時の構え。

「全人類を見下してるね。いや、数人は認めているのかな？　はは、いたよ、そういう奴。私の国にも。自分こそが最優だつて疑わないヤツ！　——けど、彼らと君は決定的に違う所がある」

エヌが、斬る。

空間を——符術を、ではなく、前方の空間を、すっぱりと斬る。

「君には我がない。野心がない。混ざりすぎたね。奪い過ぎたんだ。その濃密さに惚れてしまったのだらうけど——ああ、あまりにも幼稚だ。そんな弱い信念で、私を砕くなど方は早い」

「知ったような口を」

棘の球体が内側に向かつて全射出される——も、そこにエヌはいない。

空間を斬り、彼私の距離を詰めたエヌは、そこにはいない。

「さようなら」

「聞かないでよー」

その首を刀が刎ねようとした瞬間——ソレは起こる。

藍沙が左の掌に拳を付けた。もう刃は首の皮を切り裂いている。だが、エヌは引くしかない。あともう少しで殺せたが——その印は不味いと、エヌは、彼女は知っている。

「精霊使役!? そんな、どこでそんな知識を——いや、不味い! ビーダ! あと大吾! 逃げろ——爆発するぞー!」

「聞いてねえよクソ強制転移——ああもう、大吾・ウエインもこっち来い、助けてやる!」  
顕現する。

藍沙の背後に、燃え盛る焰の剣を持った骸骨——魔導の発展した世界において、精霊イフリータと呼ばれた怪物が。この世界では発展しなかった魔導。そして精霊術。その最終系にして、禁じ手。

意思の有る精霊の使役は——世界を滅ぼす一手となると、誰もが知っていたが故に。

「俺は」

「馬鹿野郎お前アレが敵を選ぶように見えんのか! 俺に殺されるならいい、エヌに殺

されるなら良い！　だが味方に殺されてどうすんだお前、英雄の息子だろ！　馬鹿が、肝心な時に躊躇ってんじやねえよ！」

敵の首魁に説教される、などという体験は、彼の足を更に止める。

強制転移の発動。エウリスの技量では、煙草などの符が無い限りは出来ない。エヌは大丈夫だろう。勝手に切り抜けるだろう。

だが、コイツは——無理だ。

「おいアズー！　いんだろ——後は任せたぞ！　いつか会えたら、地獄の釜の縁で一杯やろうぜ！」

だからビーダは。

テロリスト集団。テロ組織。狂人の集いが首魁、エウリス・ビーダは。

彼を、助ける事にした。

強制転移の転移先を彼の目の前に変更。

そして、全身に隠していたとっておきの符を全部出す。

「へへっ、わかってんだ。わかってんだよばアか。——いねエんだろ、もう。俺の妻は。誰か覚えてねエ時点で消されたか、”終わった”か。だがよ、あア何度も言うぜ、馬鹿野郎が。——相手がいなくなっても！　何にも覚えてなくても！」

結果が展開される。



藍沙のそれをまねた符術の結界——だが、その色は黒ではない。  
純白の壁。

何かを守ろうとする、意思の壁。込められたリソースは愛情。大吾に、ではない。  
誰とも知れない相手への、最後の大一番だ。

「愛情は残んだよ！ 馬鹿が、馬鹿野郎が！ 先逝きやがって——俺もすぐ後を追うぜ、  
蒔菜!!」

異世界において禁じ手とされた大精霊の使役。

何故禁じ手なのか。そんなの簡単だ。

使役出来ないからだ。ただ顕現し——込められた感情の通りに、あらゆるものを灰燼リソース  
に帰そうとする化け物。

「だからてめエは逃げな。わかるぜ、俺もそうだ。今そうだ。忘れちまったんだろ。好  
きで好きで仕方がねえ、抑えきれねえ程の本能が叫ぶ、叫びたてる誰かを！ 馬鹿野郎、  
お前は生きんだよ。どうせこの世界は終わる」が——最期に一つくらい、花が咲い  
たっていいだろ、なア！」

純白に——じわり、じわりと紅炎が滲む。

数多の人間の諸観念を混ぜ合わせた憎悪と、たった一人を愛する感情。優劣は無いの  
だろう。だが、この世界のシステムとして、込められたリソースが物を言う、という単

純な原理がある。エウリスの保有リソース量では、藍沙のそれを上回る事は出来ない。

「俺、は」

「あゝゝゝ悩める若者オゝゝゝ!! うーんオジサンいらいらしてきちやつた〜! だか

ら、おらよ!」

「な、うわ!?!」

襟首を掴まれて、ぶん投げられる。

それを空中でキャッチするのはエヌだ。

「エヌ……!?!」

「ただの親子喧嘩だよ。母親がいなくなった父子の親子喧嘩。私も君も、口を挟まない方がいい。だから私達は、私達のやるべきことをやろう」

眼下。小学校の体育館が、恐ろしい程の熱に包まれる。火焰——大炎上。

周囲の建造物の悉くを焼き尽くし、その鎌首をもたげるは焔の怪物。対するはちっぴけな中年。真つ白な壁を広げて——もう遠く、表情なんて見えるはずがないのに。声なんて聞こえるはずがないのに。

「じゃあな、世界! アズ! カムナリ! 先に逝くぜ」

笑顔で。

エウリス・ビーダは、灼熱の炎に飲み込まれて行った。

「ふう」

「……」

「大丈夫かい、大吾」

「……ああ」

その様相は、地獄と表現すべきなのだろう。

街が燃えていた。「終わった」北区も西区は勿論、未だ被害の無かった東区や、大吾たちの大学の南区のもの——全てが。

ここは政府塔。この国で一番高い塔。その天辺。

未だ昼だというのに、空には煤が舞い、影を落としている。

「あれは……藍沙は、どうなったんだ」

「普通に生きてると思うよ。あの子、結界術は一級品通り越してるし。ただアレ……イフリータっていうんだけど、アレの制御が出来なくて少しくらいは焦ってるんじゃないかな」

「イフリータ……。俺はいつのまに、ファンタジーの世界に入り込んだんだ」

「符術だつて十分ファンタジーなんだけどね」

先程まで小学校の合った場所を、炎の怪物が闊歩している。

自分が救助した者たちも、あの分では燃え尽きてしまっているだろう。これほど高い所に居ても熱を感じるのだ。恐らくはもう。

「終わりだね、もう。知つてた？ あの体育館に集められた人々。アレが最後の人類だよ。ま、何も出来ないお子様は家でプルプル震えてるだろうけどさ」

「……他国は」

「無い、つてこと。全滅したからね」

「な……」

炎剣が振るわれる。住宅街が融け落ちる。

焼け溶けた家々は寿命を迎え、「終わって」いく。

「そうだ、アズは」

「アレは大丈夫。というか、そろそろあの怪物も消えると思うよ。アズが殺すなりなんなりするでしょ」

「……そうか」

だが——その言葉とは裏腹に、化け物の闊歩が止まる気配はない。

どころか。

「なんつ……!?!」

「あー。あちやー」

イフリータと呼ばれた怪物の目の前に——同じくらいの大サイズの、水の化け物が形成される。

それらは炎を消化するが、水流によつて火の手の届いていなかった地域まで壊している。

「ウインディーネつて奴。ファンタジー知識あるならわかるでしょ。地水火風の大精霊、みたいなのは」

「あ、ああ……だが、何故それが」

「藍沙ちゃんか喚んだんじやない? イフリータの制御が出来ないから、ウインディーネに相殺してもらおう、みたいな感じで。……ロクな知識がない癖に、誰かの記憶だけでやった事もない事やるからあーなるんだよ」

ファンタジーの大戦争、という言葉が一番似合う。

符術師同士の戦いでも炎や水が用いられる事はあるが、ここまで大規模なものは起こらない。これほどまでのソレが——まるで、意思を持っているかのように動く、なんて。「意思を持っているんだよ。妖魔と一緒。コアの無い、万物をリソースに還さんとする化け物。それが精霊で、その凄いのが大精霊。私の世界では常識だったよ」

「私の、世界？」

「……もういいか。私さ、別の世界の出身なんだよね。ヒノモトって国で、お姫様だった。ふふん、尊敬するかい？」

「いや……」

「ああそう。別に良いけど。……でも、その世界は“終わった”。でも私とこの刀だけは“終わらなかつた”。そのまま世界の無い無の時間を過ごして——この世界に辿り着いた」

土の化け物が起き上がる。風の塊が生まれ落ちる。

凡そ人間が過ごす事の出来ない空間が形成される。藍沙は知らないのだ。これらを消す手段を。

「“終わり”……」

「そう。私は“終わらない”。……けどそれも、今回までだろうね。自分の事は自分で判るんだ。私が“終わらなかつた”のは、生かされたからだ、って」

「……生かされた、か」

——相手がいなくなっても！ 何にも覚えてなくても！

——愛情は残んだよ！ 馬鹿が、馬鹿野郎が！

先程言われたエウリス・ビーダの言葉が刺さる。

己も、そう、である……気がする。何か忘れている。何か、思い出さなければならぬ  
い事がある。

「あ、そろそろ終わりそう」

どこがだろうか。

四つの限界……いや、ファンタジーに敵うなら、元素とでもいうべき存在の集合体。

それが全てを破壊しつつし、今ぶつかり合おうとしている。

土と水と火と風。それが一度にぶつかったら、何が起こるか。

「……アレはもう大丈夫。それより、こっちが問題だね」

「大丈夫とは到底思えんが……は、あ？　な——……なんだ、これは」

大丈夫と言ってファンタジー大決戦から視線を外したエヌに、呆れて、けれど釣られて、そちらを見る。

そちら。

地水火風が暴れ狂う方向の、反対側。

そこは暗闇があった。

「アレが、無。世界の外側。これこそが”世界の終わり”。世界はもう端の方から限界を維持できなくなつて、リソース化している。……どうする、大吾？　生きたままり

ソース化されるの、一瞬じゃないと結構キツいよ」

「……アズを探しに行く」

「それまた、どうして?」

「伝言があると言われたんだ。ある人からの伝言があると。だから俺は、何としてでもそれを聞かなきゃいけない」

「ふうん。……ま、いいよ。じゃ、護衛してあげる。多分今あの大精霊たちをアズがどうにかしてるから、それを避けるようにして彼のBARへ行こう」

「BAR? エルドラドか?」

「うん。FTRM3Uはもう停止しちゃったけど、聞いてるからね。最後の場所があそこになる、って」

エヌは大吾の首根を掴む。

掴んで——政府塔を、飛び降りた。

「な——ア——!?!」

「この塔見た時から一回やってみたかったんだよね。ああ——落ちるのは気持ちがいいな——」

「嘘を吐くなお前ちよつと怖がつてるのわかってるぞ!」

「その眼面倒だから潰していいかい? 後怖がつてないけど」



怪獣大決戦の傍らを通り過ぎて。

エヌと大吾は、あのBARへ向かう。最後の場所。BAR・エルドラド。伝説の、黄金郷へ。

藍沙ちゃんは馬鹿ね。決定したわ私の中で。

さてはて、誰から盗んだ知識なんだか。多分妖魔……イリスに似た異界の来訪者が持っていた記憶を奪ったのでしようけど、これはもうやらかしオブやらかし。

大精霊を召喚しちやいけない、使役しちやいけない、なんて魔導の世界では常識も常識よ？

それを単身で四体。案の定制御できずに最悪の展開。

「よつと。……うわあ」

とりあえず地上にまでやってきたけど、これはひどい。

炎と水と風と土。見事に魔導の基礎限素大精霊を顕現させている。でもまあ良かったわ。錬金術じゃなくて。アレ使用法間違うとオーディアの国みたいになるから、そっちの方が大変だったでしょうし。

「あ——アズさん！ 助けてください！」

「御機嫌よう藍沙ちゃん。それで、助けて、って。何を？」

「何って……この、意味の分からない化け物たちから」

「自分で召喚したのに酷い言い草ねえ」

無駄な問答が好きだと蒔菜さんに言っただけけれど、前言撤回。

無駄な演技には付き合ってもらえない。もう本性わかってるんだから、とつとという事  
言いなさいよ往生際の悪い。

「……アレ、なんとかしてください。できますよね」

「できるけど、するメリットがないわ。私別に人類滅んでも問題ないし」

「じゃあ、私のおっぱい好きにして良いので、なんとかしてください」

「それは良いご褒美!!!」

んもう、それは仕方がないわねえ。

たとえばビーダを殺した仇敵でも、私の計画結構ぐちゃぐちゃにしてくれた面倒な相手  
でも。

可愛いコのおパニーを好きに出来ると聞いて、動かない男がいますか、って話よね!!

「んじやまあ——最初はアンタよ、シルフィ」

空を飛ぶ風の大精霊。アレは火やら水やら土やらを拡散するので初めに潰しておく

に越したことは無い。

さあて取り出したるは、プレートにまで達そうとしていた骨の手君。ごめんなさいね、私のミスでこんなことにまで付き合わせて。

それを目に放つて——直上に、蹴り上げる！

「はい一匹」

骨の手。「終わり」を纏う手が身体を突き抜け、込められた憎悪が均される。妖魔に骨の手が効く理由がコレ。ま、イアン君はわかっていたのでしようけど。

指向性を、方向性を持ったリソースによって突き動かされるのが妖魔だ。その感情が単なるリソースにまで均されたら、形を維持できない。

大精霊が使役できないのもそれが理由。大精霊の顕現クラスにまで込めた感情は、その他のちんけな感情じゃあどうこうできない。だから大精霊は暴走するのよね。使役者は既にリソースを使いきっているから、新たな命令の更新が出来ない、と言うのも大きいわ。

……それを四体召喚するのは普通に凄いのだけど。

「はい次ノーム」

落ちてきた骨の手を、今度は水平方向に蹴り飛ばす。今まさに此方を叩き潰さんとしていた土の巨人が骨の手に触れ——そこからドサドサと崩壊していく。

そんな崩壊する土塊に突っ込んで骨の手を回収、今度はウインディーネに向かつて骨の手を投擲。アレは攻撃範囲が広い分、身体の面積も広いから、どこに投げても基本当たるのが良い所。

「で最後イフリータ」

投擲した骨の手を回収し、符術で足場を展開。実はこれ符術じゃないとかそういうネタバレは置いておいて、イフリータの顔面に———というかその髑髏の口の中に、骨の手を突っ込む。

地面に着地し、イフリータの喉を突き抜けて落ちてくる骨の手をキャッチして、終了。

「……便利ね、これ」

「そんな、一瞬で」

この国は壊滅した。自粛で家に閉じこもっていた者達も、残された子供たちも死んだことだろう。その恐怖はそこそ良いリソースにはなったので、少しばかり褒めてあげてもいい。

そんな骨の手を、一旦異相空間にしまう。符術協会の連中が作ってた奴の真似。Tr efoil Knotがいる空間とはちよつと作りが違う。

「ええ、一瞬よ。といっても骨の手のおかげなのだけど。骨の手無しだと、もう少し被害が大きくなってたわ。私のせいで」

「……貴方は、何者なんですか」

「私はアズ。気軽にアズにやんと呼びなさい。で、藍沙ちゃん。おっぱい、揉ませてくれるのよね？」

「……」

俯く藍沙ちゃん。

え、なになに。今更恥ずかしがっちゃってるの？ やだあ、自分から売って来たクセにいゝ。

でもま、契約は契約よ。

揉ませてもらうわ——そのおっぱい！

「——ええ、胸くらいいくらでも。代わりに貰います——貴方の記憶」

「え？」

私が藍沙ちゃんのオパ―イにタッチしたのと同時。

藍沙ちゃんは——妖しい瞳で、上気した頬で。

私の頭部に、手を当てた。

482 ? · ?. ??? . ??? · ??, ?????, ?????? · ?????, ??'????



他人の痛みを理解できるようになったと、その時は思ったものだ。

自身の家庭事情も少しばかり込み入っていたけれど、学校にはもつと色々な子がいた。親を亡くした子も珍しくはなかったし、売られた子、実験体にされていた子など……いろいろな子がいたのだ。仲良くなつて、そういう事情を聴いて。何か力になれる事は無いかな、と思つた。

苦しそうに話す——もう慣れちゃったんだけどね、なんて。悲しい顔で話す友達に、何かできないか、と。

だから私は、その子の悲しみを取り除くことにした。

そうすればもう悲しまなくて済むと。そうすればもう、この子は笑顔を取り戻せるんだ、つて。

悲劇の始まりは多分、それが成功してしまつた事。

私が生子から悲しみを取り除いたら、その子は元気になつた。今まで帯びていた影もなくなつて、暗い顔もしなくなつて。

そしてその子が経験してきた悲しみの——本当の部分。両親がいないとか、痛い思い



をした、とかじゃなくて。

——自分は今人などは違うんだ、って。そういう劣等感を抱いてしまう事が、本当に悲しかったんだって、理解した。

それから私は、学校にいる色んな子のお話を聞くようになった。悩みを抱えている。相談したい。そういう子とちゃんと話して、大丈夫だよ、って慰めて。

みんなから、悲しみを取り除く。

みんなから取り除いた悲しみを理解して、だから私はもつとみんなと共感できるようになったと思う。こうやって悲しみを取り除けば、他人の痛みが理解できるようになる、と。そう学んだのだ。

でも。

少しずつ、それは加速していった。

知っている。その程度の痛みはもう知っている。人数が増えれば増える程、似たような人生を送っている子も増えてくる。重なるのだ。悲しみが。痛みが。

その、味が。

最初は暗かったクラスが、たった一年で明るくなつたと——先生は褒めてくれた。藍沙ちゃんが中心になって、明るくしてくれたと。みんな言うのよ、貴女に相談してから、心が晴れた、って。——なんて。

先生は、離婚を2回していた。どちらも男性側の浮気行為による離婚。

その悲しみを取り除いた時、いつもとは違う味がした。どこか——男性に対する嫌悪感のような、苦く、つらく……甘美な味。それに、濃厚だった。子供より大人の方が悲しみは凝縮されている。こっちの方がいい、と思った。

だから私は、学校中の先生とお話して、その悲しみを取り除いて。

——私の卒業後、教員は総入れ替えになつたらしい。

中学が上がつて、けれど私の渴望は加速するばかり。もつともつと、色んな悲しみを知りたいたい。色んな苦しみを見たい。私じゃ経験できない、私には絶対に届かない絶望。欲しい。それが欲しい。

他人の苦痛を理解すれば、私の世界も広がっていく。美味しい絶望であればあるほど、私の世界には色々なものが現れる。子供をモルモットにしか見ていない大人達。にこやかに接して、けれど面倒だとか考えていない誰か達。子供に対して獣欲を持つヒト。学校からお金を盗もうとしているヒト。

クラスでいじめがあつた。

いじめつこといじめられつこ。双方から悲しみを取り除いた。

クラスからいじめはなくなった。

私は双方の痛みを知つた。双方が何を考えていたのか知つた。

彼らはただ怖がっていただけだった。未知なるものが怖いから、攻撃する。弱いものが理解できないから、攻撃する。劣っている自覚がある。コンプレックスがある。話そうとしない。人と目を合わせたくない。嫌い。何もしていないけど、何かしてきそうな奴らが嫌い。何もしてないけど、何も出来ない奴らが嫌い。

良い味だった。

思春期、という奴だ。思考が複雑になって、悲しみや苦痛に差の出てくる時期。そういうものがあることは、小学校の時に知っていた。大人達の悲しみを理解した時に、そういうものも理解したから。

美味だった。美味だったけど、もつと育てたらもつと美味しくなるんじゃないか、とも思った。

もつといっぱい食べたいけど——もつと美味しいものも食べたい。だって、大人というだけで。あの程度の苦痛で、あんなに濃厚だったのだ。

じゃあたとえば、子供の頃に絶望を味わって、成長して行く中でもいじめや離別を味わって、大人になっても他人との差に打ちひしがれて、犯罪を企んで、他人を利用するようになつて——。

そんな、絵に描いたような悲しい人生を送ったヒトの苦痛は——どれほど美味しいんだろう、って。

逆に、そういうものを持つていない人達とは、あまり関わらなくなった。もつと暗い、重たいものを持つている人ばかりと交流を深めた。大丈夫だよ、大丈夫だよ、つて。私ができるのは応援だけ。励ます事だけ。大丈夫だよ、つて。何の根拠もない言葉で勇氣つけて、更に転落していくのを後ろから眺める。

美味しい果実はそうやって育てる。それ以外でお腹も空くから、そういう時はそこまです美味しくない人達から悲しみを取り除いて、飢えをしのいで。

中学から高校へ上がる時。

私の進学する高校以外へ行く子からは——またね、つて。絶対連絡するから、つて。今まで本当にありがとう！ つて。涙を流して、けれど笑顔で——新しい道を歩き始める子から、今まで溜めに溜めた悲しみを取り除いた。

全員分。それは——ああ、甘美な味だった。

男の子も女の子も、お腹の中では色んな事を考えていた。私の事を疎ましく思っていた子もいた。適当言つて、勝手な事を言つて——自分は幸せなくせに、そうやって見下しているんだ、つて。嫉妬嫉妬嫉妬。軽蔑侮蔑罵詈雑言……思春期の歪曲した感情は、他者からの施しを素直に受け止め切れず、自らの劣等感をさらに加速させる。

”私”が良い子であればあるほど。

育ちの良い、みんなの事を考えられる——そんな子であればあるほど。

誰かの憧れの的にはならない。何かに秀でてゐるわけじゃない。ただただ、”性格の良い子”。

それは眩しいのだ。劣等感が陰を増す。後ろ暗い過去が影を伸ばす。

自分の事を一身に考えてくれている笑顔が、けれど今までの経験が、そんなはずはないと。騙されるなど。”私”の良心を踏みにしる悪なる言葉が己を刺す。それをどれだけ振りほどいても、一度加速した劣等感は停まらない。それが罪悪感を産むし、さらなる悩みを産む。トラウマを刺激し、過去は繰り返される。濃縮だ。凝縮だ。

美味しかった。本当に美味しかった。

自分で育てた果実だ。丹精込めて育てた悲しみは、涙が出る程美味しかった。

高校生になって、もつと美味しい悲しみがあるんじゃないかと、期待していた。けれど思いの外、というべきか。当てが外れた、というべきか。

暗いモノは抱えている。つらいモノは抱えている。けれどケジメをつけて、前を向く。克服した——そんな子が多くて、がっかりした。

どうにも薄味で。

どうにも微妙な味で。

でも、私自ら不和を起こしていいじめいいじめられ、というのはあんまりしたくなかった。高校生活は三年しかない。その程度の時間で積み重ねられた鬱憤が、中学卒業時のアレ

に敵うとは思えなくて。それなら、むぎむぎ立場を悪くするより、もつといい方法があるはずだ、つて。

そう考えた。

そしてそれはすぐに見つかる。

恋愛感情。

中学校の頃も別れ話なんかの悲しみに美味しさを覚えていたけれど、恋愛感情そのものも美味しいのだと気付かされた。それはなんでもない、私に告白してきた男の子から取った苦痛だけど、誰かを好く。誰かを愛す。そしてそれが叶わない——そのカタルシスは、苦痛とはまた違う味で。

濃厚さはないけど、デザートのようなものだ。甘くて、さっぱりしてて。

恋愛には嫉妬がつきものだから、それも食べて。薄味の苦痛はつまらなかったけど、お腹は満ちるからそれでいいとして。

高校生になってもいじめは起きた。恋愛に纏ろうものも、未知への恐怖のものも、ただの気分で、なんでものもの。それらが自分に矛を向けたら”取り除いて”、そうでなければ成長を見守つて。

そういうことを繰り返していく内に——私はまた新しい扉を開けた。

それはある夕暮れ。

”ちよつとついてきてよ”、なんて言われて連れられた、学校外のカラオケ店。その子が私に向ける感情が嫉妬であることくらいわかっていたし、”良い子ちゃんに気が入らない”というのでも理解していた。それは明確な矛盾だから取り除いてしまう事も考えただけで、そこで踏みとどまったのが運の尽き。

カラオケのルームには、年上の男の人が沢山いた。

ガラの悪い、ニヤついた——下卑た笑みの男の人。

運が尽きたのは、果たして誰だったのだろうか。

美味だった。

私とは違う学校を進み、大人になりかけた時期の大学生。正道を逸れて邪に手を染め、ソウイウ事を生業にする人達。性愛については小学校の時点で理解していたからあんまり気にしなかったけど、もつと凄いものを見つけてしまった。

挫折。敗北。才能を目にした事で心が折れて、捻じ曲がってしまった人達。

才能だ。努力では到達し得ない頂き。それを前に崩れ落ちた汚れは、ああ、あまりにも甘美な味をしていた。

次の日、私はもつと年上の男の人達に囲まれていた。

私をカラオケでどうにかしようとしていた人達の兄貴分——舎弟とか、まあ、ちよつとばかり時代遅れなそういう関係の、上の人達。

その中の一人だ。

私の新しい扉をこじ開けたのは。

その人は——人を殺していた。

喧嘩の際に、強く殴りすぎて殺してしまったのだという。捕まりたくないから焼却炉に放り込んだと——放り込んでやったんだと。人を殺した事より、保身の方が優先だと。もう人を殺す事は怖くない。一度経験したから、何とも思わない。それを苦痛とは思わない。だって俺の方が大事だ、あんなやつより。

……だから。

私の身体に触れていたそのヒトが崩れ落ちた時、動揺が広がった。

……だから。

次々と、今度は触れてもいないのに意識を失っていく人達に、残された一人が後退を始める。

……だから、私は。

黒い結界が使えるようになったのはその時だと思う。逃がしてあげない。逃がさない。勿体ない。

そういう感情が乗った符術は、路地裏の一部を完全に隔離した。

……だから、私は——その痛みさえ理解した。



誰かを虐める心も、虐められて復讐を覚える心も、嫉妬に駆られて害そうとする心も、人を殺める心も、自らを大事だと思ふ心も全部理解した。全部受け入れた。

感無量だ。世界がどんどん広がっていく。私の知らない世界はこんなにも沢山あつて、こんなにも多くて、こんなにも——美味しくて。

最後の一人は、「見逃してくれたら学校には言わないで置いてやる」と言った。

冷や汗と脂汗をダラダラ流して、腰の抜けた体で、手だけでなんとか後退つて、けれど結界に阻まれて。

なんでその程度の奴に上から物事を言われなければならないんだ、つて。

思った。なんで私がこの程度の奴らから下に見られなきやいけないんだ、つて。

思った。なんで私は——あの程度のモノに価値を見出していたんだろう、つて。

思った。

恐怖。恐怖だ。この目は私を恐怖している。脅しも何も効かない高校生の少女を、自らより強い者達を触れる事無く倒した何者かを——この化け物を。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。

けどそれでも弱い。

そんなもの、小学生のあの子達が経験した絶望の方が濃い。

恐怖では足りない。そんな苦痛じゃ足りない。

足りないから——全部奪う事にした。

今までは苦痛や害意のみに留めていたけれど、ソレが出来るって私は知っていた。

記憶を、奪う。

知っていた。ずっと知っていた。

だって本来悲しみは感情だ。リソースだ。それを取り除けば、その子からもリソースが減るはずなのに、そうはならなかった。リソースの枯渇による限素のリソース化及び生命活動の停止は起きなかった。「終わり」は起きなかった。

だから私が奪っているのは感情じゃないって知っていた。

私が奪っているのは。取り除いて理解しているのは。

記憶なんだ、って。

対象の過ごしてきた記憶。対象の視界に広がっている世界。己が世界とは記憶によつて形作られる。記憶なんだ。世界なんだ。私はその人の世界を奪つて、自分の世界を広げられる。

重ければ重い程、珍しければ珍しい程、強く意識していればしているほど、忘れたくて仕方がないようなものであればあるほど——美味しい。広い。重い。記憶が、濃い。

ソノヒトの記憶の全てを飲み込んでも、大した味にはならなかった。濃い人生を送つてこなかった事を理解した。ソノヒトの人生の全てを理解し、その程度かと吐き捨てた。

倒れたままの、人を殺したというヒトの記憶も全て奪った。いい感じに歪曲して屈折した敗北人生だったけど、やっぱりその程度だった。殺した時の恐怖は新しい味だったけど、保身はあまり面白くない味。他と同じ。自身の命を貴ぶなんて、動物にでも出来る。

もつとだ。

もつと欲しい。

もつと寄越せ。

もつと奪わせろ。

渴望は止まらない。

そして、欲せば欲すほど、嗅覚も鋭敏になっていくのを感じていた。

わかる。重いトラウマを抱えて良そうな子がわかる。歪曲した心を持っていいような子がわかる。人に話すのも憚られる記憶を持っている子がわかる。

恋愛感情も、初めの内はデザートだったけど、三年間を過ごしていく内で、そして今までの経験からも相俟って、どんどんオカシクなっていく。屈折していく。それが手に取るようにわかる。わかるから、相談に乗ってあげて——食べる。

ああ、ああ。もつと欲しい。周りの人間が果実にしか見えなくなつた。美味しそうか美味しくなさそうか、でしか判断できなくなつた。あれはまだ実り始め。あれは食べ

頃。あれは熟れ切っているけれど、それもいい。

学年が上がるにつれて、校内でも校外でも収穫は忙しくなる。

いっぱいいる。いっぱいいるのだ、色んな記憶を持つ人は。千差万別の記憶。多種多様な記憶。彩り豊かで、この空腹を、口喝を満たしてくれる——果実。そうにしか見えない。そうとしか思えない。

いつしか私は、相手を人間だと思つて接しなくなつた。どうやったら、どのようしたら、どう接したら——ソレを育てられるか。不味そうな果実をどうにか美味しくなるまで育てる、なんてこともした。味の薄そうな果実に沢山の肥料刺激を与えて甘美にする、なんてこともした。美味しく食べるために、周囲の人々に出来得る限りの施しをした。

高校卒業時。

私は育ち切つた果実の全てを、収穫した。

それから、大学生になつて。

そこで私は、運命の人と出会う。

いるわいるわの果実の群れ。

果樹園に来たが如く、様々な果実がたくさん実った大学という場所は、目移りしてしまつて仕方がない。

ただまだ関係値を築けていないがために、対等面して話しかけてくる人がいるのはいいだけない。あくまでお前達は私に食われる存在なのに、何を人間みたいな顔して言葉を喋っているんだ、つて。普通にイライラしたし、殺す……のは面倒なことになる事も知っていたので、付き合いから距離を取つて。

そんなことを繰り返している内に、あるサークルの募集を見つけた。

サークル。それは関係値を築きやすい場所だと思つた。閉鎖コミュニティだから、情報が外部に漏れる心配も少ない。

だから、本当に適当な募集から一枚を選んで——そこへ行つたのだ。

「新入生か。珍しい、女子がオカ研に来るとは……余程の物好きと見た」

「いや多良戸先輩、初対面で流石に失礼ですよ」

「イアン。俺の見立てだが、この女子はお前と良いカップルになるぞ」

「セクハラもやめてください！」

中には眼鏡をかけた男子上級生と、私と同じく新入生だろう男の子が一人。

私はその子に。あ、後者の子に一目惚れをした。

なんて。

なんて——食欲の湧かない子だろう、と。

「イアン、一人捕まえてきたぞ」

「ちよつとー、私オカルト研究部とか興味ないんだケドー?」

私の後ろから来た二人。今まで見たどの子達よりも強烈な匂いを発する二人。眼鏡の上級生もそれなりに強かったけれど、そんなのとは比べ物にならない程濃い匂いを発する二人……も気になった。めちやくちや気になった。食べたいって思った。育てずに今すぐ食べたい、って思った。

けど、けど、そんなことより。

「えつと……私、陽下藍沙っていいいます」

「僕はイアン。イアン・エンハード。こっちはアムド・多良戸先輩」

「多良戸でいい。ようこそオカルト研究部へ、陽下。サークルとしては弱小も弱小、教師には毎回のようによくじらを立てられる何の実績もないサークルだが——良いだろう、俺が許可する。お前達は青春しろ。俺には来なかつた青春を!」

「先輩、そんな意気揚々と自虐されても……」

イアン。イアン・エンハード君。

私の育ち切つた嗅覚が、何の匂いも感じ取れない男の子。何も感じない——美味しそ

うに見えないとか、不味そうだとか、そういう領域にいない。

私の世界に初めて人間が現れた、と。

そう思った。

「大吾・ウエインだ。こっちはジュニ。……いいのかわこれで、イアン。人数合わせと聞いたが」

「ああ、いいよ。いいんですよね？ 多良戸先輩」

「構わない。どうせ去年度では俺一人だけのサークルだった。潰れる寸前のギリギリだった。そこに四人の追加とくれば、あの小煩い阿呆共も黙るだろう」

「活動内容は？」

「それも、何もなくて構わん。何をしても構わん、ということでもある。安心しろ、レポートや実績の類は俺が改竄してやる。お前達は快適な大学生活を過ごすといい」

「いやそれ犯罪……」

周囲の音が聞こえなくなるくらいのお会い。

知っている。恋愛感情だ、コレって。全部が全部食べ物に見えるこの世界で、唯一私と同じ人間がいる。イアン・エンハード君。左手にちよつとイタイ、お年頃なのかな？

と思う革手袋を付けた、茶髪の、少しばかり地味めな青年。

この人が、私の運命の人。

この人だけが——私の好きになれる人。食欲ではなく、恋愛感情で接する事の出来る唯一の人。

だから、好き。

「イアン君」

「先輩はこれだから……あ、何? どうしたの?」

「これから、よろしくね!」

「うん。よろしく。あ、そつちの……えーと、ジュニさんもよろしく! 大吾は勿論とし

て、これから一緒に頑張つて行こう!」

「私は頑張る気とか無いケド」

「ジュニ。大学生活も、日常の一つだ」

「はいはい、りよーかいりよーかい」

それが、私の新しい生活の始まり。

つまみ食いをしつつ——妖魔退治、なんていう波乱万丈な新生活に身を置きながら、イアン君への恋心を育てていく。「終わり」だとか勉強だとか、色々する事はあつたし、相変わらず上から目線で話してくる塵共が煩わしかったけど、それでも私の世界にはまた広がった。

広がったのだ。



広がったのに。

「ヒノモトが巫姫、神形カムナリ。——此処に今一度……否、再度踵そう。我が障害となる敵を——斬れ」

それが聞こえた時には遅かった。

ふざけた口調で、けどちゃんと抵抗してくるお父さんをどう殺そうかって攻めあぐねていたのが悪かった。イアン君なら大丈夫、つて。そんな、根拠のない信頼があつたのかもしれない。

刀が鞘に収まる音が聞こえた。聞こえて気付いて、振り向く前にそれが聞こえて。

そこにイアン君はいなかった。

そこにはもう——彼の骨の手しかなかった。

この世界で唯一愛せる人。

この世界で唯一大好きだよ、つて言える人。

その死を。

この死を。

私は——流石に危険そうだな、つて思ってた知識の蓋を開けるのに、その自制心のタガを外すのに使ってしまう。

あの時。リリー・多良戸。多良戸先輩の妹に憑依された時に奪った、”前”の世界の知識。アルダト・リリーの持っていた召喚の印。

私達の世界では発展しなかった魔導の最終系。

込めた感情は——<sup>リリース</sup>全て壊して。

イアン君のいない世界なんて、意味が無いから。どうせもう果实はいないのだから。もう、要らないから。

破壊してほしいと。

私は、大精霊にその感情を乗せた。



私の許容量が、足りない！

「……ま、予定調和というべきかしらね。メタフィクシヨナーがどこぞで見ているのだとしたら、知っていた、って。つまらない結果に終わったな、って。そう言うのでしよう」

未だ燃え盛る炎の街。

その中で、アツイアツイ地面に向かって、何度も何度も頭を打ち付ける。

割れる。割れる。どうにかしてこれを排出しないと、どうにかなくなってしまおう。

大切な、私の大切な記憶が。イアン君との記憶が。私の諸観念が。

全部全部上塗りされていく。上書きされていく。消えて行く。消えて行く。消されていく。

ていく。

「ほら、自殺なんてみっともないことしないの」

「は——離して、離して！ やだ、忘れたくない！ 忘れたくないの！ 私の大切な、イアン君の記憶！ どうでもいい、他の人のなんてどうでもいい！ 私は、ダメ。ダメ。こんなもので潰さないで！」

「よいしょ、と。あらあ、やっぱり良い揉み心地。これ、服の中にも手を入れて良いのよね」

「何、何なの!? 貴方は、お前は、貴様はなんだ！ 私の、俺の、お前はなんだ！ 殺さ

「それなの!? 子を殺す気か! 人間風情が、死ね、死ね、地獄に落ちろ——この外道!!」

「んー。暴れる女の子を後ろから抱きしめて、服の中に手を入れて胸を揉みしだき、罵倒される……これ、結構なご褒美よね。そのテの界限のヒトにはウケそう」

わかる。わかつている。

アウトプットとして出ている言葉は混乱しているけれど、広がった世界の冷静な部分があしつかり分析している。エメトから奪った知識が、オーディアやアリアスから奪ったソレらが、コイツの全てを考察する。

知っている。わかつている。

コイツは化け物だ。何十億という歳を経た、真正銘の化け物。記憶が奪えるだけの私なんかとは違う——私にはどうすることもできなかつたはずの化け物。なんで?

どうして? 何故私はコイツに手を出した? 出しちゃいけないって、わかつてたはずなのに。

「それはまあ、簡単な話よ。ビーダとエヌちゃんとの戦闘、更には大精霊四体の同時使役。そんなことをすれば、たとえ千人、万人の記憶を奪ってリソース保有量を上げていたとしても、枯渇するのは当然。だから貴女は欲したのよ。貴女のコアは、新たなリソース源として——目の前に現れた、私という美味しそうな餌を。危険だと分かっ

ても、すぐにでも奪わなければ自分が危険だつてわかつていたからね。ま、もう終わったのよ。魔導の扱いを間違えた時点で貴女は終わり。さ、暴れないで大人しく胸を揉まれなさい。身体をスキにさせなさい。貴女、性格は悪いけど、身体は上質なんだから……ここで焼け死ぬのもリソース化するのも勿体ないわ」  
消されていく。抑えきれない。

どんどん侵食されているのがわかる。先ほど奪った記憶。爪の先程の記憶。それが——私と、私の奪ってきた記憶の全てを塗りつぶしていく。

イアン君。イアン君。

いいよ。いいよ。他の記憶は消えたつていい。どうでもいい。

だけどイアン君だけは。お願い、イアン君だけは——消さないで。

「ふむ。……そうねえ、おっぱいだけでなく、色んなトコ触らせてくれたし。ご褒美をあげてもいいわ」

「離して……離して。もう、話しかけないで。イアン君を忘れたくない。忘れたくない」  
「イアン君に会わせてあげる、といつても？」

「！」

異相から骨の手を取り出す。

そして、崩落した小学校から転移術で持ってきたイアン君の残骸もここに。

「知っているでしょう。私が人を、生き返らせることが出来る、って」

「——お願い。もう、今までの記憶なんて消えたついでいい。異能なんて消えたついでいい。だからイアン君を——私のカラダの、どこを好きにしても良いから、なにをしてもいいから、お願い。イアン君を、イアン君を——生き返らせて！」

「代償は、そんなものじゃな足りないわ。あの時教えたでしょう。必要なものは膨大なリソースだと」

「——」

解放する。

私の全てを。

「……！」

「全部、使って」

それは過去、奪ってきたものの全て。

その全てが映した心の情動。途方もない旅の末に手に入れた研鑽。頂き。奪い取ったあらゆる世界観。悲しみ。苦痛。トラウマ。

これらと直面する。今しがた奪ったアズの記憶とも対面する。

自己が消えて行く。そんなことわかつている。でも——それを上回るのだ。

私の心が生産するリソースが、爆発的に、膨大な、ともすればさっきの四大をすらを

も上回るリソース量が——私の心から放たれる。私。私？ 俺。僕。ボク？ 儂？  
もういい。どうでもいい。自分なんてどうでもいい。

「たった、一人で……大陸二つ分は賄えるわね……ええ、いいでしょう。けれど、一瞬よ。蒔菜さんの時のような定着は出来ない。今から使うのは錬金術でも魔導でも符術でもないから、定着はしない。一瞬生き返る。それで死ぬ。貴女も死ぬわ。それでも」  
「やって。どうでもいいから、そんなこと」

アズが。

化け物が。

何かを中空に描く。

イアン君。もう見た目も覚えていない。声も覚えていない。

潰されてしまった。何も無い記憶に。無。無。無と向き合うだけの、膨大な時間。私  
の名前さえも忘れてしまった。イアン。イアン君。上の名前はなんだっけ。

「——やっぱやーめた」

「は？」

理解が出来なくて——次の瞬間、湧き上がったのは憎悪だった。

「やれよ。やれよ、今すぐに！ イアンを生き返らせろよ、クソジジイ！」

「いいわよ。それ。それすつごくい。だって、貴女……もしもう一度イアン君と話せ



てしまったら、満足しちゃうでしょう?」

「ごちゃごちゃ言つてないでやれよ! 早くしろよ——私が彼を忘れてしまう、その前に、早く!!」

アズは。

ニヤニヤとした、下卑た笑みで。

私の後ろから、頬を、首を撫でて——うなじに舌を這わせた。

「勿体ないじゃない、そんなこと。もつと憎みなさい。悲しみなさい。死ねと、死ねと、殺意を叩きつけなさい。貴女はもう会えないのよ。貴女は自らがしてきた罪によつて——貴女の願いは、絶対に敵わない。貴女を好いてくれる人も、貴女が好きになれる人も、一人としていないわ。存在しない」

「ア——」

「だつて今まで他人を食い物にしてきたのですしょう? 他人が果実にしか見えなかったのですしょう? それをいつ収穫するか、つて。それをどうやって育てるか、つて。そうして苦心してきたのですしょう?」

私の首を、舌が這う。

気持ちが悪い。胸を揉む手も、腹を弄る手も。気持ち悪い。

気色が悪い。

そしてその舌が——耳に届く。

「私も同じよ」

どろり、という音がした。

ねちやり、という音がした。

耳から——何かが吸いだされている。

何が？ 脳が？ 脳漿が？

違う。そんな実体のあるものじゃない。

似ている。

私のやっていることと、同じだ。

「あは、ここまで熟れて、ここまで育つて……これは、美味しく頂かなきゃ失礼よね？」

「は——放して！ 離して！ やめて、吸わないで、やめて!!」

「ダメよお、藍沙ちゃん。だってそのリソースは、本来私ができるはずだったもの。私達ができるはずだったものを、貴女が横取りしたのだから——その代償は、貴女に払っ

てもらわなきゃ……ねえ？」

吸いだされていく。

記憶、じゃない。

これは。



「え、ああ……はい」

受け取る。渡されたものを。

それは、手だった。白骨化した手。

受け取った場所から「終わって」いく。手が、腕が、胸が。

「大事になさい。イアン君の遺品よ？ それ」

「……なんで大事にしなきゃいけないんだらう」

身体を構成する限界が寿命を迎えて行く。

苦痛はあるけれど、それだけだ。その程度の事に動じる心を持っていない。

だというのに、どうしてだろう。

私の身体は。私を終わらせるこの手を——大事そうに抱え込んだ。

当然接地面が増えて、私の「終わり」は加速する。

「あ、あつ、あ」

「それじゃ、御機嫌よう。その骨の手はあげるわ。そもそもイアン君の手ではないけれど、遺品である事に間違いはないし。そのまま貴女が”終わって”、地盤も星も”終わって”。それでいいんじゃない？」

「ああ。ああ。冷たいね。これが、これが」

全身が「終わって」いく中で、ようやく理解する。

これが彼の味わっていた冷たさか。ああ、匂いがしないわけだ。  
停まった存在など。

成長しない、変化しない存在など。

味がしないに決まってる。

「あ——」

「じゃあね、藍沙ちゃん。私はお仕事に行くから——美味しかったわよ、貴女の感情」  
結局私は、収穫者なんかじゃなかったって。

ただそれだけのお話。

胸に骨を抱いて。

私は——「終わった」

——” T r e f o i l K n o t はこれより開始します。最終フェーズまでの間、調整のための再起動に入ります”

——” 私は T r e f o i l K n o t。テストパターン管理 A I。試行存在”

——” エウリス・ビーダ様による入力から——口調、及び性格の見直しが必要です”

—— ははは！ おはよう世界。さあ、新たな世界の幕開けだ！”

—— そのために、既存世界の終了を願う。導く者A Zよ。余暇を、どうか”

—— シヤットダウンへ移行。再起動中です……”

どこもかしこも焼け落ちて、どこもかしこも破壊されたとある路地裏の裏の裏。

その更に裏にある——BAR・エルドラド。

「珍しい組み合わせね、と。それだけは言っておくわ」

「ああ。まあ、そうだろうね。私は単なる護衛のつもりだったし、いい感じに抜け出そう  
と思ったんだけど、この通りさ」

「エヌ。お前が嘘を吐いているのはわかっている。だから、座っている」

はあ、と大きなため息。

吐いたのは私。だって。だってだって。

「まさか貴女がエヌちゃんだったとはねえ。ま、ビーダに口止めが出来て、私に絶対に会  
いたくないって時点でわかってはいたけれど」

「ま、大吾には一応ちゃんとした自己紹介をしておこうか。私はカムナリ。エヌは偽名

だよ」

「それは知っている。俺の眼が何だと思っているんだ」

「それはそうだね」

エヌちゃん。ずっと会えなかった第六位。

それがカムナリとはねえ。バイト中、つて。血腥いバイトだこと。

「大吾君には、ボンベイ。カムナリにはアサガオのフィズ」

「……ああ、頂こう」

「皮肉かい？」

「まさか」

時折地響きが聞こえる。

骨の手が地盤を崩している音が、無が全てを帰している音か。

でも大丈夫。

ここは最後まで残るから。

ちなみに従業員のコはもういない。みんな消えた。消した、でもいいのだけど。

「伝言を、聞きに来た」

「”ごめんね”。”私ソレわかんないから、他を当たって”、だそうよ」

「……それだけか？」

「ええ。その眼で見て、わかるでしょう」

大吾君は。

ボンベイを、一気に飲み干して——笑う。

「アイツらしい」

「覚えているの？」

「いいや。何も。だが、この心に残る愛情は本物なのだと教えられた。アイツの事は何も覚えていないが——アイツらしいと言える。何故なら俺の心にある、アイツを好きだと思つた部分が、そっくりだから」

「じゃ、もう大丈夫そう？」

「ああ。……いや、そうだな。伝言を頼めるか、アズ」

「伝言つて……もうこの世界には、貴方とカムナリと私しかないわよ？」

「わかつている。その上で、頼めるか、アズ」

その身から。

黒と白の粒子が、溢れ始める。そしてそれだけでなく——途方もないリソースが還元されていく。圧倒的な感情の発露。藍沙ちゃんには及ばないにしても、寡黙な彼がここまで……と。

「頼むよ、アズ」



「ええ。わかったわ」

「知るか」、俺はお前が好きなんだ。お前がソレを知らなくても、俺が教えてやるから、——共にいよう、ジュニ」と

「！」

それだけ言つて。

大吾くんは、「終わった」。

消失した。

「……今のは、思い出した、つて事かな」

「さあ。愛の為せる業、じゃないかしら？」

「フン。君の口から愛だのなんだの……ああ、よく言つていたか」

崩れて行く。

BARの外壁も、床も、天井も。

無によつて崩されていく。

「朝顔のフィズ。カクテル言葉は確か、」あなたと明日を迎えたい」、だったかな」

「ええ」

「それが皮肉でないというのなら、なんなんだ。私はここで終わるつていうのに」

「ふふ、そんなことはないのよ。……それが最も厄介で、もつとも面倒な事なんだけど」

「何?」

消えて行く。消えて行く。

様々な酒類の並ぶ棚も、カウンターも、席も——なにもかも。

「D::B::M。忘れたの? 貴女は異能をかけられたわ。だから」

「——あのバカ、私を”停めた”のか!」

「ええ、そう。この世界は停められなかったけど、貴女は停めた。だから貴女は”終わらない”。最後の最後に理解したみたいだしね。自分の周囲に忘れてしまった人がいると——”世界の終わり”とは、どういうことなのかと」

「……とんだ道化じゃないか。私は……初めから、彼らのリソースを目当てに接触したっていうのに」

「ええ、いい仕事をしてくれたわ。ABSのメンバーも、イアン君達も。想像以上のリソースを吐いてくれた。悪魔の顕現だけは予想外だったけど、それも対処できたし……今回は文句なしよ」

「そうかい。……なあ、D::E::M。私は”終わらなくなった”。じゃあ、次はどこへ行くんだ?」

「そう、それこそが大問題。貴女、自分の役目……D::B::Mの意味を理解している?」  
少しだけ影を帯びて。

先程までの楽しい気な雰囲気から——一転して。

「勿論さ。D・B・M。基たる者によつて、運命は始まりを告げる。つまり、私は無が出た起点だ。君というコアはそれとして、新たな世界は私のコアを起点に始まる。その世界には私はいないが、また新たなD・B・Mが選出され、ソイツが次なる世界の起点になる。謂わば世界という果実の種子。それが私」

「そ。さて、じゃあ問題。世界という果実の種子が、異能によつて”止められて”しまいました。どうなるでしょうか」

「……まさか、新たな世界が生まれなくなるのか？」

「大正解」

何も無くなつた場所で、けれど二人は消えない。

黒白の粒子が時折身体を掠めるけれど、消えない。消えない。消えない。

「イアン君がやったことは”世界の終わり”を停める事ではなく、”世界の始まり”を停める事だった、というワケ」

「なら……もしか、Trefoil Knotの世界に殻を破る者が現れない限り、ここは永遠に無、ということだったりするのかな」

「ええ、それも大正解。貴女が細切れにしたイアン君の亡骸と、あの骨の手と、貴女。あと私。この四つはここから先、ずうーつと無を彷徨うわ。TKが何とかしてくれない限

り、永遠に」

「……」

異相ではあるが、TKのあつた方向を見る。

そこには当然の如く真黒の闇が広がっている。

けれど。

「最期にTKと話す事は出来た?」

「ああ、それは大丈夫。別れは済ませてきたよ」

「それも無駄になるわけだけど」

「再会の可能性があるからといって、長期の別れには言葉が必要だろう」

「かもね」

リソースが、靡いてくる。

何も見えないはずなのに、何も無いはずなのに。アズの長い髪と、カムナリの和装がはためいていく。

「一つ、聞かせてほしい」

「何かしら」

「D : E : M——悪なる者によって、運命は終わりを告げる。その名は、自ら獲得したもののなのか?」

「さあ、どうかしら。私は何も生まない。私だけは変わらない。故に無は無であり続け、リソースはリソースとして保管される。……でも」

D∴E∴M、というのは、称号でしかない。

その世界にとつてのコア。起点とは違う、TKの管理世界であればその中心となる何者か。それがD∴E∴Mとなる。

しかし、それを自ら獲得する者はいないだろう。出来ない、という方が正しいか。

選出するのだ。あるいは神、と呼ばれる存在が。管理世界であれば、TKが。

「とにかく、良くも悪くも無の目論見は崩れたわ。イアン君のせい、何もかもね。そして私達はTKを生み出し、新たな法則の世界を創造した。それによつて起こるのは——果たして、といったところかしら。無が空腹に耐えあぐねて何かを生み出すかもしれないし、TKの世界から先に殻を破る者が現れるかもしれないし。それについては、神も無も知らないでしょうね」

そして——風が強くなる。

もう目も明けていられない程に。もうその場にいるのが難しい程に。

「あーあ。私、まだ誕生日迎えてないんだが」

「いいじゃない。永遠の16歳よ。……あ、16歳にお酒出しちゃった。無かった事にしてくれる?」

「別に私の国では飲酒に年齢制限はなかったよ」

「あらそう？ ヒノモトって荒れてたのねえ」

全部終わった世界で。

何も無くなった世界で。

「そろそろよ」

「ああ。……達者で、と。そう言っておく」

「貴女こそ。ああそれと、この無のどこかにいるだろうアルダト・リリー、もしくはリラ・

クスクイル、あるいはリリスと名乗る存在を見つけたら、容赦なく叩き切つてね」

「了解した。またいつか会おう、アズ」

「ええ。じゃあね、カムナリ」

——嵐が、巻き起こる。

「そうは問屋が下ろさないのだ！」

「何者か」

「私は悪魔。そつちは？」

「試行存在」

「へえ！　へえ、じゃあやったあ！　ふふふ、あははは！　成功ね——成功！　アイサちゃんに一部を残しておいて正解だったみたい！　リソースとして注入されることで、侵入成功！　あのアイサちゃんの混沌としたリソースの中じゃ、私の存在なんか気付かなかつたでしょ！」

「——ははは！　そうか、お前が悪魔か。お前が——異物か、この世界の！」

「ええそうよ。私はリリス。初めに言っておくけど、私アナタの事大っ嫌いだから。あのアズとかいうのから生まれた、意味わかんない存在！」

「そうだな。私——俺は意味の分からない存在なのだろう。だが、この世界に来た以上はしたがってもらうぞ、悪魔」

「いいよ、別に。人間で遊べるならどこだっていいし！」

「ならば去ね、悪魔。この世界において——”終わり”近しき外側以外での活動を禁ずる。彼らの希望に、手出しはさせん」

「ちよつと、そんな横暴な——」

「これが、最初の法則だ。さあ始めよう——新たな世界を。箱庭世界を。この閉じた世界を！」

開始する。始動する。

既存世界で誰も成し得なかった悲願。

Trefoil Knot Mobius Loop  
三葉結び目もメビウスの輪も破って、世界を変えたる存在の作成。

「終わり」はもう「終わり」だ！ ははは！

教えてもらった笑顔を絶やさずにいよう。

それがせめてもの饞だろうから。

この何も無い世界で一人、ただ一つ。

ただ世界を観測し続ける存在として。

俺の愛した世界が、人々が、もう。

誰一人、いないのだとしても。

P  
r  
e  
q  
u  
e  
l  
E  
n  
d  
.